

# 厚田中村遺跡(2)

上信自動車道吾妻東バイパス建設事業に伴う  
埋藏文化財発掘調査報告書

2023

群馬県上信自動車道建設事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 厚田中村遺跡(2)

上信自動車道吾妻東バイパス建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

群馬県上信自動車道建設事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 序

上信自動車道は、群馬県渋川市の関越自動車道渋川伊香保インターチェンジと長野県東御市の上信越自動車道東部湯の丸インターチェンジとを結ぶ総延長約80kmに及ぶ自動車専用の地域高規格道路です。

この事業は、群馬県の「はばたけ群馬・県土整備プラン」で示された「7つの交通軸構想」のうちの「吾妻軸」に属し、関越自動車道と上信越自動車道とを結ぶ新たな交通体系として、吾妻地域の活性化に寄与することが期待されています。

上信自動車道の8箇所の整備区間の一つである吾妻東バイパスは、吾妻郡東吾妻町大字植栗から大字厚田に至る約6.4kmの区間で、平成25年に整備区間に指定され、目下、事業が進められているところです。

吾妻郡東吾妻町大字厚田字中村に所在する当遺跡は、群馬県教育委員会による埋蔵文化財の試掘・確認調査によって、事業対象地において埋蔵文化財の包蔵が確認されたため、群馬県県土整備部と群馬県教育委員会との間での調整を経まして、令和2年度から令和3年度にかけて当事業団が発掘調査を実施しました。調査の結果、古墳時代の竪穴建物および水田、奈良・平安時代の溝および水田、近世の溝・土坑・畑・復旧坑などが発見され、当地に培った約1500年に亘る長い土地利用の歴史が明らかとなりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、東吾妻町教育委員会、地元関係者の方々に多大なるご指導とご協力を賜りました。ここに篤く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明に広く役立てていただけますことを願いまして、序といたします。

令和5年1月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 向 田 忠 正



# 例　　言

1. 本書は、令和2・3年度上信自動車道吾妻東バイパス建設事業に伴い発掘調査された厚田中村遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県吾妻郡東吾妻町大字厚田861-1、862-1、864-1、864-2、914-1、915-1、916-1、916-2、922、923-1、923-2、924、927-2、982、983、984、993、1000、1001、1002、1003、1011、1013、1018、1019、1039-2、1080-2、1085-1、1177-1に所在する。
3. 調査面積は、21,622.60m<sup>2</sup>である。
4. 事業主体は、群馬県上信自動車道建設事務所である。
5. 調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
6. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

(令和2年度)

名　　称：令和2年度上信自動車道吾妻東バイパス建設事業

履行期間：令和2年6月1日～令和3年2月28日

調査期間：令和2年7月1日～令和2年7月31日、令和2年10月1日～令和2年12月31日

調査担当：新井　仁(上席調査研究員)、須田正久(上席調査研究員)、田村　博(主任調査研究員)、

　　本田寛之(主任調査研究員)、田村　真(主任調査研究員)、太田　心(調査研究員)、間庭　稔(専門調査役)、

　　木村　収(専門調査役)、飛田野野正佳(専門調査役)

遺跡掘削工事請負：株式会社測研

地上測量委託：株式会社測研

(令和3年度)

名　　称：令和3年度上信自動車道吾妻東バイパス建設事業

履行期間：令和3年3月31日～令和4年3月31日

調査期間：令和3年4月1日～令和3年6月30日

調査担当：須田正久(上席調査研究員)、本田寛之(主任調査研究員)、池田　格(主任調査研究員)、

　　間庭　稔(専門調査役)

遺跡掘削工事請負：株式会社測研

地上測量委託：株式会社測研

7. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。

(令和3年度)

名　　称：令和3年度上信自動車道吾妻東バイパス建設事業

履行期間：令和4年2月1日～令和4年3月31日

整理期間：令和4年2月1日～令和4年3月31日

整理担当：高島英之(専門員(総括)、令和4年2月1日～令和4年3月31日)

　　谷藤保彦(専門調査役、令和4年3月1日～令和4年3月31日)

(令和4年度)

名　　称：令和4年度上信自動車道吾妻東バイパス建設事業

履行期間：令和4年4月1日～令和5年3月31日

整理期間：令和4年4月1日～令和4年11月30日

整理担当：谷藤保彦(専門調査役)

8. 本書作成担当は次のとおりである。

編集 : 高島英之(令和4年2月1日～令和4年3月31日)、谷藤保彦(令和4年3月1日～令和4年11月30日)

本文執筆 : 第1章-高島英之、それ以外は谷藤保彦

遺物観察 : 繩文・弥生土器 橋本 淳(主任調査研究員(資料統括))

土師器・須恵器 神谷佳明(専門調査役)

石器・石製品 岩崎泰一(専門調査役)

中近世陶磁器・土器 大西雅広(専門調査役)

金属・木製品 板垣泰之(専門員(主任))、関邦一(専門調査役)

デジタル編集 : 齊田智彦(主任調査研究員)

遺物写真撮影 : 繩文・弥生土器 谷藤保彦

土師器・須恵器 谷藤保彦

石器・石製品 谷藤保彦

中近世陶磁器・土器 大西雅広

金属・木製品 板垣泰之

遺物保存処理 : 板垣泰之、関 邦一

9. 自然科学分析は以下の内容で外部委託し、報告については第5章に一括掲載した。

火山灰分析 : 株式会社 火山灰考古学研究所

植物珪酸体・花粉分析 : パリノ・サーヴェイ株式会社

炭化材樹種同定 : パリノ・サーヴェイ株式会社

10. 石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。

11. 出土遺物および写真・図面等記録類は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

12. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご助言をいただいた。

群馬県県土整備部、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、東吾妻町教育委員会

## 凡　例

1. 本書で使用した座標値および方位は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)を用い、座標北で示した。

調査対象範囲は、X=61.070～61.270、Y=-91.730～-92.300の範囲に収まる。

2. 等高線・遺構断面図等に記した数値は、海拔標高を示す。

3. 遺構名については、発掘調査時の名称を踏襲し、遺構種別に通し番号で標記した。

4. 各遺構の土層断面に記した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修  
1988「新版標準土色帖」に依っている。

5. 遺構図・遺物図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。また、遺物写真的縮尺は、実測図と同一の縮尺を原則とした。

遺構図 : 遺構全体図1/200～1/400、1/1000 竪穴建物1/60 カマド1/30 掘立柱建物1/60 土坑1/40

溝・道1/100、1/150 畑・水田1/100～1/200 復旧坑1/200

竪穴建物・掘立柱建物・土坑以外の断面図1/50、1/100

遺物図 : 繩文・弥生土器1/3 土師・須恵器1/3 陶磁器1/2 1/3 石器・石製品1/1 1/2 1/4

金属製品1/1 1/2 木製品1/4 1/5 1/8

6. 遺物の掲載は、種別に限らず遺構毎に通し番号とした。

7. 本書の図版に使用したスクリーントーンを以下に示す。

遺構図： 燃土



硬化面



炭



カクラン



遺物図： 煤



8. 遺構の計測は、全容が計測できない遺構について残存値( )で表記してある。

9. 降下火山灰については、以下の略号を使用した。

As-B : 1108年の浅間山噴火に伴う浅間Bテフラ

As-Kk : 1128年の浅間山噴火に伴う浅間柏川テフラ

Hr-FA : 6世紀初頭の榛名山二ツ岳噴火に伴う榛名二ツ岳渋川テフラ

10. 遺物観察表は遺構毎に掲載した。また、土師器・須恵器等観察表の凡例は以下の通りである。

#### 1. 種類

文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器(奈良三彩、灰釉陶器、綠釉陶器)、土製品等に種別している。

なお、古墳時代に黒色処理を施された土器については、その成形から土師器とした。

その後の奈良時代中頃から出現する内面及び内外面を黒色処理された土器については、成形から黒色土器として種別してある。

#### 2. 器種

文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて杯、椀、高杯、盤、皿、鉢、壺、器台、壺・瓶(長頸壺、短頸壺、平瓶、横瓶、提瓶、籠)、甕、硯等の名称を使用している。なお、杯と椀の区分は、器高/口径比が大きいものを椀としているが、明確に数値化できていない。壺と甕との区分は、頸部/胸部最大径比によって区分しているが、例外として胸部最大径より頸部系径の大きい形態である広口壺と呼称しているものも存在する。

#### 3. 残存率

概ね全体の比率で「完形」、「3/4」、「1/2」等で表示している。なお、1/4以下については、「口縁部片」、「底部片」等の部位片で表示している。

#### 4. 計測値

計測力所は、以下のように省略している。

口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、摘：摘径、力：杯蓋等のカエリ径、頸：頸部径、胴：胸部最大径、

孔：孔・有孔鉢などの底部に設けられた孔径等である。この他の略称についてはそれぞれ備考等に表示した。

なお、単位はcmである。

#### 5. 脂土

記載中の表現にある細砂粒は、径2mm以下、粗砂粒は2~5mmのものを表す。5mm以上は、砾と表示した。

#### 6. 焼成

土師器は、比較的硬質に焼成されているものを「良好」、軟質や脆い状態のものを「軟質」、「不良」で表示してある。

須恵器は、「還元焰」、「酸化焰」で表示してある。

#### 7. 色調

農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠している。

#### 8. 特徴

成形を中心記載している。

11. 本書で使用した地形図は下記の通りである。

国土地理院：地勢図 1:200,000 「長野」(平成24年5月1日発行)

国土地理院：地形図 1:50,000 「草津」(平成11年1月1日発行)、「中之条」(平成11年8月1日発行)

# 目 次

序	
例言・凡例	
目次(挿図目次・表目次・写真目次)	
第1章 調査に至る経緯、方法と経過	1
第1節 上信自動車道	
吾妻東バイパスについて	1
第2節 調査に至る経緯	2
第3節 調査の方法	5
第1項 調査区と座標の設定	5
第2項 発掘調査の方法	5
第4節 調査の経過	8
第1項 発掘調査の経過	8
第2項 整理作業の経過	10
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	13
第3章 基本層序	19
第4章 検出された遺構と遺物	23
第1節 調査の概要	23
第2節 1区の遺構と遺物	25
第1項 第1面調査	25
第2項 第2面調査	25
第3節 2区の遺構と遺物	28
第1項 第1面調査	28
第2項 第2面調査	31
第4節 3区の遺構と遺物	33
第1項 第1面調査	33
第2項 第2(3)面調査	38
第5節 4区の遺構と遺物	41
第1項 調査	41
第6節 5区の遺構と遺物	42
第1項 第1面調査	42
第2項 第2面調査	52
第3項 第3面調査	55
第7節 6区の遺構と遺物	61
第1項 第1-1面調査・第1-2面調査	61
第2項 第2面調査	76
第3項 第3面調査	80
第8節 7区の遺構と遺物	89
第1項 第1-1面調査・第1-2面調査	89
第2項 第2面調査	101
第3項 第3面調査	104
第9節 8区・8-1区の遺構と遺物	107
第1項 第1-1面調査・第1-2面調査	108
第2項 第2面調査	119
第3項 第3面調査	139
第10節 9区の遺構と遺物	161
第1項 第1面調査	161
第2項 第2面調査	163
第11節 10区の遺構と遺物	166
第1項 第1-1面調査・第1-2面調査	166
第2項 第2面調査	173
第3項 第3面調査	174
第12節 遺構出土遺物	177
第5章 自然科学分析	183
第1節 各分析の経緯と結果	183
第2節 火山灰分析	184
第3節 植物珪酸体・花粉分析	193
第4節 炭化材樹種同定	201
第6章 調査の成果(総括)	205
第1節 時期別遺構分布の全体像	205
第2節 まとめ	208
写真図版	
報告書抄録	

# 挿図目次

第1図	上信自動車道計画路線図	1	第61図	8区第1-1面 全体図	107
第2図	道路の位置	2	第62図	1~4号窓口坑群、1号道 平・断面図	109
第3図	上信自動車道音斐東・西バイパスの路線と各道路位置図	4	第63図	復田川群 断面図	110
第4図	調査範囲図と調査区割図	7	第64図	3号煙 平・断面図	112
第5図	周辺地形分類図	12	第65図	8区第1-2面 全体図	113
第6図	周辺道路分布図	16	第66図	13~16・17・34・36・37・39~41号土坑 平・断面図	116
第7図	各地点の基本順序	22	第67図	1号溝 平・断面図	117
第8図	1区第1面 全体図	25	第68図	13号土坑、1号溝出土遺物	118
第9図	1区第2面 全体図	26	第69図	8区第2面 全体図	120
第10図	12~16・22~36号溝 平・断面図	27	第70図	3号掘立柱建物 平・断面図	121
第11図	2区第1面 全体図	29	第71図	4~5号掘立柱建物 平・断面図	122
第12図	2区第2面 全体図	29	第72図	6~7号掘立柱建物 平・断面図	123
第13図	7号溝 平・断面図、出土遺物	30	第73図	1~8号土坑 平・断面図	130
第14図	9~10号溝 平・断面図	31	第74図	9~12~14~15号土坑 平・断面図	131
第15図	3区第1面 全体図	33	第75図	18~21~23~26号土坑 平・断面図	132
第16図	5号溝と1号土手 平・断面図	34	第76図	27~29~35~38~42号土坑 平・断面図	133
第17図	5号煙 平・断面図	35	第77図	43~46~49~52号土坑 平・断面図	134
第18図	2号土手と木村区画 平面図	36	第78図	38号土坑出土遺物	135
第19図	2号土手芯材平面図、2号土手・畦 断面図、2号土手下遺物	37	第79図	1~4号煙 平・断面図	138
第20図	3区第2面 全体図	39	第80図	8区第3面 全体図	139
第21図	56号土坑、29号溝 平・断面図	39	第81図	1A号窓穴建物 遺物、炭化材出土分布図	142
第22図	7号煙 平・断面図	40	第82図	1A号窓穴建物 床面 平・断面図	143
第23図	4区第2面 全体図	41	第83図	1A号窓穴建物 床面・貯蔵穴 断面図、カマド遺物出土状態平面図	144
第24図	5区第1面 全体図	42	第84図	1A号窓穴建物 カマド 平・断面図	145
第25図	11号溝 断面図	43	第85図	1A号窓穴建物床面下・1B号窓穴建物 平・断面図	146
第26図	12~16号溝、3号道 平面図、石積み側面図	44	第86図	1A号窓穴建物出土遺物(1)	147
第27図	12~16号溝、3号道 断面図、12号溝出土遺物	45	第87図	1A号窓穴建物出土遺物(2)	148
第28図	13号溝 断面図	46	第88図	1A号窓穴建物出土遺物(3)	149
第29図	13号溝出土遺物	47	第89図	2号窓穴建物出土遺物	152
第30図	14~15~19号溝、4号道 平・断面図	48	第90図	2号窓穴建物 床面・床面下 平・断面図	153
第31図	16号溝出土遺物	49	第91図	3号窓穴建物 床面・カマド 平・断面図	155
第32図	17~18号溝 平・断面図	50	第92図	3号窓穴建物 床面下 平面図、出土上遺物	156
第33図	5区第2面 全体図	53	第93図	31~33~47~48号土坑 平・断面図	159
第34図	5区第3面 全体図	57	第94図	32号土坑出土遺物	160
第35図	hr-F4下水田 断面図	59	第95図	9区第1面 全体図	160
第36図	6区第1~2面 全体図	62	第96図	21号溝 平・断面図	161
第37図	7号溝、2号道 平・断面図	64	第97図	23号溝 平・断面図	162
第38図	27号溝、2~3号水田面 平・断面図	65	第98図	9区第2面 全体図	163
第39図	27A号溝トレーン・泥濘下水田畦 断面図、27A号溝出土遺物	67	第99図	20号溝 平・断面図	164
第40図	30号溝 平・断面図	68	第100図	As-B下水田 畦 平・断面図	165
第41図	6区第1~2面 全体図	72	第101図	10区第1~1面 全体図	166
第42図	27号溝西・熊川筋構造 平面図、トレーン断面図	73	第102図	24~26号溝、9号復田机、3号土手 平・断面図	167
第43図	27号溝東側石積み 平面図、31号溝 平・断面図	74	第103図	6号煙 平・断面図	169
第44図	12号煙 平・断面図	75	第104図	10区第1~2面 全体図	170
第45図	6区第2面 全体図	76	第105図	54~55号土坑 平・断面図	171
第46図	As-B下水田 平・断面図	77	第106図	10~11号復田机 平・断面図	172
第47図	As-B下水田 断面図	79	第107図	10区第2面 全体図、畦 断面図	174
第48図	6区第3面 全体図	80	第108図	10区第3面 全体図	174
第49図	32~34号溝、hr-FA下水田 平・断面図	81	第109図	2号掘立柱建物、29号溝 平・断面図	176
第50図	7区第1~1面 全体図	90	第110図	遺構外出上遺物(1)	181
第51図	3~5~6号溝、5号道、2号道 平面図	91	第111図	遺構外出上遺物(2)	182
第52図	3~5~6号溝 2号道 平面図、5号溝 止止め側面図、5号溝出土上遺物	93	第112図	時期別全体図(上: 第1-1面、下: 第1-2面)	209
第53図	5号道出土上遺物(1)	94	第113図	時期別全体図(上: 第2面、下: 第3面)	211
第54図	5号道出土上遺物(2)	95			
第55図	1号土手 断面図	98			
第56図	7区第1~2面 1号土手(上・下面) 平面図	99			
第57図	7区第2面 全体図	101			
第58図	2号溝 平・断面図、37~38号溝 断面図	103			
第59図	7区第3面 全体図	104			
第60図	1号掘立柱建物、8号溝 平・断面図	106			

# 表 目 次

第1表	上信自動車道吾妻東・西バイパス調査道路一覧	4
第2表	周辺道路一覧	17
第3表	区別遺構数量	24
第4表	7号溝出土遺物觀察表	30
第5表	2号土手出土遺物觀察表	37
第6表	12号溝出土遺物觀察表	46
第7表	13号溝出土遺物觀察表	47
第8表	16号溝出土遺物觀察表	49
第9表	5区第3面 小区画水田計測表	60
第10表	27A号溝出土遺物觀察表	67
第11表	6区第3面 小区画水田計測表	85
第12表	5号溝出土遺物觀察表	95
第13表	5号道出土遺物觀察表	95
第14表	13号土坑出土遺物觀察表	118
第15表	1号溝出土遺物觀察表	118
第16表	38号土坑出土遺物觀察表	135
第17表	1A号窓穴建物出土遺物觀察表	150
第18表	2号窓穴建物出土遺物觀察表	152
第19表	3号窓穴建物出土遺物觀察表	156
第20表	32号土坑出土遺物觀察表	160
第21表	道構外出土遺物觀察表	178

# 写真目次

P L. 1	1 厚田中村遺跡遠景 (上信自動車道厚田IC付近の空中写真 (左側に猪背峠と吾妻川))	
P L. 2	1 遺跡全景 空中写真 上空から	
2	遺跡全景 空中写真 東上空から	
P L. 3	1 区第2面(As-B下) 空中写真 東上空から	
2	1区第2面(As-B下) 空中写真 上空から	
P L. 4	1 1区第2面(As-B下) 全景 東から	
2	12号溝(1区2面) 全景 北から	
3	22号溝(1区2面) 全景 南西から	
4	1区正壁 上層断面 南から	
P L. 5	1 7号溝(2区1面) 碾出土状態 北から	
2	7号溝(2区1面) 全景 北から	
3	7号溝(2区1面) 陶磁器出土状態 北から	
4	7号溝(2区1面) 机列保存状況 北から	
5	2区2面(As-B下) 全景 西から	
P L. 6	1 9号溝(2区2面) 全景 北から	
2	10号溝(2区2面) 全景 北から	
3	2区西面 上層断面 東から	
4	3区1面(As-B泥流下) 全景 東から	
P L. 7	1 3区1面(As-B泥流下) 全景 西から	
2	3区1面(As-B泥流下) 東半 上から	
P L. 8	1 5号溝と1号土手(3区1面) 全景 北から	
2	5号溝(3区1面) 机列保存状況 南から	
3	1号土手(3区1面) 全景 南から	
4	1号土手(3区1面) 上層断面 北から	
5	2号土手(3区1面) 全景 東から	
6	2号土手(3区1面) 遺物出土状態 北から	
7	2号土手(3区1面) 上層断面 北から	
8	2号土手(3区1面) 碾出土状態 東から	
P L. 9	1 2号土手と畦・水田面(3区1面) 北から	
2	5号溝(3区1面) 上層断面 西から	
3	畦内の礫(3区1面) 確認状況 北から	
4	5号溝(3区1面) 全景 東から	
P L. 10	1 3区2面 全景 北から	
2	3区2面(西側低地から東側微高地への変換部) 西から	
P L. 11	1 28号溝(3区2面) 南から	
2	7号畑(3区2面) 全景 西から	
3	7号畑(3区2面) 上層断面 西から	
4	3区2面下の確認トレンチ 西から	
5	3区北壁(低地から微高地への変換部) 上層断面 南から	
P L. 12	1 4区遺構確認作業状況 東から	
2	4区2号トレンチ 掘削作業状況 南から	
3	5区1・2面(近世・As-B下) 空中写真 上空から	
4	11号溝(5区1面) 全景 西から	
5	11号溝(5区1面) 上層断面 東から	
P L. 13	1 12号溝(5区1面) 全景 南から	
2	12号溝(5区1面) 西壁南端付近の石組 東から	
3	12号溝(5区1面) 西壁中央南寄りの石組 東から	
4	12号溝(5区1面) 西壁中央の石組 東から	
5	12号溝(5区1面) 東壁中央の石組 西から	
P L. 14	1 12号溝(5区1面) 底面に残存する杭 西から	
2	12号溝(5区1面) 西壁石組内出土状態 西から	
3	13号溝(5区1面) 北半 遺物出土状態 北東から	
4	13号溝(5区1面) 木製品出土状態 北から	
5	14・19号溝(5区1面) 全景 西から	
6	14・19号溝(5区1面) 東から	
7	15号溝(5区1面) 全景 西から	
P L. 15	1 16号溝(5区1面) 全景 南から	
2	16号溝(5区1面) 西壁南端付近の石組 東から	
3	16号溝(5区1面) 遺物(瓦質)出土状態 北から	
4	17号溝(5区1面) 全景 南から	
5	18号溝(5区1面) 碾出土状態 西から	
6	18号溝(5区1面) 全景 西から	
P L. 16	1 3号道(5区1面) 路面に敷かれた小石 南から	
2	5区(1面) 道構外遺物(?)出土状態 北から	
3	5区(1面) 道構外遺物(瓦質)出土状態	
4	5区(1面) 道構外遺物(瓦質)出土状態	
5	5区(1面) 道構外遺物(瓦製品)出土状態	
P L. 17	1 5区As-B下水田(2面) 全景 北東から	
2	5区西側 As-B下水田(2面) 西から	
3	5区北西側 As-B下水田(2面) 西から	
4	5区西側 As-B下水田(2面) 南から	
5	5区西側 As-B下水田(2面) 水口 東から	
P L. 18	1 5区3面(Hr-Fk下) 空中写真 上空から	
2	5区3面(Hr-Fk下) 大畦で区画された小区画水田(南北) 空中写真 上空から	
P L. 19	1 5区3面(Hr-Fk下) 大畦で区画された小区画水田(南北) 空中写真 上空から	
2	Hr-Fk下水田(3面) 水路と大畦・小畦、水口 南から	
3	Hr-Fk下水田(3面) 小畦が検出されなかった区画 西から	

P.L.	20	4	5区北壁 基本上層 南から	P.L.	33	1	39号土坑(8-1区 1-2面) 全景 東から
	1	6区 1-1面(As-A泥流下) 全景 空中写真 上空から	2	40号土坑(8-1区 1-2面) 全景 南から			
	2	12・13号復旧坑(6区 1-1面) 埋没状況 東から	3	41号土坑(8-1区 1-2面) 全景 南から			
	3	7号溝(6区 1-1面) 全景 北東上空から	4	42号土坑(8-1区 2面) 全景 西から			
	4	7号溝(6区 1-1面) 南端上層断面 北から	5	43号土坑(8-1区 2面) 全景 西から			
	5	2号道(6区 1-1面) 斜面に延びる平坦面 西から	6	44号土坑(8-1区 2面) 全景 南から			
P.L.	21	1	27A・30号溝と水田畝画および煙堆(6区 1-1面上空から	7	45号土坑(8-1区 2面) 全景 南から		
	2	27A号溝(6区 1-1面) 西側 30号溝付近 北から	8	46号土坑(8-1区 2面) 全景 東から			
	3	27A号溝(6区 1-1面) 東端付近 東から	P.L.	34	1	47号土坑(8-1区 3面) 全景 北から	
	4	27A号溝(6区 1-1面) 桢判換出状況 西から	2	48号土坑(8-1区 3面) 全景 北から			
P.L.	22	1	As-A泥流下水田(6区 1-1面) 南北方向の眺 北から	3	49号土坑(8-1区 2面) 全景 西から		
	2	As-A泥流下水田(6区 1-1面) 眺と水口 北から	4	50・52号土坑(8-1区 2面) 全景 東から			
	3	8号畠(6区 1-1面) As-A泥流で埋まる畠面 西から	5	51号土坑(8-1区 2面) 全景 東から			
	4	9号畠(6区 1-1面) As-A泥流で埋まる畠面 南から	6	53号土坑(8-1区 3面) 上層断面 東から			
	5	27B号溝(6区 1-2面) 南西端の石組と杭列 南から	7	4号烟(8-1区 2面) 全景 南から			
	6	27B号溝(6区 1-2面) 北東端の石組 北から	8	4号烟(8-1区 2面) 故間に残る耕作具痕 南から			
	7	12号畠(6区 1-2面) As-A泥流上面の欲窓痕 北から	P.L.	35	1	8区 1-面(As-A泥流下) 東半全景 空中写真 上空から	
	8	12号畠(6区 1-2面) 上層断面 北から	2	8区 1-面(As-A泥流下) 南東部復旧群 上空から			
P.L.	23	1	6区 2面(As-BF) 全景 北東から	3	8区 1-面(As-A泥流下) 南東部復旧群 上空から		
	2	6区 2面(As-BF) 全景 空中写真 上空から	4	8区 1-面(As-A泥流下) 西半中央部復旧群 上空から			
P.L.	24	1	As-B下水田(6区 2面) 直線的に延びる大疊 南西から	5	8区 1-面(As-A泥流下) 西北部復旧群 東から		
	2	As-B下水田(6区 2面) 稲田状の小段差と水口 北西から	P.L.	36	1	8区 1-面(As-A泥流下) 南西部復旧群 東から	
P.L.	25	1	6区 2面(Hr-F下) 全景 中空写真 上空から	2	2号復旧群(8区 1-1面) 上層断面 北から		
	2	写真中央が33号溝、右側に調査の土手状大疊および小畦画 水田(6区 3面) 北東から	3	3号復旧群(8区 1-1面) 全景 西北から			
P.L.	26	1	Hr-F下水田(6区 3面) 梢出状況 南西から	4	4号復旧群(8区 1-1面) 上層断面 東から		
	2	Hr-F下水田(6区 3面) 小畦画と水口 南西から	5	8区 西壁の復旧田 上層断面 東から			
	3	32・34号溝(6区 3面) 全景 北東から	6	13号土坑(8区 1-2面) 遺物出土状態 北から			
	4	6区北壁 基本上層 南から	7	1号溝(8区 1-2面) 全景 西から			
P.L.	27	1	7区 1-1面(As-A泥流下) 全景 空中写真 上空から	P.L.	37	1	8区 2面(As-B下) 東半全景 南から
	2	3号溝(7区 1-1面) 全景 東から	2	8区 2面(As-B下) 西半全景 南から			
	3	3号溝駆 柴枝小枝が密集した出土状態 東から	3	西半西北部ピット群(8区 2面) 東から			
	4	5号溝(7区 1-1面) 全景 南から	4	3号掘立柱建物(8区 2面) 西辺柱列 南から			
	5	5号溝 南端東壁上止め状況 西から	5	5・6号掘立柱建物(8区 2面) 西辺柱列 南から			
P.L.	28	1	6号溝(7区 1-1面) 全景 西から	P.L.	38	1	1号土坑(8区 2面) 全景 西から
	2	2号煙(7区 1-1面) 全景 東から	2	2号土坑(8区 2面) 全景 南から			
	3	1号手すり(7区 1-2面) 東から	3	3号土坑(8区 2面) 全景 南東から			
	4	1号土手内部の石列(木材) 南から	4	4号土坑(8区 2面) 全景 東から			
	5	3号溝と 5号道での遺物(木製品)出土状態 東から	5	5号土坑(8区 2面) 全景 東から			
	6	5号道 遺物(木製品)出土状態 東から	6	6・7号土坑(8区 2面) 全景 南東から			
	7	5号道 遺物(木製品)出土状態 東から	7	8号土坑(8区 2面) 全景 南から			
P.L.	29	1	5号道 遺物(木製品)出土状態 東から	8	9号土坑(8区 2面) 全景 北から		
	2	5号道 遺物(木製品)出土状態 北から	P.L.	39	1	10号土坑(8区 2面) 全景 東から	
	3	5号道 遺物(木製品)出土状態 北から	2	11・12号土坑(8区 2面) 全景 南から			
	4	5号道 遺物(木製品)出土状態 北から	3	14号土坑(8区 2面) 全景 南東から			
	5	5号道 遺物(木製品)出土状態 東から	4	15号土坑(8区 2面) 全景 南西から			
	6	3号溝北側 畑端の植栽痕 東から	5	18号土坑(8区 2面) 全景 南から			
	7	7区(1面) 造構外遺物(瓦質)出土状態 北から	6	19号土坑(8区 2面) 全景 南から			
	8	7区(1面) 造構外遺物(瓦質)出土状態 北から	7	20号土坑(8区 2面) 全景 南から			
P.L.	30	1	7区 2面(As-B下) 全景 空中写真 上空から	8	21号土坑(8区 2面) 全景 西から		
	2	7区 2面 南東隅の段差部分 西上空から	P.L.	40	1	22号土坑(8区 2面) 全景 西から	
	3	7区 2面 南東隅の段差部分 上空から	2	23号土坑(8区 2面) 全景 南から			
	4	2号溝(7区 2面) 全景 南から	3	24号土坑(8区 2面) 全景 南から			
	5	2号溝 上層断面 西から	4	25号土坑(8区 2面) 全景 東から			
P.L.	31	1	7区 3面 南東隅付近 西から	5	26号土坑(8区 2面) 全景 南東から		
	2	1号掘立柱建物(7区 3面) 全景 北から	6	28号土坑(8区 2面) 全景 北から			
	3	8号溝(7区 3面) 全景 南から	7	29号土坑(8区 2面) 上層断面 西から			
	4	7区南壁・8号溝 基本上層 北から	8	29号土坑(8区 2面) 全景 西から			
P.L.	32	1	8-1区 1-1面 全景 北東から	P.L.	41	1	1号烟(8区 2面) 梢出状況 西から
	2	3号煙(8-1区 1-1面) 全景 東から	2	1号烟(8区 2面) 故間に残るAs-BとAs-Ek 西から			
	3	8-1区 2面 全景 北東から	3	8区 3面(古墳時代) 全景 空中写真 上空から			
	4	8-1区 2面 全景 南から	4	8区 3面(古墳時代) 西半構造確認状況 南から			
	5	34号土坑(8-1区 1-2面) 全景 東から	5	8区 3面(古墳時代) 南東隅造構確認状況 北から			
	6	35号土坑(8-1区 2面) 全景 北から	P.L.	42	1	1号竖穴建物(8区 3面) 炭化材出土状態 全景 上空から	
	7	36・37号土坑(8-1区 1-2面) 全景 北から	2	1号竖穴建物(8区 3面) 炭化材出土状態 西から			
	8	38号土坑(8-1区 2面) 全景 北から	3	1号竖穴建物(8区 3面) 炭化材出土状態 北から			

P L.	43	1	1号竪穴建物	北西壁中央	炭化材出土状態	北から	3	21号溝(9区1面)	全景 東から	
		5	1号竪穴建物	北西壁西側	炭化材出土状態	北から	4	23号溝(9区1面)	全景 北西から	
P L.	44	1	1号竪穴建物	遺物出土状態	全景	南西から	5	23号溝(9区1面)	杭列検出状況 北西から	
		2	1号竪穴建物	カマド周辺	遺物出土状態	西から	1	23号溝(9区1面)	杭列検出状況 南西から	
P L.	45	1	1号竪穴建物	カマド右側	遺物出土状態	西から	2	23号溝(9区1面)	杭列検出状況 南西から	
		4	1号竪穴建物	カマド右側	遺物出土状態	南西から	3	23号溝(9区1面)	杭列検出状況 南西から	
P L.	46	1	1号竪穴建物	カマド右側	遺物出土状態	北西から	4	9区1面	遺物(木製品)出土状態 北西から	
		5	1号竪穴建物	カマド右側	遺物出土状態	北西から	5	9区1面	遺物(木材)出土状態 北西から	
P L.	47	1	1号竪穴建物	重なった杯の出土状態	北西から		6	20号溝(9区2面)	全景 南から	
		7	1号竪穴建物	南西壁中央	遺物出土状態	北西から	7	As-B下水田(9区2面)	北東から	
P L.	48	1	1号竪穴建物	白玉出土状態	西から		8	As-B下水田(9区2面)	畦の検出状況 南から	
		2	1号竪穴建物	床面全景	南西から	P L.	49	1	10区1-1面(As-A泥流下)	西側 6号烟、9号復旧杭群、24・25号溝 西から
P L.	49	1	1号竪穴建物	カマド検出状況	西から		2	10区1-1面(As-A泥流下)	6号烟東側 北西から	
		3	1号竪穴建物	カマド検出状況	北から		3	9号復旧杭群(10区1-1面)	上層断面 南から	
P L.	50	1	1号竪穴建物	カマドに据えられた甕檢出状況	西から		4	10区1-2面	東側全景 北から	
		5	1号竪穴建物	カマド底面・支脚檢出状況	西から		5	10区1-2面	西側全景 北から	
P L.	51	1	1号竪穴建物	カマド底面・側壁石組檢出状況	西から	P L.	50	1	10・11号復旧杭群(10区1-2面)	全景 東から
		2	1号竪穴建物	貯蔵穴	南から		2	54号土坑(10区1-2面)	全景 南西から	
P L.	52	1	1号竪穴建物	床下検出状況	上空から		3	55号土坑(10区1-2面)	全景 南西から	
		5	2号竪穴建物	遺物出土状態	全景 北東から		4	10区2面(As-B下)	東半全景 北から	
P L.	53	1	2号竪穴建物	遺物出土状態	北東から		5	10区2面(As-B下)	西半全景 北東から	
		6	2号竪穴建物	床面全景	北東から	P L.	51	1	10区3面	西側全景 西から
P L.	54	1	2号竪穴建物	床面全景	南西から		2	2号掘立柱建物(10区3面)	全景 北から	
		7	2号竪穴建物	床下検出状況	南西から		3	10区1-2面	復旧杭削削作業状況 西から	
P L.	55	1	3号竪穴建物	遺物出土状態	北東から		4	10区東壁	基本上層 西から	
		2	3号竪穴建物	床面全景	上空から	P L.	52	5・7・12・13・16号溝、2号上手、5号道出土遺物		
P L.	56	1	3号竪穴建物	カマド検出状況	南東から		P L.	53	5号道、13・38号土坑、1号溝出土遺物	
		4	3号竪穴建物	床下検出状況	北東から		P L.	54	1A号竪穴建物出土遺物(1)	
P L.	57	1	31号土坑(8区3面)	全景	北から		P L.	55	1A号竪穴建物出土遺物(2)	
		5	31号土坑(8区3面)	全景	北から		P L.	56	2・3号竪穴建物、32号土坑、道構外出土遺物(1)	
P L.	58	1	32号土坑(8区3面)	全景	南から		P L.	57	道構外出土遺物(2)	
		7	8区北壁	基本上層	南から					
P L.	59	1	9区1面	全景	北西から					
		2	21号溝(9区1面)	全景	北西から					

## 第1章 調査に至る経緯、方法と経過

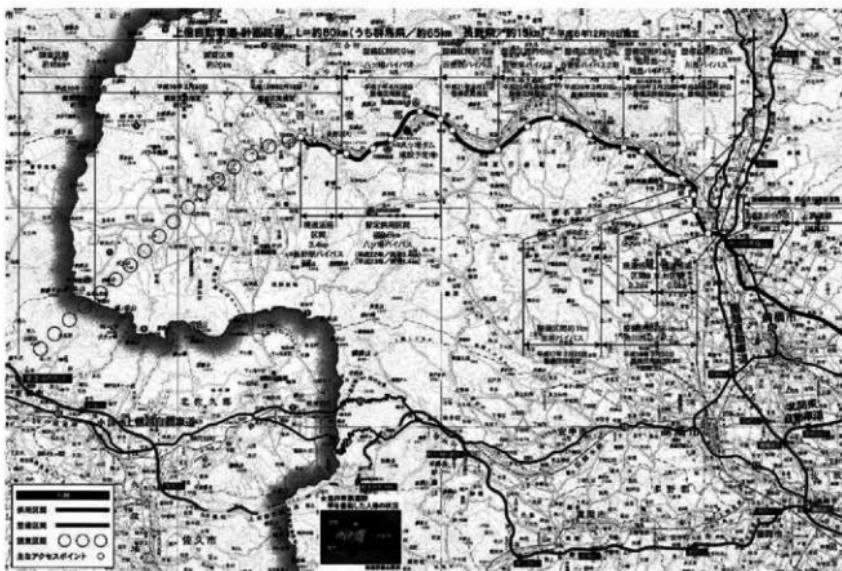
## 第1節 上信自動車道

## 吾妻東バイパスについて

上信自動車道(国道145・353号バイパス)は、群馬県渋川市の関越自動車道渋川伊香保インターチェンジを起点に、長野県東御市の上信越自動車道東部湯の丸インターチェンジへと至る総延長約80km(群馬県約65km、長野県約15km)の地域高規格道路として、平成6年12月16日に計画路線の指定を受けた。この道路は、群馬県の「群馬がはばたくための7つの交通軸構想」における「吾妻軸」として位置づけられ、関越自動車道と上信越自動車道を連携し、吾妻地域の活性化支援に大きく寄与することが期待され、起点となる関越自動車道渋川伊香保インターチェンジの東側に続く前橋渋川バイパスや上武道路を含めた地域高規格道路「熊谷渋川連絡道路」とともに、本県の広域的ネットワークを形成する重要な路線である。

この上信自動車道は、起点から県境までを渋川西バイパス(国施工区間約5km)、金井バイパス(約1km)、川島バイパス(約2km)、祖母島～箱島バイパス(約4km)、吾妻東バイパス2期(約7km)、吾妻東バイパス(約6km)、吾妻西バイパス(約7km)、ハッ場バイパス(約9km)の各整備区間と、さらに調査区間(約26km)とに分かれている。この中には、既に現道活用や暫定供用されている区間もある。

吾妻東バイパスは、国道145号バイパスの一部となる整備区間の一つで、東吾妻町大字植栗の上信自動車道吾妻東バイパス2期区間から同町大字厚田の吾妻西バイパスとの接続地点までの約6.4kmの区間である。令和3年度は植栗、岩井、川戸、厚田地区で引き続き埋蔵文化財調査を実施とともに、厚田地区においては橋の工事に着手し、また、全線において用地買収が進められた。



<http://www.pref.gunma.jp/contents/100010158.pdf>

## 第2節 調査に至る経緯

上信自動車道吾妻東バイパス(以下、吾妻東バイパスと称する)は、平成25(2013)年5月16日に整備区間の指定を受け、その後に路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事着工準備が進められた。

本遺跡は、東吾妻町遺跡番号0117、近世の遺跡として東吾妻町の遺跡台帳に登録されており、上信自動車道建設に伴う土木工事が計画された地点は、その包蔵地内に所在している。

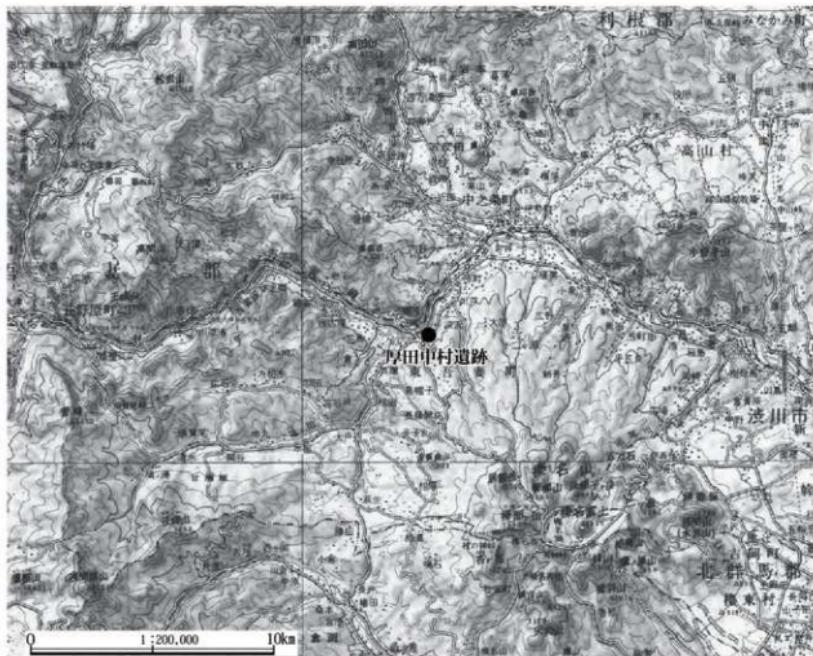
### 第1項 吾妻西バイパス建設事業に伴う

#### 厚田中村遺跡の発掘調査

上信自動車道吾妻西バイパス(以下、吾妻西バイパス

と称する)建設工事に先立って、平成25年3月及び6月に、群馬県教育委員会事務局文化財保護課(現・群馬県地域創生部文化財保護課、以下、県文化財保護課と称する)が、工事対象地における埋蔵文化財の包蔵を確認するために試掘・確認調査を実施したところ、工事対象範囲において埋蔵文化財の包蔵が確認されたため、群馬県土整備部(以下、県土整備部と称する)及び同中之条土木事務所(以下、県中之条土事務所と称する)と県文化財保護課による調整の結果、工事計画等の変更が不可能なことから、工事対象範囲に包蔵される埋蔵文化財について、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じることとなった。なお、後に、平成28年度に、平成28年7月19日付け中土第112-21号にて提出された事業地も調査に取り込むこととなった。

吾妻西バイパス建設事業に伴う厚田中村遺跡の発掘調査は、平成25年7月1日～平成25年12月31日、平成26



第2図 遺跡の位置(国土地理院 1 / 200,000 地勢図「長野」平成24年5月1日を使用)

(2014)年8月1日～平成26年11月30日、平成28(2016)年4月1日～平成28年12月31日の3次に亘って、県中の条土木事務所の委託を受けた当事業団によって12,371.15m<sup>2</sup>を対象に実施された。その結果、古墳時代後期Br-FA以下の水田と溝、平安時代後期As-B以下の水田・畑・溝・柱穴列・ピット、近世As-A以下の水田・畑・溝等の遺構が検出された。とくに、古墳時代から近世に至る水田が何層にも亘って検出され、南の様な山麓側から北の吾妻川に向かって傾斜する地形を段状に造成し、平坦面を確保して南高北低の棚田を造成し、地形の制約を受けながらも最大限の生産性を確保しようとした様子を窺うことが出来た。遺跡所在地は現在も水田地帯であり、古墳時代以来、長期にわたって連続と水田が営まれてきたことが判明した。また、吾妻地域においてはじめて発見された古墳時代の極小小区画水田の事例であり、本県において発見された古墳時代水田遺構の最北の事例として注目された。

その調査成果は、県上信道事務所の委託を受けた当事業団が、平成29(2017)年1月1日～平成29年3月31日、平成29年5月1日～平成30(2018)年3月31日、平成30年4月1日～平成30年6月30日の3次に亘って整理業務を実施し、平成30年10月16日に『厚田中村遺跡 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』を刊行した。

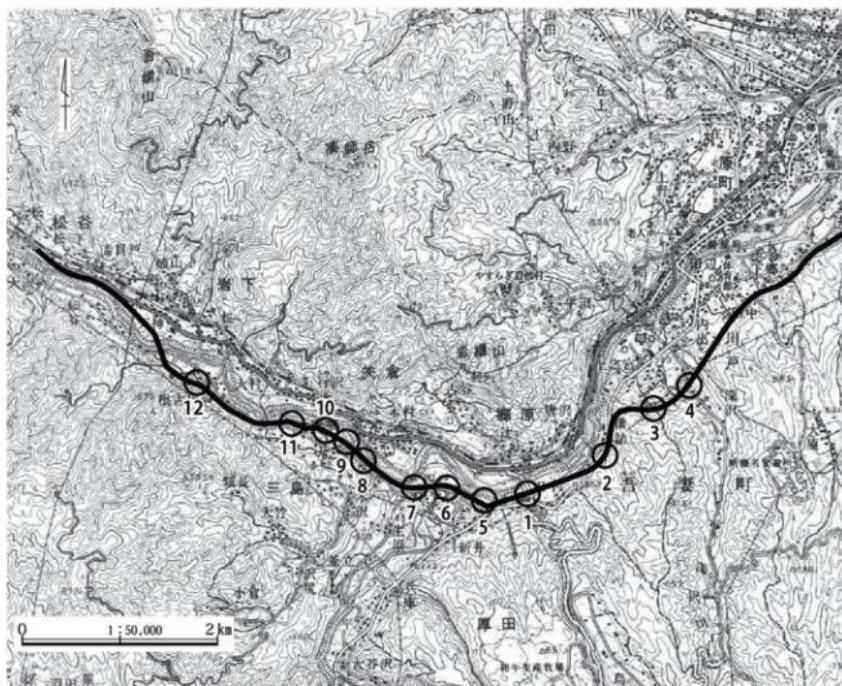
## 第2項 吾妻東バイパス建設事業に伴う 埋蔵文化財の発掘調査の経緯

平成25～28年度に発掘調査、平成28～30年度に整理が実施された吾妻西バイパス建設事業に伴う本遺跡の東側となる吾妻東バイパス建設事業対象範囲についても、埋蔵文化財包蔵地の範囲にかかっていたため、県上信道事務所は令和元(2019)年11月7日付け上建第32200-10号にて、当該地(厚田地区)における埋蔵文化財包蔵の状況について県文化財保護課に試掘・確認調査を依頼した。それを受けた県文化財保護課は令和元年11月12～14日に試掘・確認調査実施し、工事対象範囲内において遺構の存在を確認したため、令和元年12月3日付け文財第706-95号にて、試掘・確認調査の結果、工事対象地において埋蔵文化財の包蔵が認められたことを県上信道事務所長宛に回答した。

県上信道事務所は、令和2(2020)年5月1日付け上建第32200-4号にて東吾妻町教育委員会(以下、東吾妻町教委と称する)宛、東吾妻町大字厚田923-1、923-2、924、927-2、982、983、984、1011、1018、1019、1077-1、1080-2、1077-2、道路他について、文化財保護法第94条に基づく通知(国の機関、地方公共団体又は国若しくは地方公共団体の設立に係る法人で政令の定めるものが、土木工事その他の埋蔵文化財の調査以外の目的で、周知の埋蔵文化財包蔵地を発掘しようとする場合に、当該発掘に係る事業計画の策定に当たり予め通知するもの)を提出し、東吾妻町教委は東吾社第7号にてこれを県文化財保護課に進呈した。それを受けた県文化財保護課は令和2年5月1日付け文財722-5号にて、工事対象範囲内に埋蔵文化財が存在するため、県上信自動車道建設事務所宛に、工事着手前に埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施を勧告した。

その後、令和2年8月31日に行われた県文化財保護課と県県土整備部道路整備課との協議によって、発掘調査箇所が追加されることになり、県上信道事務所は令和2年9月1日付け上建第32200-17号にて東吾妻町教委宛に東吾妻町大字厚田861-1、862-1、864-1、864-2、914-1、915-1、916-1、916-2、922、993、1013、道路について文化財保護法第94条に基づく通知を提出、東吾妻町教委は令和2年9月1日付け東吾社第55号にてこれを県文化財保護課に進呈した。

また、県上信道調査事務所は令和2年11月11日付け上建第423-1号にて県文化財保護課宛、吾妻東バイパス工事対象範囲である東吾妻町大字川戸地内における試掘・確認調査を依頼し、それを受けた県文化財保護課では、令和2年11月20日・30日、12月1～4日にわたりて当該箇所において試掘・確認調査を実施し、遺構の存在を確認した。県文化財保護課は、令和2年12月21日付け文財第706-76号にて県上信道事務所宛、東吾妻町大字川戸地内において発掘調査が一部必要であることを回答した。県上信道事務所は、令和3(2021)年2月24日付け上建第423-5号にて東吾妻町教委宛、東吾妻町大字植栗423-1、423-5、423-3、423-8、423-10、423-11、道路、水(下泉B遺跡)、東吾妻町大字植栗530、531、534、道、水(下泉A遺跡)、東吾妻町大字植栗543-3、543-2、545、544、575、道路、水(小田沢遺跡)、東吾妻町大字



第3図 上信自動車道吾妻東・西バイパスの路線と各遺跡位置図(国土地理院1/50,000地形図「草津」「中之条」を使用)

第1表 上信自動車道吾妻東・西バイパス調査遺跡一覧

(令和4年12月現在)

遺跡名	調査年度									
	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	H31・R1年度	R2年度	R3年度	R4年度
1 厚田中村道路	○	○		○				○	○	
5 新井道路		○	○	○						
6 四戸の古墳群						○				
7 四戸遺跡	○	○	○	○		○				
8 万木沢B道路					○					
9 唐堀B道路		○	○							
10 唐堀道路		○	○	○	○	○				
11 唐堀C道路			○		○					
12 根小原城跡ほか			○		○	○				
西バイパス										
1 厚田中村道路								○	○	○
2 厚田橋詰道路										○
3 川戸太田道路								○		
4 深沢道路								○		
東バイパス										
小田沢道路								○	○	
池ノ沢道路									○	
小泉天神西										○
新巻駿附道路										○

岩井1912-1、1409、1410、1412、1411、1413、1440-2、1442、1447-1、道路、水(岩井山根B遺跡)、東吾妻町大字川戸1579-1、1577-1、1580-1、1602-1、1605-2、1605-3、1605-1、道(深沢遺跡)、東吾妻町大字川戸1638-18、1638-34、1644-19、1644-18、1638-11、1638-12、1638-8、1638-6、水(川戸太田遺跡)、東吾妻町大字厚田1000、1001、1003、1002、1004、1009、1039-2、1085-1、道路(厚田中村遺跡)における文化財保護法第94条に基づく通知を提出。東吾妻町教委は令和3年2月24日付け東吾教社第132号にてこれを県文化財保護課に達した。工事実施に当たっては、現状における遺跡の保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置が執られることになった。

本報告書掲載の厚田中村遺跡の発掘調査は、県上信道事務所の委託を受けた当事業団が令和2年7月1日から同年12月31日までの6箇月間と、令和3年4月1日から同年6月18日までの約3箇月弱に亘って、調査担当者10名によって実施した。調査対象面積は、令和2年度に12,855.60m<sup>2</sup>、令和3年度に8,767m<sup>2</sup>、計21,622.60m<sup>2</sup>である。なお、厚田中村遺跡の発掘調査は、令和4年度にも実施されている。

## 第3節 調査の方法

### 第1項 調査区と座標の設定

#### 1. 調査区の設定

厚田中村遺跡の調査は、北東-南西方向に細長い総延長約540mの路線部分が調査対象とされた。平成25・26・28年度の3箇年に亘って発掘調査が進められた吾妻西バイパス建設事業に伴う発掘調査範囲の東側に隣接する地点であり、吾妻西バイパスでの調査範囲を南北に分断していた生活道路の継ぎで、それと直角に交差する道・水路によって分断された9箇所と、飛び地のように北東側約200mを隔てた1箇所の計10箇所の調査区を設定した。

全調査区中、最も南西寄りの調査区は、吾妻西バイパス関連調査範囲全体の北東端に当たる9区のすぐ北側に隣接する4区で、南西側より東西道路の南側に1区と北側の5区、南側に2区と北側の6区、南側に3区と北側

の7区、南側に10区と北側の8区および8-1区、そして北東端に離れた調査区を9区として、調査の着手順に呼称した。

#### 2. 座標の設定

発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記し、「X=63,100、Y=-92,200」の場合、「100-200」のように表記した。本遺跡の、吾妻東バイパス建設事業関連で発掘調査された調査範囲は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)のX=61,055～61,250、Y=-91,700～-92,255の範囲に収まる。実際、発掘調査においては、遺構測量における遺構の位置及び遺物出土位置などはすべて世界測地系の座標によって記録した。本報告書でも、遺構外出土遺物を含め、遺構・遺物の位置情報については、世界測地系の座標によって表記する。(第4図参照)

## 第2項 発掘調査の方法

#### 1. 発掘調査

先述した通り、令和元年11月に県文化財保護課によって調査対象地における試掘・確認調査が実施され、表土層直下において天明泥流層及び礫を多量に含む黒褐色砂質土が確認された。天明泥流層下からは褐灰色砂で覆われた暗褐色水田耕土、As-A下からは水田耕土の黒色土、As-Kk下からも水田耕土の黒色粘質土が検出され、複数箇所に亘る遺構が存在することが確認された。

**①安全対策・環境整備** まず、周辺の安全対策・整備としてロープスティックとトラロープを使用して調査区を囲い、看板や旗幕を使って危険箇所の明示をした。重機が通行する道路には保護のため、ブルーシートと鉄板を敷設した。堆積土が厚く調査面までが深いため、単管パイプの階段を設置した。また、水路を渡る部分も鉄板を敷いて対応した。湧水が激しいため、調査区周囲に電源を設置し、水中ポンプで排水した。電源の無い調査区においては発電機で対応した。

**②表土掘削と遺構調査** 発掘調査の方法はごく標準的な方法を用いた。1～3面とも、遺構確認面に至るまでの

表土、天明泥流層、As-Kk、As-B、Hr-FA層表土等、次の調査面までの堆積土は重機を使用して掘削し、廃土はダンプカー・クローラーダンプを使って排出した。

その後、それぞれの文化面を発掘調査作業員(以下、作業員と称する)により、鏝簾によって均質に削っていくことで掘削作業、平面精査を行い、面的な遺構の把握に努めた。遺構の認定は発掘調査担当者(以下、担当者と称する)が行い、人為的な掘り込み箇所を遺構と認定し、調査に着手した。遺構名は、遺構確認面に抛らず遺構種別毎に本遺跡全体における通し番号で標記した。

遺構掘り下げ作業や埋没土の土層観察用ベルト設定位置などの作業指示は、担当者が遺跡掘削技術者(以下、代理人と称する)に指示し、各遺構の調査は、土層確認のためのベルトの設定もしくは半截して土層観察を行う等、それぞれに適した方法を用い、発掘作業員が移植鍛等で掘削した。発掘作業員が人力で掘削した廃土はキャリーダンプで搬出した。

③調査記録 埋没土や遺構・遺物の写真記録作業などは担当者が行った。遺構断面図、遺構平面図、出土遺物図等の図化は測量業者に委託し、また遺跡全体の空中写真撮影も業者委託した。

また、調査過程において出土した遺物については、出土した遺構ごとに出土地点を記録し、整理・集約した上で、洗浄および出土遺跡・遺構・出土地点等に関するデータを注記する作業を業者委託し、業者から提出を受けた成果品については、発掘調査担当者が逐次、点検・照合し、受領した。

④調査終了後の埋め戻し 各区の調査終了後に、掘削重機と不整地運搬車を使用して埋め戻しを行った。

## 2. 遺構測量

遺構等の測量は、遺構断面及び平面実測図とも縮尺1/20を基本とし、遺構の状況に応じて、長大な土坑及び溝、広範囲に及ぶ煙などの遺構を実測する際には、適宜、1/40・1/60などの縮尺とした。

遺構平面実測図の作成に当たっては、測量会社にデジタル測量を委託し、デジタルデータおよび打ち出し図面の提出を受けた。遺構断面実測図は、原則として発掘現場における発掘作業員によってアナログ実測で作成された図を元に、測量会社にデジタルデータ化を委託し、遺

構平面実測図と同様、デジタルデータおよび打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品およびアナログ実測された原図等は、調査記録として保存されている。

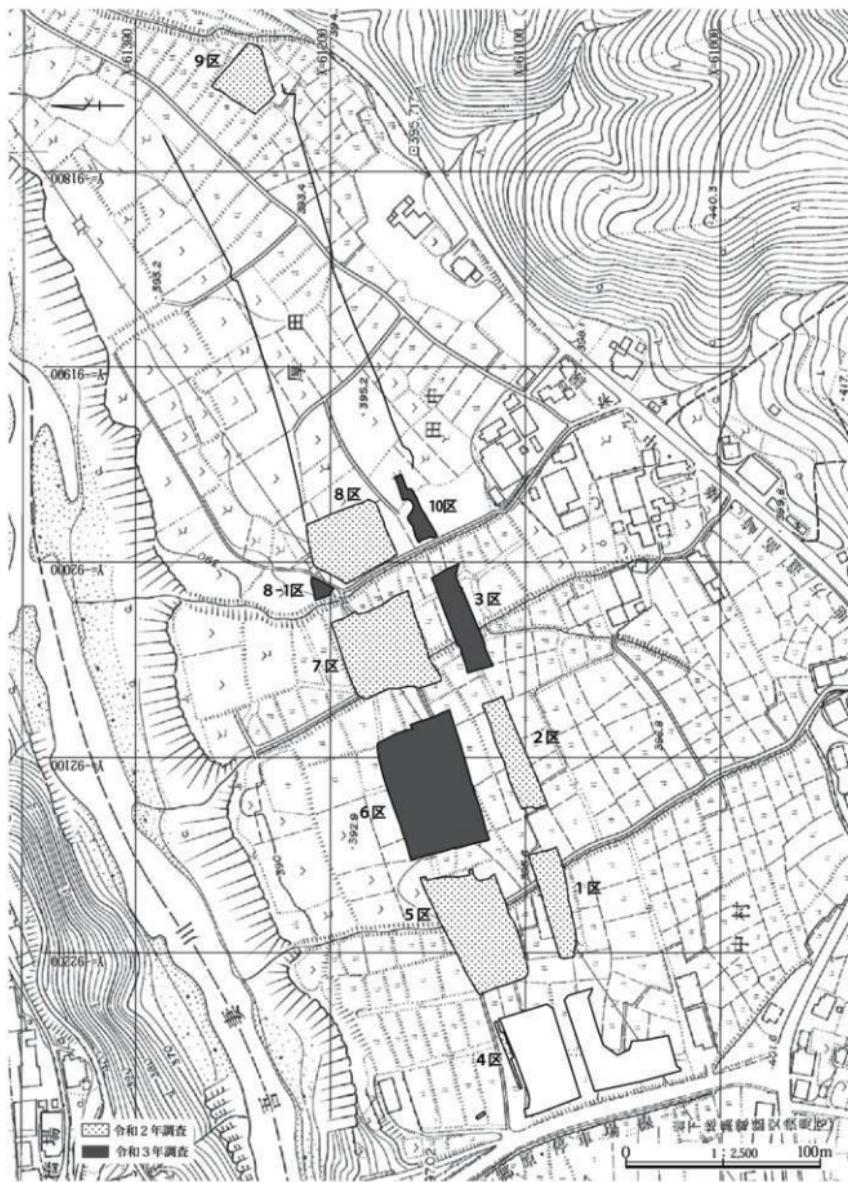
## 3. 遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真は発掘調査担当者が分担して撮影した。掘立柱建物等主要な遺構については中判カメラを用いてiso400モノクロフィルムを6×7cm判サイズで撮影し、撮影記録はネガフィルムの状態で保存し、焼き付け写真を貼付したフィルムの検索台帳を作成した。

また、発掘調査の過程で、調査の進捗状況の記録、及びすべての遺構について、デジタルカメラで撮影を行った。調査記録としては、遺構ごとに土層断面、遺物出土状態、遺構全景等の撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について、検出および調査の状況について微細な接写を行っている。

調査区の全景写真等は、調査の進展にあわせて行い、併せて空中写真撮影を実施した。記録保存の一環の全景写真撮影にあたっては、上空からの空中写真撮影、および、遺構の記録保存としての遺構図化・測量については委託により実施した。

なお、撮影した写真のデジタルデータは、HDやDVD-ROM等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。



第4図 調査範囲図と調査区割図(1/2,500吾妻町都市計画図(東吾妻町提供)を一部加工)

## 第4節 調査の経過

吾妻東バイパス建設事業に伴う発掘調査は、先述した通り、令和2・3年の2箇年度に亘って合計21,622.60m<sup>2</sup>を対象として実施した。

調査対象地は県道郷原停車場線の東側にあたり、道路・水路によって細かく分割された東西方向に長い路線であることから、令和2年度調査時に調査対象地の中央付近を東西に延びる道路を挟んだ南側の西端から1・2・3区、北側の西端から4・5・6・7・8区とし、急速、調査対象に加わった東端部南側を9区とした。その後、3区の東隣に10区を設定し、さらに8区の北側に8-1区を設けた。

### 第1項 発掘調査の経過

#### 1. 令和2年度の発掘調査

令和2年度は1・2・4・5・7・8・9区を対象として、7月および10～12月に調査を行った。7月は8区西半の1・2面を、10月からは8区、4区、1区、7区、2区、5区の順に、調査時期を重複させながら進めていった。調査は吾妻西バイパスの調査に倣い、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した面を第1面とし、第2面は12世紀前半と天仁元(1108)年の浅間山噴火による火山灰層(As-Kk・As-B)下面、第3面には6世紀初頭における榛名山噴火の際に降下した火山灰層(Hr-FA)下面、さらにローム層上面を第4面として調査を行った。但し、調査区によって各調査面の状態は、均一ではなかった。各区の調査終了後は埋戻しを行い、最終的に5区を埋戻して年度の調査を終了した。発掘調査の表面積は12,855.60m<sup>2</sup>である。

以下に、主な調査経過を記す。

7月1日 現地調査事務所の設営等、調査の準備を開始する。

7月7日 8区の調査範囲設定と、重機による表土掘削を開始する。

7月9日 重機による表土掘削を継続しつつ、8区(西半)第1面の人力による遺構確認を開始する。

その後、遺構調査へと移行する。

7月16日 8区(西半)第1面調査を終了し、第2面調査のための重機による掘削を開始する。

7月17日 8区(西半)第2面の遺構確認を開始し、遺構掘削の準備を始める。

7月19日 8区(西半)第2面の調査を終了させ、現地調査の一時撤収を図る。

10月1日 調査を再開するための準備を開始する。

10月2日 調査区の確認と、8区(東半)第1面への重機による表土掘削を開始する。

10月5日 8区(東半)第1面への重機による表土掘削を継続しつつ、1区への人力によるトレンチ調査を開始する。

10月9日 8区(東半)第1面の遺構確認を開始し、その後に遺構調査へと移行する。併行して、4区への人力によるトレンチ調査を開始する。

10月14日 8区(東半)第1面の空中写真撮影を実施し、図化等の記録を行なう。その後、第2面調査のための重機による掘削を開始し、さらに遺構確認、遺構調査を開始する。併行して、1区第1面への重機による表土掘削を継続する。

10月20日 8区(東半)第2面の全景写真を撮影し、図化等の記録を行なう。その後、第3面調査のための重機による掘削を開始し、さらに遺構確認を開始する。併行して、7区第1面調査のための重機による表土掘削を開始する。1区第1面の調査は継続する。

10月30日 8区第3面の空中写真撮影を実施し、さらなる遺構の詳細調査へと移行する。また、7区第1面については遺構確認を行いつつ遺構掘削へと進展を図り、1区第1面調査の全景写真の撮影と記録を行う。なお、調査の進展の都合上、1区の調査を一時中断とし、安全上から埋め戻しを行う。

11月9日 2・5区の調査開始として、重機による両区の表土掘削を始める。併行して、7区第1面および8区第3面の調査は継続する。

11月13日 7区第1面の空中写真撮影ならびに空中写真測量を実施して調査の進捗を図り、その後に第2面調査へと進行する。また、2・5区第1面

の調査および8区第3面の調査は継続する。なお、7・8区において、火山灰分析のための試料採取も行われる。

11月18日 7区第2面の空中写真撮影を実施し、第3面調査のための掘削・遺構調査へと移行する。また、2・5区第2面の調査は継続する。

11月20日 2区第2面および7区第3面の全景写真を撮影し、2区はその後に第3面調査のためのトレンド掘削へと移行する。また、7区第3面は図化等の記録作成に移行する。併行して、5区第2面は調査を継続し、8区では埋め戻しが始まる。

11月26日 2区第3面の全景写真を撮影し、図化等の記録後に埋め戻しを開始する。5区第2面の調査は継続。8区の埋め戻しは継続させ、7区での埋め戻しも開始する。

12月1日 1区の調査を再開し、第2面調査のための重機による掘削を開始する。また、5区第2面調査は継続し、2・7区での埋め戻しも継続中。

12月2日 新たに今年度の調査範囲に加えられた本遺跡の路線内東端の区画を9区とし、その調査準備を整えた後に重機による表土掘削を開始する。

12月4日 5区第1・2面の空中写真撮影を実施し、図化等の記録作業を継続する。また、1区第2面および9区の調査は遺構確認・掘削へと移行し、7区の埋め戻しは終了する。2区は埋め戻し継続。

12月11日 1区第2面および9区第2面の空中写真撮影を実施し、図化等の記録を終えた後に、埋め戻しを開始する。また、5区第3面調査のためのトレンド調査を開始し、Hr-FA下水田(小区画水田)の確認後に重機による掘削と遺構確認・調査へと進展させる。

12月23日 5区第3面の空中写真撮影を実施し、図化等の記録を終えて現地調査を終了する。その後、5・9区の埋め戻しを行うと共に、資材の撤収を図り、年度内の調査を完了させた。

## 2. 令和3年度の発掘調査

令和3年度は、昨年度調査に継続して3・6・8-1・

10区を対象に4・5月の予定で調査を進めたが、6区第3面の遺構の存在とその残存状態の良好さから調査期間を6月まで延長となった。調査は、まず8-1区と3区から着手し、やや遅れて6区の着手、その後の8-1区の終了後に10区の調査へと移行し、複数の調査区を併行して進めた。各区の調査終了後は埋め戻しを行い、最終的に6区を埋め戻して年度の調査を終了した。発掘調査の表面積は8,767m<sup>2</sup>である。

以下に、主な調査経過を記す。

4月1日 現地調査事務所の設営等、調査の準備を開始する。

4月6日 調査範囲設定と、8-1区の表土掘削を開始し、併せて遺構確認も行う。

4月7日 8-1区第1面の全景写真を撮影し、その後に第1-2面(中世～近世)の調査に移行する。また、3区への重機による表土掘削を開始する。

4月12日 新たに、6区への重機による表土掘削を開始する。8-1区では第1-2面の全景写真を終えて第2面の遺構調査に移行し、3区第1面では遺構確認と遺構調査を継続する。

4月19日 8-1区では第3面および旧石器時代確認調査を終え、その後に埋め戻しを行い調査を終了した。また、3区第1面の全景写真を撮影し、図化等の記録後に第2面の調査へと移行する。6区第1面では重機による表土掘削と遺構確認を継続する。さらに、10区への重機による表土掘削を開始する。

4月26日 8-1区では第3面および旧石器時代確認調査を終え、その後に埋め戻しを行い調査を終了した。また、3区第1面の全景写真を撮影し、図化等の記録後に第2面の調査へと移行する。6区第1面では重機による表土掘削と遺構確認を継続する。さらに、10区への重機による表土掘削を開始する。

4月30日 3区第3面と10区第2面の全景写真を撮影し、3区は図化等の記録後に埋め戻しを開始、10区は図化等の記録後に第3面調査へと移行する。また、6区第1面は遺構調査を継続する。

5月6日 10区第3面の全景写真を撮影し、図化等の記

## 第1章 調査に至る経緯、方法と経過

- 録後に第4面調査へと移行する。また、3区の埋め戻しは終了し、6区第1面は遺構調査を継続する。
- 5月13日 6区第1面の空中写真撮影を実施し、図化等の記録後に第2面の掘削・遺構調査へと移行する。また、10区第4面の調査を終え、埋め戻しを開始する。
- 5月18日 10区の埋め戻しを終了する。6区第2面の掘削・遺構調査は継続する。
- 5月28日 6区第2面の空中写真撮影を実施し、図化等の記録後に第3面調査のための掘削・遺構調査へと移行する。
- 6月10日 6区第3面の空中写真撮影を実施し、図化等の記録を終えた後に、埋め戻しを開始する。
- 6月18日 6区第3面の埋め戻しを終え、資材の撤収を済ませて年度内の調査を完了させた。

## 第2項 整理作業の経過

整理事業は、令和2・3年度に発掘調査した出土資料を対象に、2カ年度に跨る令和4年2月1日から令和4年11月30日までを予定し、報告書刊行に向けた整理作業を行った。

### 1. 令和3年度の整理作業

整理作業を進めるにあたり、まずは各種データ類の確認と図面類の基礎整理作業を先行させた。また、各調査区での調査面の整合性を図るために、各調査区ごとの遺構平面図を確認し、各調査面ごとの全体図の作成を先行する必要性があった。

基礎整理作業は、各区ごとに調査面数の確認と調査面の時期の確認、さらに検出された遺構種・数量および遺構番号の確認を行い、遺構測量図(平面図・断面図)と土層注記等の確認および修正作業への手順で1区から5区までを終わらせ、図のデジタル化を図った。

原稿については、凡例と第1章を先行して執筆にあたった。

### 2. 令和4年度の整理作業

前年度の図面類の整理作業を継続し、遺構計測、遺構

台帳の作成、調査記録写真の確認、出土遺物の分類と報告書掲載遺物の選定・図化作業を進め、併せて報告書刊行に向けた執筆および編集作業、遺物や資料類の収納作業を行い、整理業務の完了に努めた。

遺構測量図については、前年度からの整理作業の継続として、6区から10区までの確認および修正作業を終わらせ、図のデジタル化を図った。併行して、各遺構図版の仮レイアウトの作成、その後のデジタル編集をそれぞれ進めた。また、遺構計測や遺構台帳の整備をその都度行った。

出土遺物については、遺物種別・時期別の基礎分類を行った上で、遺物種別ごとに整理作業が進められた。繩文・弥生土器は、細時期別・器種別といった土器分類を先行し、その後に拓本・断面実測、トレース作業を行った。古墳時代から平安時代の土師器・須恵器については、出土遺構ごとに接合・復元作業、その後に報告書掲載遺物の選定・実測、トレース作業。陶磁器類については、時期・产地・器種別の分類、掲載遺物の選定・実測、トレース作業を行った。金属製品および木製品類については、表面のクリーニングや洗浄作業、台帳作成、掲載遺物の選定・実測、トレース作業を行った。石器・石製品についても、器種別分類、石材同定、台帳作成、その後に掲載遺物の選定・実測、トレース作業を行った。これらの掲載遺物については、作業過程の中で、報告書掲載用の写真撮影を行うと共に、遺物観察表の作成を行っている。

本文原稿の執筆にあたっては、各区ごとに遺構別の原稿執筆を掲載遺物図との整合性を図りつつ進め、併せて各種表の作成等を行った。

その後、本文原稿および遺構・遺物図、遺構・遺物写真を合わせた報告書版下のレイアウト作成、そして全体のデジタル編集作業およびデジタル組版を行った。その上で、印刷・製本を業者委託して発掘調査報告書を刊行した。

一方、整理作業を終えた遺構測量図や遺物、写真等といった資料については、管理台帳を作成し、活用に備えた遺物や資料類の収納作業を行った。

以上の整理経験を経て、すべての整理業務を完了した。

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

厚田中村遺跡は、群馬県北西部となる吾妻郡東吾妻町の西部に位置し、JR吾妻線原駅から南に約0.3kmの距離にあり、吾妻郡東吾妻町大字厚田字中村に所在する。東流する吾妻川の右岸段丘上に位置し、榛名山麓から北流して吾妻川に注ぐ田中沢川と本田中沢川によって形成された扇状地で、榛名山北西麓の末端に立地する。遺跡の西端には田中沢川が、東側には本田中沢川が扇状地形を大きく分割する。標高は410m前後を測る。なお、この厚田中村遺跡は、吾妻東バイパス建設事業に伴う発掘調査(平成25・26・28年度)と、その東側に隣接する吾妻東バイパス建設事業に伴う発掘調査に分かれて進められ、現在も吾妻東バイパス建設事業に伴う発掘調査は進行している。

この地域では、平坦面を形成する扇状地上を長期に亘って土地利用しており、現在は水田地帯となっている。

吾妻郡東吾妻町は、平成18(2006)年3月27日に吾妻郡吾妻町と東村が合併して成立した。榛名山の北側に位置し、町域の北・西・南には標高1000m級の嶺が連なり、吾妻川を挟んだ南側に榛名山や浅間隠山、北側には岩櫃山や吾嬬山などが聳え、町内を吾妻川・温川・深沢川などの河川が流れている。周辺の山地は、急峻な地形を呈している。なお、本遺跡から北側に望む岩櫃山は標高802mの岩山で、奇岩・怪石からなる山容は吾妻八景を代表する景勝地としても知られている。

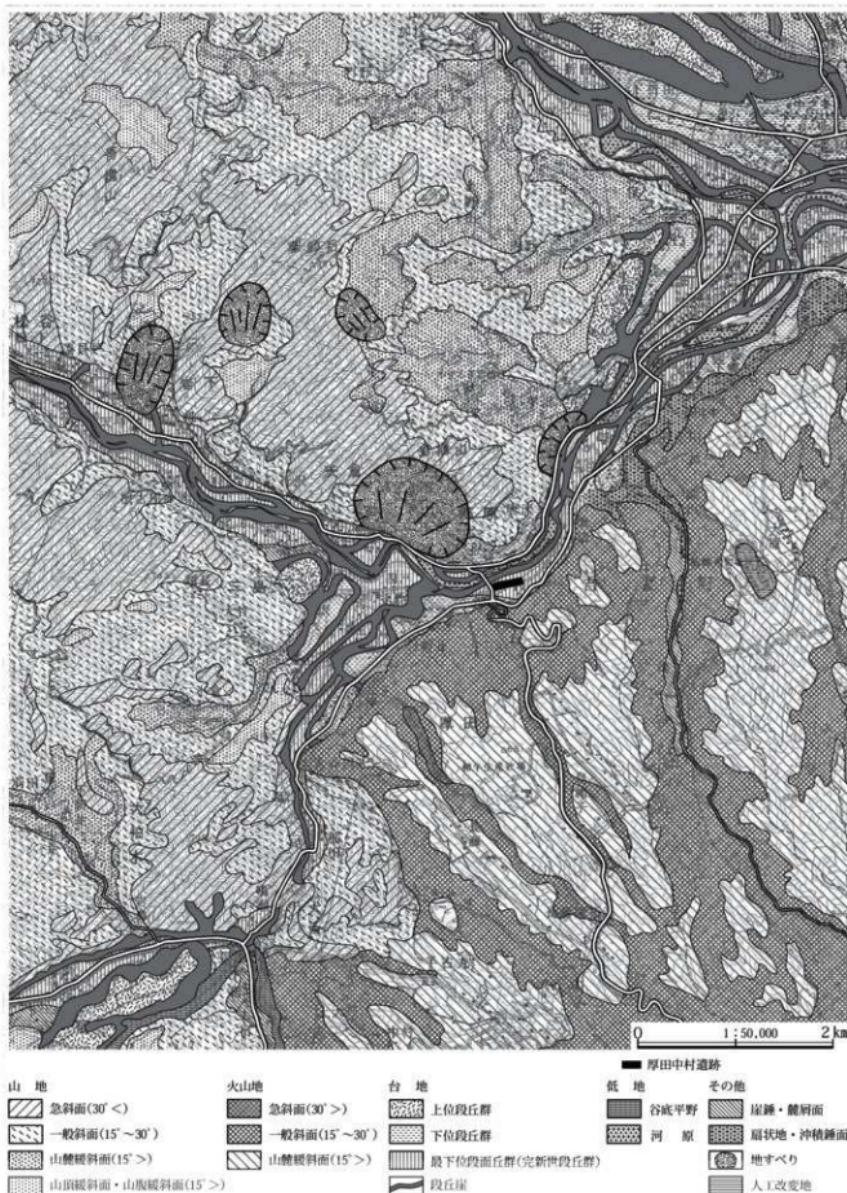
吾妻川は、長野県との県境である鳥居峠付近を源とし、吾妻郡内を西から東へと流れている。川沿いには河岸段丘が発達しており、上位段丘面群である蓑原面・成田原面、中位段丘面である新巻面、下位段丘面である中之条面、最下位段丘面群である伊勢町面群に分類される。これら段丘面のうち、上位段丘面群に下部～上部ローム層が、中位段丘面に中部～上部ローム層が、下位段丘面に上部ローム層が堆積している。最下位段丘面群にはローム層が堆積していない。なお、2020年に刊行された『四戸遺跡』(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調

査報告 第668集)には、地質の詳細が掲載されている。その中で相京建史・山口一俊は、地質調査地域での成田原面の下位にある段丘面は中之条(N k)面であり、温川沿いに連続し、吾妻川に沿っては吾妻渓谷の下流側の両岸に連続するが、その分布は下流ほど狭くなるという。このN k面と地形分類した地点は上部ローム層で直接覆われており、本遺跡の西側に位置する新井遺跡も当たるが、東から西側にN k面からIs-I面へと緩傾斜で移行し、温川右岸で段丘となる。そして、中之条面の下位にあたる伊勢町面群は3面に分けられ、伊勢町I(Is-I)面は調査地域の上流から下流にかけての連続する幅広い平坦な段丘面を形成し、温川西岸の四戸の古墳群や四戸遺跡、万木沢B遺跡等が該当する。また、Is-I面は露頭の観察やボーリングデータから見る限り、ローム層の堆積ではなく、四戸遺跡等でのローム層に類似した褐色砂礫層は吾妻川の段丘礫層で、厚さ8mの褐色砂礫層の最上部の堆積物であるともしている。

吾妻川中流域の広い面積を占めるIs-I面上には多くの遺跡が古めており、その下位となるIs-II・III面は共に狭い段丘面で調査された遺跡は少ない。また、Is-I面を天明泥流堆積物に覆われる遺跡も知られ、泥流堆積物中に貯留した巨岩の存在も数多く知られている。本遺跡も、そうした天明泥流堆積物に覆われた遺跡である。

本遺跡の西約7kmに位置する国指定名勝吾妻峡も、吾妻川によって形成された峡谷で、吾妻郡東吾妻町大字松谷の雁ヶ沢川との合流地点付近から吾妻郡長野原町大字川原湯の八ツ場ダム東側にかけての約4kmに亘っている。

榛名山は、標高1449mの掃部ヶ岳を最高峰とする複式成層火山であり、山頂部にはカルデラ、カルデラ湖、中央火口丘等が、山体斜面には熔岩ドームや爆裂火口が存在し、古墳時代6世紀の初頭と前半とされる二度の噴火が発生している。榛名山北側山麓の大部分は火山麓扇状地であり、大谷沢川・深沢川・寺沢川・大泉寺川・泉沢川・奥田川などの放射谷が山体を抉っている。泉沢川以西では、火山麓扇状地原面の一部が保存されている。周辺の山地は、急峻な地形を呈している。



第5図 周辺地形分類図(国土交通省国土政策局国土情報課5万分の1都道府県土地分類基本調査(中之条)を一部改変)

## 第2節 歴史的環境

遺跡のある東吾妻町は、吾妻郡の東南に位置し、名勝地「吾妻渓谷」を有する吾妻川が町内を東へと流下する。古代にあっては「吾妻郡」の一角をなし、戦国武将「真田氏」の岩櫃城（国指定史跡）、近世の大戸閻はよく知られているところである。特に、郷原遺跡から出土した縄文時代後期の「ハート形土偶」（国指定重要文化財）、岩櫃山の山頂付近には弥生時代中期の「岩櫃山鷹の巣遺跡」といった著名な遺跡がある。また、近年の上信自動車道吾妻西バイパスおよび吾妻東バイパス建設に伴う発掘調査が進行し、その調査件数が増大している状況にある。

ここでは、各時代を通じた概要を記すこととする。

### 1. 旧石器時代

吾妻郡内の旧石器時代の遺跡調査事例は極めて少なく、高山村に所在する新田西沢遺跡が知られているのみで、東吾妻町での調査例はない。

### 2. 縄文時代

縄文時代後期のハート形土偶で知られる郷原遺跡や、中期の新巻類型土器の標識遺跡である新巻遺跡、後・晚期の唐堀遺跡、ハッカダム関連調査での上郷岡原遺跡が知られているものの、東吾妻町内の縄文時代遺跡の発掘調査例は少なかった。近年の上信道吾妻西バイパス調査では、新井遺跡、四戸遺跡、万木沢B遺跡、唐堀遺跡、唐堀C遺跡、細谷遺跡において縄文時代の遺構・遺物が報告されている。また、現在、発掘調査が進められている上信道吾妻東バイパス調査においても、縄文時代の遺構の検出が相次いでいる。それ以外にも、縄文時代の遺物が出土している遺跡は多くある。

早期の遺構が検出された遺跡には、令和2年に発掘調査された上信道吾妻東バイパスの下泉A遺跡があり、櫛糸文期の集石が検出されている。

前期の遺構が検出された遺跡として、四戸遺跡では前葉の竪穴建物や土坑、新井遺跡では中葉の竪穴建物と土坑、唐堀C遺跡と細谷遺跡では後葉の竪穴建物と土坑が検出されている。

中期の遺構が検出された遺跡としては、郷原遺跡において、昭和59年と平成6年に発掘調査が行われ、中期後半の竪穴建物が検出されている。また、上信道吾妻東バイパス調査でも、岩井山根B遺跡、深沢遺跡、箱島下寄居遺跡で竪穴建物や土坑が検出されている。

後期の遺構が検出された遺跡として、郷原遺跡での昭和59年と平成6年の調査において初頭の敷石建物や配石土坑が検出され、新井遺跡では初頭の敷石建物が検出されている。上郷岡原遺跡でも後期初頭から後期前半にかけての敷石建物や竪穴建物が多く検出されている。また、昭和55年に調査された唐堀遺跡が、後期から晩期の多量の遺物を出土したとして知られている。

晩期の遺構が検出された遺跡としては、唐堀遺跡がある。後期後半から晩期の竪穴建物や土坑、配石遺構、水場遺構等が検出され、遮光器土偶の頭部をはじめとする多量の遺物が出土している。また、万木沢B遺跡では、晩期終末期から弥生時代前期の遺物が多量に出土している。さらに、近年調査された植栗山根A遺跡では、竪穴建物や土坑が検出されている。

### 3. 弥生時代

前期の遺跡として、万木沢B遺跡がある。上部に配石を伴う埋設土器を有し、在地土器と共に東海や西日本系、北陸系、南東北・越後系といった他地域の土器を伴している。

中期の遺跡としては、「岩櫃山式土器」の標式遺跡である岩櫃山鷹の巣遺跡、再葬墓が検出された前畠遺跡が知られている。前畠遺跡は吾妻川の河岸段丘の最下位段丘面群上に立地する一次埋葬地であり、また、岩櫃山鷹の巣遺跡は岩櫃山の岸壁に立地する二次埋葬地と考えられている。他に、新井遺跡では土坑や遺物、四戸遺跡では竪穴建物が検出されている。

後期の遺構が検出された遺跡として、四戸遺跡および四戸の古墳群、新井遺跡、唐堀B遺跡がある。四戸遺跡4区から四戸の古墳群に跨る地点には、多くの竪穴建物が検出され、同一集落であることが明らかとなっている。また、この四戸遺跡での後期の集落は、吾妻川流域にあって最も西側に位置する大規模な集落でもある。新井遺跡からは、竪穴建物、円形周溝墓、大型の方形土坑等が検出されている。さらに、唐堀B遺跡においても竪穴建物

を含む集落が確認されている。

近年の上信道吾妻東バイパス調査でも、岩井山根B遺跡で竪穴建物が検出されている。

#### 4. 古墳時代

当該地域は、本県における古墳所在地の最北西端の地として知られてきた。四戸遺跡のある段丘上の東縁には昭和47(1972)年3月1日に町指定となった四戸古墳群がある。この四戸古墳群は、昭和13(1938)年の『上毛古墳総覧』に20基を超える記載があり、その内の四戸1号墳(総覧 岩島村19号)、四戸2号墳(総覧 岩島村16号)、四戸3号墳(総覧 岩島村13号)、四戸4号墳は、昭和39・42(1964・1967)年に群馬大学による調査が行われている。他にも『上毛古墳総覧』に記載された古墳として、上古墳(総覧 岩島村43号)、玉科遺跡(総覧 川戸42～51号)、下郷古墳群(総覧 川戸62～69号)、原町下ノ町古墳群(総覧 川原1～16号)、町指定史跡の金井廃寺遺跡(総覧 川戸75号)、岩井寺沢古墳(総覧 太田村17号)、岩井西古墳群(総覧 太田村1～14号)、白山神社遺跡(総覧 太田村21号)等がある。

当地域における古墳時代の集落については、「姉山の石組カマド」として緩斜面に立地する竪穴建物に構築された山石利用の石組カマドが知られるぐらいで、不明な点が多くあった。しかし、上信道吾妻西バイパスに伴う発掘調査によって、古墳時代前期から後期に至る集落も検出され、古墳時代の集落の展開も次第に判明しつつある。

まず、本遺跡でも上信道吾妻西バイパス調査として発掘調査された厚田中村遺跡西側部分では、6世紀初頭に下降したと考えられている榛名山二ツ岳火山灰(Hr-FA)によって埋没した古墳時代の極小区域水田が部分的に検出され、当該地域における古墳時代の極小区域水田の初めての検出事例となった。

西側に隣接する新井遺跡からは、中期から後期の集落、方形周溝墓4基、古墳3基も検出されている。検出された一辺約27m程度の方墳は『上毛古墳総覧』に記載された「遠見塚古墳」に相当するとみられる。唐堀遺跡からは、6世紀後半の円墳1基が検出されている。

西側となる四戸遺跡からは、古墳時代前期から後期までの多くの竪穴建物が検出されており、5世紀後半に急増した竪穴建物は、その後も安定した棟数を保ちながら

継続した集落が展開している。この集落展開の状況は、段丘東縁の四戸の古墳群の造営に大きくかかわったであろうことは明らかで、古墳群の時期と集落の規模・変遷が物語っている。特に竪穴建物には、古墳の石室を彷彿とさせる石組カマドを有する例が数多く、併せてカマド方向を変える建て替えを行った竪穴建物も数多い。また、万木沢B遺跡や唐堀C遺跡でも竪穴建物が検出され、唐堀遺跡からは未周知の古墳も出土している。

一方、上信道吾妻東バイパス調査では、下泉B遺跡、岩井山根B遺跡、箱島下寄居遺跡で、近年の発掘調査では植栗中原遺跡、小渕沢B遺跡、植栗山根A遺跡で、竪穴建物や土坑、水田といった遺構・遺物が出土している。

#### 5. 奈良・平安時代

律令制下における群馬県域はほぼ上野国の領域に当たり、国内には「碓氷・片岡・甘楽・多胡・綿野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初13郡、和銅4(711)年に多胡郡設置で14郡)。吾妻郡には「長田」、「伊參」、「太田」の3郷があつたとされ、吾妻郡中之条町大字市城付近は官牧である「市代牧」の所在地に比定されている。また、本遺跡の北東約4.5kmに位置する白鳳期寺院の金井廃寺は、7世紀後半から9世紀前半にかけての寺院跡として知られ、佐位郡の郡領層が建立した寺院と考えられる伊勢崎市上植木廃寺と同範の軒丸瓦が採取されている。県内では前橋市の山王廃寺(放光寺跡)、伊勢崎市の上植木廃寺、太田市の寺井廃寺とこの金井廃寺以外に、本格的な白鳳期寺院の遺跡は発見されていない。金井廃寺の存在は、いち早く本格的な寺院を建立できるような強い経済基盤を有する在地首長が存在していた証である。

本遺跡周辺における奈良・平安時代の遺跡は、前畠遺跡での集落と白鳳期寺院である金井廃寺の存在が知られるに止まっていたが、上信道吾妻西バイパスに伴う発掘調査による奈良・平安時代の遺跡の検出事例は格段に多くなり、新たな注目をよんでいる。

奈良・平安時代の集落では、本遺跡の西隣に位置する新井遺跡に平安時代(9世紀)の集落が検出されている。その西側の温川と万木沢川に挟まれた四戸遺跡では、前代から続く7世紀後半から10世紀前半までの数多くの竪穴建物と掘立柱建物から成る集落が調査され、前代の竪

穴建物と同様な石組みカマドが構築される例も多く存在し、石組カマドが継続的に造られていたことが明らかとなっている。また、墨書・刻書土器には、「寺」、「吾」、「牧」、「丈」、「石」の文字があり、金井庵寺や金井庵寺の近隣に存在したであろう吾妻評・郡家との密接な関連性が示唆されている。さらに、9世紀後半の堅穴建物からは、ほぼ完形の状態での大型奈良三彩短頸壺が出土し、その希少性および特異性も含め、大きく注目されている。また、万木沢川の西側となる万木沢B遺跡や唐堀C遺跡、根小屋遺跡でも、平安時代の堅穴建物が検出されている。

さらに、生産遺構として、古代の畑や水田も検出されている。本遺跡の吾妻西バイパス調査分では、天仁元(1108)年降下の浅間山火山灰(As-B)によって埋没した水田が検出されている。四戸遺跡では、畝間溝にAs-Bを多量に混在した状態で埋没した畑が検出され、吾妻地域での初例となった。また、不明瞭ではあるが同火山灰下に小規模な水田も検出している。万木沢B遺跡においても、As-B直上に小規模な畑、その上位に12世紀前半の降下とされる浅間-柏川テフラ(As-Kk)層の直下に畑を検出している。唐堀C遺跡では、As-Bで埋没した畑が検出されている。こうした古代の畑や水田は、平安時代の集落の検出面の上に検出される例が多く、集落廃絶後に大きな土地利用の変換がなされたことを物語っている。

一方、上信道吾妻東バイパス調査では、小田沢遺跡、下泉B遺跡、岩井山根B遺跡、深沢遺跡、川戸太田遺跡で、近年の発掘調査での植栗中原遺跡、小湧沢B遺跡、植栗山根A遺跡で、堅穴建物や土坑、水田といった多くの遺構・遺物が出土している。

## 6. 中・近世

天仁元(1108)年の浅間山噴火後、上野国内では莊園開発への動きが活発になる。吾妻郡域においては、12世紀末頃に秀郷流藤原氏である吾妻氏(前吾妻氏)が台頭する。「吾妻鏡」には、吾妻八郎、吾妻太郎助亮、吾妻四郎助光の名が見え、承久3(1221)年に勃発した承久の乱において吾妻助光が戦死したことにより前吾妻氏は滅亡したと言われている。その後、嘉禎年間(1235~1238年)に、前吾妻氏と同様、秀郷流藤原氏を称する吾妻(下河辺)行家が鎌倉幕府より吾妻郡を賜った。これを学界では、便宜的に後吾妻氏と称している。貞和5(1349)年に吾妻行

盛が里見義侯との争いで戦死し、後吾妻氏は滅亡したとの伝承がある。東吾妻町大字岩井の長福寺五輪塔に刻まれた「藤原行盛」がこの吾妻行盛であるとされるが、戦死の一件については疑問視もされている。

14世紀末のこの地域では、秀郷流藤原氏の齊藤氏が台頭し、永禄4(1561)年の上杉謙虎の関東出兵時の「関東幕注文」には「岩下衆 齊藤越前守 六葉柏」とあり、齊藤氏が岩下城を中心に勢力を張ったことが窺える。

16世紀前半には温川上流の手子丸城(大戸城)に拠った大戸氏が勢力を伸ばし、根小屋城に入っている。この根小屋城跡は、吾妻西バイパス建設に伴い発掘調査され、堅穴遺構、土坑、ピットなどが検出された。

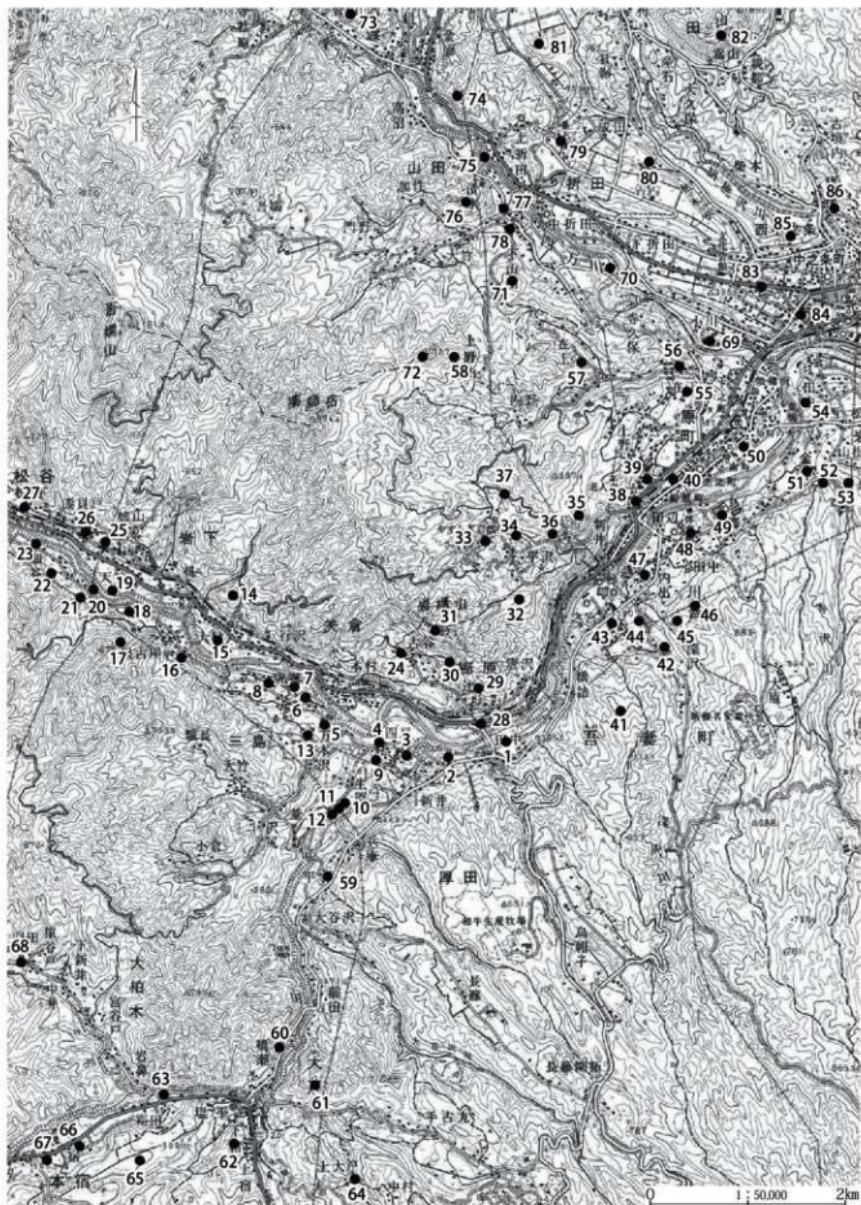
永禄6(1563)年、甲斐・信濃を領した武田信玄の上野国西部への侵攻により、大戸氏は武田氏に従属し、武田氏の部将真田幸隆により岩下城(齊藤氏の居城)が落城。岩櫃城が武田氏の拠点となったことにより、吾妻郡域は武田氏の支配下となる。その後、岩櫃城は天正10(1582)年の武田氏滅亡後に真田氏の支配下となり、元和元(1615)年の「一国一城令」により破却されるまで存続した。この岩櫃城は、令和元年10月16日に国指定史跡となつた。

徳川家康の江戸入府後、本遺跡のある厚田村は引き続き真田氏の支配下にあった。

その後の天明3(1783)年には、浅間山が大噴火する。火山灰(As-A)を降下させ、吾妻川流域では噴火に伴う泥流被害が知られている。ハッカダム建設に伴って数多くの泥流下の遺跡が確認されており、さらに下流となる本遺跡においても泥流が覆っている。

中・近世の遺構を検出した遺跡には本遺跡を含め、吾妻西バイパス調査での根小屋城跡や根小屋B遺跡、根小屋遺跡、新井遺跡、四戸遺跡、万木沢B遺跡、唐堀遺跡、唐堀B遺跡、唐堀C遺跡、細谷E遺跡があり、掘立柱建物、塩壠、土坑、溝、畑等が検出されている。また、天明泥流によって埋没した畑や水田が検出されている遺跡には、本遺跡や新井遺跡、唐堀遺跡がある。

一方、上信道吾妻東バイパス調査では、小田沢遺跡、下泉A遺跡、岩井山根B遺跡、深沢遺跡、川戸太田遺跡、箱島下寄居遺跡で、近年の発掘調査での植栗中原遺跡、で、中世の掘立柱建物や土坑、畑といった多くの遺構が検出されている。



第6図 周辺遺跡分布図(国土地理院1/50,000地形図「中之条」平成10年8月1日発行を使用)

第2表 周辺道路一覧

No	道 路 名	所 在 地	時 代	種 别	調 査 歴・備 考
1	原田中村道路				本道路
2	新井道路	東吾妻町大字厚田字新井	繩・弔・古・奈・平	集落、その他	平成26～28・30年調査(理文事業団)
3	四野の古墳群	東吾妻町大字三島字四野	弔・古	集落、古墳	平成30年調査(理文事業団)
4	四野道路	東吾妻町大字三島字四野	繩・弔・古・奈・平・中	集落、その他	平成25～28・30年調査(理文事業団)
5	万古沢B道路	東吾妻町大字三島字万古沢	繩・弔・古・奈・平・中	集落、その他	平成29・30年調査(理文事業団)
6	唐塙B道路	東吾妻町大字三島字唐塙	繩・弔・古・奈・平・近	集落、その他	平成26・27年調査(理文事業団)
7	唐塙道路	東吾妻町大字三島字唐塙	繩・古・奈・平・近	集落、その他	昭和55年調査(吾妻町教育委員会) 平成27～30年調査(理文事業団)
8	唐塙C道路	東吾妻町大字三島字唐塙	繩・奈・平	集落、その他	平成28・30年調査(理文事業団)
9	峰跡	東吾妻町大字鳥四 <sup>ノ</sup> 388	古	散布地	
10	生原道路	東吾妻町大字鳥生原620	古	古墳	
11	石臼上古墳	東吾妻町大字鳥生原620	古	古墳	
12	上古墳	東吾妻町大字鳥生原580-1	古	古墳	古墳疑覧 岩鳥村43
13	上反道路	東吾妻町大字三島3203	繩	散布地	岩鳥村誌
14	岩下城跡	東吾妻町岩下	中	城館	中世城館跡779
15	前掛道路	東吾妻町岩下76	繩・弔・古・奈・平・中	散布地、集落、墓、他	昭和62年調査(吾妻町教育委員会)
16	古古屋道路	東吾妻町大字鳥古屋	繩・奈・平	その他、不明	根小屋 <sup>ノ</sup> 道跡、根小屋B道跡 平成28年調査(理文事業団)
17	根小屋城跡	東吾妻町三島	中世	城館	中世城館跡780 平成28・31年調査(理文事業団)
18	綿谷E道路	東吾妻町大字綿谷	弔	散布地	平成28年調査(理文事業団)
19	弁天洞道路	東吾妻町岩下前畠	繩	散布地	
20	綿谷D道路	東吾妻町大字綿谷5128	繩	散布地	
21	綿谷C道路	東吾妻町大字綿谷5092他	繩・平	散布地	
22	綿谷B道路	東吾妻町大字綿谷5542	繩・平	散布地	
23	綿谷A道路	東吾妻町大字綿谷5625	繩	散布地	
24	古谷道路	東吾妻町原古谷	弔	散布地	
25	天神道路	東吾妻町岩下天神873他	弔・古・平	散布地	
26	津日川 <sup>ノ</sup> 道路	東吾妻町岩下津日川1172他	繩・古	散布地	
27	松谷松下道路	東吾妻町大字松谷109他	繩・古・奈・平・中・近	集落	令和元年
28	黒原道路	東吾妻町黒原592-1	繩・平・中	散布地、その他	昭和59年・平成6年調査(吾妻町教育委員会)
29	黒原城跡	東吾妻町黒原	中	城館	中世城館跡
30	浦能院跡(古廟跡)	東吾妻町黒原	中	寺社	中世城館跡778 10
31	石岩山 <sup>ノ</sup> 巖の里	東吾妻町石岩山	弔	墓その他	弥生時代の墓址(明治大学)
32	石岩城跡	東吾妻町石岩山下	中	城館	中世城館跡781 国指定史跡(令和元年10月16日指定)
33	岩門城跡北側道路群	東吾妻町岩門	繩・中	集落・城館	平成4年調査(吾妻町教育委員会)
34	笠塚道路	東吾妻町原町笠塚1768	繩・弔	集落	平成3・4年調査(吾妻町教育委員会)
35	柳沢城跡	東吾妻町平沢	中	城跡	中世城館跡783
36	道心 <sup>ノ</sup> 道跡	東吾妻町原町4159	弔	散布地	
37	岬穴 <sup>ノ</sup> 道跡	東吾妻町原町施塚山	弔	墓その他	
38	青岸寺前道路	東吾妻町原町1091-1	弔・平・中	散布地、墓その他	平成7年調査(吾妻町教育委員会)
39	諏訪前道路	東吾妻町原町1018-1	弔・古・平・近世	集落、古墳・生産道路	平成6・7年調査(吾妻町教育委員会)
40	別駕町道路	東吾妻町原町二之町	平	散布地	
41	川口 <sup>ノ</sup> 横原道路	東吾妻町原町1364-2他	繩	その他	陥し穴
42	玉科道路	東吾妻町原町1602-1	繩・弔	散布地	古墳疑覧 川口42～51
43	上ノ宮道路	東吾妻町原町上ノ宮	古	散布地	
44	深沢道路	東吾妻町原町深沢	繩・古	集落	
45	水上 <sup>ノ</sup> 道跡	東吾妻町原町水上	繩・古	集落	
46	城館城跡	東吾妻町原町	中	城館	中世城館跡789
47	内出城跡	東吾妻町原町	中	城館	中世城館跡788
48	下郷A道路	東吾妻町原町下郷284	繩・古	散布地	
49	下郷古墳群	東吾妻町原町甲271	古	古墳	古墳疑覧 川口62～69
50	原町下 <sup>ノ</sup> 古墳群	東吾妻町原町460	古	古墳	古墳疑覧 川口1～16
51	金井魔寺跡	東吾妻町金井472-1	奈	寺社	町指定史跡(昭和47年3月1日指定) 昭和53年発掘調査(吾妻町教育委員会) 古墳疑覧 川口75。
52	岩井寺古墳	東吾妻町岩井寺字守沢庚1693	古	古墳	古墳疑覧 大田村17
53	先陣村の物跡	東吾妻町岩井	中	城館	中世城館跡794
54	岩井西古墳群	東吾妻町岩井字西135	古	古墳	古墳疑覧 大田村1～14
55	東上野道路	東吾妻町原町上野2662-1他	繩・弔・古・奈・平	散布地・集落	
56	稲荷城跡	東吾妻町原町下	中	城館	中世城館跡787
57	上須藤道路	東吾妻町原町上須藤3295-1	古	集落	平成2年(吾妻町教育委員会)
58	高野平城跡	東吾妻町原町	中	城館	中世城館跡
59	平道跡	東吾妻町原町1361-1	古	散布地	
60	千人窟陣城跡	東吾妻町大字千人窟	中	城館	中世城館跡774
61	手子丸城跡	東吾妻町大字手子丸	中	城館	中世城館跡775
62	大口平城跡	東吾妻町大字大口	中	城館	中世城館跡773
63	下田道路	東吾妻町大字下田150-1	弔	散布地	平成14～17年調査(吾妻町教育委員会)
64	大口 <sup>ノ</sup> 道路	東吾妻町大字大口3850	繩	散布地	
65	上ノ原道路	東吾妻町本宿175-1	繩	散布地	

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

No	遺跡名	所在地	時代	種別	調査歴・備考
66	下野遺跡	東吾妻町本宿364-1	古	散布地	
67	宿遺跡	東吾妻町大字本宿字宿524他	古	集落	平成3年試掘(吾妻町教育委員会)
68	下中遺跡	東吾妻町柏木下中	磚	散布地	
69	小川古墳群	中之条町小川362	古	古墳	古墳疑観・中之条町25～28・31～34 町指定史跡(昭和63年3月26日指定)
70	山田勝負灘古墳群	中之条町山田119-3	古	古墳	古墳疑観・澤村1丁～4 町指定史跡(苗吹塚 昭和63年3月26日指定)
71	山田城址(古城)	中之条町山田696	中	城館	中世城館跡750山田古城
72	高野平城跡	中之条町山田	中	城館	中世城館跡51 吾妻町境に位置する
73	天神山城址	中之条町天神渡	中	城館	中世城館跡46
74	内山城址	中之条町折田2070-1	中	城館	中世城館跡53仙威城 町指定史跡(平成6年12月1日指定)
75	折田屋敷跡	中之条町折田	中	城館	中世城館跡754
76	桑田城址(寺山)	中之条町山田2181-1	中	城館	中世城館跡748 町指定史跡(平成6年12月1日指定)
77	清水敷石住居跡	中之条町山田清水2289-3	磚	集落	道跡台帳3065
78	古墳址	中之条町山田	中	城館	中世城館跡749
79	成田遺跡	中之条町折田成田原2344	甃	集落	道跡台帳3062
80	成田原千貫遺跡	中之条町折田子貫2859	磚・甃	散布地	道跡台帳3066 中世城館跡752
81	鏡原遺跡	中之条町天反田4373-1	磚・奈・平	散布地、その他	平成17年立会調査
82	嵩山城址	中之条町五反田	中	城館	中世城館跡760
83	水田原遺跡	中之条町西中之条永田原119	古	古墳	道跡台帳3078 古墳疑観・中之条町38
84	中条城址	中之条町中之条	中	城館	中世城館跡755
85	城ヶ城跡	中之条町西中之条	中	城館	中世城館跡756
86	法満寺遺跡	中之条町中之条町法満寺2268	甃	散布地	道跡台帳3076

### 文献

- 1「年報33 一厚田中村道路」2014(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報34 一厚田中村道路」2015(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報35 一厚田中村道路」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「厚田中村道路」2018(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 2「年報34 一新井遺跡」2015(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報35 一新井遺跡」2016(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報36 一新井遺跡」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報37 一新井遺跡」2019(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 3「年報38 一四ツの古墳跡」2019(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「四ツの古墳群」2020(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 4「年報33 一四ツ「遺跡」」2014(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報34 一四ツ「遺跡」」2015(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報35 一四ツ「遺跡」」2016(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報36 一四ツ「遺跡」」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報38 一四ツ「遺跡」」2019(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「四ツ「遺跡」」2020(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 5「年報37 一万木井B遺跡」2018(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報38 一唐堀遺跡」2019(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 6「年報34 一唐堀B遺跡」2015(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報35 一唐堀B遺跡」2016(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報36 一唐堀B遺跡」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 7「唐堀遺跡」1983 吾妻町教育委員会  
 「年報35 一唐堀遺跡」2016(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報36 一唐堀遺跡」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報37 一唐堀遺跡」2018(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報38 一唐堀遺跡」2019(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「唐堀遺跡(1)」2021(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 8「年報36 一唐堀C遺跡」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報38 一唐堀C遺跡」2019(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「唐堀C遺跡」2021(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 15「前畠遺跡」1998 吾妻町教育委員会  
 16「年報36 一小根小屋遺跡」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報36 一小根小屋遺跡」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 17「年報36 一小根小屋城跡」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 「年報38 一小根小屋城跡」2019(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 18「年報36 一細谷E遺跡」2017(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 27「松谷松下遺跡」2014 東吾妻町教育委員会  
 28「郷原遺跡」1985 吾妻町教育委員会  
 「郷原遺跡」1998 吾妻町教育委員会  
 32「吾妻町指定史跡 岩棚城跡」1993 吾妻町教育委員会  
 「岩棚城跡北側遺構群遺跡」1994 吾妻町教育委員会  
 「東吾妻町指定史跡 岩棚城跡」2016 東吾妻町教育委員会  
 「東吾妻町指定史跡 岩棚城跡総合調査報告書」2018 東吾妻町教育委員会  
 34「念仏塚遺跡」1994 吾妻町教育委員会  
 38「善導寺前遺跡」1996 吾妻町教育委員会  
 39「諫訪前遺跡」2000 吾妻町教育委員会  
 51「金井魔寺遺跡」1979 吾妻町教育委員会  
 57「上須郷遺跡」1992 吾妻町教育委員会  
 67「宿遺跡発掘調査報告書」1993 吾妻町教育委員会

### 第3章 基本層序

本遺跡は吾妻川右岸にあり、JR吾妻線郷原駅から南側を東流する吾妻川を挟んだ対岸の河岸段丘上に広がる。遺跡の西半は、上信自動車道吾妻西バイパス建設に伴い調査および報告書が平成30年に刊行され、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物に覆われていることや、平安時代後期のAs-B下水田、古墳時代後期のHr-FA下水田が知られるに至った。そして、本遺跡の西側に位置する新井遺跡、四戸の古墳群、四戸遺跡、万木沢B遺跡、唐堀遺跡等、多くの調査・報告書もすでに刊行を終えている。

これら西バイパスでの調査結果からは、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流が吾妻川を流下した際の痕跡が本遺跡西側調査でも確認されている。また、温川を週上した記録もあり、新井遺跡では温川沿いの一段低い部分に泥流堆積物が確認されている。さらに、唐堀遺跡においても、一段低い河岸段丘面に泥流堆積物に覆われた棚田状の水田が検出されている。また、調査された各遺跡からは、As-Kkの降下軽石、その直ぐ下層にAs-Bの降下灰が堆積していることが報告され、それら鍵層に絡んだ各種の遺構が検出されている。

#### 第1節 厚田中村遺跡

東バイパス建設に伴う厚田中村遺跡の調査においても、以前の調査結果を踏まえ、調査面(遺構確認面)の設定や遺構の検出・時期認定にあたっては、鍵層となる層位を重視して調査が進められた。調査地内の1~10区の層序を概観すると、最上位のⅠないしⅡ層には暗褐色土の表土(現耕作土)および厚く堆積する天明泥流が覆い、泥流下面を遺構確認面として第1面調査を行った。調査区によって、部分的に第1-2面として調査を行った箇所もある。第1面調査下位の層は、As-Kkの混土が含有量の違いで分層され、その下層にAs-Kkの一次堆積層である暗褐色ないし明褐色・灰黃褐色といった地点によって異なる色調の軽石が総じて堆積している。さらにその直下には、灰白色ないし灰黃褐色をしたAs-Bの灰層が一次堆積し、層上位には部分的に黒色土、層最下部に

は軽石が僅かに伴うことも確認されている。この層下位を遺構確認面として第2面の調査を行い、低地部では水田、そして水田下の層は、黒色あるいは黒褐色となる混入物のない水田耕作土を形成する。微高地においては、掘立柱建物や土坑等が検出された。さらに、地点によって異なるが、5区X層や6区XI層では浅橙色のHr-FAの灰が主体層となり、この層下位が低地部における遺構確認面として第3面の調査を行った。その下層には、黒褐色土や褐灰色土といったHr-FA下水田の耕作土が形成されている。一方、As-B灰層下が微高地となる8区においては、Ⅶ層として黒褐色土、IX層の暗褐色土、X層の褐色土という順序であり、このⅧ層下位からX層上面が第3面の遺構確認面となり、竪穴建物等の遺構が検出された。

以下、各区の層序を第7図に示し、それぞれの堆積層について、調査時の記録を基に記す。

#### 1区 北壁

- I 暗褐色土 天明泥流(現耕作土)。
- II 黒褐色土 As-Kkの混土。
- II' 黑褐色土 As-Kkの混土。
- III 暗褐色軽石 As-Kkの一次堆積層
- IV 灰白色土 As-Bの灰(一次堆積)層。
- V 黑色土 As-B下水田の耕作土。
- VI 黑褐色土 黄色軽石を少量混在する。

#### 2区 南壁

- I 暗褐色土 天明泥流。
- II 黑褐色土 As-Kkの混土。
- II' 黑褐色土 As-Kkを極めて多量に混在。
- III 暗褐色軽石 As-Kkの一次堆積層
- IV 灰白色土 As-Bの灰(一次堆積)層。
- V 黑色土 As-B下水田の耕作土。
- VI 黑褐色土 黄色軽石と褐色粘質土ブロックを少量含む。粘質で綿まりやや強。

## 3区 北壁

- I 暗褐色土 天明泥流。
- II 灰白色土 白色輕石、鉄分凝縮ブロックを含み、小礫を混入。締まりあり。
- III 褐灰色土 細粒白色輕石を多量に含み、小礫を少量混入。
- III' 暗褐色土 As-Kkを少量含む。
- IV 鈍い黄橙色土 暗褐色土ブロックを含み、小礫を少量含む。
- V 鈍い黄橙色土 細粒白色輕石、As-Kkを含む。
- VI 褐灰色土 細粒白色輕石を少量含む粘質土。
- VII 明褐色土 細粒白色輕石を多量に、As-Kkを少量含む。
- VIII 明褐色輕石 As-Kkの一次堆積層。
- IX 黒色土 黒色の粘質土で、帶状に堆積。
- X 灰白色土 As-Bの灰(一次堆積)層。
- XI 黑褐色土 混入物のない粘質土。
- XII 黑色土 黄橙色粒を含み、粘性強く、締まりあり。
- XIII 褐灰色土 灰白色土ブロックを含む粘質土。
- XIV 灰白色土 灰白色粘質土を主体とし、黄橙色粒を含む。
- XV 鈍い黄橙色土 黄橙色粒、黑褐色土ブロックを少量含む。締まり弱い。
- XVI 浅黄橙色土 大型の礫が混在し、黄橙色粒を少量含む。
- XVII 明綠灰土 粘質シルト土で、砂粒を少量含む。

## 4区 基本土層

- I 暗褐色土 園場整備による土地改良。
- II 褐灰色土 粘質土。砂粒を含む。
- III 褐灰色土 天明泥流。
- IV 黑褐色土 混入物は見られない。粘質土。
- V 黑褐色土 As-Kkを多量に含み、小礫が混在する。
- VI 灰黃褐色土 As-Kkを多量に含む。

## 5区 北壁

- I 暗褐色土 天明泥流(現耕作土)。
- II 褐灰色土 As-Kkを多量に、褐灰色粘土を含む。
- II' 黑褐色土 As-Kk、褐色土・黑色土ブロックを含む。

## III 明褐色輕石 As-Kkの一次堆積層。

## IV 灰白色土 As-Bの灰(一次堆積)層。

## V 黑褐色土 混入物のない粘質土。As-B下水田の耕作土。

## VI 灰黃褐色土 黃橙色粒、黑褐色土ブロックを含む粘質土。

## VII 褐灰色土 黃橙色粒を多量に、黑褐色土ブロックを含む。粘性強い。

## VIII 鈍い黄橙色土 黄橙色粒、砂粒を含む。やや粘性あり。

## IX 褐灰色土 黃橙色粒、黑褐色土ブロックを含む。砂粒を少量含み粘質。

## X 浅橙色土 Hr-FAの灰が主体。

## XI 黑褐色土 Hr-FA下水田の耕作土。

## XII 黑褐色土 僅かに細粒の黄橙色粒が混入する。締まりあり。

## 6区 北壁

- I 暗褐色土 天明泥流。
- II 褐灰色土 細粒白色輕石、As-Kk、褐灰色粘土を含む。
- III 褐灰色土 As-Kkを多量に、褐灰色粘土を含む。
- IV 明褐色輕石 As-Kkの一次堆積層。
- V 灰白色土 As-Bの灰(一次堆積)層。
- VI 黑褐色土 混入物のない粘質土。As-B下水田の耕作土。
- VII 灰白色土 灰白色粘質土が主体で、黄橙色粒を含む。
- VIII 鈍い黄橙色土 黄橙色粒を多量に、黄褐色土ブロックを含む。やや粘性あり。
- IX 褐灰色土 黑褐色土ブロックを含み、粘性強い。
- X 灰白色土 褐灰色粘質土と黄橙色土が互層となる。
- XI 浅橙色土 Hr-FAの灰が主体。
- XII 褐灰色土 Hr-FA下水田の耕作土。

## 7区 南壁

- I 暗褐色土 天明泥流。
- II 褐灰色土 泥流に伴う礫を含む。
- III 黑褐色土 泥流に伴う礫を少量含む。
- IV 鈍い黄橙色土 細粒白色輕石、As-Kk輕石を含む。鉄分凝縮ブロックを少量含む。

- V 黒褐色土 As-Kkを多く含む。
- V' 黒褐色土 As-Kkを含む。下層にAs-B灰ブロックを混入する。
- VI 褐灰色土 As-Kkを多量に混在。
- VII 明褐色軽石 As-Kkの一次堆積層。
- VIII 暗褐色土 As-Bの灰ブロックを僅かに含む粘質土。
- IX 灰白色土 As-Bの灰(一次堆積)層。
- X 黒褐色土 鉄分凝縮ブロックを含み、締まりあり。
- XI 黒褐色土 混入物のない粘質土。As-B下水田の耕作土か。
- XII 褐灰色土 僅かに黄橙色粒を含み、締まり強い。
- XIII 褐灰色土 XII層に似るがやや明るく、締まる。
- XIV 黒褐色土 混入物はなく、締まり強い。
- XV 鈍い黄橙色土 地山礫が混在。

## 8-I区 北壁

- I 暗褐色土 天明泥流。
- II 鈍い黄橙色土 細粒白色輕石、As-Kkを少量含む。
- III 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。
- IV 橙色土 As-Kk(橙色)を多量に含む。
- V 灰黃褐色土 細粒白色輕石を少量含む粘質土。
- VI 褐灰色土 黄橙色粒を含む粘質土。
- VII 黒褐色土 黄橙色土ブロックを少量含む。
- VII' 黒褐色土 黄橙色粒を含む。
- VIII 黑褐色土 黄橙色土ブロックを含み、粘性あり。
- IX 灰黃褐色土 大型の礫が混在する粘質土。
- X 黄色土 暗褐色土ブロックを含み、硬く締まる。
- XI 明黃褐色土 黄橙色粒、褐色土ブロックを含む。

## 8区 北壁

- I 暗褐色土 表土。1cm程の小石を多く含む。
- II 暗褐色土 天明泥流。小石、人頭大礫を多く含み、締まりなし。
- II' 暗褐色土 II層と同様の天明泥流。復旧坑の埋没土。
- III 褐灰色土 1cm程の小石を含み、固く締まる。部分的に酸化する。
- IV 黑褐色土 III層に似るが色調が濃く、部分的に酸化する。
- V 灰黃褐色土 As-Kkを含み、固く締まる。

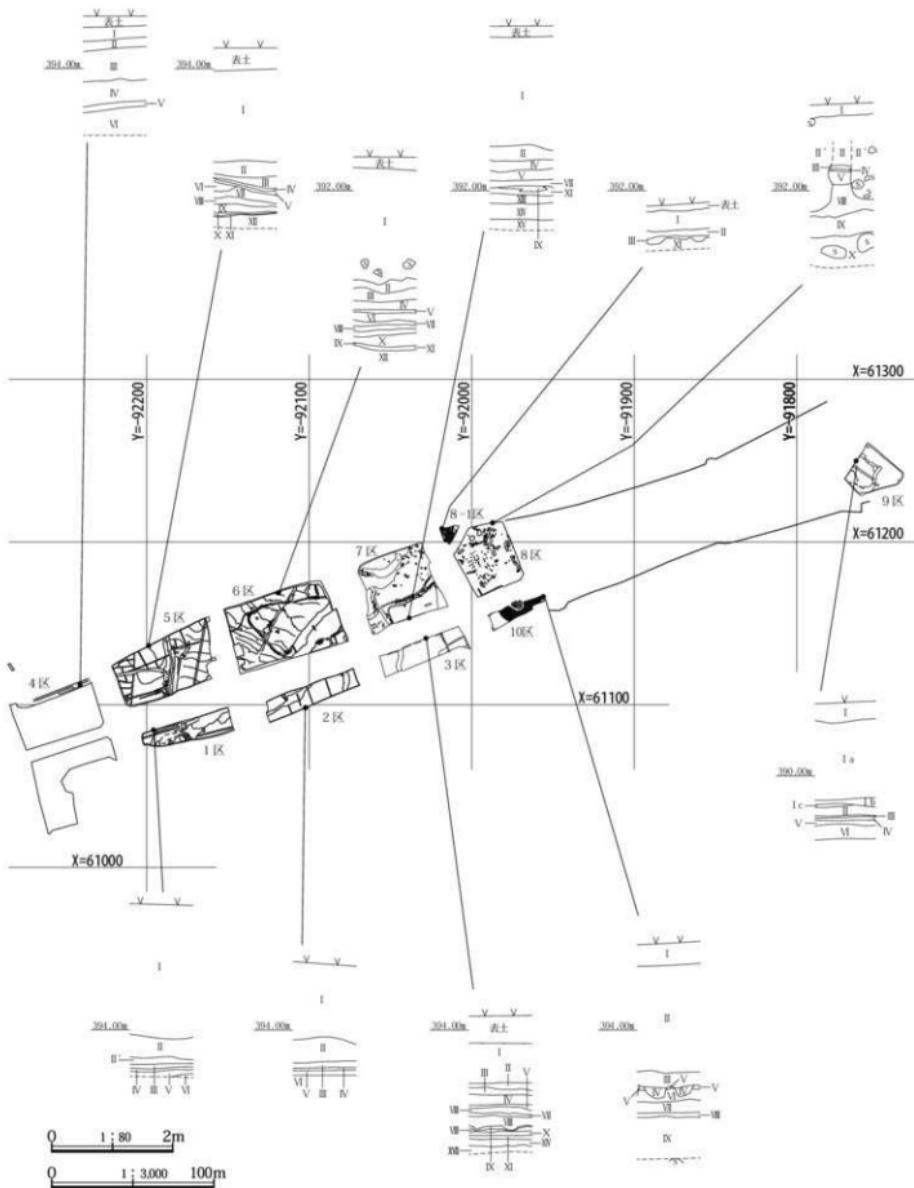
- VI 灰黃褐色軽石 As-Kkの一次堆積層。ブロック状に残存。
- VII 灰黃褐色土 As-Bの灰(一次堆積)層。層上位には部分的に黒色土が認められ、層最下部には軽石が僅かに伴う。
- VIII 黑褐色土 細かな黄色粒子(白色粒子)を含む。粘性あり。
- IX 暗褐色土 X層への漸移層。斑状にローム含む。
- X 褐色土 水性堆積と思われるローム層で下層には多くの礫を含む。

## 9区 北壁

- I 暗褐色土 表土(現耕作土)。
- I a 黒褐色土 天明泥流。2~15cmの礫を多く含む。
- I b 黑褐色土 天明泥流。径1cm程の礫を含む。
- I c 褐灰色土 天明泥流に伴う砂層。
- II 暗褐色土 As-Kkの混在土。
- III 明黃褐色軽石 As-Kkの一次堆積に近い層。
- IV 黄灰色土 As-Bの灰(一次堆積)層。
- V 黑褐色土 As-B下水田の耕作土。
- VI 黑褐色土 粘質な水田耕作土。

## 10区 基本土層

- I 暗褐色土 表土(現耕作土)。
- II 暗褐色土 天明泥流。
- III 暗褐色土 少量の礫と赤褐色土を含む。
- IV 暗褐色土 砂質土。
- V 明灰褐色土 砂粒を多量に含む砂質土。
- VI 黑褐色土 砂粒を少量含む砂質土。
- VII 明褐色軽石 As-Kkの一次堆積層。
- VIII 灰白色土 As-Bの灰(一次堆積)層。
- IX 黑褐色土 混入物のない粘質土。As-B下水田の耕作土か。



第7図 各地点の基本層序

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

以前の吾妻西バイパス建設に伴う厚田中村遺跡の調査結果および吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡の工事対象範囲内の試掘・確認調査結果を基に、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した面を第1面とし、第2面は12世紀前半と天仁元(1108)年の浅間山噴火による火山灰層(As-Kk・As-B)下面、第3面は6世紀初頭の榛名山噴火で降下した火山灰層(Hr-FA)下面、といった多面にわたる調査の必要性が当初から予測されていた。

調査対象地は、道路・水路によって細かく分割された東西方向に長い路線であることから、令和2年度調査開始時に調査対象地の中央付近を東西に延びる道路を挟んだ南側の西端から1・2・3区、北側の西端から4・5・6・7・8区とし、途中で8区の東側に距離の離れた地点が調査対象に加わったことからその東端部南側を9区、そして8区の南側で3区の東側の地点を10区とし、さらに8区の北側に8-1区を設定した。現地における発掘調査は、令和2・3年の2箇年度に亘って1~10区とした計11箇所の調査区(合計21,622.60m<sup>2</sup>)を対象として実施され、令和2年度の調査では1・2・4・5・7・8・9区を対象とし、令和3年度は3・6・8-1・10区の調査が行われた。この2箇年度の調査を対象に、検出された遺構・遺物について本書で報告する。なお、8区の東側から9区までの間にについては、令和4年度に発掘調査が予定されている。

調査は、各調査区を順に調査時期を重複させながら多面調査が進められ、各種の遺構調査、そして遺構測量や写真撮影等の調査記録の収集の後、各区の調査終了後は埋め戻しを行った。

当初から予測されていた多面調査の状況は、表土(現耕作土)下に天明泥流が堆積していることは全ての調査区で確認できたが、その堆積の厚さはまちまちで、泥流被災以前の地形は現地形とは大きく異なり、起伏のある地形にあった農地(水田・畑)や水路が広がることが第1面調査で明らかとなった。また、この第1面調査で

は、1-1面とした泥流被災後の農地復旧を行った痕跡として多くの復旧坑群も検出されている。この1-1面下に1-2面として泥流被災以前の姿を捉えることができた。第2面調査は、近年の周辺遺跡の調査で明らかとなった本地域一帯に降下したAs-KkとAs-Bの下面を調査面とし、As-Bの降下直前から中世・近世前半期までの遺構・遺物の調査を行った。その結果、中世から近世前半期の掘立柱建物や土壙墓、土坑、ピット、溝、畑といった遺構が検出され、As-B下面からは古代水田や畑が検出されている。これらの遺構は、調査区による調査面の地形のあり方によって遺構種の違いを見せており、さらに、第3面調査では地形による遺構種の違いが第2面よりも明瞭で、微高地部では竪穴建物や土坑が、低地部ではHr-FA直下の小区画水田が検出された。なお、10区の調査では、第2面としたのが近世前半期、第3面がAs-B降下直前から中世、そして第4面において古墳時代から古代までを対象とした調査が行われた。

一方、ローム(黄褐色土)層が安定していた8-1区の調査終了段階に旧石器時代の確認調査を行ったが、旧石器時代の遺構・遺物は出土していない。

以上の結果、検出された遺構には、古墳時代の竪穴建物3軒、古墳時代から古代の掘立柱建物2棟、中世から近世前半期の掘立柱建物5棟、中世の土壙墓および古墳時代から中・近世前半期の土坑が計54基とピット多数、古墳時代から近世前半期の各時期の溝が計42条、古墳時代の水田、平安時代の水田・畑、天明泥流下の水田・畑・道、天明泥流被災後の復旧坑群がある。出土した遺物には、縄文時代の土器・石器、古墳時代の竪穴建物から出土した土師器や須恵器、石製品、建物の炭化材。さらに、中世から近世の陶磁器類、人骨(骨片)、錢貨や煙管といった金属製品、農具や生活用具・板材等といった木製品類があり、その量は遺物収納箱で計8箱となる。

## 第4章 検出された遺構と遺物

第3表 区別遺構数量

厚田中村遺跡

区	面	遺構種								
		竪穴建物	掘立柱建物	土坑(墓)	ピット	溝	水田	窓	土手	道(道路)
1	1									
	2				4					
2	1				1					
	2				2	○				
3	1				1	○	○	2		
	2		1	1	1		○			
4					9				2	
5	1					○				
	2				1	○				
	3				3	○				
6	1-1				3	○	○	1	2	
	1-2				2		○			
	2					○				
	3				3	○				
7	1-1				3		○		1	
	1-2							1		
	2			1	3					
8	3		1	4	1					
	1-1								1	4
	1-2			3	11	1				
	2		5	25	61		○			
8-1	3	3		3	22					
	1-1						○			
	1-2			6						
	2			11			○			
9	3			3						
	1				2					
	2				1	○				
	1-1				3		○	1		1
10	1-2		2							2
	2					○				
	3		1		10	1				
計		3	7	54	110	42		4	5	9

## 第2節 1区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内の最西南端に位置し、道路を挟んだ北側に5区、東側の水路を挟んで2区と接する。また、南西隅に位置する鉄塔をかきめるように、東西に細長い調査区となっている。なお、調査区の西側は、道路を挟んで吾妻西バイパスでの調査区と接する。

### 第1項 第1面調査

本調査区における第1面調査においては、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した面での遺構は検出されなかった。その泥流下の面は第8図に示すように、西側が最も高く、段差をもって3段の面からなり、東側ほど低くなる状態であった。しかし、その後に調査を行った北側の5区の状況から、本区と5区に跨る溝の存在が予測されるに至った。結果、本調査区の第2面調査の際に検出されることになる。

### 第2項 第2面調査

As-KkとAs-Bの下面を調査面とした第2面調査において、先述した5区第1面から続く近世溝、それよりも古い中世溝が検出された。また、5区で検出されたAs-B下面の古代水田の継ぎが予測されたが、遺構としての明瞭さに欠ける状況であった。(第9図参照)

以下、各遺構ごとに記述する。

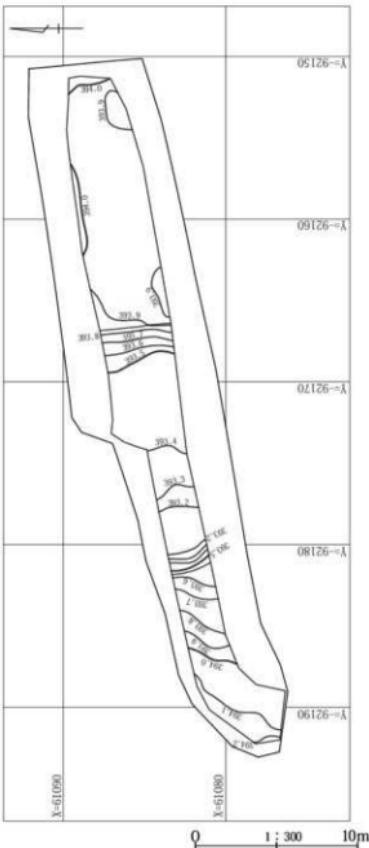
#### 12号溝（第10図、PL. 4）

5区第1面で検出された12号溝に続く溝であることから、同一の遺構番号を付した。

**位置：**1区中央を南側から北側に延びた溝で、南側が二股に分かれ、北側では合流した幅広な溝として北側調査区外へと延びる。本溝の東側には16号溝が、西側には36号溝が接続して並走する。

**座標値：**X=61,078～61,088 Y=-92,172～92,180

**検出状況：**東側の16号溝、西側の36号溝と共に、第2面調査時に検出された。南側から緩い曲線状に北側へ延



第8図 1区第1面 全体図

びる本溝は、中央で二股となる南側はやや細目の2条の溝として南側調査区外へ延び、二股に分岐する北側では1条の幅広な溝として北側調査区外へと続き、5区第1面での12号溝となる。底面は平坦に近く、底面の勾配は南側が高く北側ほど低くなる。溝内からの遺物の出土はない。なお、36号溝と重複しているように思われるが、詳細は不明。

**規模：**長さ 13.58 m 上面幅 0.72 ~ 2.28 m

深さ 20 ~ 36cm

**延伸方向：**N - 31° - W

**埋没土：**溝の検出は第2面調査となったが、溝内の埋没土は1区基本層序I層となる天明泥流であり、大小の礫を極めて多く混在させた、粘性の弱い黒色土である。

**所見・時期：**溝が天明泥流で埋没していることと、5区の状況を加味すると、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況であると言える。

#### 16号溝（第10図）

5区第1面で検出された16号溝に続く溝であることから、同一の遺構番号を付した。

**位置：**1区中央付近から北壁側に僅かに延びる溝で、12号溝の東側に並走するように近接して位置する。

**座標標：**X=61,085 ~ 61,089 Y=-92,175 ~ -92,177

**検出状況：**西側の12号溝と共に、第2面調査時に検出された。延伸距離の短い溝で、溝両面の壁は緩く斜位に立ち上がり、底面は平坦に近い。底面の勾配は、南側が高く北側ほど低くなる。溝内からの遺物の出土はない。

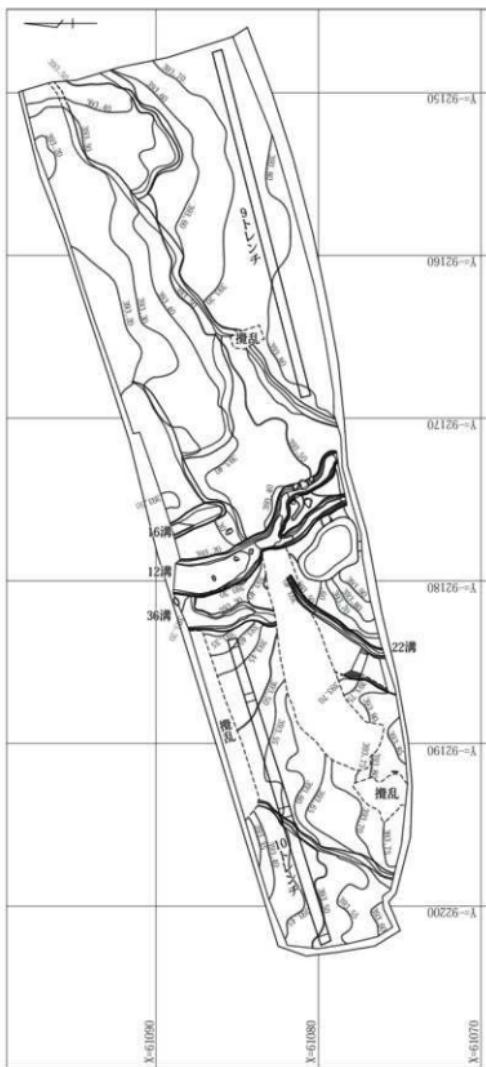
**規模：**長さ 4.78m 上面幅 1.14m

深さ 8 ~ 10cm

**延伸方向：**N - 24° - W

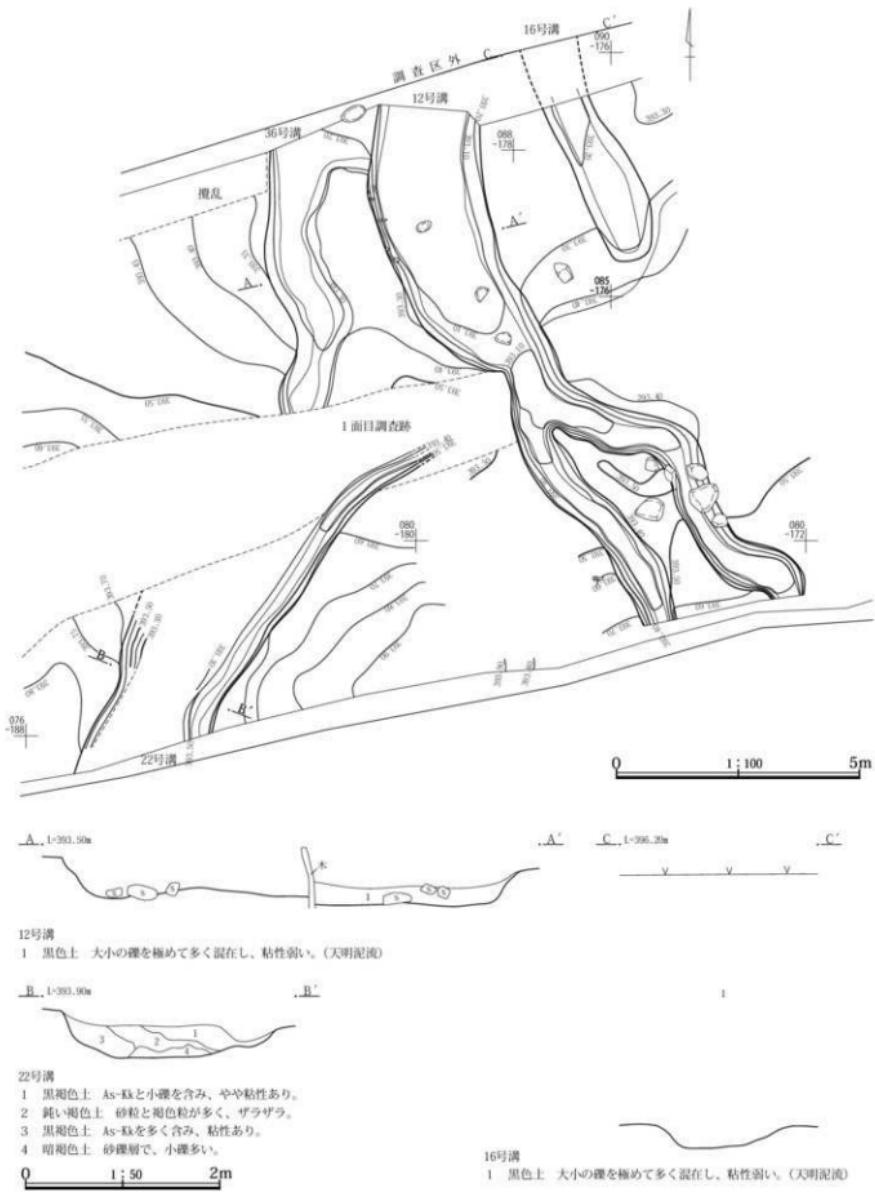
**埋没土：**溝の検出は第2面調査となったが、溝内の埋没土は1区基本層序I層となる天明泥流であり、大小の礫を極めて多く混在させた黒色土である。

**所見・時期：**溝が天明泥流で埋没していることと、5区の状況を加味すると、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況であると言える。



0 1:300 10m

第9図 1区第2面 全体図



第10図 12・16・22・36号溝 平・断面図

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 22号溝（第10図、PL. 4）

1区第2面調査で検出された溝である。先述の12・16号溝と同一面での検出ではあるが、埋没土の異なる他の時期の溝である。

**位置：**1区の中央西寄を南壁から北東側に延びた溝で、北東側先端は不明。本溝の東側には12号溝の二股部が、北側には36号溝が近接する。

**座標値：**X=61,075 ~ 61,081 Y=-92,179 ~ -92,186

**検出状況：**天明泥流で埋没した他の溝と共に、第2面調査時に検出された。南壁から北東側へ延びる幅広な本溝は、第1面調査時のトレンチのため溝の北東側先端は不明。溝両面の壁は緩く斜位に立ち上がり、底面は平坦に近い。底面の勾配は、南側が高く北側ほど低くなる。溝内からの遺物の出土はない。なお、36号溝と重複しているように思われるが、詳細は不明。

**規模：**長さ7.76m 上面幅2.4m

深さ31cm

**延伸方向：**N-32°-E

**埋没土：**1 ~ 3層としたAs-Kkを含む黒褐色土や鈍い褐色土を主に、最下層には4層とした暗褐色の砂礫層が堆積している。

**所見・時期：**溝の埋没土が天明泥流ではなく、As-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期の溝と考えられる。

##### 36号溝（第10図）

1区第2面調査で検出された溝である。先述の12・16号溝と同一面での検出であり、同様に天明泥流で埋没した溝である。

**位置：**1区の中央西寄を中央から北壁側に延びた溝で、中央付近の南端は不明。本溝の東側には12号溝の二股部北側が接するように並走する。

**座標値：**X=61,082 ~ 61,088 Y=-92,178 ~ -92,183

**検出状況：**天明泥流で埋没した12・16号溝と共に、第2面調査時に検出された。調査区中央付近から北壁側へ延びる本溝は、第1面調査時のトレンチのため溝の南端は不明。溝の西壁は緩く斜位に立ち上がり、底面は概ね平坦。底面の勾配は緩く、南側が高く北側がやや低くなる。溝内からの遺物の出土はない。なお、12号溝および22号溝と重複しているように思われるが、詳

細は不明。

**規模：**長さ(5.65)m 上面幅(4.2)m

深さ14 ~ 36cm

**延伸方向：**N-13°-W

**埋没土：**溝内の埋没土は、1区基本層序1層となる天明泥流であり、大小の礫を極めて多く混在させた黒色土である。

**所見・時期：**溝が天明泥流で埋没していることと、5区の状況を加味すると、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

## 第3節 2区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内の西南側に位置し、道路を挟んだ北側に6区、西側は水路を挟んで1区、東側は道路を挟んで3区と接し、東西に細長い調査区となっている。調査は、第1面調査と第2面調査が行われた。

### 第1項 第1面調査

本調査区における第1面調査では、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した明確な遺構は1条のみであった。第11図に示すように、溝は調査区の東側にあり、溝の西側となる泥流下の面は不明瞭で、1区と同様に遺構を確認することはできなかった。

以下、検出できた溝について記述する。

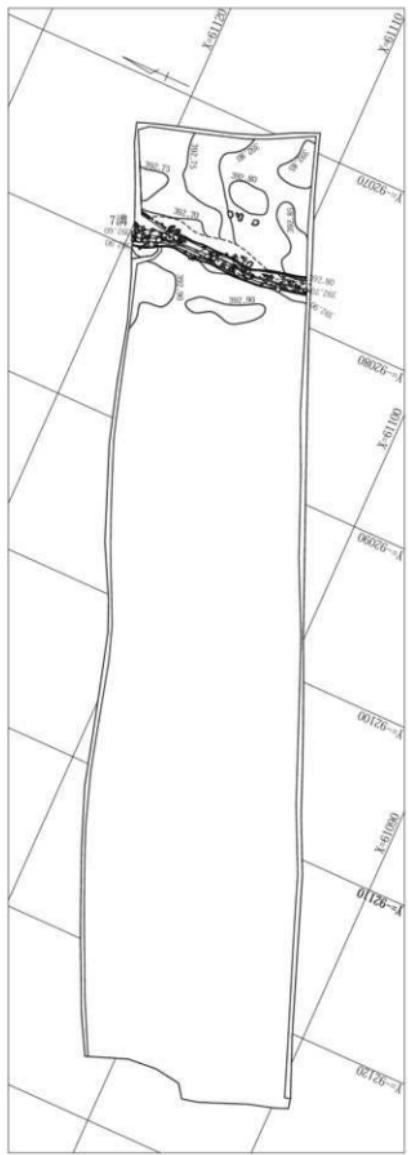
##### 7号溝（第13図、第4表、PL. 5・52）

6区第1-1面で検出された7号溝に続く溝であることから、同一の遺構番号を付した。同一調査面での遺構は、本溝のみである。

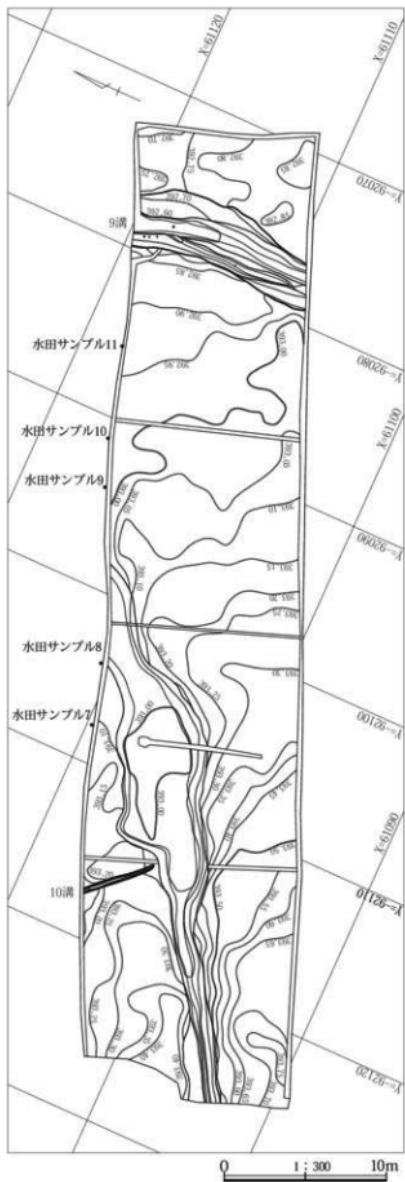
**位置：**2区東側を南壁から北壁に向かって延びたやや直線的な溝で、後述する第2面調査での9号溝と重複する。

**座標値：**X=61,108 ~ 61,119 Y=-92,077 ~ -92,079

**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時に検出された。南壁から概ね直線的に北側へ延びる溝であり、遺構確認時および溝上面には多くの大小の礫が確認できていた。溝の北壁付近はやや幅広く、西壁は下部が緩く、



第11図 2区第1面 全体図



第12図 2区第2面 全体図

#### 第4章 検出された遺構と遺物

上部が直立ぎみな急傾斜となる。底面は平坦に近く、底面の勾配は南側が高く北側ほど低くなる。埋没土内には多くの大小歴が含まれるが、溝内からの陶磁器の出土が僅かにあった。

規模：長さ11.38m 上面幅0.80～1.70m

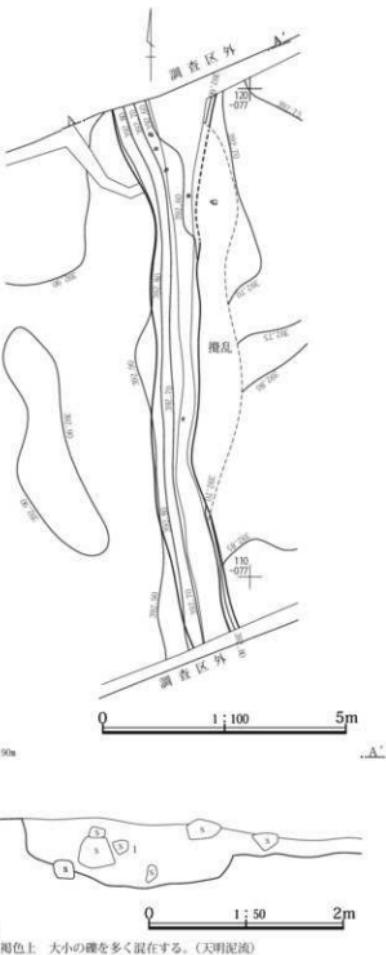
深さ20～39cm

延伸方向：N-4°-W

**埋没土**：調査区北壁で土層断面の記録を行ったが、溝内の埋没土は2区基本層序Ⅰ層となる天明泥流であり、大小の礫を極めて多く混在させた黒褐色土である。

**遺物**：出土した遺物は少なく、図示した1は脚部を欠く瀬戸・美濃陶器の仏飯器で、外面が灰釉となる。他に、陶磁器の破片が数点である。

**所見・時期**：溝が天明泥流で埋没していることと、6区の状況を加味すると、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。



第13図 7号溝 平・断面図、出土遺物

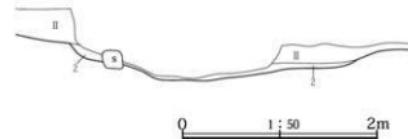
第4表 7号溝出土遺物観察表

種 国 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土・焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第13図 PL.52	1	瀬戸・美濃 陶器 仏飯器	7溝 脚部欠	口(6.9) 底(—) 高(—)	褐灰	脚部欠損。口縁部内済。内外面灰釉。	江戸時代

9号溝

 $\Delta$ , U-393.90m

0 1:100 5m



9号溝

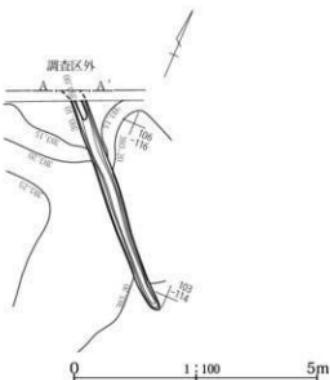
- II 褐灰色土 As-Kkを多量に混在する。(基本層序II層類似)  
2 黒褐色土 As-Kkを多く含む。粘性・練まりや弱。

## 第2項 第2面調査

本調査区における第2面調査では、2条の溝を検出したのみであった。第12図に示すように、溝の1条は調査区の東側にあり第1面調査時の7号溝と重複し、もう一条の溝は調査区西側に検出された。また、調査面の状態は、西半で南側と北側を分かつように不明瞭な溝状の窪みがみられ、南側面が北側面よりやや高い状態で、両面共に東側ほど高く、西側へ徐々に低くなる地形を呈していた。この南側と北側の平坦面上では判断し難かったが、断面の土層観察において、他調査区でも確認されているAs-B下水田の耕作土が存在していた。依って、As-B下水田存在の可能性が高まった。

以下、検出できた溝と水田について記述する。

10号溝

 $\Delta$ , U-394.10m  $\Delta'$ 

0 1:100 5m



10号溝

- II 黒褐色土 As-Kkの混土。(基本層序II層)  
I 黒褐色土 As-Kkを極めて多量に含む。

第14図 9・10号溝 平・断面図

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 9号溝（第14図、PL. 6）

先述した本調査区第1面調査で検出された7号溝と同じ位置に、重複する溝である。

位置：2区東側を南壁から北壁に向かって延び緩い弧状の溝で、先述の7号溝と重複し、ほぼ同じ位置にある。

座標値：X=61,108～61,120 Y=-92,075～92,079

検出状況：第2面調査時に検出された。先述の7号溝とほぼ同位置に、7号溝よりも幅広い溝として南壁から

北側へ延びる溝として検出された。しかし、7号溝と大部分を重複することから残存度は低く、底面付近を検出するに止まった。溝の両壁は緩く立ち上がり、底面は中央がやや窪みぎみ。溝内の遺物の出土はない。

規模：長さ11.42m 上面幅2.80～3.70m

深さ17～30cm

延伸方向：N-3°-W

埋没土：調査区北壁で土層断面の記録を行った。北壁の最上層は2区基本層序I層となる天明泥流であり、その天明泥流が上位に重複する7号溝の埋没土となり、基本層序I層の下にII層に類するAs-Kkを多量に混在する褐灰色土が堆積し、その下にAs-Kkを多く含む黒褐色土を埋没土とした本溝がある。

所見・時期：基本層序II層類似の褐灰色土下に、As-Kkを含む黒褐色土を埋没土とすることから、時期は中世から近世前半期の溝と考えられる。

##### 10号溝（第14図、PL. 6）

第2面調査時に、9号溝と共に検出された溝である。

位置：調査区の西側に位置し、北側平坦面を東西に分割するような位置にあたり、北側平坦面南端を先端に北壁へ延びる溝である。

座標値：X=61,102～61,106 Y=-92,114～92,117

検出状況：第2面調査時に検出された。第2面の北側平坦面の中央付近で東西に分割する形で、北側平坦面の南端を端部に北西方向に延び、北壁の調査区外へ続く。溝断面はU字状を呈し、あまり深くはない。溝内からの遺物の出土はない。

規模：長さ4.58m 上面幅0.42～0.70m

深さ15～19cm

延伸方向：N-43°-W

埋没土：調査区北壁で土層断面の記録を行った。北壁の

最上層は基本層序I層の天明泥流であり、基本層序II層がAs-Kk混土となる黒褐色土で、その下にAs-Kkを極めて多量に含む黒褐色土を埋没土とした本溝がある。

所見・時期：基本層序II層下に、As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋没土とすることから、時期は9号溝と同様の中世から近世前半期の溝と考えられる。

##### 水III（第12図）

第2面調査時に、西半における調査面が概ね平坦をなし、南側と北側を分かつように不明瞭な溝状の直線的な窪みが確認された。南側平坦面が北側平坦面よりやや高い状態で、両平坦面共に東側ほど高く、西側へ徐々に低くなる。この南側と北側の平坦面上では判断し難かったが、斯面の土層観察において、他調査区でも確認されているAs-B下水田耕作土の存在が確認できたことから、両平坦面がAs-B下水田である可能性が極めて高まった。

位置：2区第2面の全面。

座標値：X=61,089～61,122 Y=-92,069～92,126

検出状況：2区第2面の全面に、As-B下水田の広がる可能性が高まったが、基本層序III層のAs-Kkの一次堆積層（暗褐色軽石）および基本層序IV層のAs-Bの灰（一次堆積層）（灰白色土）の直下面となる南北の両平坦面上には、畦状の高まりは検出されていない。しかし、直下面の土壤は基本層序V層とした黒色土であり、斯面における土層観察からも水田耕作土であることが確認された。さらに、本調査区北側の6区第2面においても、同様の耕作土を面としたAs-B下水田の広がりが検出されている。これらの状況から、この平坦面もAs-B下水田であったものと推察される。

所見・時期：本水田は土層観察等からAs-B下水田と考えられ、As-Bの降下年代から平安期の水田であると考えられる。なお、As-B直下の水田土壤と考えられる黒色土層を分析対象とした自然科学分析（植物珪酸体分析・花粉分析）の結果、稻作が行われていたことを裏付けする分析データが得られた。

## 第4節 3区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内の南側中央に位置し、北側は道路を挟んで7区、西側は道路を挟んで2区、東側は道・水路を挟んで10区と接し、東西に細長い調査区となっている。調査は、第1面調査と第2面調査、そして第3面調査が行われた。しかし、第2面として検出された遺構は、第1面で検出された水田に伴う畦のプリントであること、第3面がAs-B下面での調査であることから、本書ではこの第3面を第1面の次の第2面として記述することとした。

### 第1項 第1面調査

本調査区における第1面調査では、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した溝や烟・水田、水田を区画する畦・土手といった遺構が検出された。第15図に示すように、調査区の中央西寄に溝があり、その溝の西側には烟の一部が残存する。溝の東縁には土手が添い、その東側は平坦面となり、途中に帯状の高まりが数本交差するように検出された。この高まりが水田を区画する畦であり、土手状の高まりとも交差する。

以下、検出できた各遺構について記述する。

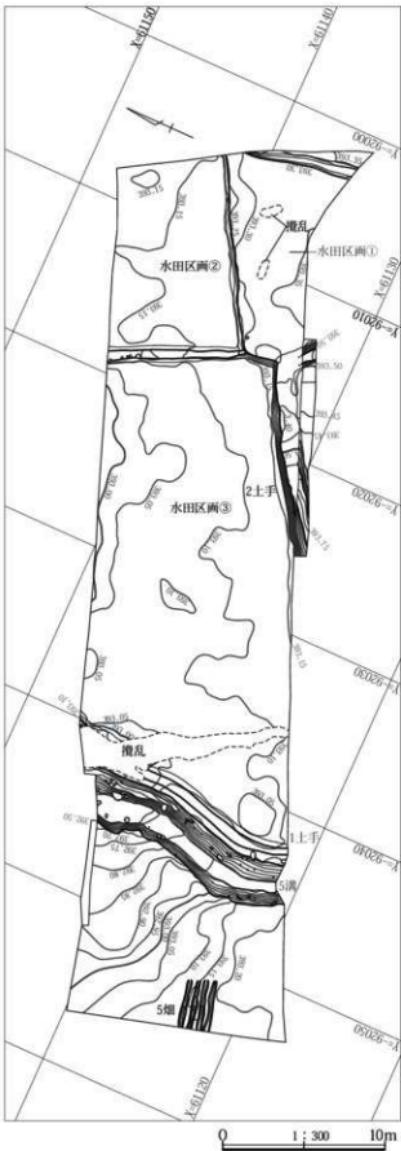
#### 5号溝（第16図、PL. 8）

7区第1面で検出された5号溝に続く溝であることから、同一の遺構番号を付した。なお、本溝の東縁には1号土手が付随する。同一調査面での遺構は、溝の西側に烟地、溝の東側は水田となる。

**位置：**調査区の中央西寄を南壁から北壁に向かってやや蛇行ぎみに延びた溝で、溝の東縁には1号土手が付隨する。

**座標値：**X=61,120 ~ 61,134 Y=-92,042 ~ 92,046

**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時に検出された。溝上面の東縁には、1号土手とした幅1.3m、高さ30cm程の高まりが帯状に連なり、対する西縁に高まりは確認されていない。溝は南壁からやや蛇行ぎみに北側へと延びる。溝の両壁の下部は直立ぎみな急傾斜



第15図 3区第1面 全体図

#### 第4章 検出された遺構と遺物

となり、西壁上部はやや急傾斜で、東壁上部は緩い傾斜と共に1号土手を有する。底面は平坦に近く、北壁付近でやや幅広くなる。底面の勾配は、南側が高く北側ほど低くなる。埋没土内には多くの大小の礫が含まれるが、溝内からの遺物の出土はない。

**規模：**長さ13.38m 上面幅2.54～3.00m

深さ51～79cm

**延伸方向：**N-4°-E

**埋没土：**調査区南壁で土層断面の記録を行ったが、溝内の埋没土は2区基本層序1層となる天明泥流であり、

大小の礫を極めて多く混在させた黒褐色土である。

**所見・時期：**溝が天明泥流で埋没していることと、7区の状況を加味すると、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

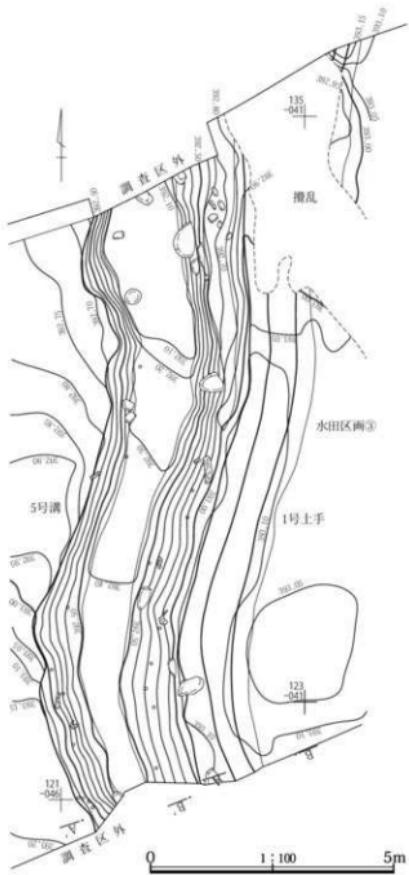
#### 5号畠（第17図、PL. 9）

先述した5号溝の西側に、僅かであるが畠の痕跡が検出された。このことにより、5号溝西側は畠地として利用されていたことが推察できる。

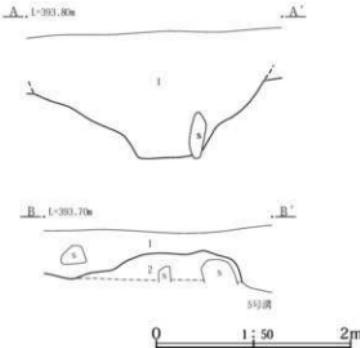
**位置：**5号溝の西側で、調査区西端に位置する。周囲は北側への緩斜面地であり、本畠痕跡以外に遺構はない。

**座標値：**X=61,121～61,123 Y=92,051～92,054

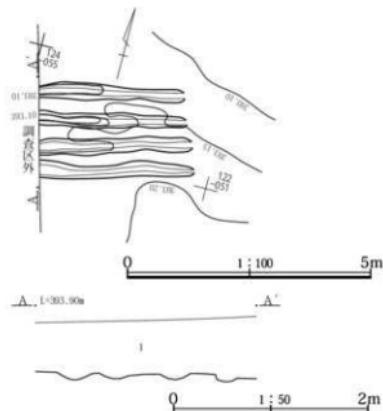
**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時に検出された。溝状となる畠の畝間に、帯状に天明泥流が残存する形で検出された。検出された畝間数は少ないが、明瞭な畝間として検出できたのは4条のみである。しかし、本畠の位置する5号溝西側は、溝東側の平坦面(畦を伴う水田面)に比べて一段高い北側への緩斜面地となっていることから、この面が水田とは異なる地目として、畠の耕作地として利用されていた可能性が極めて高い。



第16図 5号溝と1号土手 平・断面図



5号溝・1号土手  
1 黒褐色土 大小の礫を多く混在する。(天明泥流)  
2 暗褐色土 畦上ブロックを含む砂質土。



5号烟  
1 黒褐色土 大小の礫を混在する。(天明泥流)

第17図 5号烟 平・断面図

区画規模：長さ(3.20)m 幅(1.98)m

歛長(3.20)m 歛間間隔50～62cm前後

鞋数3条

鉛方向：N-75°-E

所見・時期：検出面および天明泥流による埋没であることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

#### 1号土手 (第16図、PL. 8)

水田区画の西縁を画す土手で、5号溝の東縁に付随する。

位置：調査区の中央西寄を南壁から北壁に向かって延びる5号溝の東縁に、帯状に位置する。

座標値：X=61,121～61,136 Y=-92,039～92,043

検出状況：天明泥流除去後の第1面調査時に検出された。本土手は、5号溝上面の東縁に幅1.3m、高さ30cm程の帯状の高まりが連なるように検出された。しかし、北壁付近は攪乱により壊され、検出には至らなかった。なお、5号溝西縁に高まりは確認されていない。土手の東側には平坦な水田面が広がっており、本土手が水田面の西縁を画す形となっている。

規模：長さ15.27m 幅0.40～0.65m 高さ26cm

延伸方向：N-6°-E

盛り土(構築状況)：本土手は5号溝や水田と共に基本層Ⅰ層の天明泥流に覆われるが、土手の土層断面観察からは、砂質な暗褐色土で構築されていることが明らかとなった。また、土手構築にあたっては、芯材として大型礫を用いていることも解った。

所見・時期：検出面および天明泥流による埋没であることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

#### 2号土手 (第18・19図、第5表、PL. 8・9・52)

水田区画の要を画す帯状の高まりで、2号土手とした。その規模・状況は、1号土手に近似する。

位置：調査区の中央東寄りの南壁際に位置し、南壁に並走するように北東方向に直進し、途中で南東方向へと直角に向きを変える。その曲がり角部には、北方向からの幅狭な蛙が取り付くようある。

座標値：X=61,127～61,134 Y=-92,012～92,025

検出状況：天明泥流除去後の第1面調査時に検出された。本土手は、南壁中央東寄りの壁際に幅1.5m、高さ30cm程の帯状の高まりが連なるように検出された。その長さ約12mを測り、北東方向へ延びた先で南東方向へと直角に曲がる。しかし、曲がり角付近は不明瞭な検出となってしまった。また、その曲がり角部には、北方向からの蛙が取り付く形となる。土手の北側と東側には平坦な水田面が広がっており、本土手が水田面の南縁ないし西縁を画す形となっている。なお、土手上面より煙管(雁首)が出土している。

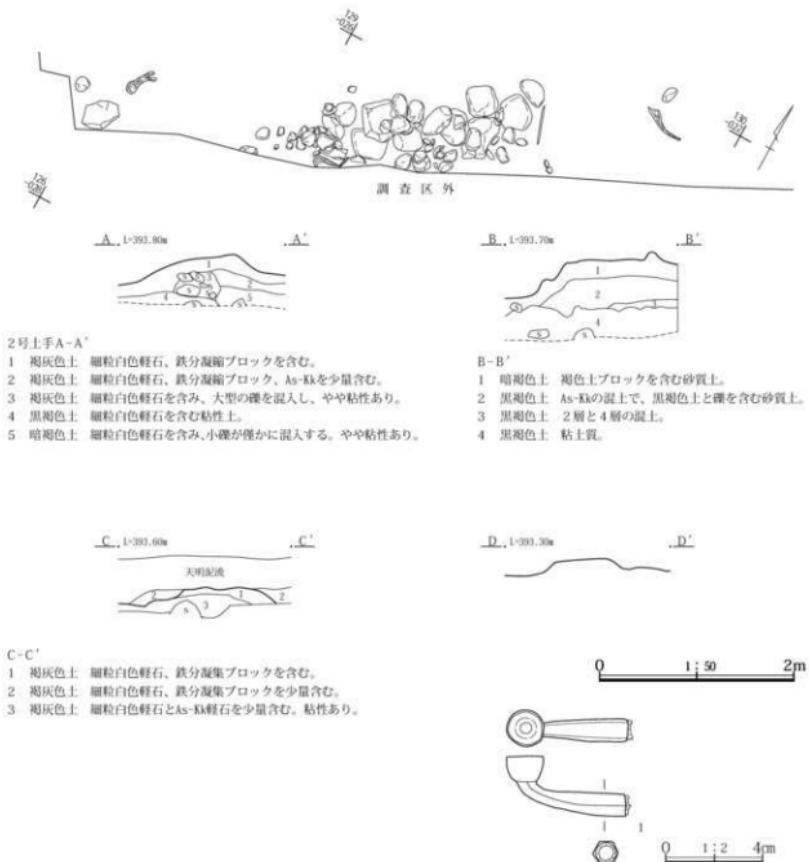
規模：長さ12.77m 幅0.50～0.85m 高さ15～37cm

延伸方向：東西N-58°-E、南北N-48°-W

盛り土(構築状況)：本土手は、先の1号土手と同様に5号溝や水田と共に基本層Ⅰ層の天明泥流に覆われる。土手の土層断面観察からは、1号土手と同様の砂質な暗褐色土や、褐灰色土で土手の上面を構築していることが明らかとなった。また、土手構築にあたっては、大型礫を芯材として用いていることが明らかとなり(芯材となる大型礫の配置状況は、第19図参照)、その構築法が先の1号土手や他調査区での土手と共通することも明らかとなった。

遺物：出土した遺物は極めて少ないが、土手上面に出土





第19図 2号土手芯材平面図、2号土手・畦 断面図、2号土手出土遺物

第5表 2号土手出土遺物観察表

種 国 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第19回 PL.52	1	銅製品 煙管(雁首)	2上手 完形	長 5.0 径 1.0 重 6.1	0.1	側面につなぎ目が明瞭。内部に羅字が一部残存している。 断面形状が6角形になっている。	

#### 第4章 検出された遺構と遺物

した煙管の雁首1点を図示した。

**所見・時期：**検出面および天明泥流による埋没であることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

#### 水田（第18・19図）

先述の1号土手を付随させた5号溝の東側の平坦面が水田であり、畦と土手で区画された3区画の水田面を検出した。

**位置：**調査区西側にある5号溝・1号土手の東側で、5号溝西側より一段低い平坦面全体が水田地となる。また、水田は畦と土手で区画され、先の1・2号土手は水田区画の縁を画する状況ともなっている。

**座標値：**X=61,121～61,148 Y=-92,001～-92,041

**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時に検出された5号溝の東側で、調査区中央付近から東側全体の平坦面が水田となる。この平坦面には、先の2号土手の曲がり角に取り付く南北方向の畦、この畦の取り付き部北側2.0m程を交点とした東へ延びる畦が検出されており、これらの畦と土手によって水田は3区画に区画されている。南北方向の畦は、東西畦と交差する地点より北側では幅1.0m程と幅広く、弧の交点以南および東西畦は幅40cm前後と狭い。調査区南東側に位置する東西畦南側で2号土手東側の区画の水田面がやや高く、東西畦の北側で南北畦の東側の区画および南北畦西側で1・2号土手が縁となる区画の水田面はやや低い位置にある。その比高差は約10cm程である。

各区画の規模は、次の通りである。

##### ①調査区南東側に位置する区画

東西方向：(12.3)m

南北方向：(7.4)m

面積：(58.6) m<sup>2</sup>

##### ②東西畦の北側で南北畦東側の区画

東西方向：(11.3)m

南北方向：(7.2)m

面積：(81.3) m<sup>2</sup>

##### ③南北畦西側で1・2号土手が縁となる区画

東西方向：(29.5)m

南北方向：(12.5)m

面積：(308.8) m<sup>2</sup>

**畦の断面の状況：**掲載した畦の断面は、北壁での土層断面と畦中央付近での断面である。畦土は褐色土で、土手の構築土と同様である。その下にAs-Bを含む土が確認できる。なお、南北方向の畦内に中型礫が連なる様子が確認されたため、もう一面掘削したところ、畦下に中型礫が点々と配置されており、畦の芯材としての利用を窺わせる。

**所見・時期：**検出面および天明泥流による埋没であることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

## 第2項 第2(3)面調査

発掘調査で第2面として検出された遺構は、第1面で検出された水田に伴う畦のプリント（擬似畦畔）であること、第3面がAs-B下面での調査であることから、本項ではこの第3面を第2面として記述することとした。第2(3)面調査では、土坑、ピット、溝、烟といった遺構が検出された。また、第20図に示すように、調査区の中央を南壁から北東方向に延びて北壁へと達する段差があり、この段差の東側が高く、西側が低い面となる。土坑が位置するのも、東側の高い面である。

以下、検出できた各遺構について記述する。

#### 56号土坑（第21図）

調査区東側の高い面に、1基のみ検出された。

**位置：**調査区の東端となる東壁北端の壁際に位置し、一部は調査区外へと続く。本土坑の西側には、28号溝およびピット1基がある。

**座標値：**X=61,146 Y=-92,007

**検出状況：**As-B下面での調査時に検出された。調査区東壁際に位置することから、土坑の全体形状は不明。調査できた範囲内では、壁は垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦に近い。遺物の出土はない。

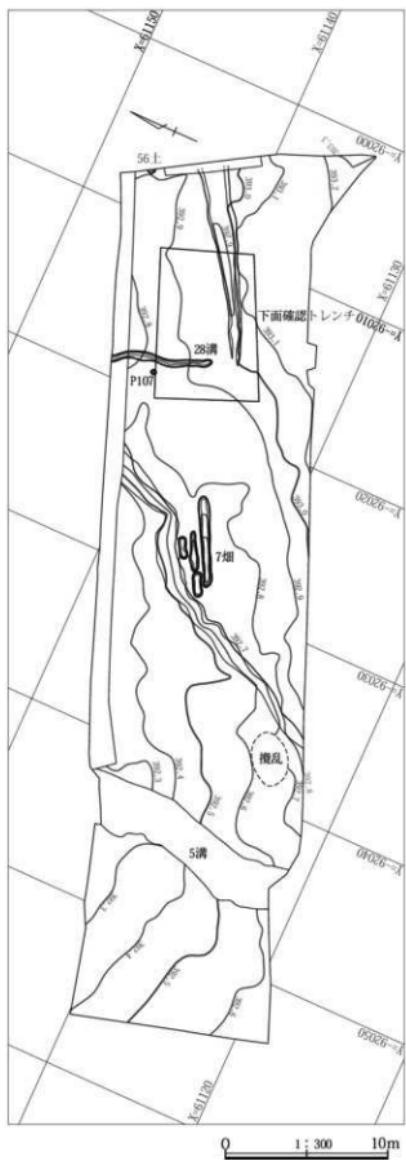
**形状：**不明

**規模：**長軸0.52m 短軸(0.25)m 深さ40cm

**長軸方向：**N-31°-W

**埋没土：**黒褐色粘質土ブロックと小礫が混在する灰黄褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と埋没土、周囲の状況から、時期は古墳時代から古代と考えられる。



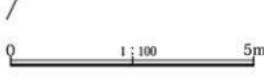
第20図 3区第2面 全体図

56号土坑



0 1:40 1m

28号溝



△ A-A' 1:393.10m △' A' 1:393.10m

0 1:30 1m

28号溝

1 関灰色土 As-Kk (黄褐色粒)を含む。

第21図 56号土坑、28号溝 平・断面図

## ピット

As-B下面での調査時に1基のみ検出された。調査区東側の高い面で、28号溝の西側に位置し、径30cmを測り、As-Kkを多量に含む褐灰色土を埋没土とする。

## 28号溝（第21図、PL.11）

調査区東側の高い面に、1条のみ検出された。

位置：調査区東側の高い面で、調査区中央からやや直線的に北壁へと延びる。本溝の西脇にはピットが1基近接する。

座標値：X=61,138 ~ 61,144 Y=-92,016 ~ 92,019

検出状況：As-B下面での調査時に、調査区東側の高い面で、本溝西側のピットと共に検出された。やや直線的に北壁へと延びる溝で、比較的に浅い。遺物が僅かに出土している。

規模：長さ6.27m 上面幅0.34 ~ 0.54m

深さ6 ~ 14cm

延伸方向：N-22 ~ 25°-W

埋没土：As-Kkを含む褐灰色土を埋没土とし、西脇のピットと同様である。

遺物：土師器の細片4点が出土したのみで、遺構に伴う遺物はない。

所見・時期：埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期の溝と考えられる。

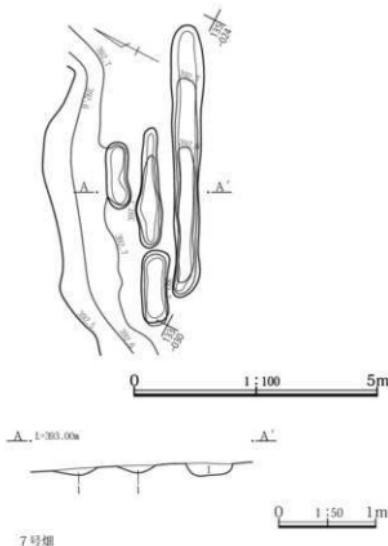
## 7号烟（第22図、PL.11）

溝状に並走する数条の烟の歛間であり、その残存状況は悪い。

位置：調査区の中央を南壁から北壁へと北東方向に延びる段差の東脇に位置し、高い面の西縁にあたる。同一面上には、やや離れて溝やピットも検出されている。

座標値：X=61,132 ~ 61,135 Y=-92,024 ~ 92,030

検出状況：As-B下面での調査時に、調査区東側の高い面の西縁で、段差際に検出された。段差と同方向に向きをもつ3条の並走する溝状の遺構で、溝間はやや狭い。この溝状遺構は烟の歛間であり、その歛間にAs-Kkを多量に含む褐灰色土が埋没土となる。残存状況は極めて悪く、浅い状態である。また、溝状の延長上、その周囲にも点々と同様な埋土が確認されている状況から、この東側の高い面一帯に烟が存在した可能性が高い。



第22図 7号烟 平・断面図

区画規模：長さ(6.14)m 幅(2.05)m

歛長(6.14)m 歛間間隔62 ~ 76cm前後

畦数2条

歛間方向：N-62°—E

所見・時期：検出面および埋没土にAs-Kkを多量に含むことから、時期は中世と考えられる。また、一帯が烟地であった可能性が高い。

## 第5節 4区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内の北西端に位置し、西側は県道郷原停車場線の東側に面し、南側は吾妻西バイパス調査時の9区、東側は道路を挟んで本報告の吾妻東バイパス5区と接し、幅狭なL字状となる細長い調査区となっている。

### 第1項 調査

調査区が狭いことから、数箇所のトレンチを設定し、作業員による人力掘削を主に、部分的に機械掘削により調査を行った。トレンチは、吾妻西バイパス調査時の9区に面する箇所、県道郷原停車場線の東側に面する箇所に設定し、他調査区と同様に天明泥流下面での第1面調査、さらに4区基本層序VI層のAs-Kk混土下面での第2面調査を行った。

調査の結果、第1・2面の両調査面共に、遺構の検出はみられなかった。しかし、天明泥流面下から木製品類が出土しており、遺構外遺物を扱った後述の第12節で図示した。



第23図 4区第2面 全体図

## 第6節 5区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内の北西側に位置し、西側は4区および吾妻西バイパス調査時の9区、南側は道路を挟んで1区、東側は水路を挟んで6区と接し、やや幅広な広い調査区である。調査は、第1面調査と第2面調査、そして第3面調査が

行われた。この第3面調査において、Hr-Faの存在とその下面に水田が検出された。このHr-Fa下水田について、先の吾妻西バイパス調査時にその存在が指摘されていたが明瞭な状態ではなく、本調査において明確となった。勿論、同地域における初調査例となった。

### 第1項 第1面調査

本調査区における第1面となる遺構は、第2面の調査



第24図 5区第1面 全体図

と共に確認され調査が行われた。天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した遺構には、多くの溝や道といった遺構が検出された。第24図に示すように、調査区のはば中央を南側から北側へ延びる溝、さらに東西方向に延びる溝が幾条も存在する。溝の一部には石組による堅固な壁が構築され、その部分に道が通じている。

以下、検出できた溝と道について記述する。

#### 11号溝（第24・25図、PL.12）

調査区の北西隅付近の西壁から調査区中央へと延びる溝で、12号溝に接続する。

**位置：**調査区の西側にあり、調査区の北西隅付近の西壁から調査区中央へと東西方向に延びる溝で、その東端は緩く湧曲して12号溝に接続する。

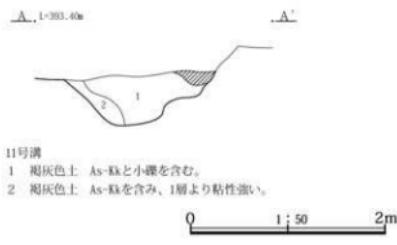
**座標値：**X=61,117 ~ 61,122 Y=-92,185 ~ 92,218

**検出状況：**天明泥流で埋没した遺構と共に、第2面調査時に検出された。溝は西壁から概ね直線的に東側へと延びながら緩く南側へ湧曲し、東端は調査区中央で12号溝に接続する。溝の両壁はやや急傾斜となり、底面は概ね平坦に近く、底面勾配は西側が高く東側ほど低くなる。12号溝に接続する東端部の状況は、接続部に12号溝西壁を構成する石積みが組まれており、12号溝埋没時と同時に機能していたとは考え難い。しかし、溝が接続している点から、本溝と12号溝の両溝が機能・共存していた後、本溝は埋没し、12号溝は石組を構築して天明泥流被災時まで存続したものと推測できよう。

**規模：**長さ34.36m 上面幅0.77 ~ 2.06m

深さ0.26 ~ 0.48cm

**延伸方向：**N=83° ~ E



第25図 11号溝 断面図

**埋没土：**調査区西壁での土層観察では、天明泥流下にAs-Kkを含む褐灰色土を主体とした埋没土である。

**遺物：**須恵器の杯片が1点、それと近世の陶器片が1点出土している。

**所見・時期：**埋没土にAs-Kkを多量に含むことから、時期は中世ないし近世前半期と考えられる。なお、12号溝が天明泥流で埋没した時点では、本溝と12号溝の接続部分に石積みが組まれていることから、石積み時には本溝が機能していないことが分かる。

#### 12号溝（第26・27図、第6表、PL.13・14・52）

1区第2面で検出された12号溝に続く溝として、同一の遺構番号を付した。本調査区での12号溝は、両壁の一部に石組をもち、東脇に3号道が沿うと共に、本溝を跨ぐ4号道が交差する。また、本溝の古い段階には11号溝が接続する。

**位置：**調査区のはば中央を、南壁から北壁側に向かって緩く蛇行するように延びる溝で、南半の東脇には3号道が沿い、さらに本溝を跨ぐ西からの4号道と交差する。

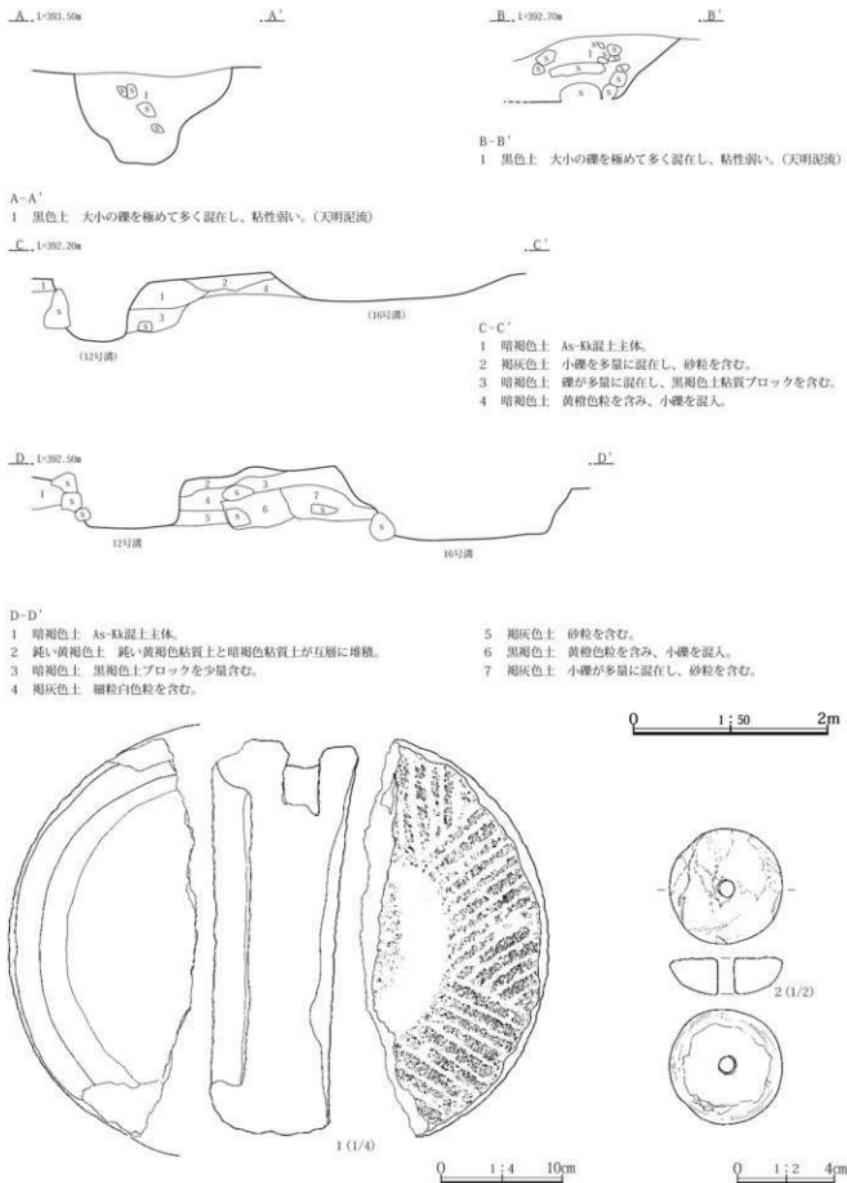
**座標値：**X=61,105 ~ 61,142 Y=-92,183 ~ 92,188

**検出状況：**第2面調査時に、天明泥流で埋没した石組をもつ溝として検出され、1区第2面の12号溝と同一溝として調査が行われた。調査区のはば中央を、南壁から北壁側に向かって緩く蛇行するように延びる溝で、溝南半の両壁の一部は石積みで構築されている。この石積みの状況は、西壁石積みの西側から延びる14・15・19溝と接する付近(石積み南側)とその北側、さらに東壁石積みでは、使用される礫の大きさや石の積み方に違いがある。溝両面の壁は石積み以外の箇所でも垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦に近い。底面の勾配は、南側が高く北側ほど低くなる。なお、西壁石積みの中央付近の底面には、3本の杭が列状に刺さった状態で検出されている。

**石積みの状況：**西壁石積み南側の状況は、やや大型礫を最下段に、3ないし4段積みで、高さ50cm程度を測り、長さ7.0mほど続き、続く北側に全体に大振りな礫により2から3段積みとなり、さらに巨石1段積み、大中型礫での2から3段積みと続く。その距離は47m程度を測る。一方、東壁石積みは西壁よりも短く、良好な



第26図 12・16号溝、3号道 平面図、石積み側面図



#### 第4章 検出された遺構と遺物

第6表 12号溝出土遺物観察表

種類 PL.No.	種類 器種 No.	出土位置 PL.52	残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				幅	高さ			
第27回 PL.52	1	石製品 石臼(上臼)	12溝 1/2	径 - (36.0) 幅 -	高 重 12.1 5800	粗粒輝石安山岩	上臼1/2破片。主溝・副溝は摩耗して浅く若干削減する。表面にはもの配り溝の端部が残されているが、軸穴孔・物入孔はなく、6分面。	
第27回 PL.52	2	石製品 紡錘	12溝 完形	径 4.7	厚 1.5 重 48.4	蛇紋岩	上面側は薄く剥落しているが、機能的に問題はない。下面側は丸味を帯び風化気味。体側縁は剥落もなく、使用時の状態が良好である。	

残存箇所は調査区中央に寄った位置である。中央付近となる石積みは、溝の上面肩部に小口積みに1段並べた状態で、その南側は大中の礫を上部肩部にややランダムに敷設している。

一方、石積みに使用される礫には、2分割した石臼も転用されている。

規模：長さ36.78m 上面幅0.94～1.70m

深さ34～92cm

延伸方向：北N-6°-W、南N-8°-E

埋没土：調査区南壁で土層断面の記録を行ったが、溝最終時期の埋没土は5区基本層序I層となる天明泥流であり、大小の礫を極めて多く混在させた黒色土である。

しかし、第26・27回C・Dラインの土層断面からすると、Cライン1・3層およびDライン4・5層と上下の礫の存在から、天明泥流で埋没した本溝の古い段階には、東壁がさらに東側へ寄っていたことが分かる。しかも、C・Dライン共に2層は3号道の路面下の土である。

遺物：溝中央付近には、底面に刺された状態で杭が3本出土している。また、西壁の石組内には、構築材の一部に1の半完形の粗粒辉石安山岩製石臼(上臼)が用いられている。出土遺物としては、近世の陶磁器片が13点ある。他に、2の滑石製の紡錘1点、土師器の細片が1点出土している。

所見・時期：天明泥流による埋没であることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。なお、11号溝との関係から、本溝はかなり古い段階から機能していたものと考えられる。同時に、古い段階の本溝は、東壁が天明3年の埋没時よりもさらに東側に位置していたようで、かなり広い溝幅であったと考えられる。

また、3・4号道との関係であるが、調査時には道としての認識はなかったため詳細に欠ける。天明泥流による埋没時には本溝の南半東脇に3号道が沿い、さ

らに道は、本溝の石積み部分を跨ぐように西からの4号道と交差する。しかし、この3号道は、本溝の古い段階には存在していないものと考えられる。

#### 13号溝 (第24・28・29図、第7表、PL.14・52)

南端で16号溝と重複する溝で、天明泥流を埋土とした溝である。

位置：調査区中央の東側にあり、溝の南端が16号溝東側に重複し、並走するように北側へ延びた先で東北方向へと向きを変える。本溝の北側では、東西方向に延びる18号溝と接する。

座標値：X=61,119～61,139 Y=-92,173～92,180

検出状況：重複する16号溝共に、第2面調査時に検出された。遺構確認時より天明泥流以前に埋没した溝と判明しており、その新旧も明らかであった。溝の両端は細く、途中がやや広くなり、全体に深い。溝内からの遺物の出土はないが、溝上面となる天明泥流下面から、数点の木製品が出土している。

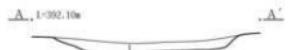
規模：長さ22.21m 上面幅0.50～1.96m

深さ11～38cm

延伸方向：N-10°～25°-E

埋没土：砂層を主体とした褐灰色土を埋没土とする。

遺物：溝上面に、数点木製品が埋まって出土した。1は桶の底で半完形品、2は重箱の底と考えられる。他に、棒状の木製品も数点出土しているが、取り上げ後、細かく割れてしまったため図化していない。なお、溝内

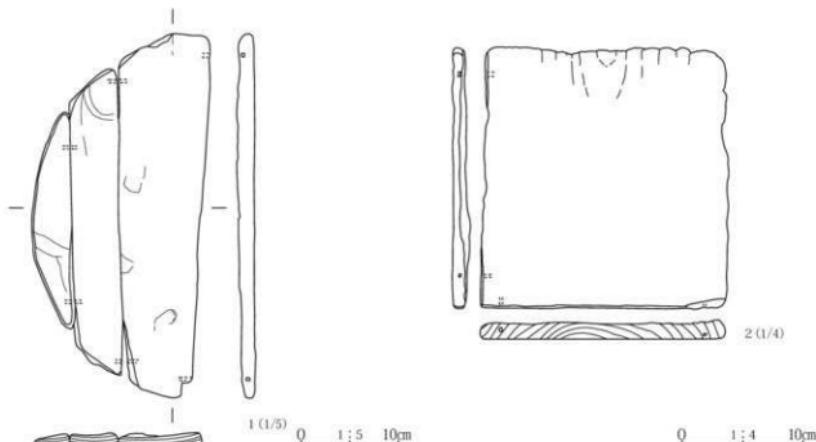


13号溝

1 褐灰色土 砂層が主体で、小石を含む。



第28図 13号溝 断面図



第29図 13号溝出土遺物

第7表 13号溝出土遺物観察表

掲 図 PL.No.	No.	種 類 器 器	出上位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成形・整形の特徴	備 考
第29図 PL.52	1	木製品 底板	13溝 2/3	縦 幅 37.2 18.3	厚 横 2.0	3分割されているが、側面にそれぞれをつなげる竹釘の穴 が確認できる。	
第29図 PL.52	2	木製品 板	13溝 完形	縦 幅 21.3 20.3	厚 横 1.6	正方形の板状の製品。重箱状の製品の底部か。側面に竹釘 の穴と見られる痕跡が確認できる。	

からは、国産磁器片が3点出土している。

**所見・時期：**重複する16号溝および埋没土から、埋没時期は天明3年以前と考えられる。

#### 14号溝（第30図、PL.14）

15号溝と共に、調査時には道としての認識はなかった4号道の北側を画す溝である。南側には並走する19号溝がある。なお、調査時において、15号溝となる部分で分岐し、南側に緩く湾曲する溝を含めて14号溝と呼称した。

**位置：**調査区の西側南壁付近に、南壁と並行するようある。西壁際を端に、北東方向へ直線的に延び、途中で15号溝となるが、その東端は12号溝西壁石積み付近に達する。

**座標値：**X=61,103 ~ 61,108 Y=-92,186 ~ 92,213

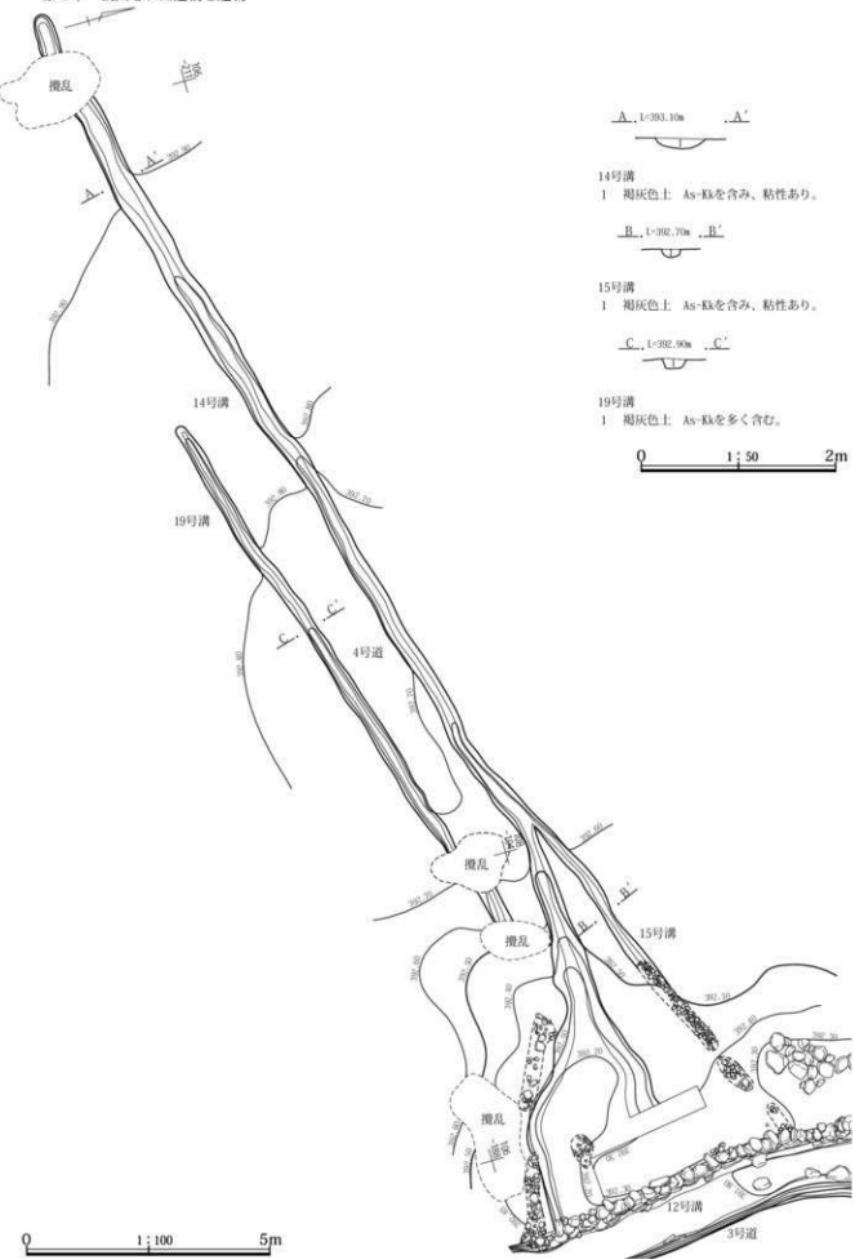
**検出状況：**第2面調査時に検出された。西端は西壁際となり、ほぼ直線的に北東方向に延び、途中で南側へと緩く湾曲し、その端部は解放状に広く不明瞭となる。しかし、湾曲の始点には、北東方向へ直進する15号溝が接しており、むしろ14号溝と15号溝が同一溝で、さらに湾曲部分が分岐した状態と考えられる。両溝の溝幅や深さもほぼ一致し、埋没土も同じである。なお、南側に並走する19号溝も同様な規模にある。

**規模：**長さ27.18m 上面幅0.30 ~ 0.58m

深さ8 ~ 13cm

**延伸方向：**N -75 ~ 90° - E

**埋没土：**11号溝と同様な、As-Kkを含む褐灰色土が埋没



土となる。

**所見・時期：**埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世ないし近世前半期と考えられる。なお、本溝は15号溝との同一溝で、4号道の北側を画する側溝と考えられる。因みに、南側の側溝が19号溝となる。

#### 15号溝（第30図、PL.14）

14号溝と共に、調査時には道としての認識はなかった4号道の北側を画す溝である。南側には並走する19号溝がある。なお、14号溝と同一の溝である。

**位置：**調査区の西側南壁付近に、南壁と並行するようある。14号溝の湾曲始点に接して北東方向へ直線的に延び、東端は12号溝西壁石積み付近に達する。

**座標値：**X=61,108 ~ 61,111 Y=92,187 ~ 92,194

**検出状況：**14号溝と共に、第2面調査時に検出された。

西端は14号溝の湾曲始点に接し、14号溝の直進方向と同一な北東方向に直線的に延び、東端は12号溝西壁石積み付近に達する。先述したように、14号溝と15号溝が同一溝である。

**規模：**長さ8.02m 上面幅0.3m

深さ7 ~ 10cm

**延伸方向：**N-68°-E

**埋没土：**14号溝と同様な、As-Kkを含む褐色灰色土が埋没土となる。

**所見・時期：**埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世ないし近世前半期と考えられる。なお、本溝は14号溝と同一溝で、4号道の北側を画する側溝と考えられる。

#### 16号溝（第26・27・31図、第8表、PL.15・52）

1区第2面で検出された16号溝に続く溝として、同一の遺構番号を付した。本調査区での16号溝は、先の12号溝に並走し、西脇には3号道が沿う。

**位置：**調査区のほぼ中央を、南壁から北側となる調査区

中央付近へと延びる溝で、西脇には3号道が沿う。また、東壁には13号溝が接する。

**座標値：**X=61,107 ~ 61,129 Y=92,180 ~ 92,183

**検出状況：**第2面調査時に、天明泥流で埋没した溝として12号溝と共に検出され、1区第2面の16号溝と同一溝として調査が行われた。調査区のほぼ中央を、南壁から北側の調査区中央付近まで延びる溝で、東側の12号溝と距離を保ちながら並走する。溝の東壁中央に13号溝が接するが、遺構確認時の埋没土の状況から本溝の方が新しい。12号溝と同様に3号道の東側を画するのが本溝であるが、西側の12号溝とは溝の規模・構築状況に違いがある。溝幅は本溝が幅広く、溝の北側付近では底面も浅くなる。また、12号溝での堅固な石積み壁はなく、僅かに西壁の南寄りの一部に石列を確認したのみである。石列に使用される礫はやや大振りで、底面に1段8石が残存していた。その長さは約2.5mを測る。なお、3号道となる西壁上面には、縁を補強する石列等はみられない。

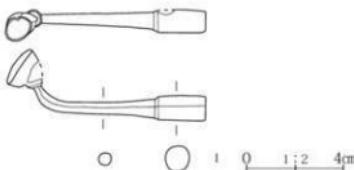
**規模：**長さ22.12m 上面幅2.06 ~ 3.06m

深さ0.27 ~ 0.65cm

**延伸方向：**N-2°-E

**埋没土：**12号溝と共に調査区南壁で土層断面の記録を行ったが、溝内の最終時期の埋没土は5区基本層序Ⅰ層となる天明泥流であり、大小の礫を極めて多く混在させた黒色土である。

**遺物：**出土した遺物極めて少ないが、溝内より出土した煙管の雁首1点を図示した。他に、近世の陶器片が1点出土している。



第31図 16号溝出土遺物

第8表 16号溝出土遺物観察表

辨別 PL. No.	種類 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
			長径	厚	重			
第31図 PL.52	1 銅製品	16溝 ほぼ完形	8.2	0.1	3.2		一部に金色の光沢が見られる。肩が付き雁首が長い。	
	煙管(雁首)		1.3					

#### 第4章 検出された遺構と遺物

**所見・時期：**天明泥流による埋没であることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。なお、13号溝との新旧は、本溝の方が新しい。

また、3・4号道との関係であるが、調査時には道としての認識はなかったため詳細に欠ける。天明泥流による埋没時には本溝の西脇に3号道が沿い、さらに4号道が3号道と交差するように12号溝と本溝を跨いでいたものと考えられ、その部分に石積みや石列が敷設されたものと推測できよう。

#### 17号溝（第32図、PL.15）

**位置：**調査区の中央北寄りにあり、16号溝の北側に位置するが、不明な点が多い。2.5m程西側には12号溝が並走する。

**座標値：**X=61,134 ~ 61,140 Y=-92,181 ~ 92,183

**検出状況：**第2面調査時に検出された。16号溝の北側で南北方向に直線的に延びる溝で、西側には12号溝が並走する。溝の両端は不明。埋没土は天明泥流ではなく、11号溝の埋土に近い。

**規模：**長さ5.45m 上面幅0.42m

深さ12 ~ 20cm

**延伸方向：**N-14°-W

**埋没土：**As-Kkを含む褐灰色土が埋没土となる。

**遺物：**極めて少なく、近世の陶器片が1点出土している。

**所見・時期：**埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世ないし近世前半期と考えられる。

#### 18号溝（第32図、PL.15）

13号溝北端付近の東側に中型礫が密に詰まった状態で検出された。

**位置：**調査区の北東側にあり、13号溝北端付近の東側に位置する。13号溝との重複の新旧は不明。東西方向に直線的に延びる溝である。

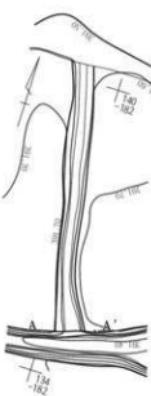
**座標値：**X=61,136 ~ 61,138 Y=-92,167 ~ 92,174

**検出状況：**第2面調査時に検出された。13号溝北端付近の東側に、東西方向に直線的に延びる溝で、礫が密に詰まった状態で検出された。溝自体は浅く、埋没土は11号溝や13号溝に近い。

**規模：**長さ7.2m 上面幅0.32 ~ 0.52m

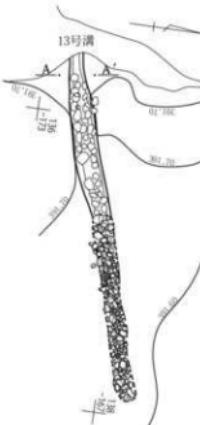
深さ4 ~ 8cm

#### 17号溝

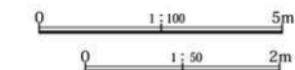


17号溝  
1 褐灰色土 As-Kkを含み、粘性あり。

#### 18号溝



18号溝  
1 褐灰色土 As-Kkを含み、粘性あり。



第32図 17・18号溝 平・断面図

**延伸方向：**N-73°-E

**埋没土：**As-Kkを含む褐灰色土が埋没土となる。

**所見・時期：**埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世ないし近世前半期と考えられる。なお、礫の集中するあり方から、暗渠の可能性が高く、暗渠であるとすれば、水田地の可能性が高くなる。

#### 19号溝（第30図、PL.14）

調査時には道としての認識はなかった4号道を画す溝で、北側には並走する14・15号溝がある。

**位置：**調査区の西側南壁付近に位置し、南壁と並行するようある。本溝の北側に並走する14・15号溝とは、約1.0m程の距離を保つ。

**座標値：**X=61,103 ~ 61,107 Y=-92,192 ~ 92,204

**検出状況：**調査区の南西側で、14・15号溝の南側に並走する溝として検出された。約1.0m程の距離を保ち、直線的に延びる距離は14・15号溝より短いものの、ほぼ同様に続いているものと考えられる。また、溝の特徴・規模も同様であることから、道の脇に付随する側溝と考えた。

**規模：**長さ12.1m 上面幅0.36m

深さ3~9cm

**延伸方向：**N-73°-E

**埋没土：**14・15号溝と同様に、As-Kkを含む褐灰色土が埋没土となる。

**所見・時期：**埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世ないし近世前半期と考えられる。なお、本溝は、4号道の南側を画する側溝と考えられる。

#### 3号道（第26・27図、PL.16）

調査時には道としての認識はなかったものの、その後の整理時に諸要素から3号道として認定した。

**位置：**調査区のほぼ中央を、南壁から北壁側に向かって延びる12号溝と16号溝との間で、両溝が本道の両側を画し、側溝となる。良好に路面が残存するのは、12号溝の南半東側であり、16号溝の西側である。なお、本道の南側において、西からの4号道と交差する。

**座標値：**X=61,106 ~ 61,134 Y=-92,182 ~ 92,185

**検出状況：**第2面調査時に、天明泥流で埋没した石組をもつ12号溝と16号溝の間に、幅約1.0m程の距離を保

つ帶状の小砂利敷の面として検出された。調査区のほぼ中央を、南壁から北方向に向かう道と考えられるが、北半については不明。この小砂利敷の路面は、古い段階の幅広な12号溝を埋めると共に、泥流で埋没した新しい12号溝に改修し、その埋めた12号溝と16号溝の間に路面を構築した状況が第26・27図C・Dラインの土層断面から読み解ける。併せて、路面構築にあたっては、12号溝東壁肩部に検出された木口積みの石列が、路肩の養生を物語っている。さらに、西側から延びてくる4号道との交差については、本調査区南東側での遺構検出はないものの、6区の状況を踏まえ、4号道が東側へ続くと想定した。また、その想定は、12号溝の石積み壁や16号溝の石列から、溝を跨ぐための構造物があったものと考えたことにも発する。

**規模(路面)：**長さ(27.5)m 上面幅0.90 ~ 1.50m

(側溝)：東側に16号溝 西側に12号溝

**延伸方向：**N-2°-E

**埋没土：**路面を覆うのは天明泥流であり、鈍い黄褐色土や褐灰色土が路面の構築土となっている。

**所見・時期：**天明泥流により埋没していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。しかし、この3号道は、12号溝の古い段階には存在していないものと考えられる。

#### 4号道（第30図）

調査時には道としての認識はなかったが、その後の整理時に先の3号道と同様に諸要素から4号道として認定した。

**位置：**調査区の西側南壁付近を並走する14・15号溝および19号溝で画された、幅約1.0m程の直線的な帶状をなす。北側を画す14・15号溝と南側を画す19号溝が、側溝として本道と一体となる。概ね東西方向に延びる本道は、調査区中央南端付近で直行する溝を跨いで3号道と交差し、さらに東へ延びると考えられるが詳細は不明。

**座標値：**X=61,103 ~ 61,111 Y=-92,186 ~ 92,213

**検出状況：**第2面調査時に、天明泥流で埋没した12号溝や16号溝、3号道と共に、西側南壁付近を並走する14・15号溝と19号溝の間に、幅約1.0m程の距離を保つ帶状の面として検出されている。この14・15号溝と

#### 第4章 検出された遺構と遺物

19号溝の両溝が本道の側溝として一体となり、概ね東西方向に直線的に延びる道として捉えることができ。そして、側溝の途切れる東端は、調査区中央南壁から北壁へ延びる12号溝付近に達する。本道と接する12号溝西側部分は、確認面が荒れ詳細に欠けるが、部分的に礫が散乱している。また、12号溝西壁は堅固な石積みとなっており、12号溝東側に沿う3号道、その東側の16号溝および16号溝の石列等の存在から、溝を跨ぐための橋等の存在が想起される。本道が12号溝を跨いで3号道と交差し、さらに16号溝を跨いで東進する可能性をもつ。なお、本道の側溝埋没土が12・16号溝の埋没土(天明泥流)と異なる点から、本道の側溝が天明泥流被災より早い段階に埋没していたものと考えられ、その後も道としての機能が継続していた結果が、12号溝等にみる石積みに現れていると考えられよう。

**規模(路面)**：長さ(27.2)m 上面幅1.05～1.40m

(側溝)：東側に19号溝 北側に14・15号溝

**延伸方向**：N-73°-E

**埋没土**：路面上覆う土は不明。しかし、側溝となる両側の溝はAs-Kkを含む褐色灰色土が理没土となっている。

**所見・時期**：側溝が天明泥流による埋没ではないことから、天明3年以前に埋没した側溝をもつ道と考えられる。また、6区の状況を踏まえると、調査区南東側での検出はないが、本道が東側へ続くものと想定できる。

#### 第2項 第2面調査

本調査区における本来の第2面に相当する遺構は、As-B直下の水田である。第33図に示すように、調査区のほぼ全面に検出した。しかし、調査区西側にかなり寄った畦を検出できた良好な残存状態の部分、それ以後の調査区の8割近くとなる畦の検出できなかった部分とに大きく分かれる。

以下、検出できたAs-B直下水田について記述する。

##### As-B直下水田（第33図、PL.17）

第2面調査で検出した、As-B直下の水田である。水田域は調査区のほぼ全面に及ぶが、その残存状態はあまり良くなく、畦の検出できなかった部分が多い。また、水田面は地形に大きく左右され、特に東側では区画境に

段を設けた水田面が棚田状に連続する。

**位置**：調査区のほぼ全面に広がるが、西端、中央西寄り、そして東側で残存状況に大きく違いがみられる。

**座標値**：X=61,099～61,152 Y=-92,160～-92,220

**検出状況**：検出された水田は、5区北壁における基本層序IV層下面にあたるAs-B直下の水田である。先述してきたように、調査区西端の畦が良好に残存する箇所、その東側となる調査区中央西寄では畦のない緩斜面となり、調査区中央が最も低く、その東側となる調査区の東半は棚田状の平坦面が北側へ下るように、地形および面の状態が異なる。以下、各面の状況を記す。

**調査区西端の状況** 畦が良好に残存する箇所であり、調査区南西隅から北へ直線的に1本の畦が通じ、その西側に東西方向を主とした畦によって水田区画がなされる。その区画の形状および規模は一様ではなく、地形を反映するように畦が設けられ、これら各区画の東端を画する北への直線的な畦に直交する。また、各畦の交点は接することはなく、各々が間隔を空けた水口となっている。なお、各田面は緩い凹凸が著しく、水田面の特徴をよく現わしている。

**調査区中央西寄りの状況** 畦の明瞭な西端水田の東側を区画する直線的な北方向の畦の東側で、調査区中央付近の南北方向の崖地(第1面調査での12・16号溝付近)までの間の畦のない北東方向への緩斜面である。緩斜面には、緩い凹凸が確認できる。なお、この地点の北壁におけるAs-B直下の黒色土層を分析対象に、植物珪酸体分析と花粉分析の自然科学分析を行った(第5章第3節を参照)。

**調査区東側の状況** 調査区中央付近の南北方向の崖地よりも東側で、南側から北側への緩斜面となる。しかし、この緩斜面には、概ね東西方向に長い比高差5～10cm程の段が設けられており、その段数も7段8面を数える。各段の面は比較的平坦で、面は緩い凹凸が著しい。また、畦の確認はないが、各面をなすAs-B直下の土壌は所謂水田土壌の黒色土であることから、段差の少ない棚田状の水田であった可能性が高い。

**所見・時期**：本調査区における第2面の水田は、As-B直下であることからして所謂As-B直下水田に比定され、古代水田として位置付けられる。なお、As-B直下の水田土壌と考えられる黒色土層を分析対象とした自然科学



第33図 5区第2面 全体図

分析(植物珪酸体分析・花粉分析)の結果、稲作を積極的に支持する分析データではなかった。分析試料の採取地点が、畦の検出箇所より東側で、北壁中央西寄りの地点であったことによる可能性がある。因みに、採取地点は水田地ではなく、水田地脇の閑地にある箇所である。それが故に、西端のような水田特有の畦は検出されず、東側での連続する棚田状の平坦面とも異なる状況を呈している。

### 第3項 第3面調査

本調査区における第3面調査での主な遺構は、Hr-FA直下の水田である。第34図に示すように、調査区の西半に検出した。調査区東側においては、第2面調査後にトレンチを設定して下層の遺構の状態を確認したが、明確な遺構を確認するには至らなかった。Hr-FA下水田は、先の上信自動車道吾妻西バイパスでの調査でその可能性が示唆されていたものの、明瞭な状態で検出されたのは本調査区での検出例が初めてである。

以下、検出された水田に伴う溝とHr-FA下水田について記述する。

#### 35号溝（第34・35図）

第3面で検出されたHr-FA下水田に伴う溝で、大区画を構成する大畦の外側に検出された水路の要素の溝である。

**位置：**第3面調査範囲の西側で、小区画水田を画する南側から北北西方向に直進する大畦の西脇に沿う溝であり、北端は不明。

**座標標：X=61,106～61,140 Y=−92,184～−92,205**

**検出状況：**小区画水田を画す南側から北北西方向に直進する大畦の西脇に沿う深い溝で、溝の南側では両側が大畦となる。溝の西側の大畦には、途中2箇所および北端が途切れて空き、排水用の水口となっている。また、溝の東側大畦にも、3箇所の取水用の水口が設けられている。溝自体は比較的深いものの、用水を導くには十分であろう。なお、北端部については不明であるが、東側大畦の西脇にのみ付随した状況が見て取れる。

**規模：**長さ15.1m 上面幅0.42～0.82m

深さ6～12cm

**延伸方向：**N-23°-W

**埋没土：**Hr-FA下水田と同様に、基本層序第X層となるHr-FAの灰が主体となる浅橙色土が埋没土となり、覆われている。

**所見・時期：**Hr-FAに覆われ、水口に直結していることから、Hr-FA下水田に伴う水路であり、古墳時代(6世紀初頭)の溝である。

#### 水III（第34・35図、第9表、PL.18・19）

当該地域における明瞭な状態でのHr-FA下水田の検出は、初例である。周辺での調査では、これまでに検出された事例はなかった。本調査区での水田は、基本層序第X層となるHr-FAの灰が主体となる浅橙色土に覆われた状態で検出された。水田は、大畦による大区画、そして大区画内を小区画に区画する小畦からなる。

**位置：**調査区の西半となる、第3面調査範囲全体に検出した。調査区東半の状況は、第2面調査後のトレンチから読み取ることができる。因みに、本調査区の東隣となる6区第3面調査においても、同様なHr-FA下水田が検出されている。

**座標標：**X=61,106～61,140 Y=−92,184～−92,205

**検出状況：**検出された水田は、5区北壁基本層序X層下面を確認面として検出された水田で、Hr-FAの灰が主体となる浅橙色土に覆われた状態で検出された。この基本層序X層を対象とした自然科学分析(火山灰分析)により、Hr-FAに起因した土層であることが明らかとなったため、X層(浅橙色土)に覆われた水田をHr-FA下水田として扱った。その水田の状態は、太い大畦と細い小畦からなり、大畦によって大区画が、そして大区画内を小畦により細かく区画された小区画水田で構成される。大区画を画する大畦は、まず、第3面調査範囲の南西隅から北北西に直進した先で北東へと大きく向きを変え、途中で直交する大畦と交差するも、なお北東へと延びる。この大畦の北北西への直進部分は緩斜面の等高線に並行し、北東への直進部分は等高線に直行する。さらに、この北北西に延びる大畦の途中から分岐するように、北東へ直進する大畦が延び、その途中からさらには分岐して北西へ直進する大畦がある。これらの大畦は幅0.8～1.0m前後を測り、断面

観察からはHr-FA下水田耕土となる基本層序XII層の黒褐色土よりやや明るい粘性の強い暗褐色土で構築されている。

こうした大畦によって区画された大区画に、便宜上の呼称として大区画1～大区画4までを付した。なお、調査範囲内の南西隅となる35号溝西側の区画については、区画される大畦および大畦にみる排水用の水口の存在から、水田が続く可能性をもつが詳細は不明。また、大区画2の北西側は区画がなされておらず、併せて斜面もややきついことから、水田地ではないものと考えられる。以下、各大区画の状況を記す。

**大区画1** 第3面調査範囲の南側の大半に及ぶ。大区画の南西辺は、南西隅から北北西に直進する大畦となり、その大畦には35号溝によって導かれた取水用の水口が計3箇所設けられている。北西辺は、南西辺を画する大畦から分岐した北東へ直進する大畦によって画され、その途中には北西へ直進する大畦が分岐する。東側および南側は調査範囲境となるが、大区画は範囲外へと続く。この北西へ直進する大畦が、北側に位置する大区画2(北側の西半)と大区画3(北側の東半)との区画境となっている。

大区画内の状況であるが、区画内は小畦によって多くの小区画に分割される。西辺沿いの区画はやや規模が大きく、水口からの取水を受け入れる位置にある。この取水口際の区画以東は、傾斜の等高線に直行するように西南西から東北東方向へ直線的に延びる小畦を軸に、それに直行する南南東から北北西方向の小畦によって各小区画が画されている。そして各小区画には、取水用と排水用の水口が設けられ、西南西から東北東方向へ水を流下させることができている。これら小区画は73区画を数え、その規模(面積)は0.7～3.0m<sup>2</sup>で、2.0m<sup>2</sup>前後の区画が最も多い。なお、各田面には、緩い凹凸が見られる。

**大区画2** 第3面調査範囲の中央北寄りで、大区画1の北側、大区画3の南西側に位置する。大区画の南西辺は、大区画1の南西辺を画する大畦の続きで、北北西に直進する大畦であり、35号溝が西側に沿う。この南西辺の大畦中央付近は最も低くなってしまっており、取水用の水口があった可能性をもつ。北西辺は、南西辺の北西端で大きく曲がり、北東へ直進する大畦によっ

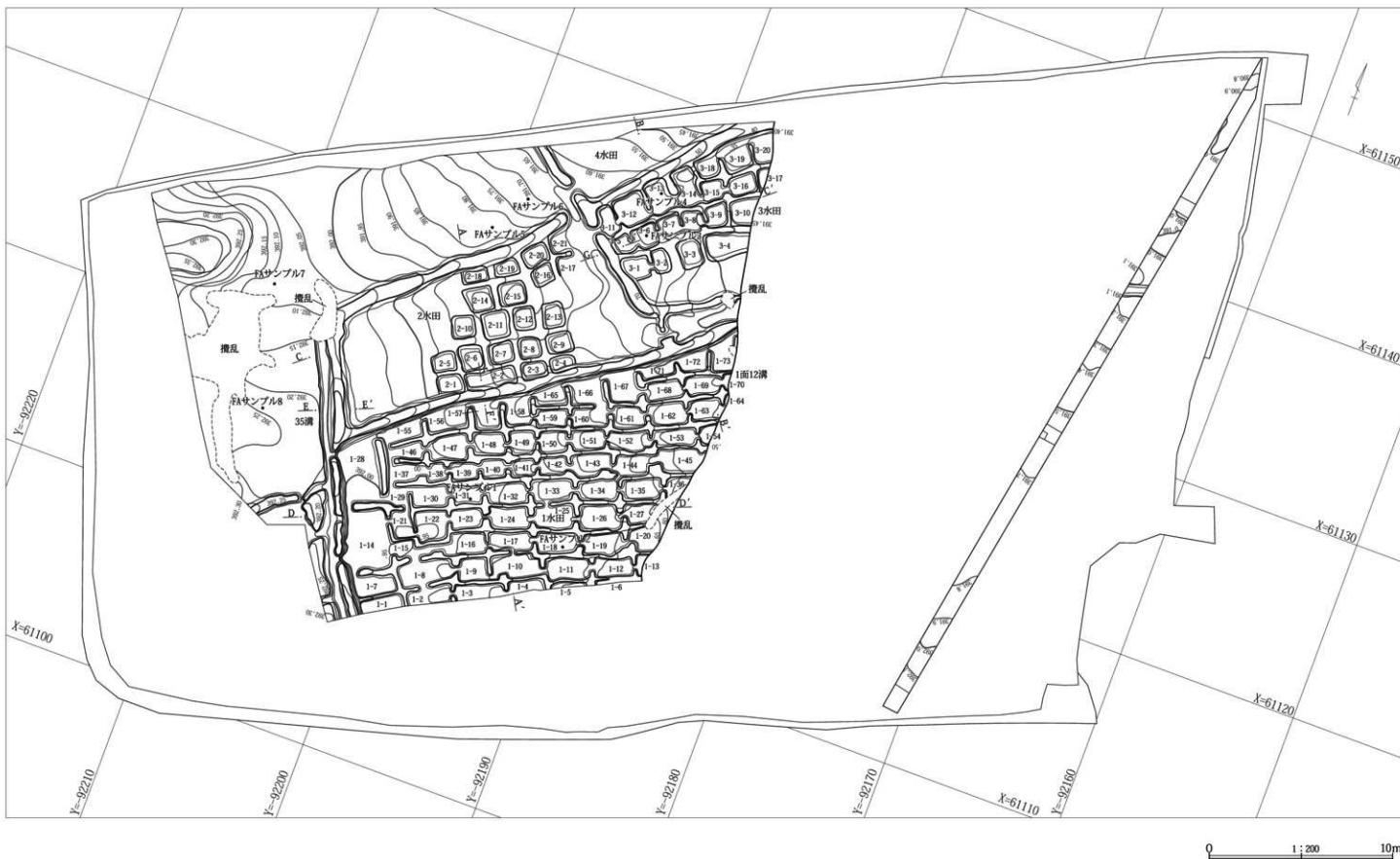
て画され、北東辺を画する大畦と交差する。この交点となる北西辺の端部に排水用の水口を見ることができ。南東辺は、大区画1の北西辺を画する北東へ直進する大畦によって画される。北東辺は、大区画3の南西辺を画する大畦であり、本大区画の北西辺と南東辺の大畦と交点をもち、大畦の両端付近に排水用の水口を検出している。

大区画内は、小畦によって小区画に分割されるが、大区画1よりも不明瞭さが目立つ。小区画は、大区画内の中央北東寄りに検出された。傾斜の等高線に直行するような西南西から東北東方向への小畦を軸に、それに直行する南南東から北北西方向の小畦で小区画とするが、小畦自体も低く、水口も不明である。これらの小区画は21区画を数え、その規模(面積)は0.6～1.3m<sup>2</sup>とだいぶ小振りである。なお、各田面には、少ないが緩い凹凸も見られる。

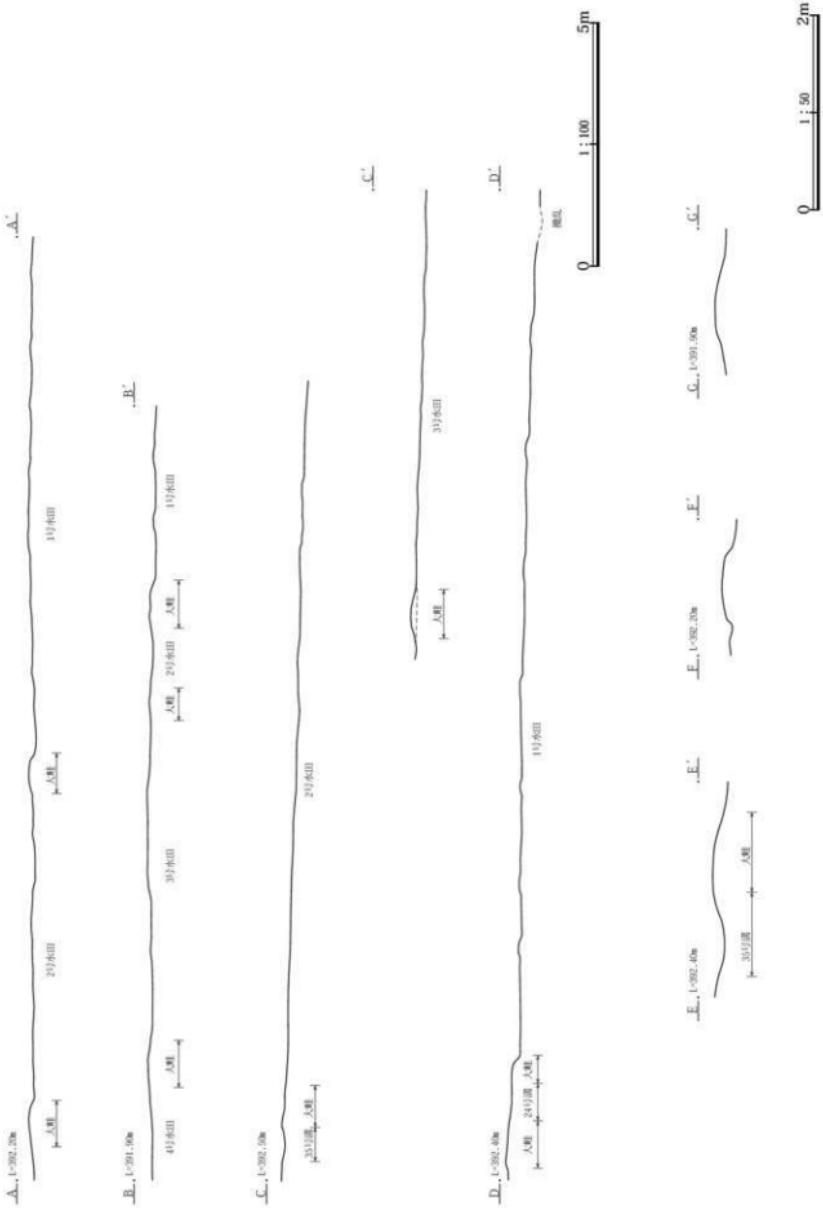
**大区画3** 第3面調査範囲の北東隅付近で、大区画1の北側、大区画2の北東側、大区画4の南東側に位置する。大区画の南西辺は、大区画1の北西辺を画する大畦から分岐し、大区画2の北東辺を画する大畦でもあり、本大区画の北西辺を画する大畦と交差する北西方向へ直進する大畦によって画される。また、この南西辺を画する大畦の両端付近には、取水用の水口が検出されている。南東辺は大区画1の北西辺を画した大畦となり、北西辺は大区画2の北西辺を画する大畦の続きである。

大区画内は、小畦によって小区画に分割される。小区画は、傾斜の等高線に直行するように西南西から東北東方向へ延びる小畦を軸に、それに直行する南南東から北北西方向の小畦によって各小区画が画されている。そして各小区画には、取水用と排水用の水口が設けられ、西南西から東北東方向へ水を流下させることができが意識されている。これら小区画は20区画を数え、その規模(面積)は0.6～2.2m<sup>2</sup>で、一部小畦の不明瞭な箇所もある。なお、各田面には、緩い凹凸が見られる。

**大区画4** 第3面調査範囲の北東隅で、大区画3の北西側に位置し、僅かな調査対象であった。大区画の南西辺は、大区画3から続く北西へ直進する大畦で、南東辺を画する大畦との交点付近に取水用の水口が検出されている。南東辺は、大区画2・3の北西辺を画



第34図 5区第3面 全体図



第35図 Hr-FA下水田 断面図

## 第4章 検出された構造と遺物

第9表 5区第3面 小区画水田計測表

大区画	小区画	規模(m, ㎡)			水口位置		
		長さ	幅	面積	取水口	排水口	他
1	1	2.2	(0.7)	(1.4)			
1	2	2.3	(0.8)	(1.8)	→北畔中央 東畔中央→3		
1	3	2.6	(0.7)	(1.8)	→→西畔中央 東畔中央→4		
1	4	1.8	(0.5)	(1.0)	3→西畔中央		
1	5	1.8	(0.2)	(0.4)			
1	6	(2.4)	(0.2)	(0.5)			
1	7	2.1	1.0	1.9	14→北畔西隅		
1	8	2.8	1.1	3.0	15→北畔中央 東畔中央→9 南畔中央		
1	9	1.3	1.1	1.5	8→西畔中央 東畔南隅→10		
1	10	2.5	1.2	2.6	9→西畔南隅 東畔北隅→11 北畔中央		
1	11	2.3	1.1	2.3	10→西畔中央 東畔中央→12		
1	12	2.0	0.8	1.7	11→西畔中央 東畔中央→13		
1	13	(0.6)	(1.1)	(0.4)	12→西畔中央		
1	14	2.3	3.1	6.9	28→北畔西隅 東畔南隅→15 南畔西隅 東畔北隅→21		
1	15	1.0	0.8	0.7	14→西畔北隅 東畔南隅→16 南畔東隅		
1	16	2.2	1.0	2.0	15→西畔中央 東畔南隅→17		
1	17	2.3	0.8	1.8	16→西畔南隅 東畔中央→18 南畔中央		
1	18	2.1	0.9	1.8	17→西畔北隅 東畔中央→19		
1	19	2.0	0.9	1.9	18→西畔中央 東畔中央→20		
1	20	(1.7)	1.2	(1.5)	19→西畔中央		
1	21	1.0	1.4	1.4	14→西畔北隅 東畔南隅→22 北畔東隅		
1	22	1.6	1.5	2.3	21→西畔南隅 東畔北隅→23		
1	23	1.6	1.9	1.4	22→西畔中央 東畔中央→24		
1	24	1.9	1.0	2.0	23→西畔中央 東畔中央→25		
1	25	2.0	1.1	2.2	24→西畔中央 東畔中央→26 北畔中央		
1	26	2.2	1.2	2.4	25→西畔中央 東畔中央→27		
1	27	(1.7)	0.9	(1.2)	26→西畔中央		
1	28	1.9	3.2	5.9	14→南畔西隅 東畔南隅→29 北畔北隅→55		
1	29	1.0	0.9	0.9	28→西畔南隅 東畔北隅→30 南畔東隅 北畔西隅		
1	30	1.8	1.0	1.8	29→西畔北隅 東畔中央→31		
1	31	1.4	0.7	1.0	30→西畔中央 東畔中央→32		
1	32	2.0	1.0	1.9	31→西畔北隅 東畔中央→33		
1	33	2.1	1.1	2.1	32→西畔中央 東畔中央→34 南畔中央		
1	34	2.1	0.9	1.8	33→西畔中央 東畔中央→35 北畔東隅		
1	35	1.9	0.9	1.8	34→西畔中央 東畔中央→36		
1	36	(1.2)	(0.9)	(0.7)	35→西畔中央		
1	37	2.0	0.8	1.4	29→南畔西隅 東畔中央→38 46→北畔西隅		
1	38	1.0	0.8	0.7	37→西畔中央 東畔中央→39		
1	39	1.4	0.8	1.1	38→西畔中央 東畔北隅→40		
1	40	1.2	0.8	0.9	39→西畔中央 東畔中央→41		
1	41	1.3	0.7	0.9	40→西畔中央 東畔中央→42		
1	42	1.4	0.8	1.1	41→西畔中央 東畔中央→43		
1	43	2.0	1.1	2.0	42→西畔中央 東畔南隅→44		
1	44	1.6	1.0	1.6	43→西畔南隅 東畔北隅→45 南畔西隅		
1	45	2.1	1.2	(2.2)	44→西畔北隅		
1	46	1.8	0.8	1.1	37→南畔西隅 東畔中央→47 55→北畔西隅		
1	47	2.0	1.2	2.2	46→西畔中央 東畔中央→48		
1	48	1.6	1.0	1.6	47→西畔中央 東畔中央→49		
1	49	1.3	1.1	1.3	48→西畔中央 東畔中央→50		
1	50	1.4	1.0	1.3	49→西畔中央 東畔中央→51		
1	51	1.7	0.9	1.5	50→西畔中央 東畔中央→52		
1	52	2.1	0.9	1.7	51→西畔中央 東畔中央→53		
1	53	2.2	0.7	1.5	52→西畔中央 東畔中央→54		
1	54	(1.0)	(0.9)	(0.6)	53→西畔中央		
1	55	2.1	0.8	1.7	28→西畔北隅 東畔北隅→56 南畔西隅		
1	56	2.1	1.1	2.3	55→西畔北隅 東畔北隅→57		

した大畦となる。

この大区画内には、明瞭な小畦を検出していないが、本区画の南西側で大区画2の北西側に位置する箇所に比べ、本区画が比較的平坦な面となっていること、南西辺の大畦に水口が検出されていることから、水田と認識した。

**所見・時期：**本水田は基本層序X層に覆われた水田であることから、Hr-FA下水田として扱い、その時期を古墳時代の6世紀前半頃と考えている。一方、調査区東半については、第2面調査終了後にトレンチによる確認を行ったものの明瞭な遺構の検出ができなかったことから、第3面の本調査に至らなかった。しかし、トレンチを再確認すると、トレンチの中央北寄りに幅0.7m程の高まりが、帯状に東北東方向へ延びる様子が窺える。この帯状の高まりの位置は、第3面調査範囲内のHr-FA下水田での大区画1と大区画2を画する大畦のほぼ延長線上にあり、同一の大畦である可能性が極めて高い。依って、大区画1や大区画3が東側へ広がっていたことは確実であり、小区画水田が連続と続いていたことが想定される。このことは、本調査区の東隣となる調査区における6区第3面でのHr-FA下水田の状況からも想像し難い。

本調査区第3面における各大区画内の小区画水田の計測値を表9に示す。

## 第7節 6区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内の北側中央に位置し、西側は水路を挟んで5区、南側は道路を挟んで2区、東側は道路を挟んで7区と接し、最も広い調査区である。調査は、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流下を対象とした第1面調査、As-B下面を対象とした第2面調査、そして先述の5区と同様なHr-FA下面を対象とした第3面調査が行われた。その結果、第2面調査において、中世から近世初頭にかけての遺構を検出しており、天明3年の泥流下面を第1-1面、中世から近世初頭にかけての遺構を第1-2面として記述することとした。

### 第1項 第1面調査

本調査区における第1面にふくまれる遺構は、調査における第1・2面と調査面を跨いで確認された事から、第1-1面として天明3年の泥流下面での遺構、第1-2面として中世から近世初頭にかけての遺構とに分割して扱うこととした。

#### 1. 第1-1面調査

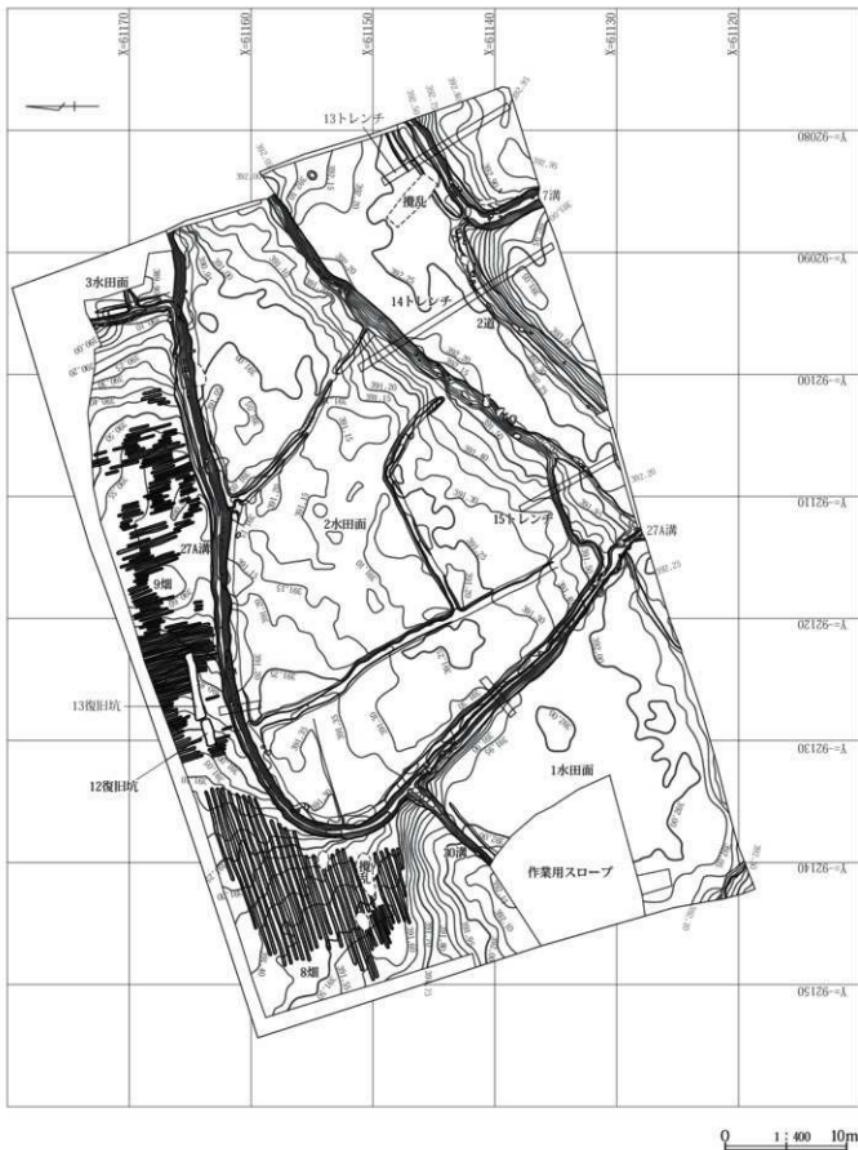
天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した遺構には、復旧坑、溝、道、水田、畠といった各種の遺構が検出された。第36図に示すように、調査区の中を大きく湾曲して南側から北側へ流れる溝、斜面地特有の段差が数段にも及んで大きく4段の平坦面を作り出し、そうした段差と溝で区画された平坦面には水田や畠が展開する。一方では、段差の斜面に道も確認された。また、一部には、泥流被災後の耕地復旧のための復旧坑も検出された。

以下、検出された各遺構ごとに記述する。

#### 12号復旧坑（第36図、PL.20）

天明3(1783)年の泥流被災後に行われた、耕地復旧の痕跡である。

位置：6区の北壁中央付近の壁寄りに位置し、13号復旧坑と接するようにある。



第36図 6区第1-1面 全体図

**座標値：**X=61,162～61,164 Y=-92,128～92,130

**検出状況：**第1面調査時に、9号烟を壊すように13号復旧坑と共に検出された。長方形を呈し、底面はやや浅いが、泥流と多くの礫が埋土となる。

**規模：**長さ2.3m 幅0.8m 深さ12cm

**延伸方向：**N-75°-E

**埋没土：**大小の礫と天明泥流が混在する暗褐色土を埋没土とする。

**遺物：**出土した遺物はない。

**所見・時期：**天明泥流で埋没した9号烟より新しく、礫を多量に含むことから、泥流被災後の復旧坑である。

#### 13号復旧坑（第36図、PL.20）

**位置：**6区の北壁中央付近の壁寄りに位置し、12号復旧坑の東側に接するようある。

**座標値：**X=61,163～61,165 Y=-92,122～92,128

**検出状況：**第1面調査時に、9号烟を壊すように12号復旧坑と共に検出された。長軸5.5mの長方形を呈するが、底面はやや浅い。12号復旧坑と同様に、礫と天明泥流で埋まる。

**規模：**長さ5.5m 幅0.7m 深さ14cm

**延伸方向：**N-78°-E

**埋没土：**大小の礫と天明泥流が混在する暗褐色土を埋没土とする。

**遺物：**出土した遺物はない。

**所見・時期：**天明泥流で埋没した9号烟より新しく、礫を多量に含むことから、泥流被災後の復旧坑である。

#### 7号溝（第37図、PL.20）

調査時において、2・6区で検出された溝は同一溝として7号溝と扱っているが、東隣の7区で検出された6号溝も区を跨ぐ同一の溝である。

**位置：**6区の南東隅付近を南側から東側へ直角に曲がるように延びた溝である。また、調査区の中では最も高い位置にある平坦部を区画する溝で、2区においては2区東端付近に、7区においては区の西端に検出されている。

**座標値：**X=61,136～61,147 Y=-92,079～92,088

**検出状況：**6区の第1面調査時に検出された。調査区の南東隅付近を南側から北側へ直線的に延び、さらに東

壁へと直角に曲がり、直線的に延びる溝で、断面U字状を呈する。溝の勾配は、南壁部分が高く、東壁部分が最も低いことから、南側から北東方向へと流水する。つまり、7区6号溝へと流れる状況にある。一方、調査区南東端部で最も高い位置にある東西方向に長い平坦面は、この溝により東西に分割しており、耕地区画に大きく関わっている。天明泥流を埋土としている点で見れば、2区7号溝、7区6号溝と同じであり、同一溝である由縁もある。同時に、これら同一溝に囲まれた平坦面の利用の在り方等、同地域での耕地区画・利用を考える素材となろう。

**規模：**長さ15.66m 上面幅0.80～1.66m

深さ34～58cm

**延伸方向：**北N-57°-E、南N-24°-W

**埋没土：**大小の礫を混在する黒褐色土で、2区検出の7号溝と同じ天明泥流を埋没土としている。

**遺物：**出土した遺物はない。

**所見・時期：**天明泥流により埋没していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

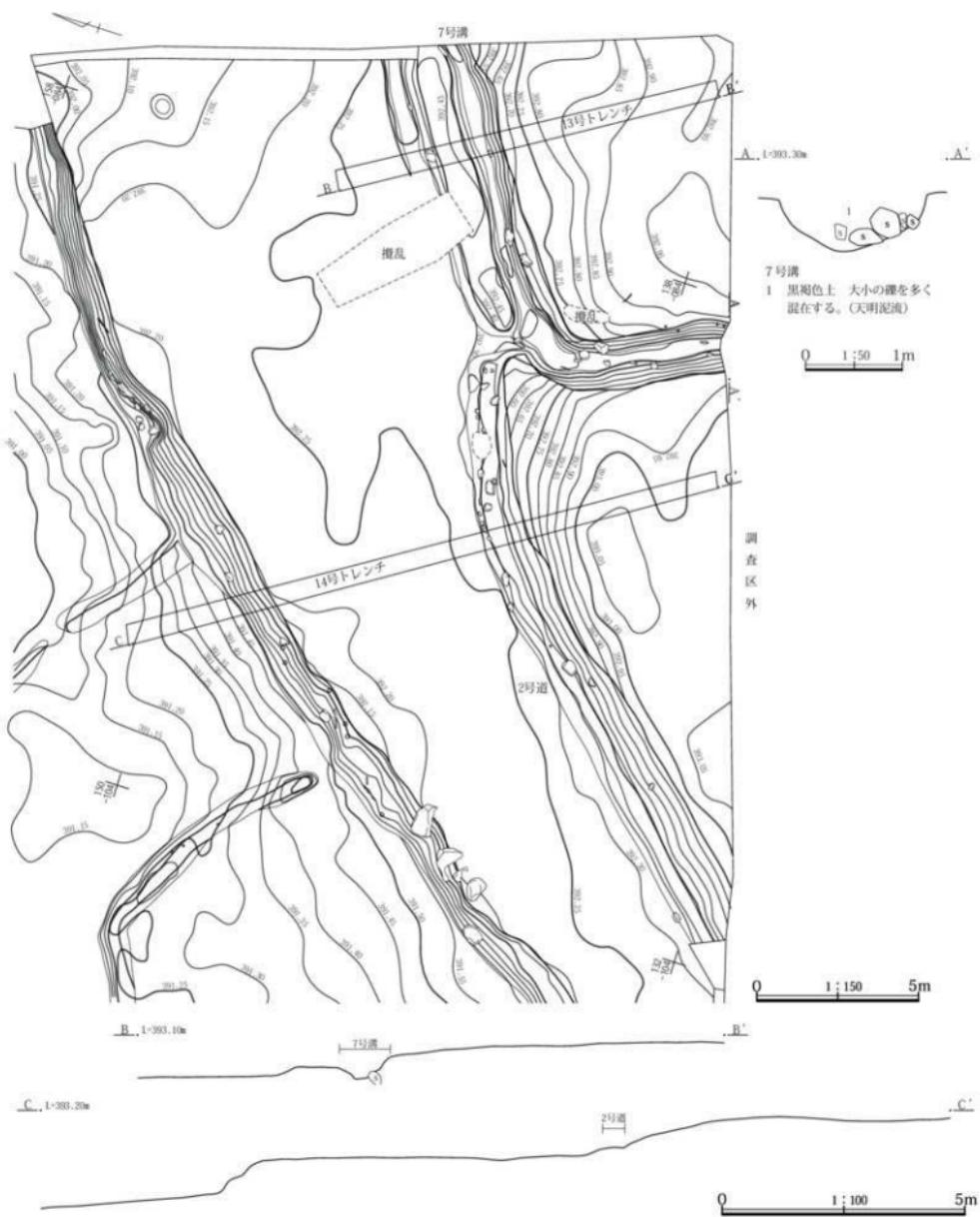
#### 27A号溝（第38・39図、第10表、PL.21）

調査区内の低い平坦面を大きく区画する溝で、直線部と屈曲部、そして直角に屈折しながら方向を変えつつ北流する溝でもある。なお、天明泥流によって被災した本溝は、古い段階の溝を改修した姿であり、改修前の溝は一部に石積みをもつ溝であったことが明らかとなっている。そこで本報告では、天明泥流で埋没した改修後の溝を27A号溝として本項で扱い、石積みをもつ改修前の溝を27B号溝として次項で扱うこととした。

**位置：**6区の南壁中央のやや西寄りの壁際から北西方向へと直線的に延び、その先で大きく東方向へと屈曲するように向きを変えて直進し、さらに調査区の北東隅付近で直角に屈折して北側へ延びる溝である。途中、東方向へと向きを変える屈曲部の南側西縁には、東流してくる30号溝がT字状に合流する。

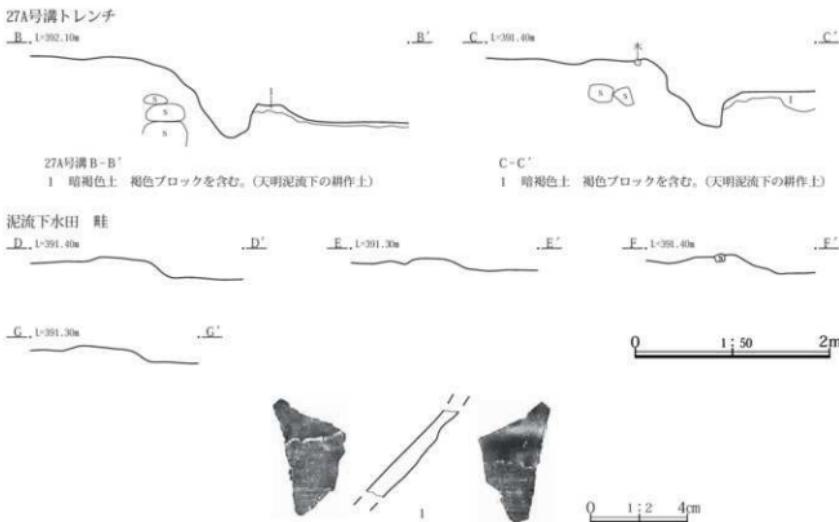
**座標値：**X=61,127～61,173 Y=-92,093～92,138

**検出状況：**6区の第1面調査時に検出された。調査区の南壁中央のやや西寄り壁際を南端とするが、先述の2区では同一とされる溝の検出はない。南壁際を南端とする本溝は、先ず北西方向へと直線的に延び、その先



第37図 7号溝、2号道 平・断面図





第39図 27A号溝トレンチ、泥流下水田畦 断面図、27A号溝出土遺物

第10表 27A号溝出土遺物観察表

種類 PL.No.	種類 No.	出土位置 器種	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第39回	1	古漁具陶器 盤類	27A溝 体部片	口 底 高 —	灰黄	内外面上半に灰釉。外面の縦縫目顯著。 14世紀後葉～ 15世紀

で大きく東方向へと屈曲するように向きを変えて直進し、さらに調査区の北東隅付近で直角に屈折して北側へと延びる。断面がU字形ないし底面の狭いV字形を呈する壁は、傾斜のきつい斜面となるが、その壁際には部分的に杭を確認することができた。最も残存状態の良好な箇所は、30号溝との合流地点南側の西壁であり、25～30cm前後の間隔で3.6mほど続き、その杭列の裏側に横木としてか、長い丸木材(径6.0cm前後)が据えられていた。また、良好な箇所の南側においても、西壁際に点々と杭が検出されている。同様な杭のあり方は、屈曲して東側へ直進する南壁際、さらには直角に屈折して北側へ延びる東壁際においても検出された。こうした杭列を有する壁側は、溝を挟んだ各平坦面の高い側の壁際であり、落差のある壁面の補強を意図していたことが理解できる。なお、27号溝の調査を進める中で、30号溝との合流地点の南側西壁での杭列

の状態確認のためのトレンチ調査の結果、西壁の内側となる壁奥に3段の石積みを検出したことから、天明泥流で埋没した天明3年期の溝よりも古い溝の存在が判明した。同様のトレンチを東へ直進する部分でも確認した結果、やはり本溝の南壁の内側となる壁奥においても石積みを検出した。つまり、泥流による埋没直前の本溝は、断面がU字形ないし底面の狭いV字形を呈し、一部の壁際を杭等で補強をするものの、基本的には素掘りの溝である。しかし、何らかの要因による改修前の溝(27B号溝)は、後述するように素掘りの溝でありながら、一部に石積みを施した溝であった。(第39図 27A号溝トレンチ断面図 参照)

規模：長さ90.78m 上面幅0.60～1.90m

深さ30～81cm

延伸方向：北N-80°-E、南N-46°-W

埋没土：大小の礫を混在する黒褐色土で、天明泥流を埋

#### 第4章 検出された遺構と遺物

没土としている。

遺物：僅かではあるが出土している。図示した1は、古瀬戸陶器の盤類の体部片である。また、出土した杭についても、図示していない。

所見・時期：天明泥流により埋没していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

##### 30号溝（第40図、PL.21）

調査区の西側平坦面を区画する溝で、その東端は27A号溝に接する。

位置：6区の西側作業用スロープ隅から北東方向へと直線的に延びる溝で、北東端は27A号溝の屈曲部南側の西壁にT字状に合流する。

座標標：X=61,139 ~ 61,147 Y= -92,133 ~ 92,140

検出状況：6区の第1面調査時に検出された。調査区西侧の作業用スロープ北東隅から北東方向へと直線的に延びる溝で、その北東端は27A号溝の屈曲部南側の西壁にT字状に合流する。西側平坦面と中央部平坦面とは27A号溝西壁に段差が生じており、このため合流付近では溝の落差が大きくなっている。作業用スロープ際での溝断面は、U字状を呈している。また、東端の合流地点付近には、27A号溝で検出された杭と同様に、高さのある両側の壁際に数本の杭を確認した。

規模：長さ9.03m 上面幅0.50 ~ 0.94m

深さ17 ~ 31cm

延伸方向：N-45°-E

埋没土：黒褐色土の天明泥流を埋没土とする。

遺物：出土した杭については、図示していない。

所見・時期：天明泥流により埋没していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

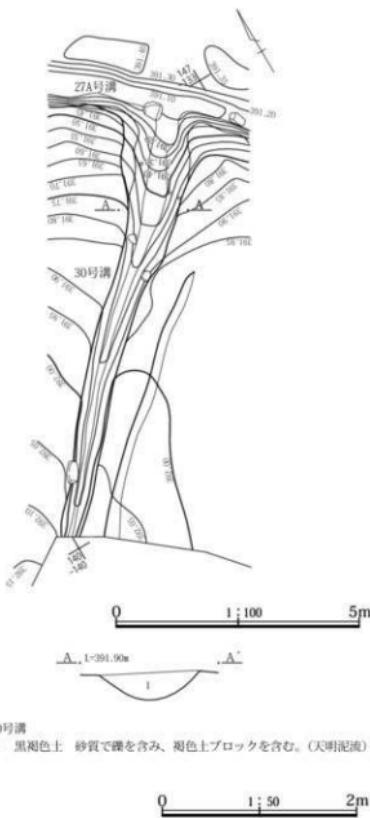
##### 2号道（第37図、PL.20）

調査区の南壁際に位置し、13号畠とその北側の平坦面との境となる段差に設けられた小道である。

位置：6区での13号畠とその北側平坦面との境に位置し、境となる段差斜面のやや下側に、斜面を横切るように設けられる。

座標標：X=61,130 ~ 61,143 Y= -92,087 ~ 92,103

検出状況：6区の第1面調査時に検出された。13号畠とその北側平坦面との境となる段差斜面の途中に設けら



第40図 30号溝 平・断面図

れた道で、幅40cmほどの狭い平坦面が、帯状に南壁際から北東側へと延びる。路面はやや硬化が認められるが、著しくはない。出土遺物はない。

規模：長さ19.8m 幅0.35 ~ 0.55m

延伸方向：N-44 ~ 70°-E

埋没土：黒褐色土の天明泥流を被覆する。

所見・時期：天明泥流を被覆していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

**水田**

検出された第1面での水田は、その周囲を落差のある段差や溝で区画した平坦面を利用しており、その平坦面も3段からなっている。調査区南西側に位置する平坦面が最も高い1号水田面、調査区中央に位置する中段の平坦面が2号水田面、調査区北東隅に僅かに検出された最も低い3号水田面として報告する。

**1号水田面（第36図、PL.21）**

本水田面は、調査区南西側に位置した平坦面を水田利用している。北側を区画する30号溝際に、水田に伴う土手上の高まりを有することから、不明な点もあるが水田面と判断した。

**位置：**6区南西側に位置する平坦面であり、北側は30号溝、東側は27A号溝、南側および南西隅は段差によつて区画された範囲である。

**座標標：X=61,119～61,145 Y=-92,114～92,146**

**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時に、27A・30号溝や他の平坦面とともに検出された。本調査区内では比較的高い位置にある平坦面で、2号水田面より高位にある。北側を区画する30号溝際に、幅60～70cm程の土手状の高まりが沿う。しかし、東側の27A号溝との段差上の際には土手状の高まりは確認できていな。また、平坦面内を区画する畦状の高まりも検出されていない。

**埋没土：**黒褐色土の天明泥流を被覆する。

**所見・時期：**天明泥流を被覆していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

**2号水田面（第36・38・39図、PL.21・22）**

本水田面は、調査区中央となる27A号溝の内側に位置した広い平坦面を利用した水田で、調査時には水田を区画する帯状の高まりを15～20号畦とし、4区画を確認した。

**位置：**6区中央に位置する平坦面であり、西側と北側は27A号溝、南側は南壁中央から東壁中央南側へとやや細長く伸びる平坦面北側の段差斜面に囲われた内側がその範囲である。

**座標標：X=61,131～61,166 Y=-92,085～92,136**

**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時に、27A号溝

や他の平坦面とともに検出された。本調査区内では最も広い平坦面であり、南東側からすると大きく4段中の3段目、しかも西側の1号水田面より低い位置にある平坦面となる。27A号溝と接する平坦面の縁には、本平坦面南側の高まりから続く土手状の高まりが帶状に取り巻き、途中には排水用の水口も確認できる。また、平坦面内を区画する直線的な帯状の高まりも検出されており、この区画畦から4区画の水田が設けられていたと考えられる。畦は、南側から北側へ延びる直線的な東西2本の畦と、その間に鈎の手状に曲がった畦からなり、幅は50～60cm程度で、畦を挟んで僅かな高低差が認められる。なお、各区画を便宜的に①～④とした。

各区画の規模は、次の通りである。

①：平坦面の中央南側に位置する区画で、西側に②、北・東側に③の区画が隣接する。

東西方向：16.0m

南北方向：12.3m

面積：153.9m<sup>2</sup>

②：平坦面の西側に位置する区画で、東側に①と③の区画が隣接する。

東西方向：10.4m

南北方向：32.0m

面積：203.4m<sup>2</sup>

③：平坦面の中央北側に位置する区画で、南側に①、西側に②、東側に④の区画が隣接する。なお、区画の北東隅には排水用の水口が確認できる。

東西方向：18.2m

南北方向：23.1m

面積：323.0m<sup>2</sup>

④：平坦面の東側に位置する区画で、西側に③の区画が隣接し、③との区画畦には水口をもつ。

東西方向：(17.5)m

南北方向：(16.1)m

面積：(209.6) m<sup>2</sup>

**畦の断面の状況：**図示した27A号溝脇の土手および畦の断面は、土手の方が水田面より依り高く、水田を区画する畦を境に各水田面が僅かに段状になっていることが読み取れる。土手および畦土は、褐色ブロックを含む暗褐色土である。

#### 第4章 検出された遺構と遺物

**埋没土：**黒褐色土の天明泥流を被覆する。

**所見・時期：**天明泥流を被覆していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

##### 3号水田面（第36・38図、PL.21）

本水田面は、調査区北東隅に僅かに検出された平坦面で、直角に曲がって北進する27A号溝の東側にある。この27A号溝際に、水口をもつ土手状の高まりとを有することから、不明な点もあるが水田面と判断した。

**位置：**6区北東隅に位置する平坦面であり、西側は27A号溝、南側は2号水田面との段差によって区画された範囲である。

**座標標：**X=61,165～61,173 Y=-92,088～92,094

**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時に、27A号溝や他の平坦面とともに検出された。本調査区内では最も低い位置にある平坦面で、西側を画する27A号溝際に、幅60～70cm程の土手状の高まりが沿い、水口状の切れ間を有する。

**埋没土：**黒褐色土の天明泥流を被覆する。

**所見・時期：**天明泥流を被覆していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

##### 烟

検出された第1面での烟は、その周囲を落差のある段差や溝で区画した平坦面を利用しておらず、その平坦面も水田と同様に数段にわたっている。調査時には8～11・13号烟までの遺構名を付したが、烟に伴う歓間溝を検出できた烟区画は少ない。

##### 8号烟（第36図、PL.22）

調査時に呼称した遺構名で、歓間溝も多く検出され、整理時にもそのまま踏襲した。

**位置：**6区北西隅に位置し、南端は南斜面、西側は27A号溝と9号烟に面する。

**座標標：**X=61,146～61,163 Y=-92,133～92,149

**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時に、27A号溝や他の平坦面とともに検出された。9号烟と共に本調査区北側の平坦面に位置し、東側の9号烟とは歓間方向が異なる。歓間は直線的で、ほぼ東西方向を向き、最長で19.3m、歓間幅は30～50cmを測り、計30条の歓間を検出した。本烟区画に接する27A号溝には土

手状の高まりではなく、9号烟との間には2.0m程の閑地を有する。また、烟地となる平坦面は、2号水田面より若干低い段となる。遺物等の出土はない。

**区画規模：**長さ(19.30)m 幅(13.80)m

歓長(19.30)m 歓間間隔30～50cm前後

畦数30条

**歓間方向：**N-72°—E

**埋没土：**黒褐色土の天明泥流を被覆する。

**所見・時期：**天明泥流を被覆していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

##### 9号烟（第36図、PL.22）

調査時に呼称した遺構名で、歓間溝も多く検出され、整理時にもそのまま踏襲した。

**位置：**6区北側の中央に位置し、西側は8号烟、南側は27A号溝に面する。なお、12・13号復旧坑と重複する。

**座標標：**X=61,161～61,172 Y=-92,101～92,131

**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時に、27A号溝や他の平坦面とともに検出された。重複する12・13号復旧坑より明らかに旧く、8号烟と共に本調査区北側の平坦面に位置し、西側の8号烟とは歓間方向が異なる。歓間は直線的で、ほぼ南北方向を向き、最長で9.6m、歓間幅は8号烟より狭く24～30cmを測り、計83条の歓間を検出した。本烟区画に接する27A号溝には土手状の高まりではなく、8号烟との間には2.0m程の閑地を有する。また、烟地となる平坦面は、2号水田面より若干低い段となるが、3号水田面よりはやや高い。遺物等の出土はない。

**区画規模：**長さ(30.70)m 幅(9.60)m

歓長(9.60)m 歓間間隔24～30cm前後

畦数83条

**歓間方向：**N-15°—W

**埋没土：**黒褐色土の天明泥流を被覆する。

**所見・時期：**天明泥流を被覆していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

##### 10号烟

南壁際の中央や西寄りに位置し、1号水田面の南側にある1号水田面より一段高い平坦面であるが、歓間等の痕跡が検出されていないことから、欠番とした。

**11号烟**

先述した1号水田面であり、戸間等の痕跡が検出されていない点、30号溝脇の土手状の高まりの存在から、11号烟を欠番とした。

**13号烟**

南壁際の中央やや東寄りに位置し、2号道の斜面上段で、7号溝の西側にある最上位の平坦面であるが、戸間等の痕跡が検出されていないことから、欠番とした。

**2. 第1-2面調査**

中世から近世初頭にかけての遺構として扱う第1-2面は、調査において第2面調査時に検出された遺構であるが、その後の検討により第1-1面とした天明泥流で埋没した面よりも古く、本来の第2面であるAs-B下面の遺構よりも新しい時期の遺構として、この第1-2面を設定した。つまり、第1-1面の遺構下に検出された遺構として位置付けた。遺構数としては少ないが、調査区東半の平坦面の状況は大きく変化し、特に南東部での平坦面の段数が増している。また、天明3年の泥流被災よりも古い溝、さらにはAs-Kkの一次堆積層を掘り込んだ中世烟の存在も明らかとなった。(第41図)

以下、検出された各遺構ごとに記述する。

**27B号溝 (第41・42・43図、PL.22)**

調査区内の平坦面を大きく区画する27A号溝であるが、30号溝との合流地点の南側トレンチにおいて、27A号溝西壁よりも内側に3段の石積みを検出した。同様に、東へ直進する部分でのトレンチでも、27A号溝南壁の内側に石積みを検出したことから、天明泥流で埋没した天明3年期の27A号溝よりも古い溝の存在が判明した。その27A号溝よりも古い溝が27B号溝であり、調査区内の延伸状況はほぼ27A号溝をトレースした状態にある。

**位置：**6区の南壁中央のやや西寄りの壁際から北西方向へと直線的に延び、その先で大きく東方向へと屈曲するように向きを変えて直進し、さらに調査区の北東隅付近で直角に屈折して北側へと延びる溝である。

**座標標：X=61,127 ~ 61,173 Y=-92,093 ~ 92,138**

**検出状況：**6区の第2面調査時に検出された。27A号溝をトレースするように、調査区南壁際を南端として北

西方向へと直線的に延び、その先で大きく東方向へと屈曲するように向きを変えて直進し、さらに調査区の北東隅付近で直角に屈折して北側へと延びる。途中、大きく東方向へと屈曲する部分では、溝底面が二重となるが、内側が27B号溝の底面である。また、この屈曲部付近から東側への底面には、円形の浅い穴が確認できた。一方、27B号溝の大きな特徴である石積み壁は、南壁から北西方向へと直線的に延びる西壁、東へと直進する南壁に部分的に残存し、さらに、調査区の北東隅付近で直角に屈折して北側へと延びる辺りが最も良好に残存する(PL.22-5・6)。また、第1-1面調査時の2箇所のトレンチでは、第42図に示したように明らかに石積み列を確認しており、その断面図が第42図トレンチ断面図である。北西方向へ延びる西壁では、最下段を大型礫とした3段積みの石列、そして石列を押さえるかのような杭列も併せもつ。東へ延びる南壁でも、2段積みの石列であったことが窺える。これらトレンチ内での土層断面からは、石積みがAs-Kkを含む暗褐色土を耕土とする中にあり、石積みの下位にAs-Kk(一次堆積層)があることが読み取れる。さらに、第43図に示した北東隅付近で直角に屈折して北側へと延びる辺りでは、屈折する手前の南壁と北壁の両側ともに石積みが設けられ、屈折後の北進する西壁が石積みとなっている。石積みのあり方は、最下段に大型礫が用いられる傾向にある。遺物の出土はない。

**規模：**長さ90.78m 上面幅1.00 ~ 1.60m

**深さ 不明**

**延伸方向：**北N-80°-E、南N-46°-W

**所見・時期：**27A号溝より古く、As-Kkを含む暗褐色土を耕土とする中に検出された石積みであり、As-Kkの一次堆積層の上位に位置することから、溝は中世から近世初頭にかけての時期と考えられる。

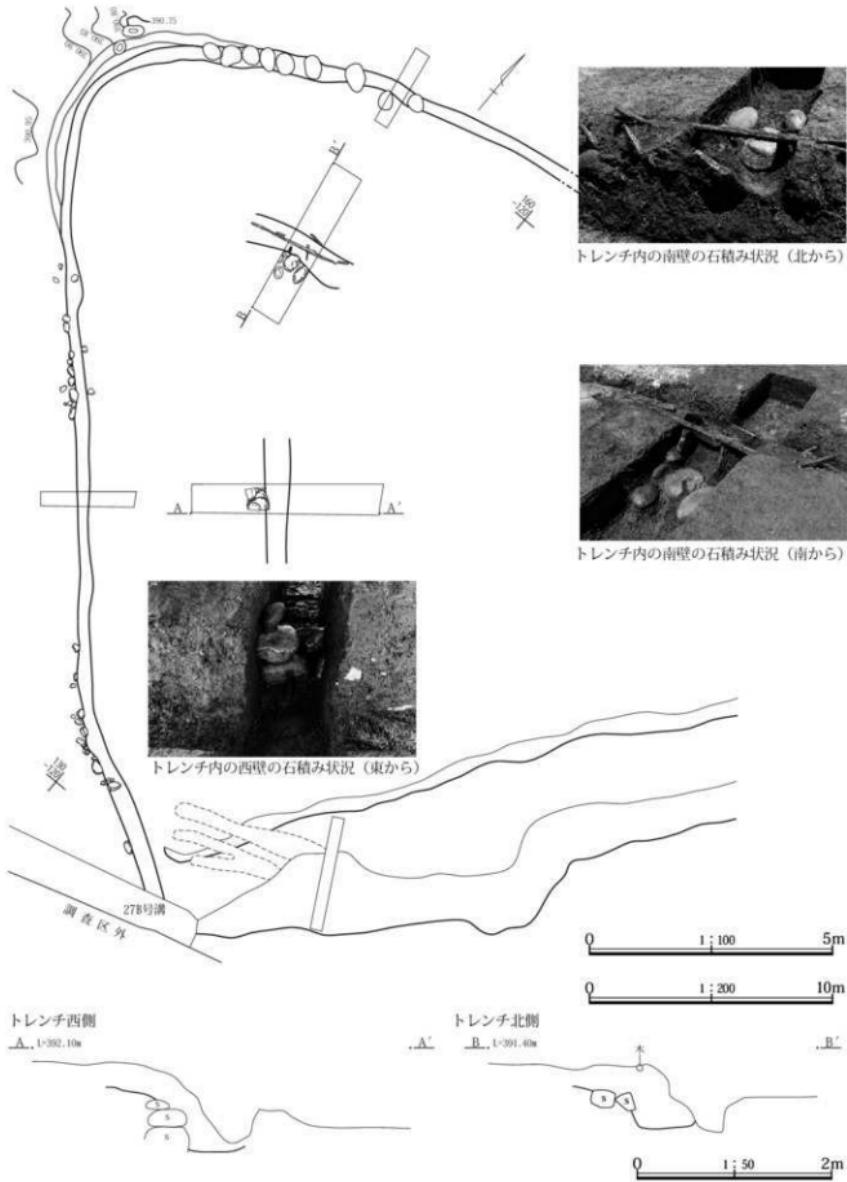
**31号溝 (第43図)**

第2面調査時に検出した溝であるが、第2面のAs-B下水田より新しく、併せて埋没土の土層観察から、第1-2面の遺構と判断した。

**位置：**6区の北西に位置し、調査区西壁中央のやや北寄りの壁際から北東方向へ緩く蛇行するように延びる溝で、その東端は27A号溝が東方向へと屈曲する付近に

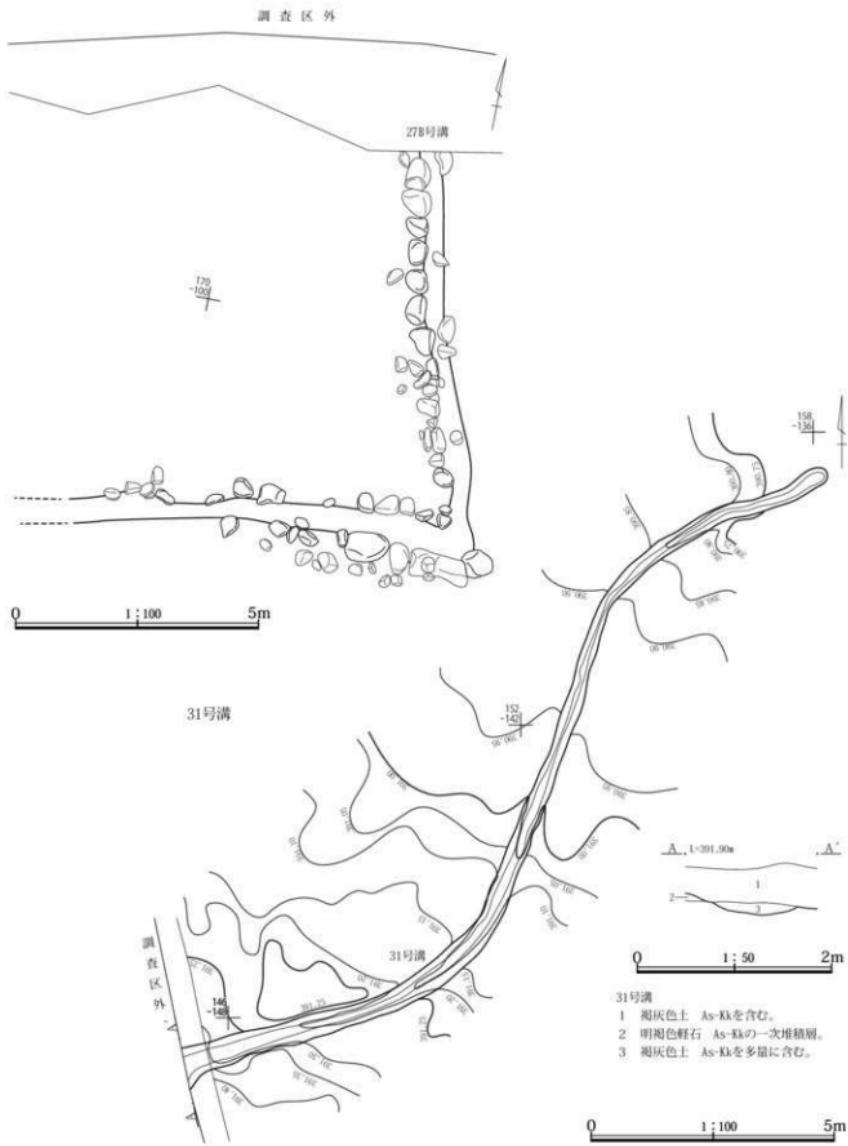


第41図 6区第1-2面 全体図



第42図 27B号溝西・北側石積み 平面図、トレンチ断面図

27B号溝東側石積み



第43図 27B号溝東側石積み 平面図、31号溝 平・断面図

まで達する。

座標標：X=61,144～61,157 Y=-92,135～-92,148

**検出状況：**第2面調査時に検出された。調査区の西壁際から北東方向へ緩く蛇行し、その東端は27A号溝が東方向へ屈曲する付近に達する。西壁での土層断面からは、天明泥流下の基本層序Ⅱ・Ⅲ層と同様のAs-Kkを含む褐灰色土を埋没土とし、基本層序IV層(As-Kkの第一次堆積層)を掘込んでおり、その底面は第2面のAs-B下水田面にまで達している。遺物の出土はない。

**規模：**長さ19.39m 上面幅0.25～0.56m

深さ3～15cm

**延伸方向：**N-20°～66°-E

**埋没土：**As-Kkを含む褐灰色土を埋没土とする。

**所見・時期：**埋没土および西壁の土層観察、第2面のAs-B下水田の掘込まれた本溝底面の状況から、溝は中世から近世初頭にかけての時期と考えられる。

### 12号烟 (第44図、PL.22)

第2面調査時に検出した烟であるが、歎間の埋没土の土層観察から、第1-2面の遺構と判断した。

**位置：**6区の南東隅に位置し、第1-1面での7号溝底面の内側に検出された。

座標標：X=61,137～61,143 Y=-92,076～-92,082

**検出状況：**第2面調査時に検出した烟であるが、歎間の埋没土がAs-Kkを含む黒褐色であることから、第1-2面の遺構として扱った。歎間方向は概ね南北方向を向き、歎間の間隔も35～40cmを測り、17条を検出した。遺物等の出土はない。

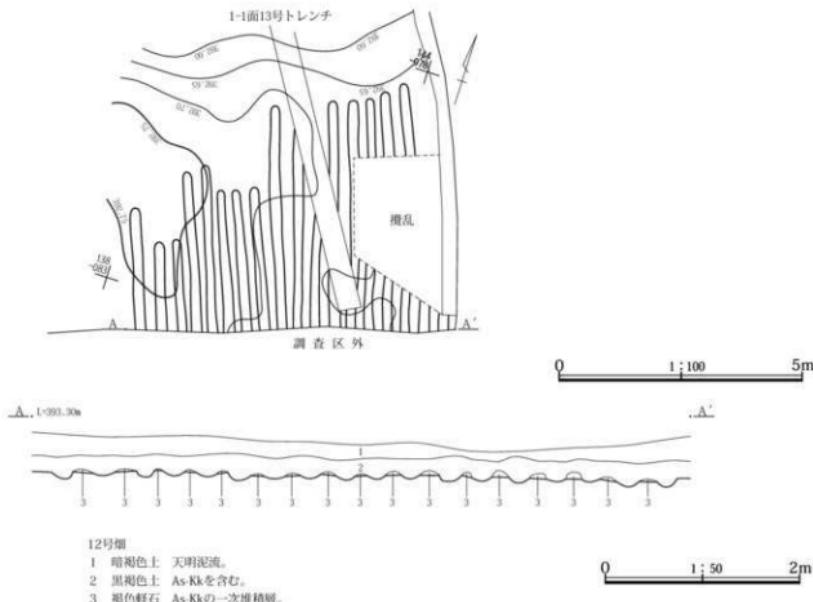
**区画規模：**長さ(6.45)m 幅(5.12)m

歎長(5.12)m 歎間間隔35～40cm前後

柱数17条

**歎間方向：**N-17°-W

**所見・時期：**検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、時期は中世以降と考えられる。



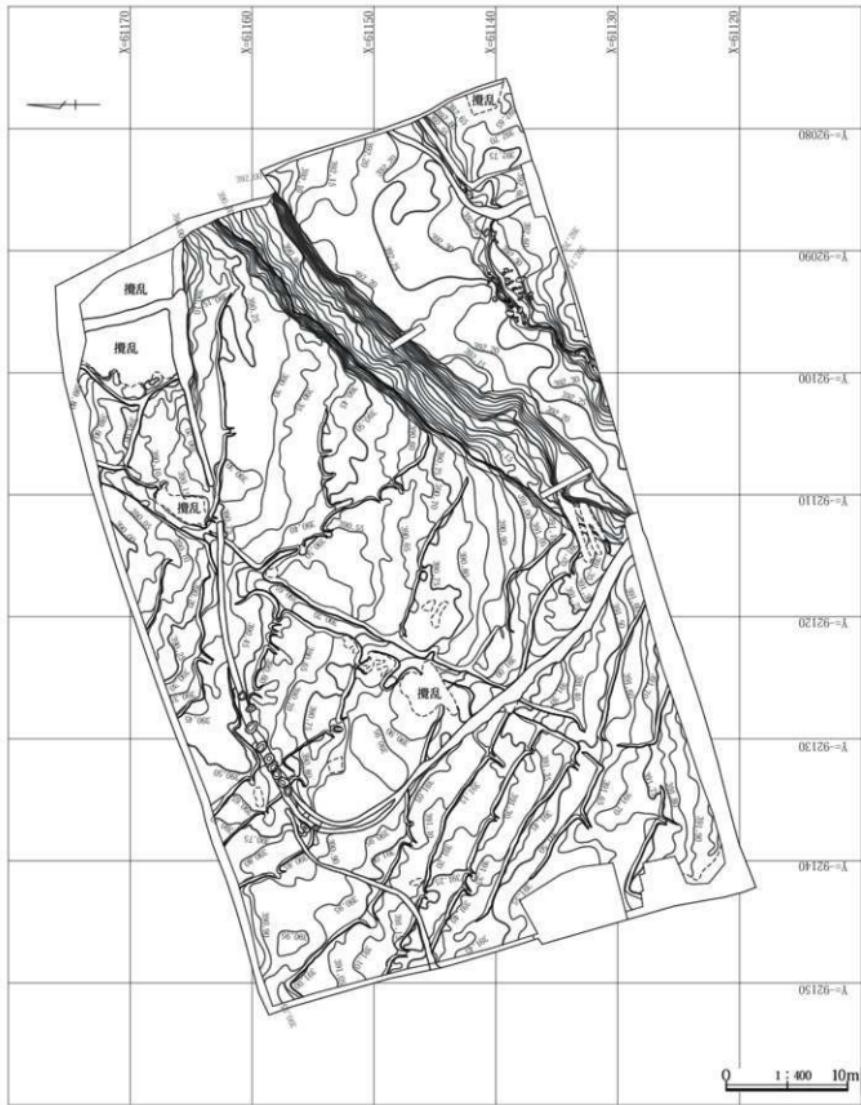
第44図 12号烟 平・断面図

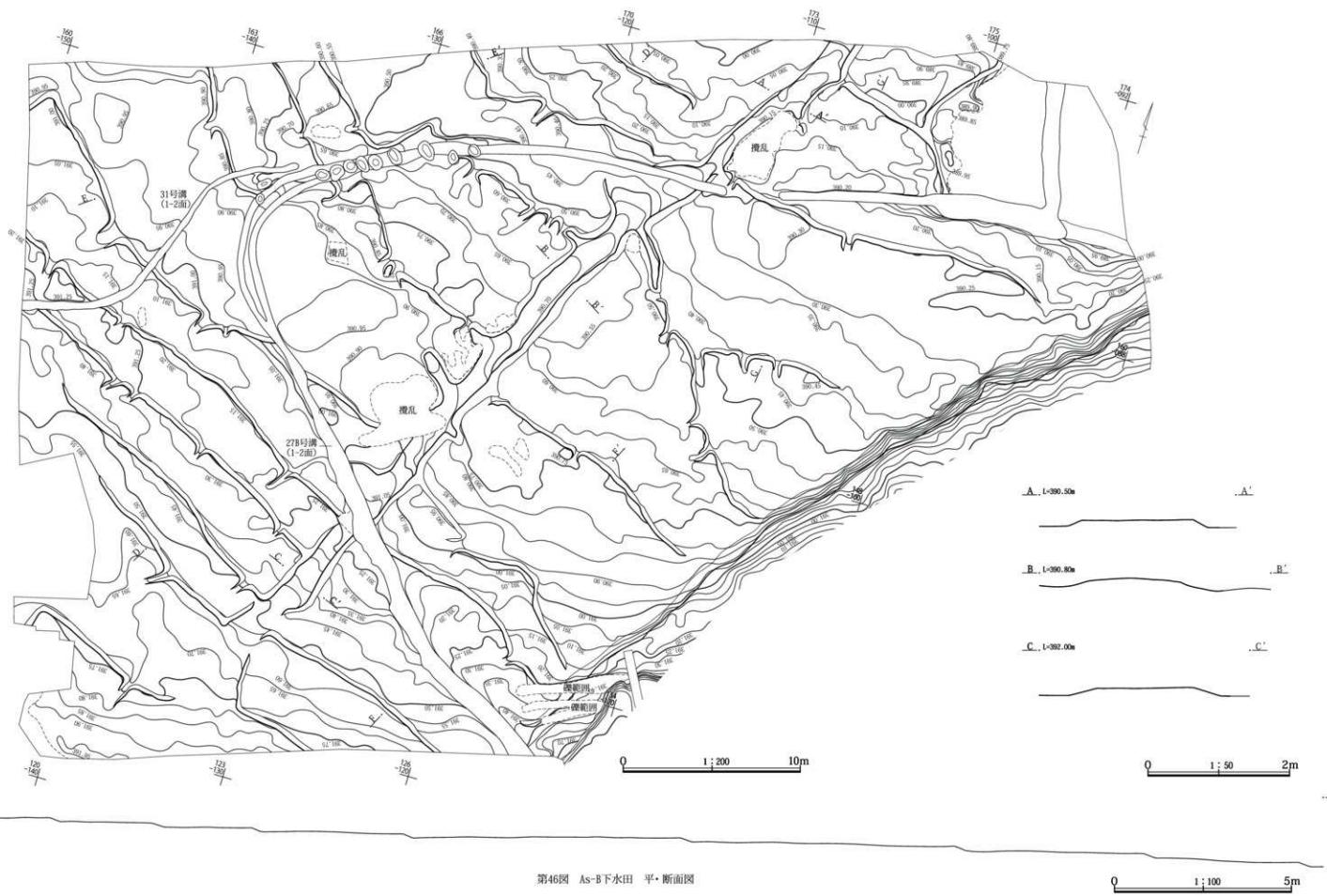
## 第2項 第2面調査

本調査区における本来の第2面に相当する遺構は、As-B直下の水田である。第45図に示すように、調査区

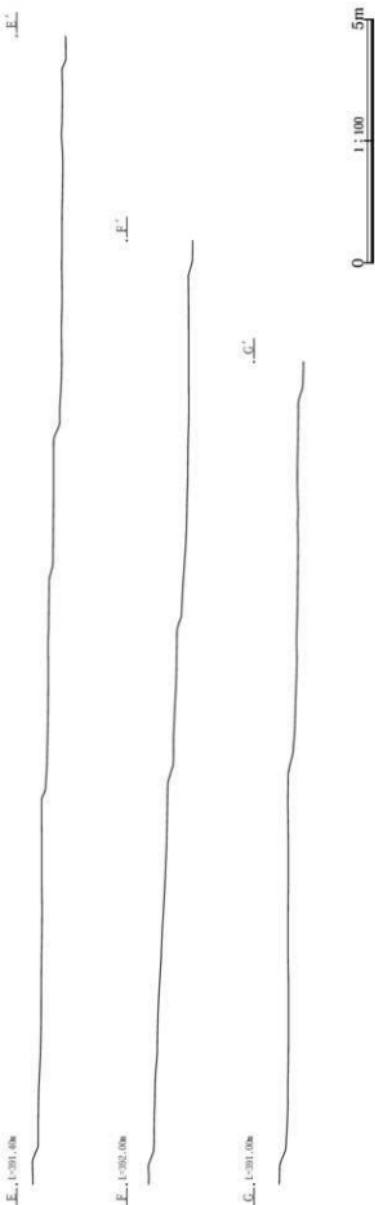
の南東部を除く広く広い面に検出した。水田の検出されない南東部は、急斜面を伴う段差と平坦面が連続する。また、北東隅の一部についても水田の検出はできなかった。

以下、検出できたAs-B下水田について記述する。





第46図 As-B下水田 平・断面図



第47図 As-B下水田 断面図

## As-B下水田 (第46・47図 PL.23・24)

第2面調査で検出した、As-B直下の水田である。調査区の南東部は段差と斜面を伴う2段の平坦面が形成され、その南東部を除く広い範囲に水田域が及ぶ。北東方向への緩い斜面地でありながら、各田面は棚田状に段差をもって連続する。

位置：調査区の南東部を除く広い範囲に及ぶ。

座標値：X=61,121～61,174 Y=92,087～92,151

検出状況：検出された水田は、6区北壁における基本層序IV層下面にあたるAs-B直下の水田である。その水田域は、平坦面と段差および斜面が連なる調査区南東部を除く広い範囲に及び、南西から北東方向への緩い斜面地を大きく区画する大畦が南西側から傾斜方向に直線的に伸び、その両側に各田面が棚田状に段差をもって連続する。以下、大畦を境として、大畦の状況、大畦の北西側と南東側に分けた各面の状況を記す。

**大畦の状況** 大畦は幅1.5～2.0mと幅広で、断面が緩い壠鉢状を呈し、調査区南西隅付近から北東方向へ直線的に伸び、途中に両側からの水田面の段差が接続する。

**大畦の北西側の状況** 大畦の北西側となる水田域は、各田面を区画するように段差が確認された。各段差は8cm前後の落差で、大畦から北西方向に等高線に平行するように長く伸び、途中で途切れながらも続く状況もある。こうした段差で区画された平坦面は、棚田状に計12段を数える。本来、段差上面の縁に畦が存在したものと考えられ、段差が途切れる部分は水口であったことが想定される。

**大畦の南東側の状況** 大畦の南東側となる水田域は、調査区南東側からの斜面までの間にあり、各田面を区画するように段差が確認された。段差の状況は、北西側と同様に計10段を数えるが、北東隅付近では等高線に平行しない区画畦が見られる。

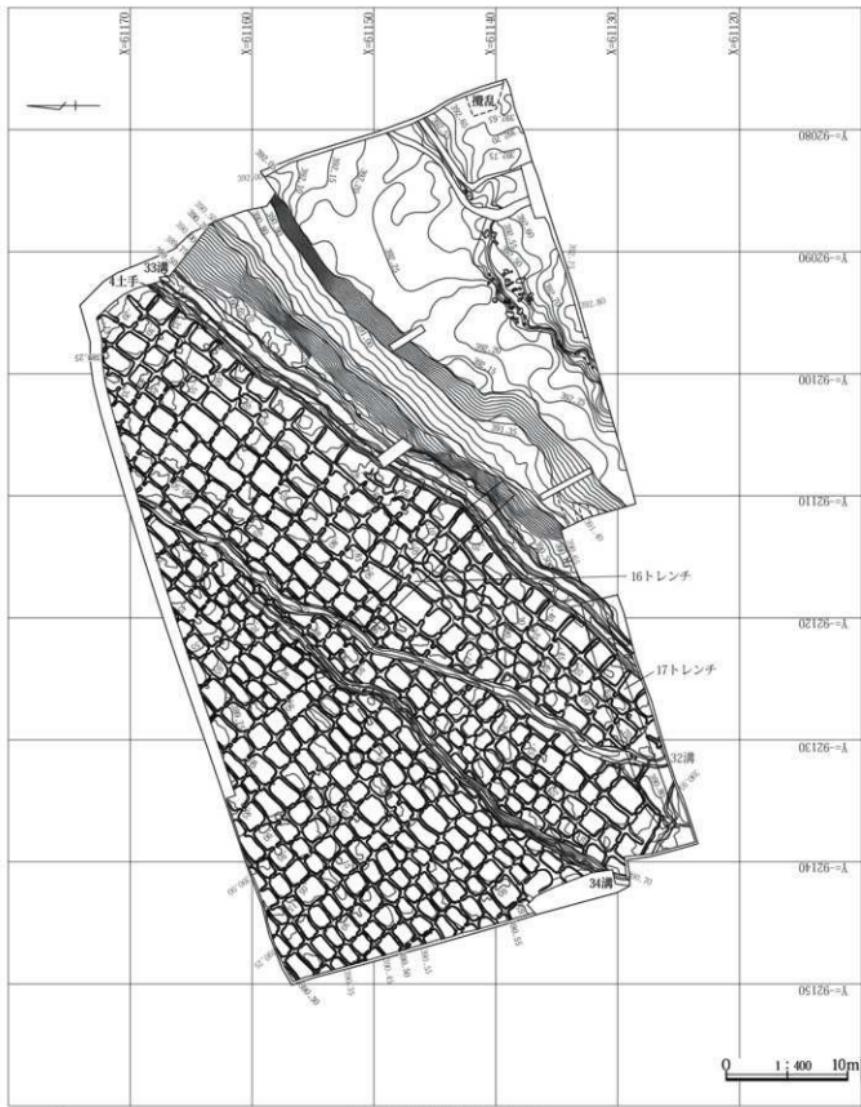
**所見・時期：**本調査区における第2面の水田は、As-B直下にあることから、As-B降下直前の古代水田として位置付けられる。また、5区第2面の水田と同時期の水田である。

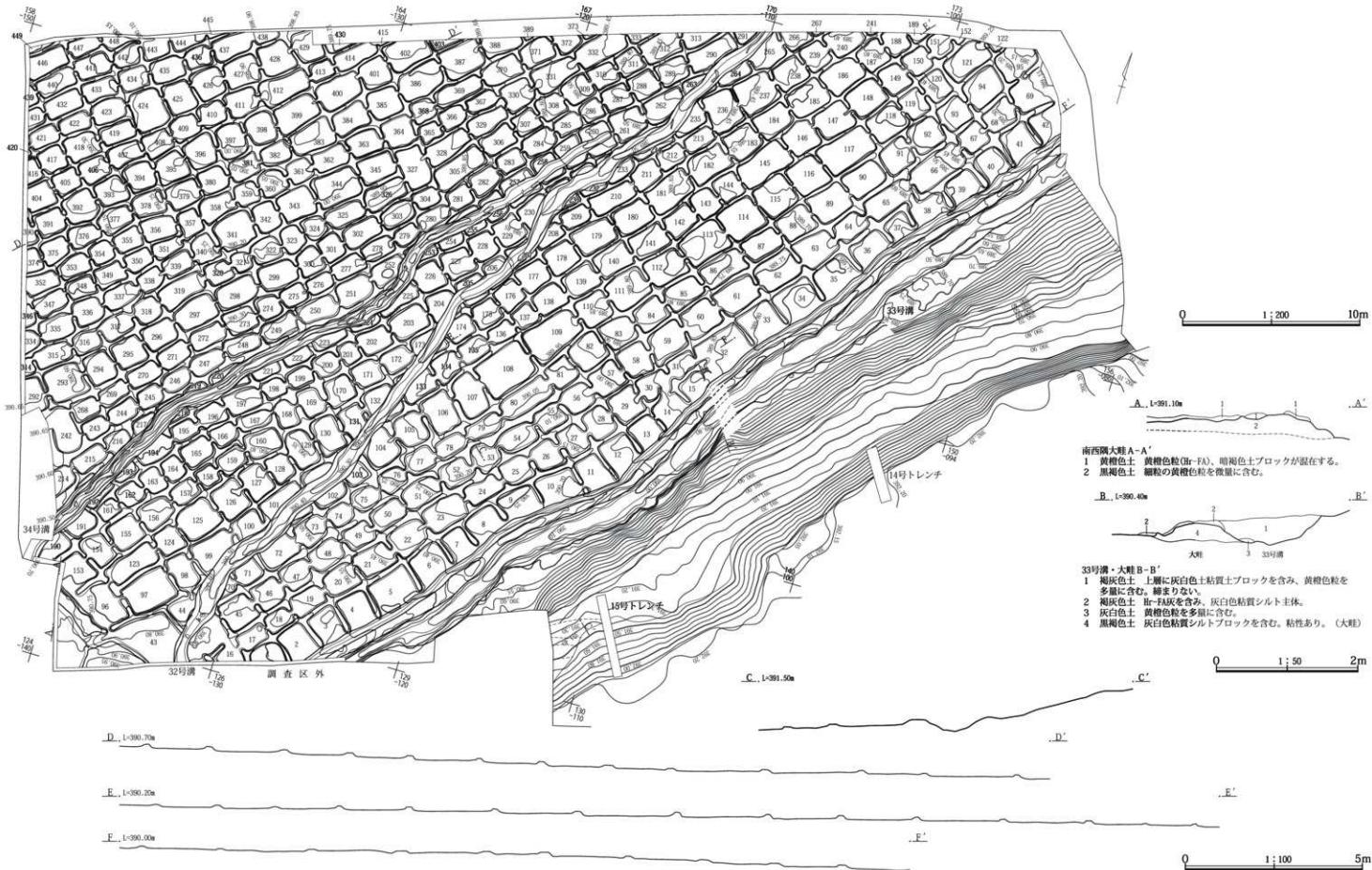
## 第3項 第3面調査

本調査区における第3面の遺構は、Hr-FA下面に検出された水田を主としている。第48図に示すように、調査

区の南東部を除く広い低地部にHr-FA下水田が検出され、他に水田に伴う大畦と水路も検出された。また、Hr-FA下水田より新しい溝も2条検出されている。

以下、検出できた遺構について記述する。





第49図 32～34号溝、Hr-FA下水田 平・断面図

## 32号溝（第49図、PL.26）

第3面調査で検出したが、Hr-FA下面を掘り込む溝である。

**位置：**6区南西隅のやや東寄りの壁際から北東方向へ延びた溝で、本溝の北側に同様の34号溝がある。また、本溝は、Hr-FA下の水田面を掘り込む。

**座標値：**X=61,125～61,169 Y=-92,109～92,132

**検出状況：**34号溝共に、第3面調査時に検出された。北

東方向へ延びる本溝は、僅かに蛇行しながらその北東端は調査区北壁まで達する。溝の断面形は、U字状を呈し、溝幅も1.0m前後を測るが一定しない。底面の勾配は、南西側が高く北東側ほど低くなる。遺物の出土はない。

**規模：**長さ49.59m 上面幅0.55～1.37m

深さ17～56cm

**延伸方向：**N-25～35°-E

**埋没土：**灰白色土粘質土ブロックを含む褐灰色土を埋没土とするが、下位ほど灰白色土粘質土ブロックを多量に含む。

**所見・時期：**検出面とHr-FA下水田面を掘り込むことから、34号溝と同様にHr-FA降下後の溝と考えられ、自然流路の可能性もある。

## 33号溝（第49図、PL.25）

第3面調査の主たる遺構であるHr-FA下水田に伴う溝であり、水路と考えられる。

**位置：**6区南東側からの北西斜面下際に位置し、Hr-FA下水田を大区画する大畦と斜面下際に挟まれるようにある。

**座標値：**X=61,128～61,167 Y=-92,091～92,123

**検出状況：**Hr-FA下水田面と共に、第3面調査時に検出された。南東側からの北西斜面下に、水田を大区画する大畦と挟まるように沿う溝であり、水田に伴う水路として位置付けることができる。調査区の南西隅の東寄りの壁際から北東隅のやや南寄りの壁際まで、概ね直線的に延び、その断面形は緩いU字状を呈し、溝底面は水田面より低い位置にある。また、底面の勾配は、南西側が高く北東側ほど低くなる。遺物の出土はない。

**規模：**長さ49.32m 上面幅0.80～1.88m

深さ13～37cm

**延伸方向：**N-37～42°-E

**埋没土：**黄橙色粒を多量に含む褐灰色土を主とする。

**所見・時期：**後述のHr-FA下水田に付随する溝(水路)であり、水田埋没土と同様であることから、その時期は古墳時代の6世紀前半頃と考えられる。

## 34号溝（第49図、PL.26）

第3面調査で検出したが、Hr-FA下面を掘り込む溝である。

**位置：**6区南西隅のやや北寄りの壁際から北東方向へ延びた溝で、本溝の南側に同様の32号溝がある。また、本溝は、Hr-FA下の水田面を掘り込む。

**座標値：**X=61,129～61,161 Y=-92,116～92,141

**検出状況：**32号溝と共に、第3面調査時に検出された。緩く蛇行するように北東方向へ延びる本溝は、その北東端が32号溝となり近接する。溝の断面形は、浅いU字状を呈するが、南西側ほど深く底面も細くなる。底面の勾配は、南西側が高く北東側ほど低くなる。遺物の出土はない。

**規模：**長さ41.62m 上面幅0.42～1.05m

深さ0.19～0.56cm

**延伸方向：**N-28～49°-E

**埋没土：**上位は砂粒を主体に鈍い黄橙色粘質土ブロックを含む灰白色土、下位は砂粒主体の褐灰色土を埋没土とする。

**所見・時期：**検出面とHr-FA下水田面を掘り込むことから、32号溝と同様にHr-FA降下後の溝と考えられ、自然流路の可能性もある。

## 水III（第49図、第11表、PL.25～26）

先述の5区第3面調査で検出されたHr-FA下水田に続く検出例で、基本層序第XI層となるHr-FAの灰が主体となる浅橙色土に覆われた状態で検出された。水田は、大畦による大区画、そして大区画内を小区画に区画する小畦からなり、南東側の大畦と北西斜面との間には33号溝とした水路が伴う。

**位置：**調査区の南東側を除く、第3面調査範囲全体に検出した。なお、本調査区の西隣となる5区第3面調査においても、同様なHr-FA下水田が検出されている。

座標値：X=61,125～61,172 Y=92,092～92,149

**検出状況：**検出された水田は、6区北壁基本層序XI層下面を確認面として検出された水田で、Hr-FAの灰が主体となる浅橙色土に覆われた状態で検出され、5区での検出状況と全く同様であった。水田の状態は極めて良好で、太い大畦と細い小畦、そして水路からなり、大畦によって大区画が、さらに大区画内を小畦により細かく区画された小区画水田で構成される。水路は、南東側の水田域の縁を大畦と北西斜面との間にあり、北東方向へ流下する。大区画を画する大畦は、二方向を検出した。まず、水路脇を調査区南西隅寄りの堀際から北東方向へ、幅0.8～1.0m前後の断面蒲鉾状の太い大畦が水路に沿うように51mほど検出された。この大畦が、水田域の南東側縁を画する。もう一方の大畦は、調査区南西隅に僅かに確認された。調査時に21号畦と呼称した畦であり、北西方向に延びる大畦で、本調査区第3面の小区画水田域の南西側を画し、水口を有する。これらの大畦の断面観察からは、Hr-FA下水田耕土(基本層序XI層)より暗い粘性の強い黒褐色土で構築されている。

本調査区におけるHr-FA下水田の大区画は、先の二方向の大畦で区画された一区画のみである。南西側を画する大畦には取水用の水口が設けられ、大区画内は小畦によって多くの小区画に分割される。小区画を形成する小畦は、水田面の傾斜の等高線に直行するように南西から北東方向へ直線的に延びる小畦を軸に、それに直行する南東から北西方向の小区画によって各小区画が画されている。そして各小区画には、取水用と排水用の水口が設けられ、水田面の傾斜である南西から北東方向へ水を流下させることが意識されている。これら小区画は449区画を数え、その規模(面積)は0.9(小区画No161)～6.0(小区画No108) m<sup>2</sup>で、2.0m前後の区画が最も多い。なお、各田面には、緩い凹凸が見られる。

**所見・時期：**本水田は、基本層序XI層に覆われた水田であることからHr-FA下水田とし、その時期を古墳時代の6世紀前半頃と考えている。なお、西隣の5区第3面のHr-FA下水田と同時期にあり、周辺一帯に広く営まれていた可能性が強い。

本調査区第3面における大区画内の小区画水田の計

測定を表11に示す。

#### 4号土手

調査時に4号土手と呼称した遺構は、Hr-FA下水田の大区画を構成する調査区の南西隅東寄り堀際から北東方向へ延びる大畦であることから、ここでの記述は省略する。

第11表 6区第3面 小区画水田計測表

大区画	小区画	規模(m, m)	水口位置	取水口	排水口	他
1	1 (1.7)	(1.1) (1.5)				
1	2 1.5 1.9 (2.8)		東畦南隅→3			
1	3 1.4 1.8 2.5	2→西畦南隅	東畦南隅→4			
1	4 1.5 1.8 2.9	3→西畦南隅	東畦南隅→5			
1	5 2.3 1.8 4.2	4→西畦南隅	東畦南隅→6			
1	6 1.9 1.7 3.3	5→西畦南隅	東畦南隅→7			
1	7 1.2 1.7 2.1	6→西畦南隅	東畦南隅→8			
1	8 1.8 1.4 2.6	7→西畦南隅	東畦南隅→9			
1	9 1.9 1.5 2.8	8→西畦南隅	東畦南隅→10			
1	10 2.0 1.5 3.3	9→西畦南隅	東畦南隅→11			
1	11 1.4 1.8 2.6	10→西畦南隅	東畦南隅→12			
1	12 1.7 1.8 3.0	11→西畦南隅	東畦南隅→13			
1	13 1.4 1.5 2.2	12→西畦南隅	東畦北隅→14			
1	14 1.6 1.3 2.2	13→西畦北隅	東畦南隅→15	北畦東隅		
1	15 1.4 1.1 1.6	14→西畦南隅	東畦中央→32			
1	16 (1.2) (1.0) (1.0)		東畦中央→17	北畦東隅		
1	17 1.5 0.8 1.3	16→西畦中央	東畦中央→18			
1	18 1.4 0.9 1.3	17→西畦中央	東畦中央→19			
1	19 1.9 1.0 1.9	18→西畦中央	東畦中央→20			
1	20 1.8 1.3 2.3	19→西畦中央	東畦北隅→21			
1	21 1.9 1.3 2.6	20→西畦北隅	東畦中央→22			
1	22 2.0 1.4 2.6	21→西畦中央	東畦中央→23			
1	23 2.3 1.3 3.1	22→西畦中央	東畦中央→24			
1	24 1.9 0.9 1.9	23→西畦中央	東畦南隅→25			
1	25 1.6 1.3 2.0	24→西畦南隅	東畦北隅→26			
1	26 1.3 1.4 1.8	25→西畦北隅	東畦中央→27			
1	27 1.2 1.5 1.8	26→西畦中央	東畦中央→28			
1	28 1.3 1.6 2.1	27→西畦中央	東畦中央→29			
1	29 1.5 1.5 2.4	28→西畦中央	東畦中央→30			
1	30 1.6 1.2 1.7	29→西畦中央	東畦中央→31	南畦東隅		
1	31 1.5 0.9 1.4	30→西畦中央	東畦南隅→32			
1	32 2.7 2.0 5.2	15→西畦南隅 31→西畦北隅	東畦南隅→33			
1	33 1.9 1.9 3.7	32→西畦南隅	東畦南隅→34			
1	34 2.2 1.9 4.3	33→西畦南隅	東畦南隅→35			
1	35 2.1 1.6 3.5	34→西畦南隅	東畦南隅→36			
1	36 2.0 1.2 2.5	35→西畦南隅	東畦南隅→37			
1	37 1.2 1.2 1.5	36→西畦南隅	東畦南隅→38			
1	38 1.9 1.1 2.2	37→西畦南隅	東畦南隅→39	北畦西隅		
1	39 1.7 1.4 2.4	38→西畦南隅	東畦南隅→40			
1	40 1.5 1.5 2.5	39→西畦南隅	東畦南隅→41			
1	41 1.5 1.6 2.6	40→西畦南隅	東畦南隅→42			
1	42 (1.7) 1.5 (2.5)	41→西畦南隅		北畦東隅		
1	43 2.5 (3.0) 8.0	0→西畦北隅	東畦南隅→44			
1	44 1.8 3.3 5.5	43→西畦南隅	東畦中央→45	南畦東隅		
1	45 1.7 1.6 2.7	44→西畦北隅	東畦中央→46			
1	46 1.5 1.4 2.1	45→西畦中央	東畦中央→47			
1	47 1.6 1.3 1.9	46→西畦中央	東畦中央→48			
1	48 1.7 1.1 2.0	47→西畦中央	東畦中央→49			
1	49 1.5 1.1 1.7	48→西畦中央	東畦中央→50			
1	50 1.8 1.1 2.0	49→西畦南隅	東畦南隅→51			
1	51 2.0 1.1 2.2	50→西畦南隅	東畦中央→52			
1	52 1.5 1.2 1.9	51→西畦中央	東畦南隅→53			
1	53 1.3 1.3 1.5	52→西畦中央	東畦中央→54			
1	54 1.9 1.1 2.0	53→西畦北隅	東畦北隅→55			
1	55 1.3 1.1 1.6	54→西畦北隅	東畦北隅→56			
1	56 1.5 1.4 2.0	55→西畦北隅	東畦中央→57			
1	57 1.6 1.4 2.4	56→西畦中央	東畦中央→58			

大区画	小区画	規模(m, m)	水口位置	取水口	排水口	他
1	58	1.5 1.6 2.5	57→西畦中央	東畦中央→59		
1	59	2.0 1.6 3.2	58→西畦中央	東畦中央→60		
1	60	1.9 1.6 3.1	59→西畦中央	東畦中央→61		
1	61	2.2 1.5 3.3	60→西畦中央	東畦中央→62		
1	62	2.3 1.6 3.6	61→西畦中央	東畦南隅→63		
1	63	2.0 1.5 3.0	62→西畦南隅	東畦南隅→64		
1	64	1.6 1.1 1.9	63→西畦中央	東畦中央→65		
1	65	2.6 1.1 3.1	64→西畦中央	東畦北隅→66	南畦東隅	
1	66	3.1 1.3 4.1	65→西畦中央	東畦中央→67		
1	67	1.4 1.2 1.8	66→西畦中央	東畦中央→68		
1	68	1.7 1.2 2.1	67→西畦中央	東畦中央→69		
1	69 (2.4)	1.8 (4.2)	68→西畦中央		南畦東隅	北畦中央
1	70 (1.0)	(0.8) (0.4)		東畦中央→71		
1	71 (1.3)	(1.0) (1.4)	70→西畦中央			
1	72	1.9 (1.2) (2.4)		東畦中央→73		
1	73	1.6 1.2 1.9	72→西畦中央	東畦中央→74		
1	74	1.2 1.0 1.2	73→西畦北隅	東畦中央→75		
1	75	1.4 1.0 1.3	74→西畦中央	東畦中央→76		
1	76	1.4 1.0 1.4	75→西畦中央	東畦中央→77		
1	77	1.5 1.1 1.6	76→西畦中央	東畦中央→78		
1	78	1.6 0.8 1.3	77→西畦中央	東畦中央→79		
1	79	1.9 0.8 1.4	78→西畦中央	東畦中央→80		
1	80	2.8 1.1 3.2	79→西畦中央	東畦中央→81		
1	81	1.4 1.3 1.8	80→西畦中央			
1	82	1.8 1.7 2.8		東畦中央→83		
1	83	1.7 1.5 2.5	82→西畦中央	東畦中央→84		
1	84	1.7 1.4 2.3	83→西畦中央	東畦中央→85		
1	85	2.0 1.2 2.5	84→西畦中央	東畦南隅→86		
1	86	2.4 1.2 3.1	85→西畦南隅	東畦中央→87		
1	87	2.0 1.2 2.4	86→西畦中央	東畦中央→88		
1	88	1.9 1.4 2.7	87→西畦中央	東畦中央→89		
1	89	2.0 1.6 3.4	88→西畦中央	東畦中央→90		
1	90	2.1 1.4 2.9	89→西畦中央			
1	91	1.6 1.5 2.5		東畦中央→92		
1	92	1.7 1.5 2.6	91→西畦中央	東畦中央→93		
1	93	1.5 1.4 2.3	92→西畦中央	東畦中央→94		
1	94	2.0 1.6 3.3	93→西畦中央			
1	95 (2.1)	(1.6) (3.0)				
1	96	1.8 2.3 4.0	153→北畦西隅	東畦中央→97	南畦中央	
1	97	2.5 1.8 4.4	96→西畦北隅	東畦北隅→98		
1	98	1.1 1.9 2.1	97→西畦北隅	東畦北隅→99	南畦中央	
1	99	2.2 (1.6) (3.0)	98→西畦北隅	東畦北隅→100		
1	100	1.5 (1.1) (1.7)	99→西畦北隅	東畦北隅→101		
1	101	2.4 1.9 (4.2)	100→西畦中央			
1	102	1.8 2.1 3.7				
1	103	1.1 (0.9) (0.8)				
1	104	1.7 (1.8) (2.7)		東畦中央→105		
1	105	1.4 1.7 2.4	104→西畦中央	東畦北隅→106		
1	106	1.5 2.0 3.0	105→西畦北隅	東畦中央→107		
1	107	1.4 2.2 3.0	106→西畦中央	東畦中央→108		
1	108	2.8 2.1 6.0	107→西畦中央	東畦中央→109		
1	109	3.0 1.7 5.2	108→西畦中央	東畦中央→110		
1	110	1.7 1.5 2.6	109→西畦中央	東畦中央→111		
1	111	2.1 1.7 3.6	110→西畦中央	東畦南隅→112		
1	112	2.0 1.5 3.1	111→西畦南隅	東畦中央→113		
1	113	2.4 1.7 4.2	112→西畦中央	東畦中央→114		
1	114	2.0 1.9 3.9	113→西畦中央	東畦中央→115		

## 第4章 検出された遺構と遺物

大区画	小区画	規模(m, m)	水口位置	大区画	小区画	規模(m, m)	水口位置
		長さ 幅	面積 取水口 排水口			長さ 幅	面積 取水口 排水口
1	115	1.9 1.9	3.7 114→西暦中央 東暦中央→116	1	175	1.4 1.2	1.7 174→西暦中央 東暦中央→176
1	116	1.7 1.8	3.3 115→西暦中央 東暦中央→117	1	176	1.4 1.3	1.8 175→西暦中央 東暦中央→177
1	117	2.9 1.6	4.8 116→西暦中央 東暦中央→118	1	177	1.6 1.3	2.1 176→西暦中央 東暦中央→178
1	118	1.9 1.5	3.0 117→西暦中央 東暦中央→119	1	178	1.6 1.4	2.3 177→西暦中央 東暦中央→179
1	119	1.2 1.3	1.7 118→西暦中央 東暦中央→120	1	179	2.2 1.5	3.2 178→西暦中央 東暦中央→180
1	120	1.2 1.5	1.9 119→西暦中央	1	180	2.0 1.5	2.9 179→西暦中央 東暦中央→181
1	121	2.5 1.3	3.2 東暦南隅→122	1	181	2.5 1.4	3.6 180→西暦中央 東暦中央→182
1	122 (0.4) (0.6)	(0.2) 121→西暦北隅		1	182	2.1 1.4	3.1 181→西暦中央 東暦中央→183
1	123	2.9 1.0	3.1 96→西暦中央 東暦中央→124	1	183	1.7 1.5	2.7 182→西暦中央 東暦中央→184
1	124	1.3 1.3	1.7 123→西暦中央 東暦北隅→125	1	184	1.9 1.3	2.6 183→西暦中央 東暦中央→185
1	125	2.0 1.7	3.4 124→西暦北隅 東暦中央→126	1	185	2.0 1.5	3.2 184→西暦中央 東暦中央→186
1	126	1.6 1.7	2.7 125→西暦中央 東暦中央→127	1	186	2.0 1.4	3.0 185→西暦中央 東暦中央→187
1	127	1.3 1.7	2.3 126→西暦中央 東暦中央→128	1	187	1.3 1.4	2.0 186→西暦中央 東暦中央→188
1	128	1.0 1.3	1.5 127→西暦北隅 東暦北隅→129	1	188	1.1 (1.4) (1.5)	187→西暦中央 東暦中央→189
1	129	1.2 2.0	2.5 128→西暦中央 東暦中央→130	1	189	(0.9) (0.6) (0.4)	188→西暦中央
1	130	1.2 1.9	2.5 129→西暦中央 東暦中央→131	1	190	(1.8) (1.0) (1.6)	
1	131 1.1 (1.6)	(1.7) 130→西暦中央 東暦中央→132		1	191	(1.5) (0.9) (1.4)	
1	132	1.7 1.7	3.0 131→西暦中央	1	192	1.8 1.4	2.3
1	133	1.9 1.5	2.9 東暦中央→134	1	193	1.3 (0.6) (0.6)	
1	134	1.4 1.2	1.8 133→西暦中央 東暦中央→135	1	194	1.9 (1.0) (1.8)	東暦中央→195
1	135	1.5 1.1	1.6 134→西暦中央 東暦中央→136	1	195	1.3 0.9 1.2	194→西暦中央 東暦中央→196
1	136	1.3 1.8	1.2 135→西暦中央 東暦中央→137	1	196	1.4 1.0 1.5	195→西暦中央 東暦中央→197
1	137	1.2 1.1	1.3 136→西暦中央 東暦南隅→138	1	197	1.9 1.1 2.2	196→西暦中央 東暦北隅→198
1	138	1.7 1.3	2.2 137→西暦南隅 東暦南隅→139	1	198	1.2 0.9 1.1	197→西暦北隅 東暦中央→199
1	139	1.8 1.4	2.6 138→西暦南隅 東暦南隅→140	1	199	1.4 0.9 1.2	198→西暦中央 東暦中央→200
1	140	1.9 1.3	2.6 139→西暦南隅 東暦南隅→141	1	200	1.3 1.1 1.4	199→西暦中央 東暦中央→201
1	141	1.9 1.3	2.7 140→西暦南隅 東暦中央→142	1	201	1.0 1.1 1.0	200→西暦中央 東暦中央→202
1	142	1.7 1.2	2.1 141→西暦中央 東暦南隅→143	1	202	1.6 1.1 1.9	201→西暦中央 東暦中央→203
1	143	1.2 1.5	1.8 142→西暦中央 東暦中央→144	1	203	2.0 1.3 2.6	202→西暦中央 東暦中央→204
1	144	1.3 1.3	1.7 143→西暦中央 東暦中央→145	1	204	1.4 1.4 2.1	203→西暦中央
1	145	2.9 1.4	4.2 144→西暦中央 東暦中央→146	1	205	1.4 1.3 1.9	
1	146	1.6 1.6	2.6 145→西暦中央 東暦北隅→147	1	206	1.3 1.3 1.7	
1	147	1.9 1.5	3.0 146→西暦北隅 東暦中央→148	1	207	1.4 1.0 1.4	
1	148	1.9 1.5	2.9 147→西暦中央 東暦中央→149	1	208	1.6 0.8 (1.0)	東暦中央→209
1	149	1.3 1.5	1.9 148→西暦中央 東暦中央→150	1	209	1.5 0.9 1.3	208→西暦中央 東暦中央→210
1	150	1.4 1.3	1.7 149→西暦中央 東暦中央→151	1	210	2.5 0.9 2.5	209→西暦中央 東暦中央→211
1	151 (1.1) 1.2	(1.4) 150→西暦中央 東暦中央→152		1	211	1.5 1.1 1.7	210→西暦中央 東暦中央→212
1	152 (0.5) (0.5)	(0.2) 151→西暦中央		1	212	1.4 0.9 1.4	211→西暦中央 東暦中央→213
1	153 (1.9) 1.6	(2.6) 東暦中央→154 南暦西隅		1	213	1.6 0.9 1.4	212→西暦中央 東暦中央→236
1	154	1.2 1.6	1.8 153→西暦中央 東暦中央→155	1	214	(1.5) 1.1 (1.3)	東暦北隅→215
1	155	1.6 1.5	2.3 154→西暦中央 東暦中央→156	1	215	1.8 0.8 1.5	214→西暦北隅 東暦南隅→216
1	156	1.8 1.3	2.2 155→西暦中央 東暦中央→157	1	216	1.2 (0.9) (1.1)	215→西暦中央
1	157	1.4 1.0	1.4 156→西暦中央 東暦中央→158	1	217	(1.3) (0.7) (0.7)	
1	158	1.1 1.1	1.5 157→西暦中央 東暦中央→159	1	218	1.4 1.1 1.5	
1	159	1.5 1.0	1.5 158→西暦中央 東暦中央→160	1	219	(1.2) (0.4) (0.2)	
1	160	1.8 1.1	2.1 159→西暦中央	1	220	1.7 1.1 2.0	
1	161	1.1 0.9	0.9 東暦中央→162	1	221	1.5 (0.6) (0.8)	
1	162	1.2 1.2	1.4 161→西暦中央 東暦中央→163	1	222	1.5 (0.6) (0.9)	
1	163	1.0 1.3	1.3 162→西暦中央 東暦中央→164	1	223	1.9 (0.7) (1.1)	
1	164	1.1 1.2	1.2 163→西暦中央 東暦中央→165	1	224	(1.6) (0.5) (0.5)	
1	165	1.7 1.2	2.0 164→西暦中央 東暦中央→166	1	225	(2.3) (0.8) (1.1)	東暦中央→226
1	166	1.4 1.0	1.5 165→西暦中央 東暦中央→167	1	226	1.5 (2.1) 225→西暦中央 東暦中央→227	
1	167	1.8 0.8	1.3 166→西暦中央 東暦中央→168	1	227	1.5 1.4 2.1 226→西暦中央 東暦中央→228	
1	168	0.9 1.4	1.3 167→西暦北隅 東暦北隅→169	1	228	1.2 1.4 1.7 227→西暦中央 東暦中央→229	
1	169	1.1 1.4	1.5 168→西暦北隅 東暦南隅→170	1	229	1.5 1.4 2.0 228→西暦中央 東暦中央→230	
1	170	1.3 1.3	1.9 169→西暦南隅 東暦中央→171	1	230	(1.7) (1.3) (1.3) 229→西暦中央	
1	171	1.4 1.2	1.7 170→西暦中央 東暦北隅→172	1	231	1.2 1.4 1.8	
1	172	1.4 1.0	1.5 171→西暦北隅 東暦南隅→173	1	232	1.4 1.5 2.2	
1	173	1.7 1.2	1.9 172→西暦中央	1	233	1.6 1.5 2.3	東暦中央→234
1	174	1.6 1.1	(1.5) 東暦中央→175	1	234	(2.4) (0.4) (0.6) 233→西暦中央	

大区画	小区画	規模(m, m)			水口位置		
		長さ	幅	面積	取水口	排水口	他
1	235 (1.9) (1.2)	(1.4)			東畠中央→236		
1	236 1.6 2.0 3.5	213→西畠南隅	東畠中央→237				
1	237 2.1 1.8 3.9	236→西畠中央	東畠中央→238				
1	238 1.6 1.4 2.4	237→西畠中央	東畠中央→239				
1	239 1.2 1.3 1.8	238→西畠中央	東畠中央→240				
1	240 1.8 1.5 (2.1)	239→西畠中央					
1	241 (0.4) (0.2) 0.0						
1	242 1.3 2.6 3.0		東畠南隅→243				
1			東畠北隅→268				
1	243 1.3 0.9 1.2	242→西畠中央	東畠中央→244				
1	244 1.6 0.9 1.4	243→西畠中央	東畠中央→245				
1	245 1.2 0.9 1.2	244→西畠中央	東畠中央→246				
1	246 1.5 0.9 1.2	245→西畠中央	東畠中央→247				
1	247 1.9 0.9 1.8	246→西畠中央	東畠中央→248				
1	248 1.9 0.8 1.5	247→西畠中央	東畠中央→249				
1	249 2.0 0.9 1.8	248→西畠中央	東畠中央→250				
1	250 2.0 1.0 2.0	249→西畠中央	東畠南隅→251				
1	251 1.9 1.2 2.3	250→西畠南隅	東畠中央→252				
1	252 1.8 1.0 (1.7)	251→西畠中央					
1	253 1.7 0.7 1.3						
1	254 1.3 (0.6) (0.8)		東畠北隅→255				
1	255 1.2 1.4 1.7	254→西畠北隅					
1	256 1.2 1.3 1.6						
1	257 1.8 1.4 2.8						
1	258 1.3 1.4 1.9						
1	259 1.3 1.5 1.9		東畠南隅→260				
1	260 1.6 1.6 2.6	259→西畠南隅	東畠中央→261				
1	261 1.7 1.4 2.4	260→西畠中央	東畠中央→262				
1	262 2.1 1.2 (2.5)	261→西畠中央					
1	263 1.7 1.1 1.8						
1	264 (1.7) (0.7) (1.2)		東畠中央→265				
1	265 1.9 (1.4) (2.3)	264→西畠中央	東畠中央→266				
1	266 1.3 (1.3) (1.2) 265→西畠中央						
1	267 (0.5) (0.3) (0.1)						
1	268 1.4 1.0 1.4	242→西畠北隅	東畠中央→269				
1	269 1.6 0.8 1.4	268→西畠中央	東畠中央→270				
1	270 1.7 0.9 1.7	269→西畠中央	東畠中央→271				
1	271 1.7 1.0 1.7	270→西畠中央	東畠中央→272				
1	272 1.9 0.9 1.8	271→西畠中央	東畠中央→273				
1	273 1.6 1.2 2.0	272→西畠中央	東畠中央→274				
1	274 1.2 1.2 1.5	273→西畠中央	東畠北隅→275				
1	275 1.3 1.0 1.3	274→西畠北隅	東畠南隅→276				
1	276 1.4 0.8 1.1	275→西畠中央	東畠北隅→277				
1	277 1.7 0.9 1.8	276→西畠中央	東畠南隅→278				
1	278 1.7 0.9 1.5	277→西畠南隅	東畠中央→279				
1	279 1.3 0.8 1.1	278→西畠中央	東畠南隅→280				
1	280 1.8 0.8 1.4	279→西畠南隅	東畠中央→281				
1	281 1.2 1.0 1.3	280→西畠南隅	東畠中央→282				
1	282 1.5 1.1 1.7	281→西畠中央	東畠中央→283				
1	283 1.3 0.9 1.2	282→西畠中央	東畠北隅→284				
1	284 1.8 1.1 1.9	283→西畠中央	東畠中央→285				
1	285 1.4 0.9 1.3	284→西畠中央	東畠中央→286				
1	286 1.1 1.0 1.1	285→西畠中央	東畠中央→287				
1	287 1.4 1.1 1.7	286→西畠中央	東畠中央→288				
1	288 1.4 1.3 1.9	287→西畠中央	東畠南隅→289				
1	289 1.6 1.2 1.9	288→西畠南隅	東畠中央→290				
1	290 2.7 0.9 2.7	289→西畠中央					
1	291 (1.1) (1.7) (0.5)						
1	292 (1.3) (1.8) (1.8)		東畠中央→293				

大区画	小区画	規模(m, m)			水口位置		
		長さ	幅	面積	取水口	排水口	他
1	293 1.9 1.8 3.5	292→西畠中央	東畠中央→294				
1	294 1.5 1.6 2.2	293→西畠中央	東畠中央→295				
1	295 1.6 1.4 2.3	294→西畠中央	東畠中央→296				
1	296 1.7 1.2 2.1	295→西畠中央	東畠北隅→297				
1	297 2.3 1.3 2.9	296→西畠北隅	東畠中央→298				
1	298 2.2 1.2 2.7	297→西畠中央	東畠中央→299				
1	299 2.0 1.3 2.5	298→西畠中央	東畠中央→300				
1	300 1.2 1.3 1.6	299→西畠中央	東畠中央→301				
1	301 1.1 1.3 1.5	300→西畠中央	東畠中央→302				
1	302 2.1 1.0 2.2	301→西畠中央	東畠中央→303				
1	303 1.8 1.1 1.8	302→西畠中央	東畠北隅→304				
1	304 1.3 0.9 1.2	303→西畠北隅	東畠中央→305				
1	305 2.9 1.1 3.2	304→西畠南隅	東畠中央→306				
1	306 1.8 1.0 2.0	305→西畠中央	東畠中央→307				
1	307 1.2 1.1 1.4	306→西畠中央	東畠中央→308				
1	308 1.4 1.2 1.7	307→西畠中央	東畠中央→309				
1	309 1.5 1.2 1.9	308→西畠中央	東畠中央→310				
1	310 1.4 1.1 1.5	309→西畠中央	東畠中央→311				
1	311 1.3 1.1 1.6	310→西畠中央	東畠中央→312				
1	312 2.1 1.3 (2.6)	311→西畠中央	東畠中央→313				
1	313 (1.9) (0.9) (1.1)	312→西畠中央					
1	314 (0.6) (0.8) (0.4)						
1	315 2.0 1.0 1.9	314→西畠北隅	東畠中央→316				
1	316 1.5 1.0 1.4	315→西畠中央	東畠北隅→317				
1	317 1.7 1.1 1.8	316→西畠北隅	東畠中央→318				
1	318 1.4 1.2 1.6	317→西畠中央	東畠中央→319				
1	319 2.5 1.0 2.7	318→西畠中央	東畠中央→320				
1	320 1.3 1.1 1.5	319→西畠中央	東畠中央→321				
1	321 0.9 1.0 0.9	320→西畠中央	東畠中央→322				
1	322 1.5 1.2 1.7	321→西畠北隅	東畠中央→323				
1	323 1.1 1.4 1.4	322→西畠中央	東畠中央→324				
1	324 1.1 1.2 1.3	323→西畠中央	東畠中央→325				
1	325 2.1 1.0 2.0	324→西畠中央	東畠南隅→326				
1	326 2.3 1.0 2.5	325→西畠南隅	東畠北隅→327				
1	327 1.4 2.1 3.0	326→西畠南隅	東畠中央→328				
1	328 2.5 1.0 2.4	327→西畠中央	東畠中央→329				
1	329 2.2 0.9 1.9	328→西畠中央	東畠中央→330				
1	330 1.6 1.4 2.3	329→西畠南隅	東畠中央→331				
1	331 2.5 1.2 3.0	330→西畠中央	東畠中央→332				
1	332 2.9 1.1 3.1	331→西畠北隅	東畠中央→333				
1	333 (1.3) (0.6) (0.4)	332→西畠中央					
1	334 (1.0) (1.1) (0.7)						
1	335 1.9 1.2 2.1	334→西畠南隅	東畠北隅→336				
1	336 1.5 1.3 1.9	335→西畠中央	東畠中央→337				
1	337 1.9 1.0 1.8	336→西畠中央	東畠中央→338				
1	338 1.4 1.0 1.3	337→西畠中央	東畠中央→339				
1	339 1.6 1.0 1.6	338→西畠中央	東畠南隅→340				
1	340 1.2 1.5 1.7	339→西畠南隅	東畠南隅→341				
1	341 2.1 1.9 3.5	340→西畠南隅	東畠中央→342				
1	342 1.3 1.6 1.8	341→西畠中央	東畠中央→343				
1	343 1.9 1.5 2.8	342→西畠中央	東畠南隅→344				
1	344 2.4 1.6 4.0	343→西畠南隅	東畠中央→345				
1	345 1.9 1.3 2.3	344→西畠中央	東畠南隅→347				
1	346 (0.7) (1.0) (0.5)						
1	347 1.9 1.0 1.8	346→西畠中央	東畠中央→348				
1	348 1.5 1.0 1.5	347→西畠中央	東畠中央→349				
1	349 1.6 1.0 1.6	348→西畠中央	東畠中央→350				
1	350 1.4 1.0 1.3	349→西畠中央	東畠中央→351				

大区画	小区画	規模(m, m)			水口位置		大区画	小区画	規模(m, m)			水口位置	
		長さ	幅	面積	取水口	排水口			長さ	幅	面積	取水口	排水口
1	351	1.7	0.7	1.2	350→西畠中央	東畠中央→357	1	409	1.5	1.2	1.7	408→西畠中央	東畠南隅→410
1	352	(1.9)	0.8	(1.6)		東畠中央→353	1	410	1.4	1.2	1.6	409→西畠南隅	東畠中央→411
1	353	1.7	1.0	1.6	352→西畠中央	東畠中央→354	1	411	1.7	1.3	2.1	410→西畠中央	東畠中央→412
1	354	1.3	1.1	1.2	353→西畠中央	東畠中央→355	1	412	2.8	1.2	3.2	411→西畠中央	東畠中央→413
1	355	1.5	1.0	1.5	354→西畠中央	東畠中央→356	1	413	1.2	0.9	1.0	412→西畠南隅	東畠中央→414
1	356	1.8	1.1	2.0	355→西畠中央	東畠中央→357	1	414	2.4	0.9	1.9	413→西畠中央	東畠中央→415
1	357	1.1	1.3	1.6	351→西畠南隅	東畠中央→358	1	415	(0.6)	(0.2)	(0.1)	414→西畠中央	
					356→西畠北隅		1	416	(1.0)	(1.2)	(0.8)		東畠南隅→417
1	358	1.9	1.1	2.0	357→西畠中央	東畠中央→359	1	417	1.4	1.3	1.7	416→西畠南隅	東畠中央→418
1	359	1.3	1.1	1.3	358→西畠中央	東畠中央→360	1	418	1.7	1.3	2.2	417→西畠中央	東畠中央→419
1	360	1.4	1.3	1.7	359→西畠中央	東畠中央→361	1	419	1.9	1.0	1.8	418→西畠中央	東畠中央→420
1	361	1.3	1.2	1.4	360→西畠中央	東畠中央→362	1	420	(0.2)	(0.3)	0.0		東畠中央→421
1	362	1.8	1.0	1.9	361→西畠中央	東畠中央→363	1	421	1.5	0.9	1.3	420→西畠中央	東畠中央→422
1	363	1.7	1.2	2.0	362→西畠中央	東畠中央→364	1	422	1.7	0.8	1.3	421→西畠中央	東畠中央→423
1	364	1.6	1.6	2.3	363→西畠中央	東畠南隅→365	1	423	1.8	1.2	1.9	422→西畠中央	東畠中央→424
					東畠北隅→368		1	424	1.8	2.2	3.7	419→西畠南隅	東畠北隅→425
1	365	1.1	0.8	1.0	364→西畠中央	東畠中央→366	1	425	1.5	1.7	2.4	424→西畠北隅	東畠北隅→426
1	366	1.4	1.1	1.4	365→西畠中央	東畠中央→367	1	426	1.6	1.6	2.4	425→西畠北隅	東畠中央→427
1	367	1.7	0.9	1.4	366→西畠中央	東畠南隅→339	1	427	1.9	1.5	2.6	426→西畠中央	東畠中央→428
1	368	1.3	1.1	1.3	364→西畠中央	東畠中央→369	1	428	1.8	1.6	2.8	427→西畠中央	東畠中央→429
1	369	2.7	0.9	2.4	368→西畠中央	東畠中央→370	1	429	1.6	1.6	(2.0)	428→西畠中央	
1	370	2.2	1.2	2.4	369→西畠中央	東畠中央→371	1	430	(1.5)	(0.6)	(0.4)		
1	371	1.8	1.2	2.1	370→西畠中央	東畠中央→372	1	431	(1.1)	0.9	(0.7)		東畠中央→432
1	372	(1.3)	(1.3)	(1.2)	371→西畠中央		1	432	2.1	1.0	2.0	431→西畠中央	東畠中央→433
1	373	(0.6)	(0.3)	(0.1)		東畠南隅→375	1	433	1.9	0.9	1.7	432→西畠中央	東畠中央→434
1	374	(0.9)	1.2	(0.9)		東畠中央→376	1	434	1.6	1.1	1.7	433→西畠中央	東畠中央→435
1	375	1.4	1.1	1.5	374→西畠南隅	東畠中央→376	1	435	1.8	1.2	2.0	434→西畠中央	東畠北隅→436
1	376	1.7	1.0	1.6	375→西畠中央	東畠中央→377	1	436	1.4	1.0	1.3	435→西畠北隅	東畠北隅→437
1	377	1.9	1.2	2.0	376→西畠中央	東畠中央→378	1	437	2.1	1.1	(2.2)	436→西畠中央	東畠中央→438
1	378	1.8	1.2	1.9	377→西畠中央	東畠中央→379	1	438	(1.4)	(0.7)	(0.7)	437→西畠中央	
1	379	1.8	1.3	2.1	378→西畠中央	東畠中央→380	1	439	(0.6)	(1.0)	(0.4)		東畠中央→440
1	380	1.5	1.3	1.8	379→西畠中央	東畠中央→381	1	440	2.2	0.9	2.0	439→西畠中央	東畠北隅→441
1	381	1.6	1.1	1.7	380→西畠中央	東畠中央→382	1	441	1.8	1.1	2.0	440→西畠北隅	東畠南隅→442
1	382	1.6	1.0	1.6	381→西畠中央	東畠中央→383	1	442	1.5	1.0	1.2	441→西畠北隅	東畠北隅→443
1	383	2.4	1.3	3.2	382→西畠中央	東畠南隅→384	1	443	1.4	0.9	1.7	442→西畠北隅	東畠中央→444
1	384	1.9	1.2	2.3	383→西畠南隅	東畠中央→385	1	444	1.4	(1.1)	(1.6)	443→西畠北隅	東畠北隅→444
1	385	1.7	1.5	2.5	384→西畠中央	東畠北隅→386	1	444	(1.9)	(0.8)	(1.1)	443→西畠北隅	東畠中央→445
1	386	2.5	1.5	3.5	385→西畠中央	東畠中央→387	1	445	(0.9)	(0.3)	(0.1)	444→西畠中央	
1	387	2.2	1.6	3.5	386→西畠北隅	東畠北隅→388	1	446	(2.3)	1.0	(2.3)		東畠中央→447
1	388	(2.2)	(1.2)	(1.8)	387→西畠中央		1	447	1.7	0.8	(1.3)	446→西畠中央	東畠南隅→448
1	389	(0.4)	(0.2)	0.0		東畠中央→391	1	448	(1.4)	(0.8)	(0.7)	447→西畠中央	東畠南隅→443
1	390	(0.7)	(1.4)	(0.5)		東畠中央→391	1	449	(1.4)	(0.3)	(0.2)		
1	391	1.6	1.3	2.0	390→西畠中央	東畠中央→392							
1	392	1.7	1.6	2.6	391→西畠中央	東畠中央→393							
1	393	1.6	1.4	2.1	392→西畠中央	東畠中央→394							
1	394	1.5	1.5	2.1	393→西畠中央	東畠中央→395							
1	395	1.6	1.4	2.2	394→西畠南隅	東畠北隅→396							
1	396	1.6	1.6	2.4	395→西畠北隅	東畠中央→397							
1	397	1.5	1.8	2.4	396→西畠中央	東畠中央→398							
1	398	1.5	1.7	2.2	397→西畠中央	東畠中央→399							
1	399	2.4	1.4	3.2	398→西畠中央	東畠中央→400							
1	400	2.5	1.4	3.3	399→西畠中央	東畠北隅→401							
1	401	1.5	1.5	2.2	400→西畠北隅	東畠北隅→402							
1	402	2.3	1.6	(3.1)	401→西畠中央								
1	403	(1.6)	(0.7)	(0.5)									
1	404	(1.7)	1.3	(1.9)		東畠中央→405							
1	405	1.4	1.1	1.5	404→西畠中央	東畠中央→406							
1	406	1.5	1.2	1.7	405→西畠中央	東畠中央→407							
1	407	1.8	1.0	1.7	406→西畠中央	東畠南隅→408							
1	408	1.5	1.1	1.7	407→西畠中央	東畠中央→409							

## 第8節 7区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内の北東側に位置し、西側は道路を挟んで最も広い調査区の6区、南側は道路を挟んで3区、東側は道・水路を挟んで8区と8-1区の両調査区に接する。調査は、先ず天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流下を対象とした第1面調査を行ったが、その後、一部の第1面下に第2面とは異なる遺構および遺構面を確認したことから、部分的ではあるが第1面下面として調査が進められ、この面を近世初頭頃の遺構面と推測した。そしてAs-B下面を対象とした第2面調査、さらに基本層序(南壁)廻層下面を対象とした第3面調査が行われた。その結果、第3面調査において、微高地の存在と微高地に古墳時代と考えられる掘立柱建物を検出した。

### 第1項 第1面調査

本調査区での第1面の遺構には、調査時に天明3年の泥流下面での遺構、部分的ではあるが第1面下面とした遺構の両者がある。そのため整理段階では、天明3年の泥流下面を第1-1面、そして第1面下面を第1-2面として扱った。本報告においても、第1-1面と第1-2面に分割して記述する。

なお、第1面の遺構は、調査区の中央から南北に検出されたが、北側については不明。

#### 1. 第1-1面調査

天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した遺構には、平坦面、溝、道、煙といった各種の遺構が検出された。第50図に示すように、調査区の南西側を南側から北西方向に延びる溝で大きく西側と東側に分割され、西側はさらに西側の6区から続く溝で南北に分割される。東側では、段差によって調査区南壁に接する平坦面と煙を検出した中央部の平坦面、さらに北側の北傾斜する段差に分割される。この東側には平坦面を画する段差際に、段差と溝によって画された帯状の緩い斜路が設けられている。

なお、南壁中央での天明泥流直下の土壤を分析対象と

した自然科学分析(植物珪酸体分析・花粉分析)の結果、そのデータ値は稲作を積極的に支持するものではなく、ソバの栽培・利用の可能性があるという。

以下、検出された各遺構ごとに記述する。

#### 3号溝 (第51・52図、PL.27・28)

調査時に3号溝と呼称したが、5号道の北側を画する溝状遺構である。

位置：7区の中央部南寄りに位置し、5号道の北側を画し、中央の平坦面との境をなす。

座標値： $X=61,160 \sim 61,179$   $Y=-92,024 \sim -92,054$

検出状況：第1面となる天明泥流下面の調査時に検出された。溝の西端部は2号煙の南側にあり、そこから緩く蛇行しながら北東方へと延びる。溝の北側は2号煙から続く調査区中央の平坦面に面し、平坦面の溝際に植栽痕列が確認されている。南側は5号道となり、5号道の北側を画する。溝底面は西側が高く、北東側ほどやや低くなるが、流水した状況ではない。また、遺物の出土もない。

規模：長さ36.50m 上面幅0.50～0.90m

深さ20～30cm

延伸方向：N-25°～68°-E

埋没土：暗褐色土の天明泥流を埋没土とする。

所見・時期：天明泥流により埋没していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。また、5号道に付随する北側側溝として位置付けることができ、併せて流水を伴わない溝である。

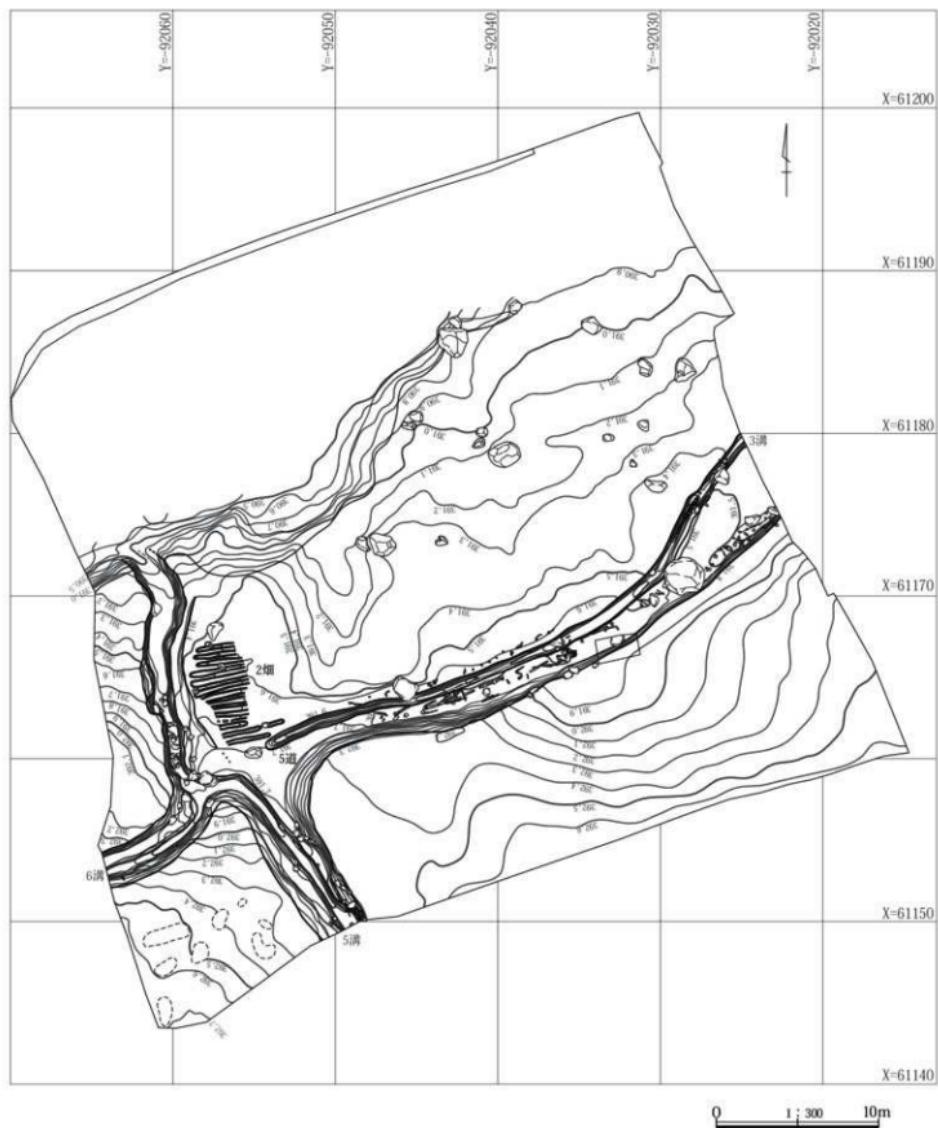
#### 5号溝 (第51・52図、第12表、PL.27・28)

調査区中央から南側の平坦面や段差を西東に分割する溝で、先述した3区第1面から続く溝であることから同一番号を付している。

位置：7区の南西側を南側から北西方向に延びる溝で、平坦面や段差を西東に分割するように位置する。また、途中のクランク部分では、西から延びる6号溝が合流する。

座標値： $X=61,149 \sim 61,171$   $Y=-92,048 \sim -92,062$

検出状況：第1面となる天明泥流下面の調査時に検出された。3区第1面での5号溝から続く溝であり、本調査区の南西側南壁を再起点とし、平坦面や段差を西東



第50図 7区第1-1面 全体図



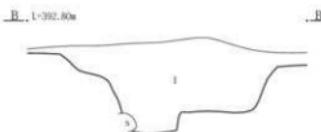
第51图 3·5·6号沟、5号道、2号烟 平面图

3号溝



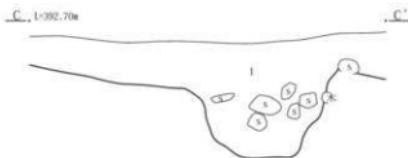
3号溝  
1 暗褐色土 天明泥流

6号溝



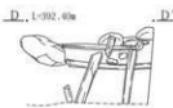
6号溝  
1 黒褐色土 大小の礫を多く混在する。(天明泥流)

5号溝



5号溝  
1 黒褐色土 大小の礫を多く混在する。(天明泥流)

5号溝土止め側面



2号烟

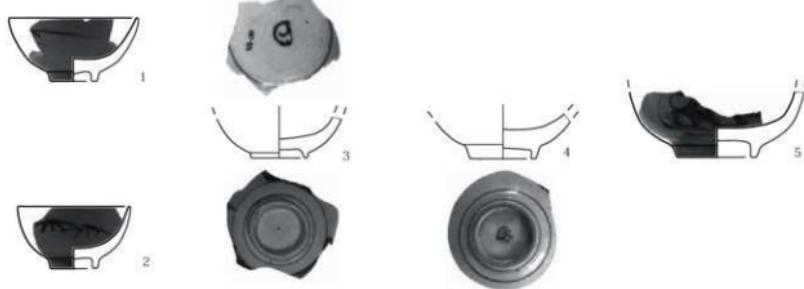


2号烟

1 暗褐色土 泥流を主とし、褐灰色土ブロックを含む。

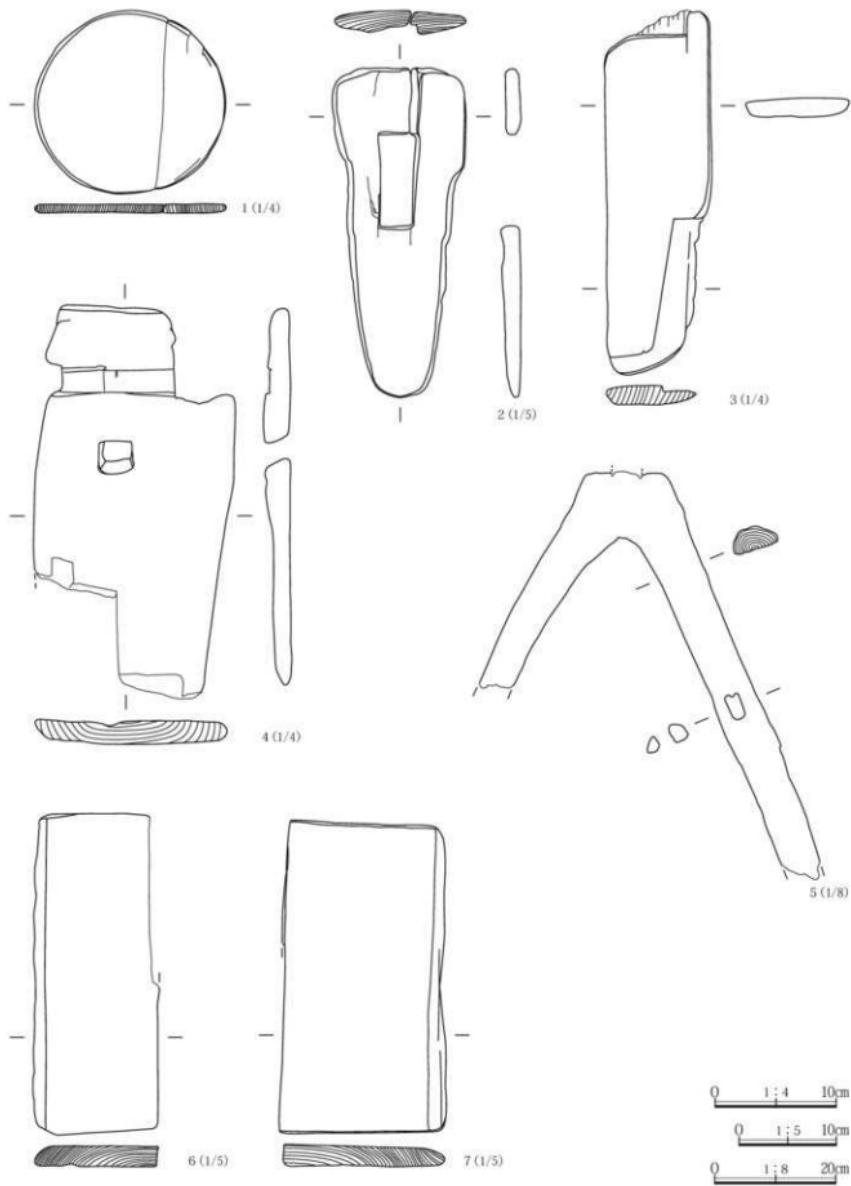
0 1:50 2m

5号溝出土遺物

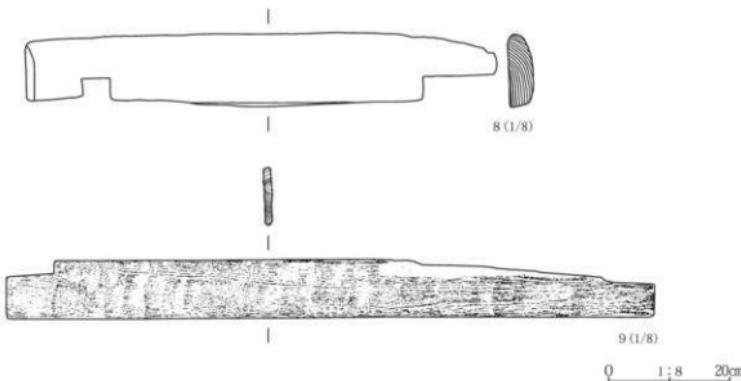


0 1:3 10cm

第52図 3・5・6号溝 2号烟 5号溝 土止め側面図、5号溝出土遺物



第53図 5号道出土遺物(1)



第54図 5号道出土遺物(2)

第12表 5号溝出土遺物観察表

種 国 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第52回 PL.52	1	肥前磁器 染付小碗	5溝 口縁1/4、底部 底 1/2	口 (7.9) 底 2.7	高 3.9 灰白	口縁部外面に染付。高台端部のみ無釉。	18世紀後葉～ 19世紀前葉
第52回 PL.52	2	肥前磁器 染付小碗	5溝 口縁1/4、底部 底 2/3	口 (6.8) 底 2.8	高 3.8 灰白	外面に墨文。高台脇と高台境に1重團線。	18世紀中葉～ 18世紀後葉
第52回 PL.52	3	肥前磁器 染付碗	5溝 底部	口 一 底 3.9	高 — 灰白	体部外面に染付。底部内面周縁1重團線内に不明文様。	18世紀中葉～ 19世紀前葉
第52回 PL.52	4	肥前磁器 染付碗	5溝 底部	口 一 底 3.9	高 — 灰白	高台脇に1重團線。高台境に2重團線。高台内に満福字文。	18世紀中葉～ 19世紀前葉
第52回 PL.52	5	肥前陶器 陶胎染付碗	5溝 底部	口 一 底 4.9	高 — 灰	外面は山水文か。内面は無文。高台端部のみ無釉。	17世紀後葉～ 18世紀前葉

第13表 5号道出土遺物観察表

種 国 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第53回 PL.52	1	木製品 曲物底板	7区道構外 一部欠損	径 15.7 厚 0.7	厚 0.7	小ぶりの曲物の底板。角が丸くなっているが、使用時の状態かは不明。	
第53回 PL.52	2	木製品 鍛先	7区道構外 完形	長 33.8 幅 13.7	厚 2.5	上部に柄を取り付ける穴が開けられている。	
第53回 PL.52	3	木製品 踏み歯	7区道構外 一部	長 (29.0) 幅 8.8	厚 1.7	刃を取り付ける部分に段が付けられ、加工痕が確認できる。	
第53回 PL.52	4	木製品 踏み歯か	7区道構外 一部	長 (32.3) 幅 16.7	厚 2.5	端部から5.3cmの所に幅2.0cm程度の凹みがつけられている。風呂部分に柄を付ける穴が開けられている。	
第53回 PL.53	5	木製品 台の脚部分か	7区道構外 一部欠損	長 (66.5) 幅 (33.4)	厚 4.3	2又の木材を平裁し、脚部の中心部に方形の支えを透す木材を入れると見られる穴が開けられる。幅は現存の足の長さで推定幅となる。	
第53回 PL.53	6	木製品 板状木製品	7区道構外 完形か	幅 33.0 幅 13.0	厚 2.2	表裏と側面の内3面は整形されている。同様の形状の木製品が出土しているが、関係性は不明。	
第53回 PL.53	7	木製品 板状木製品	7区道構外 完形	幅 32.0 幅 17.2	厚 2.3	削りの痕跡がわざわざに確認できる。表裏と側面の内3面が整形されている。	
第54回 PL.53	8	木製品 建築材か	7区道構外 一部欠損	長 (77.5) 幅 12.2	厚 4.3	加工痕が明晰なやや薄めの板材。端部が一部切り取られている。	
第54回 PL.53	9	木製品 建築材か	7区道構外 一部欠損	長 (106.0) 幅 9.5	厚 1.5	きっかきが2力所に付けられている長方形の板材。使用用途は不明。	

#### 第4章 検出された遺構と遺物

に分割するように北西方向へと延びる溝で、途中小さくクランクした部分で、西側から延びてきた6号溝が合流する。3区での5号溝と本調査区での5号溝は、泥流によって埋没していることは勿論であるが、合流する6号溝も同様である。また、本調査区南壁際の5号溝東壁には、壁の崩落を修繕した土止めの痕跡が確認されている(PL.27-5)。土止めは、外側を縦位に数本の杭を打ち込み、縱杭の内側に横位の丸木材を数段渡し、その内側に中型礫を多量に混在させた裏込め土で構築されている。その規模は不明。5号溝の底面は深く、北側ほど低くなることからも、かなりの流水があったものと考えられる。しかし、北側端部の詳細は不明。出土遺物には、多くの陶器類がある。

**規模：**長さ28.74m 上面幅0.94～2.10m

深さ53～82cm

**延伸方向：**N-36°-W

**埋没土：**大小の礫を多く混在する黒褐色土の天明泥流を埋没土とする。

**遺物：**多くの陶器が出土しており、5点を図示した。

1・2は肥前磁器の染付小碗、3・4は肥前磁器の染付碗の底部、5は肥前陶器の陶胎染付碗の底部である。

未掲載遺物には、近世の国産磁器、国産施釉陶器が多くある。

**所見・時期：**天明泥流により埋没していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。

**6号溝** (第51・52図、PL.28)

調査時は6号溝としていたが、先述の6区で検出された7号溝と同一溝である可能性が極めて高い。

**位置：**7区南西隅のやや北側にあり、西壁南端のやや北側を壁際から東方向へ緩く湾曲しながら、その先端が5号溝のクランク部へ接続する。また、5号溝で分割された調査区の西側を、さらに南側と北側に分割する溝でもある。

**座標値：**X=61,152～61,157 Y=-92,057～-92,064

**検出状況：**第1面となる天明泥流下面の調査時に、5号溝と共に検出された。調査区南西隅のやや北側で、西壁際から東方向へ緩く湾曲しながら延び、その先端が5号溝のクランク部へ接続する。溝上面は幅広く、底面は段状となり、南側が一段低い本来の6号溝底面と

なる。底面は深く、東端の5号溝との接合部ほど低く、東流し5号溝クランク部で合流する状況がよく解る。そして埋没土についても、5号溝と同様に天明泥流である。また、本溝で分割された南北の両箇所は、それぞれの平坦面の東端にあたり、その端部は斜面となる。一方、この6号溝の延びてくる西側の6区をみると、道路を挟んだその先には7号溝が位置しており、本調査区における平坦面や段差斜面、溝等はその延長線上にあることが解る。つまり、6区東側の各平坦面と段差斜面および溝は、7区西側での平坦面、段差斜面、溝は同一の遺構であり、6区での7号溝と本調査区の6号溝は同一溝である。出土遺物はない。

**規模：**長さ8.02m 上面幅2.30～2.56m

深さ60～75cm

**延伸方向：**北N-12°-W、南N-55°-E

**埋没土：**大小の礫を多く混在する黒褐色土の天明泥流を埋没土とする。

**所見・時期：**天明泥流を埋没土としていることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。また、6区の南東隅付近で検出された7号溝と同一の溝でもある。

**5号道** (第51・53・54図、第13表、PL.52・53)

調査時には道としての認識はなかったものの、その後の整理時に諸要素から5号道として認定した。

**位置：**7区の中央部南寄りに位置し、本道の北側を先述の3号溝が、調査区南側平坦面の北斜面が道の南側を画し、北流する5号溝のクランク部付近から緩やかに湾曲しながら北北東へと延びる。

**座標値：**X=61,158～61,179 Y=-92,022～-92,054

**検出状況：**第1面となる天明泥流下面の調査時に、3号溝や2号烟等と共に検出された。道は、北流する5号溝のクランク部付を西端とし、緩やかに湾曲しながら北北東へと延びる。また、道の北側を3号溝が、南側を調査区南側平坦面の北斜面が画するように、道の両側にある。路面は、やや硬化ぎみで、ほぼ平坦に近いが西側がやや高く、途中に地山内の巨石が露出する。なお、西端部を詳細にみると、5号溝脇には南側から延びる狭い平坦部、2号烟との間の土手状となる帯状の平坦面、5号溝クランク部付で接し、その接点に本

道が接することでT字状の交差部となる状況である。

一方、路面には多くの木製品や木材が、散乱した状態で出土している。

**規模(路面)**：長さ35.5m 上面幅0.70～2.05m

(側溝)：北側に3号溝

**延伸方向**：N-68°—E

**埋没土**：路面を覆うのは、天明泥流である。

**遺物**：路面に、多くの杭や木材、木製品等が出土した。

図示したのは計9点で、木製品を優先した。1は小振りの曲物の底板で、径15.7cm、厚さ0.7cmを測る。角が丸くなっている。2は鍛先の完形品で、長さ33.8cm、幅13.7cmを測る。鍛先の上部に柄を取り付ける穴が開けられている。3は欠損した踏み鉗の一部で、残存するのは長さ29.8cmを測る。刃を取り付ける部分に段が付けられ、加工痕が確認できる。4は欠損した踏み鉗と考えられ、残存するのは長さ32.3cmを測る。端部から5.3cmの所に幅2.0cm程度の凹みがつけられ、風呂部分に柄を付ける穴が開けられている。5は一部を欠損するが、台の脚部と考えられる。残存する長さ(高さ)66.5cm、幅33.4cm、厚さ4.3cmを測り、半裁した2又の木材を用い、脚部の中心部に方形の支えを通して木材を入れると見られる穴が開けられる。幅は現存の足の長さで推定幅となる。6と7は分割した板状木製品で、6は縦33.0cm、横幅13.0cm、厚さ2.2cm、7は縦32.0cm、横幅17.2cm、厚さ2.3cmが残存するものの接合はしない。両者は表裏と側面の3面が整形され、7には削りの痕跡が僅かに確認できる。出土状態から同一個体の加工性をもつ(PL.29-4参照)。8は欠損する建築材と考えられ、加工痕が明瞭なやや薄めの板材で、端部が一部切り取られている。残存する長さ77.5cm、幅12.2cm、厚さ4.3cmを測る。9は用途不明な建築材と考えられる長方形の板材で、表面に加工痕がある。残存する長さ106.4cm、幅9.5cm、厚さ1.5cmを測る。図示した以外にも、多くの板や角材、杭等の木材が出土している。また、露出した巨石の東側で、3号溝脇から芝を束ねた状態の小枝も出土している。

**所見・時期**：天明泥流を被覆していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。また、路面に散乱するかのように出土した木製品や木材類は、近い高場にあった小屋等からの流出物と考えられよう。

**2号烟** (第51・52図、PL.28)

泥流下に検出された天明3年時の烟であるが、残存状態は悪く、烟の西端のみの検出となった。

**位置**：7区の中央西寄りに位置し、大きく3段からなる平坦面の2段目にあたる平坦面にある。烟の西側には南北方向の土手上の高まりと5号溝、南側に3号溝が接する。

**座標標**：X=61,160～61,167 Y=-92,053～-92,058

**検出状況**：第1面となる天明泥流下面の調査時に、3号溝や5号溝等と共に検出された。南側から北流する5号溝の東側は、最も高い平坦面が南側に、中段となる平坦面が中央に、そして北側に下段となる面と、大きく3段からなる。その2段目にあたる平坦面に2号烟がある。この中段の西側は南北方向の土手上の高まりと5号溝に画され、南側は3号溝が接して画され、3号溝は5号道の側溝でもある。また、平坦面の北側は、最下段への北斜面となる。検出された2号烟は、泥流で埋没した溝状の痕跡として確認され、調査により溝状の痕跡は烟の歓間であることが明らかとなった。歓間の西端は、土手上の高まりからの等間隔に歓間端部を描え、東方向へと延びる。検出された歓間は12条を数え、最長6.24mを測る。遺物等の出土はない。

**区画規模**：長さ(6.24)m 幅(5.05)m

歓長(5.05)m 歓間間隔45～55cm前後

歓数12条

**歓間方向**：N-75°—E

**埋没土**：黒褐色土の天明泥流を被覆する。

**所見・時期**：天明泥流を被覆していることから、埋没時期は天明3年であり、泥流被災の状況である。なお、検出された歓間部分は僅かであるが、その中段の平坦面全体に烟が耕作されていたものと考えられる。

## 2. 第1-2面調査

本調査区での第1面の遺構は、調査時に第1-1面とした天明3年の泥流下面での遺構、そして第1-2面とした中世から近世初頭にかけての遺構であるが、両面の遺構は調査区の中央から南半に検出された。特に、第1-2面は南側の最も高い平坦面で確認された遺構であり、その平坦面の状況を大きく変えた。第1-1面での平坦面はや

や起伏のある状態であったが、第1-2面においては調査区の南東隅に平坦面を有する一段高い面が存在し、そのつぎの平坦面として周囲に土手をもつ面が確認された。この周囲に土手をもつ面が、先述の3区で検出された溝、土手、水田と同一視できるかが問題となっている。

以下に、平坦面の周囲に巡る土手について記す。

#### 1号土手（第55・56図、PL.28）

第1-2面調査において検出された土手で、平坦面の縁となる周囲を巡るようにあり、本調査区の南側に道路を隔てた3区では5号溝と共に1号土手として、本調査区から延びる同一遺構として調査が行われた。

**位置：**調査区東南隅の最も高い平坦面を除く、南側の平坦面の直線的な北縁および西縁を巡るように延びる土手である。

**座標値：**X=61,149 ~ 61,174 Y=-92,022 ~ 92,053

**検出状況：**天明泥流除去後の第1面調査時では検出されおらず、トレンチにて第1面下に異なる遺構面を確認したことから第1-2面として調査を行った。その結果、調査区南側の平坦面（東南隅の最も高い平坦面を除く）の直線的な北縁および西縁を巡るように延びる、上端幅0.3 ~ 0.8m、下端幅1.0 ~ 1.8m、高さ50cm前後を測る土手が検出された。この土手が伸びる南側の3区では、本調査区から延びた5号溝と共に土手が検出されており、調査段階で同一溝および同一土手と判断し、両調査区の遺構に同一の番号を付した。遺物の出土はない。

**規模：**長さ42.76m 幅0.32 ~ 0.96m 高さ45 ~ 62cm

**延伸方向：**東西N-63°-E

南北N-21°-W

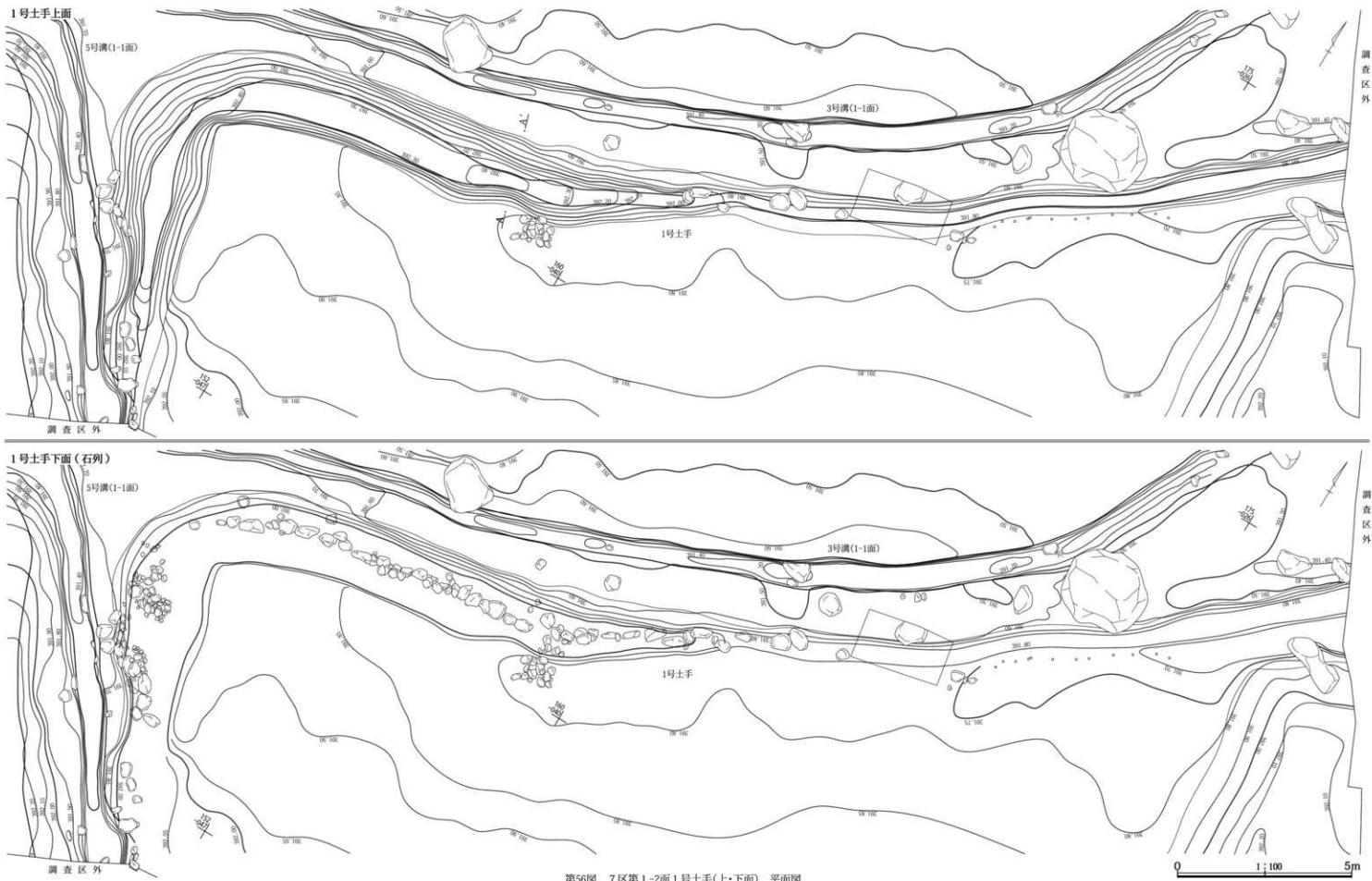
**盛土（構築状況）：**土手の構築状況は、第1段階として平坦面の周囲を一段低く掘り込み、第2段階として掘り窪めた中央に大型礫を主に列状に並べ、並べる際には礫を立たせるように配し、部分的に積み重ねる等の所作を行う。さらに第3段階は盛土であるが、盛土は上層の1層としたAs-Kkを含む粘性のある灰黄褐色土と、中・下層の2層としたAs-Kkを多量に含む褐灰色土に分層できる。また、この2層の中央下には第2段階での石列が盛土の芯材となり、盛土自体を頑丈なつくりをしている。

以上の工程を図化したのが第56図であり、図上段の1号土手上面とした図が第3段階の盛土を行った状況（第1-2面検査面）、図下段の1号土手下面とした図が第2段階の石列の状況を示した図である。3区では5号溝や水田と共に基本層序1層の天明泥流に覆われるが、土手の土層断面観察からは、砂質な暗褐色土で構築されていることが明らかとなった。また、土手構築にあたっては、芯材として大型礫を用いていることも解った。

**所見・時期：**検出面および盛土内にAs-Kkを多く含むことから、時期は中世から近世初頭期と考えられる。なお、3区で検出された1号土手と比較すると、盛土の構築状況は近似するものの、両者の平坦面が同時期であるかについては一考を要する。



第55図 1号土手 断面図



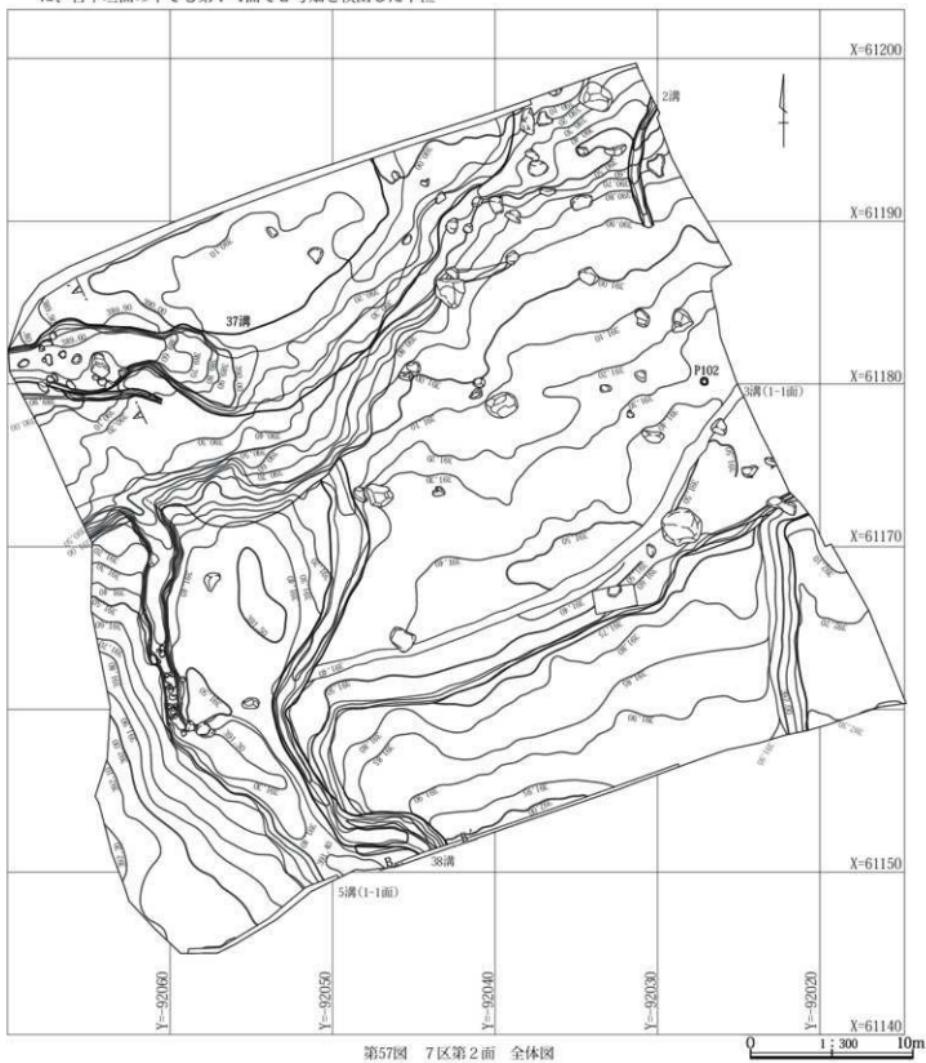
第56图 7区第1-2面 1号土手(上・下面) 平面图

## 第2項 第2面調査

本調査区における第2面に相当する遺構は、As-B直下の遺構ということになるが、先述した西側調査区の5・6区に見る水田は検出されなかった。第57図に示すように、各平坦面の中でも第1-1面で2号烟を検出した中位

の平坦面に変化が大きく、併せて自然流路として調査された溝もある。遺構としては、調査時に自然流路とした溝も含めて計3条の溝、ピット1基が検出された。しかし、何れもAs-B直下の遺構ではない。

以下、検出できた遺構について記述する。



第57図 7区第2面 全体図

0 1:300 10m

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 2号溝（第58図、PL.30）

調査では、本溝を含めた調査区北側を第1面調査時に本面までの掘削を行ってしまったことから、第1面での遺構としていたが、整理時の検討により後述の37号溝と共に本面で扱うこととした。

位置：調査区の北東隅付近に位置し、地山礫が露出する中を湾曲して東壁へと延びる短い溝である。

座標値：X=61,189 ~ 61,197 Y=92,030 ~ 92,031

検出状況：第1面調査時に検出されたが、その後の整理作業時の検討から本面で扱う。調査区北東隅付近の北緩斜面となる地山礫が露出する中を、湾曲して東壁へと延びる短い溝であり、その南端も詳細は不明。溝の断面形状は緩いU字状を呈し、斜面に沿って北側ほど低い。なお、第1面の遺構から変更した理由は、埋没土にAs-Kkを含むという土層断面観察からである。この観察を重視し、とりあえず本面で扱うこととした。遺物等の出土はない。

規模：長さ7.88m 上面幅0.40 ~ 0.75m

深さ 8 ~ 20cm

延伸方向：北N-18°-E、南N-15°-W

埋没土：As-Kkを主体に、黒色土を混在する橙色土を埋没土とする。

所見・時期：溝の性格等は不明。埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世の可能性が高い。

##### 37号溝（第57図）

調査では、本溝を含めた調査区北側を、第1面調査時に本面までの掘削を行ってしまったことから、調査時点は自然流路として扱っていた。しかし、整理時の検討により37号溝として新たに認定し、先述の2号溝と共に本面で扱うこととした。

位置：調査区の北側となる最下段の平坦面にあり、平坦面を北西隅の壁際から東方向へ蛇行ぎみに湾曲し、東端は北壁東寄りへ接する。

座標値：X=61,178 ~ 61,196 Y=92,038 ~ 92,069

検出状況：第1面調査時に検出されていた。調査区の北西隅の壁際から東方向へ蛇行ぎみに湾曲して延び、東端は北壁東寄りの壁面へ達する。調査区の中でも北側の最下段の平坦面にあり、遺構断面図から確認できる上層の状況は不明。溝幅は一定ではなく、2.2 ~ 5.0

mを測り、北東側ほど低くなる。溝の周囲を含めた断面の土層観察からは、As-Kkの混土層によって埋没していることが判明しており、本面で扱う理由とした。併せて、溝の形状や西側調査区との比較から、自然流路ではないと判断した。

規模：長さ35.20m 上面幅2.30 ~ 8.50m

深さ68cm

延伸方向：N-45 ~ 86°-E

埋没土：記録された溝中間での土層断面図からは、1層の褐灰色土から2層の鈍い黄橙色土、3層の黒褐色土、4層の鈍い黄橙色土、5層の褐灰色土、7層の黒褐色土の各層にAs-Kkを含むことが記されている。

所見・時期：溝の主体となる埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世の可能性が高い。

##### 38号溝（第57図）

第2面調査時に検出され、自然流路として扱っていた。しかし、整理時の検討により38号溝として新たに認定し、先述の37号溝と同様に本面で扱うこととした。

位置：調査区の西寄りに、南側から中央部までの各平坦面を貫くように、南壁から蛇行しながら北流する溝で、5号溝に接する部分もある。

座標値：X=61,151 ~ 61,175 Y=92,043 ~ 92,053

検出状況：第2面調査で検出された。調査区の南壁際を南端とし、調査区中央の平坦面までを蛇行しながら北流し、その北端は中央平坦面の北斜面に達して解放される。溝幅は一定ではなく0.7 ~ 2.4mを測り、深さは77cmと深く、壁面の立ち上がりもかなり急で、底面も平坦ぎみである。溝の土層観察からは、As-Kkが上位層に含まれ、大型礫が埋没している点、そして断面形状から自然流路ではないと判断した。

規模：長さ30.25m 上面幅0.72 ~ 2.40m

深さ77cm

延伸方向：北側 N-11°-E

南側 N-45°-W

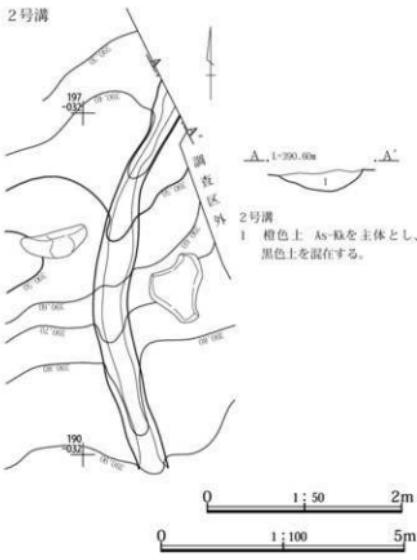
埋没土：1層の灰黃褐色土にAs-Kkを含み、2 ~ 5層に含まれる黄橙色粒はAs-Kkである可能性が高い。最下層となる6層は褐灰色土、7層は黒褐色土を埋没土とする。

所見・時期：溝の上位埋没土にAs-Kkを含むことから、

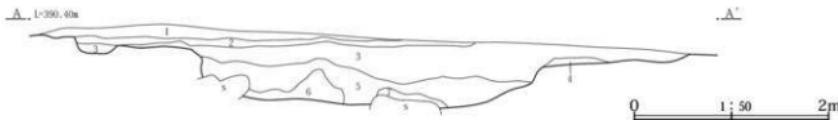
時期は中世の可能性がある。

#### ピット（第57図）

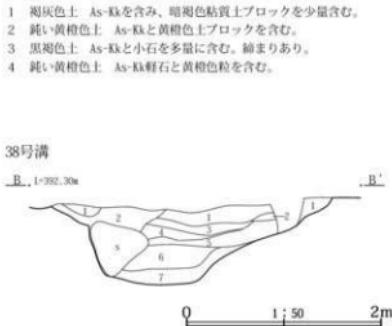
検出されたピット1基は調査区の東壁中央付近に位置し、黒褐色土を埋没土とする。第1面調査時に検出されていたが、埋没土に天明泥流を含まないことから第1面より削除し、本面の扱いとした。詳細は不明。



#### 37号溝



#### 38号溝



- 1 褐灰色土 As-Kkを含み、暗褐色粘質土ブロックを少量含む。
- 2 純い黄褐色土 As-Kkと黄褐色土ブロックを含む。
- 3 黑褐色土 As-Kkと小石を多量に含む。縛まりあり。
- 4 純い黄褐色土 As-Kk軽石と黄褐色粒を含む。
- 5 褐灰色土 As-Kkと黄褐色粒、砂粒を多量に含む。
- 6 淡い褐色土 黏質土を主体とする。
- 7 黑褐色土 程々にAs-Kkと黄褐色粒を含み、粘質。

第58図 2号溝 平・断面図、37・38号溝 断面図

## 第3項 第3面調査

本調査区における第3面調査の主な遺構には、掘立柱建物、ピット、溝がある。第59図に示すように、調査区南東の微高地上に検出した。この遺構が検出された微高

地周辺は、斜面となり、北側ほど低い低地部となる。また、微高地は、道・水路を隔てた東隣の8-1区および8区に続き、8区第3面での竪穴建物を検出した面と同一面と考えられる。

以下、検出された各遺構について記述する。



**1号掘立柱建物** (第60図、PL.31)

微高地となる調査区の南東隅付近の壁際で、掘立柱建物の一部を調査した。

**位置：**調査区の南東隅付近の壁際で、東壁南端に位置する。建物の大半は、東側の調査区外にある。

**座標値：**X=61,166 ~ 61,170 Y=-92,019 ~ 92,022

**形状：**不明(長方形か)

**規模：**桁行方向(1.90)m 梁行方向3.95m

**桁行方向：**N-52°-E

**検出状況・埋没土：**微高地上に検出された柱穴は、P 1 ~ 4 の 4 基で、桁行 1 間、梁行 2 間からなる掘立柱建物の西側の一部である。各柱間の距離は、桁行方向で 1.85m、梁行方向で 1.95m を測る。各柱穴は概ね円形を呈し、その規模は径 30 ~ 38cm、深さ 35 ~ 52cm を測る。埋土は暗褐色土を主体とする。なお、P 2 の北側に他のピットが重複するが、詳細は不明。

**遺物：**柱穴内より、土師器片が 1 点出土している。

**所見・時期：**検出面が第 3 面であることと、東側調査区の 8 区に続く微高地上に立地すると考えられることから、本建物の時期は古墳時代から古代の建物である可能性が高い。

**8号溝** (第60図、PL.31)

第 3 面調査で検出した唯一の溝である。

**位置：**調査区の南壁中央やや東寄りの壁際を南端とし、地山礫の露出する中を直線的に北へ延びる溝である。

**座標値：**X=61,156 ~ 61,164 Y=-92,028 ~ 92,030

**検出状況：**1号掘立柱建物と共に、第 3 面調査時に検出された。調査区の南東部に位置する微高地上にあり、南壁際を南端に地山礫の露出する中を直線的に北へ延びる。溝は浅く、北端は途中で消失する。南壁での土層断面では、1層としたAs-B灰層の下部層に位置し、地山を彫り込んでいることが判る。遺物の出土はない。

**規模：**長さ 7.8m 上面幅 0.43 ~ 0.62m

深さ 2 ~ 16cm

**延伸方向：**N-8°-W

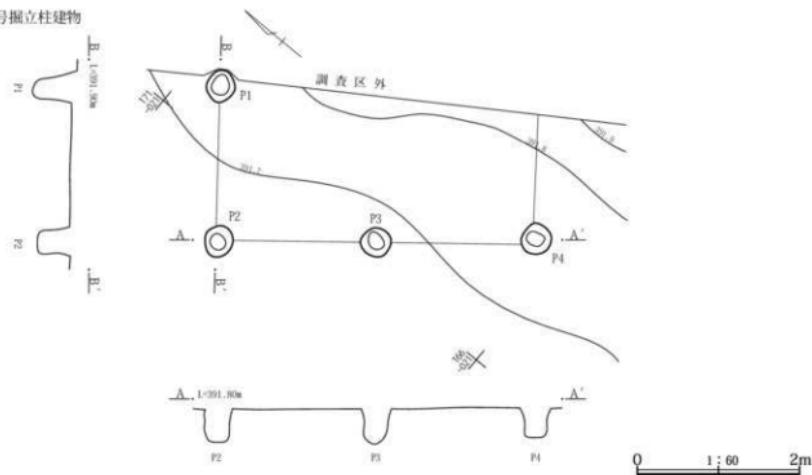
**埋没土：**5 層とした粘性の強い黒褐色土を埋没土とする。

**所見・時期：**南壁土層断面でのAs-Bより下部層に位置することと、周囲の遺構の状況から、時期は古墳時代から古代である可能性が高い。

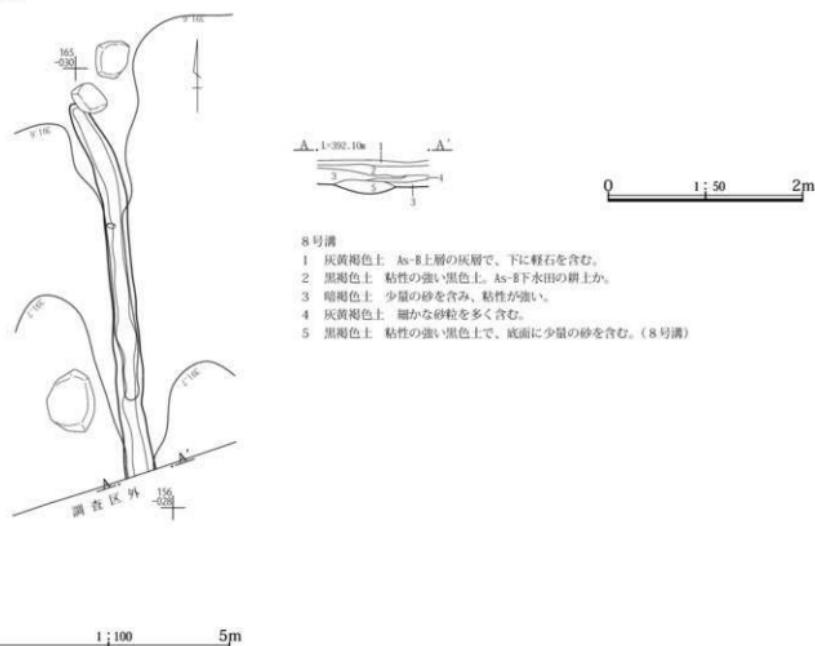
**ピット**

微高地上にある 1 号掘立柱建物の周囲に、4 基を検出した。うち、1 基は掘立柱建物と重複するが、詳細は不明。また、重複するピットもある。各ピットは径 25 ~ 30cm を測り、暗褐色土ないし黒褐色土を埋土とする。なお、土師器片を出土させたピットもある。

1号掘立柱建物



8号溝



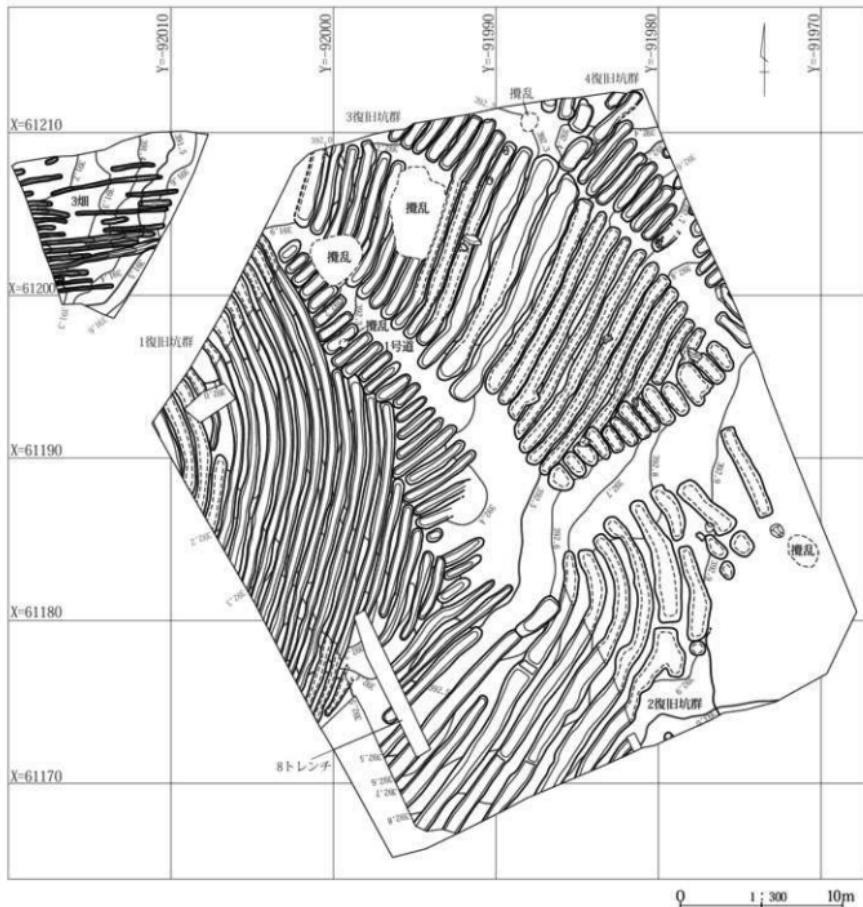
第60図 1号掘立柱建物、8号溝 平・断面図

## 第9節 8区・8-1区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内の北東端に位置し、道路によって分割された南側の五角形状の大区画を8区として令和2年7月と10月に、北側の三角形状の小区画を8-1区として令和3年度に調査を行った。本節では、両者を一つの区として総めて記述する。

調査区の西側には道・水路を挟んで7区、南側は道路を挟んで10区が接し、調査区の東側は9区を含めた令和4年度の調査対象範囲となる。

なお、この8区で検出された遺構の状況は他の調査区と異なり、第2面調査で土壤墓をはじめとした多くの土坑や掘立柱建物、ピット、さらに第3面調査では竪穴建物が検出される等、極めて特徴的である。



第61図 8区第1-1面 全体図

## 第1項 第1面調査

調査は8区東半と西半、そして8-1区に分割して行われた。その結果、地点によって面に違いが生じている。以下、8区と8-1区に分けて記述する。

### 1. 8区第1-1面調査

検出された遺構は、天明泥流被災後の復旧に関わる遺構である。特に、復旧坑とされる長い土坑状の遺構が幾列も連なって群をなす状況は、泥流被害を受けた多くの遺跡で検出されており、所謂耕地復旧の一つである天地返しを行った姿である。本調査区においても、東半、西半共に、調査区全体に及んでいる。また、各復旧坑群の壙には、帯状の空間を有し、道であることが分かる。

以下、各遺構ごとに記述する。

#### 1号復旧坑群（第62・63図、PL.35）

8区西半に検出した。調査時は、緩い弧状の復旧坑列を1群、その東側の短い復旧坑列を2群、さらに1群の南端の南西から北東方向に長い復旧坑列を3群としていたが、これらは同一区画内の復旧坑と判断し、本書では1号復旧坑群として報告する。

**位置：**8区の北西側の大部分を占め、南側に2号復旧坑群、東側に1号道（畑区画間の道）を挟んで3号復旧坑群がある。

**座標値：**X=61,173～61,203 Y=-91,989～92,011

**検出状況：**8区の北西隅付近を支点とした緩い弧状を呈した20列からなる長い復旧坑列群と、その東縁に向かう異なる23列の短い復旧坑列群、さらに弧状列群の南側に南西から北東方向に6列の長い復旧坑列群からなる。この3パターンの復旧坑群によって、畑区画内を天地返しした状況であるが、北側に位置する8区1-1面では同様な復旧坑は検出されておらず、その間の現道下に区画境があり、それぞれの復旧坑の端部となることが予測される。西側は不明。なお、復旧坑の完掘は一部にとどめ、断面・土層観察等の記録の調取を行った。一方、天地返しである復旧坑の深度をみると、その底面は8区北壁基本層Ⅲ・Ⅳ層に達しており、明らかに天明3年以前の土（耕作土）を獲得していることが分かる。

**規模：**長さ1.0～(27.2)m 幅0.5～0.9m

深さ5～50cm

**延伸方向：**N-9～69°-E、N-3～20°-W

**埋没土：**小石や人頭大礫を多く含んだ締まりのない暗褐色土であり、8区北壁基本層Ⅱ層である天明泥流に極めて近似する。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、そして土層断面および埋没土から、復旧坑の時期は天面3年の泥流被災後と考えられる。

#### 2号復旧坑群（第62・63図、PL.36）

8区西半と東半に跨る8区の南側に検出した。調査時は、西半側の南西から北東方向へのやや直線的な部分の復旧坑列を4群とし、東半側となる弧状に湾曲する復旧坑列を8群としていたが、これらは一体のもので、同一区画内の復旧坑であると判断し、本書では2号復旧坑群として報告する。

**位置：**8区の南側を占め、北側の西半に1号復旧坑群、北側東半には帯状の空間（畑区画間のやや幅広な道か）を隔てて3・4号復旧坑群がある。

**座標値：**X=61,166～61,191 Y=-91,973～91,996

**検出状況：**8区の南側を占めるように、西半側の南西から北東方向への8列の復旧坑列がやや直線的に延び、その先で弧状に湾曲して端部となる。東端では、形状が崩れる。1パターンの復旧坑群により、区画内を天地返しした状況である。なお、復旧坑の完掘は一部にとどめ、断面・土層観察等の記録の調取を行った。一方、復旧坑の深度は、先述の1号復旧坑群と同様である。

**規模：**長さ0.9～(10.0)m 幅0.6～1.5m

深さ24～39cm

**延伸方向：**N-4～48°-E、N-8～47°-W

**埋没土：**小石や人頭大礫を多く含んだ締まりのない暗褐色土であり、8区北壁基本層Ⅱ層である天明泥流に極めて近似する。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、そして土層断面および埋没土から、復旧坑の時期は天面3年の泥流被災後と考えられる。

#### 3号復旧坑群（第62・63図、PL.36）

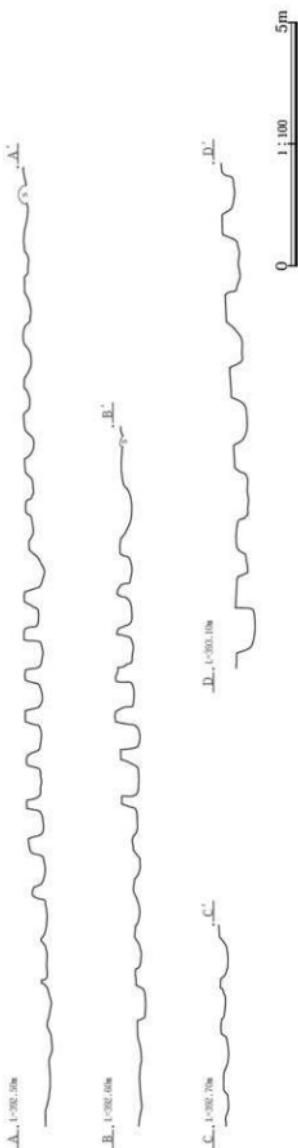
8区西半に僅かと、東半に跨るように検出した。調査

時は、西半側に僅かに検出された部分、それに続く東半での復旧坑列を5群とし、その南端に位置する方向の異

なる短い復旧坑列を7群としていたが、これらは同一区画内の復旧坑であると判断し、本書では3号復旧坑群と

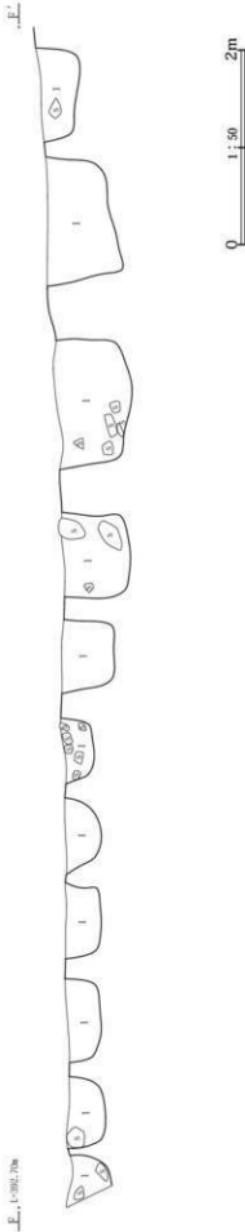


第62図 1～4号復旧坑群、1号道 平面図



復旧坑群 E' - E'・F' - F'

- 1 黄赤褐色土 小礫～人頭大礫を含み、縛まり強い。(復旧B面段土)
- 2 黄赤褐色土 固く結びついた土で、上面が不明3年半の生活面。
- 3 黄い黄褐色土 小礫を多く含む、粘性少しあり。
- 4 黄い黄褐色土 粒子の繋がつなが質土、粘性なし。
- 5 黒褐色土 3と6層の漸移層。
- 6 黒褐色土 粒子の繩かな黒色土で、縛まりあり。



263図 復旧坑群 断面図

して報告する。

**位置：**8区の中央から北東側にかけて位置し、西側に1号道(畠区画間の道)を挟んで1号復旧坑群、南側に2号復旧坑群、東側に幅狭な帯状の空間(畠区画間の道か)を挟んで4号復旧坑群がある。

**座標値：**X=61,188 ~ 61,211 Y=-91,975 ~ 92,002

**検出状況：**区画の北側では、やや短めと短めな2列の復旧坑に分かれ、やや短めな復旧坑は9列を数える。この2列の復旧坑列の南側では、1本のやや長い復旧坑列となっており、16列からなる。さらに、その南端は90度方向の異なる13列の短い復旧坑列群からなる。この3パターンによって、天地返した状況である。また、畠区画は三方を幅の異なる帯状の空間に囲まれており、区画の周囲に道状の堀があったことを推測できる。なお、復旧坑の完掘は一部にとどめ、断面・土層観察等の記録の調取を行った。一方、復旧坑の深度は、先述の1号復旧坑群と同様である。

**規模：**長さ1.7~15.5m 幅0.7~1.5m 深さ23~81cm

**延伸方向：**N-13°~36°-E, N-32°~44°-W

**埋没土：**小石や人頭大礫を多く含んだ締まりのない暗褐色土であり、8区北壁基本層序II層である天明泥流に極めて近似する。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、そして土層断面および埋没土から、復旧坑の時期は天面3年の泥流被災後と考えられる。

#### 4号復旧坑群 (第62・63図, PL.35)

8区東半の北東壁際に検出した。調査時は、北東隅付近の南西から北東方向へのやや短めの復旧坑列を6群とし、その南端に位置する方向の異なる短い復旧坑列を7群としていたが、これらは同一区画内の復旧坑であると判断し、本書では4号復旧坑群として報告する。

**位置：**8区の北東壁際に位置し、西側に幅狭な帯状の空間(畠区画間の道か)を挟んで3号復旧坑群がある。

**座標値：**X=61,196 ~ 61,212 Y=-91,974 ~ 91,987

**検出状況：**8区の北東隅の壁際付近に、短めな11列の復旧坑列、壁際に僅かに端部を確認できる復旧坑列があり、その南側に90度方向の異なる2列の短い復旧坑列が確認できる。いくつかのパターンによって、天地返した状況である。また、畠区画は三方を幅の異なる

帶状の空間に囲まれており、区画の周囲に道状の堀があったことを推測できる。なお、復旧坑の完掘は一部にとどめ、断面・土層観察等の記録の調取を行った。一方、復旧坑の深度は、先述の1号復旧坑群と同様。

**規模：**長さ1.9~(5.3)m 幅0.6~1.1m

深さ26~69cm

**延伸方向：**N-12°~50°-E, N-38°~48°-W

**埋没土：**小石や人頭大礫を多く含んだ締まりのない暗褐色土であり、8区北壁基本層序II層である天明泥流に極めて近似する。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、そして土層断面および埋没土から、復旧坑の時期は天面3年の泥流被災後と考えられる。

#### 1号道 (第62図)

8区東半の調査時に検出された。復旧坑群を分割する畠区画間の道と解釈し、遺構と認定した。

**位置：**8区中央付近で、1号復旧坑群と3号復旧坑群との間の幅狭から幅広な帯状の空間である。

**座標値：**X=61,183 ~ 61,205 Y=-91,973 ~ 92,003

**検出状況：**1号復旧坑群と3号復旧坑群との間の帯状の空間であり、その南端は3号復旧坑群の南端を添うように北東方向へと帯状空間が続く。

**規模：**長さ42.3m 幅0.85~3.30m

**延伸方向：**南北N-40°-W、東西N-54°-E

**埋没土：**検出面は、基本層序II層の天明泥流直下である。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、そして土層断面から、復旧坑と同時期と考えられる。

#### 2. 8-1区第1-1面調査

8区の北西側に隣接するが、8区と同様な天明泥流被災後の復旧に関する遺構は検出されなかった。検出された遺構は、天明泥流に覆われた烟である。つまり、先の8区第1-1面とは、時期の異なる遺構である。

以下、検出された烟について記述する。

#### 3号烟 (第64図、PL.32)

**位置：**8-1区全面に広がる。同様な烟は、南側の8区では検出されておらず、さらに南の10区第1面にみることができる。

座標値：X=61,200 ~ 61,208 Y=92,009 ~ 92,019

**検出状況：**8-1区第1-1面調査時に、天明泥流直下面に検出され、調査区全面に広がる。先述したように、南側の8区での第1-1面調査では、泥流直下の畠ではなく、泥流被災後の復旧坑が検出されており、調査区間の現道がその境となっている。歓間方向は概ね東西方向を向き、歓間の埋土は天明泥流である。残存する歓間の状況は、極めて浅く、不明瞭な部分もある。歓間の間隔は、明瞭な箇所で50cm前後である。

区画規模：長さ(10.00)m 幅(8.26)m

歓長(10.00)m 歓間隔50cm前後

畦数15条

歓間方向：N-82°—E

**所見・時期：**検出面および天明泥流による埋没であることから、時期は天明3年の泥流被災前と考えられる。なお、10区第1面で検出された6号畠と同様であり、歓間間隔もほぼ同じである。



第64図 3号畠 平・断面図

## 3. 8区第1-2面調査

検出された遺構は、先行して調査が行われた東半において人骨と錢貨を伴う墓と土坑およびピットであり、西半には天明泥流で埋没した溝1条である。つまり、東半では埋土および出土錢貨から中世から近世前半期の遺構面で、西半は天明泥流による埋没時の面ということになり、時期の異なる状態にある。

以下、検出された遺構について記述する。

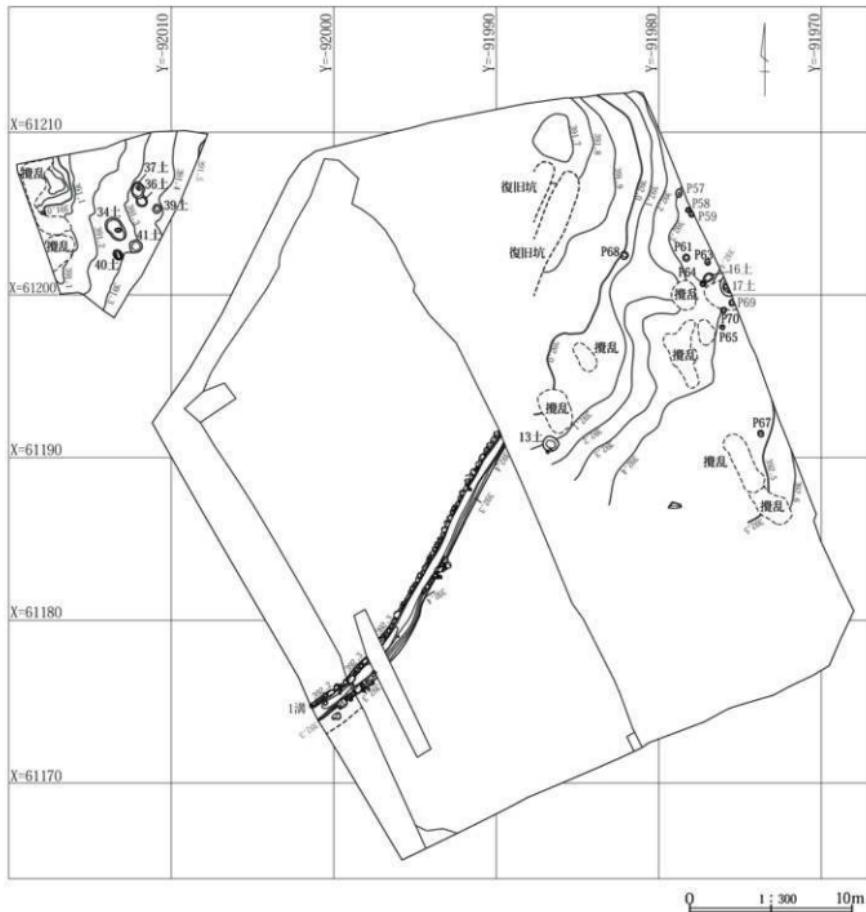
## 13号土坑（第66・68図、第14表、PL.36・53）

土坑として扱うが、本調査で検出された唯一の人骨を伴う中世墓である。

位置：8区のほぼ中央に位置する（先行調査した東半では、範囲の南西壁中央付近）。

座標値： $X=61,190 \sim 61,191$   $Y=-91,986 \sim -91,987$

検出状況：先行した8区東半の第1-2面調査時に検出された。埋土上位より小骨片が散見され、骨片の量的



第65図 8区第1-2面 全体図

#### 第4章 検出された遺構と遺物

な多さは底面のやや上位にあった。状態は極めて悪く、取り上げ時には、形状を保つものはほとんどなかった。そのため、人骨の鑑定は行っていない。土坑内からは、銭貨が底面近くに出土し、埋土中には中型罐も多い。土坑は浅く、壁は斜位に立ち上がり、底面はやや掘鉢状。

形状：円形

規模：長軸0.93m 短軸0.88m 深さ15cm

長軸方向：N-75°-W

埋没土：1・2層のAs-Kkを含む暗褐色土を主体に、下層となる3層は炭化物を多く含む黒褐色土を埋土とする。人骨の出土は、3層上である。

遺物：出土した銭貨を図示した。2点はいずれも渡来銭であり、1は「紹熙元寶」の背文あり、2は銭名が不鮮明で「治平元寶」か。他に、土器細片が1点出土している。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土にAs-Kkを含むこと、出土遺物が渡来銭であることから、時期は中世と考えられる。

#### 16号土坑（第66図）

位置：調査区の北東壁のやや北寄りに位置し、南東側に17号土坑が近接する。また、土坑の南西際にはピットが接するようあり、周囲にもピットが散見される。

座標値：X=61,200・61,201 Y=-91,976・91,977

検出状況：先行した8区東半の第1-2面調査時に検出された。規模の小さい土坑で、壁はやや垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.65m 短軸0.46m 深さ28cm

長軸方向：N-55°-E

埋没土：上層にAs-Kkを含む灰黄褐色土、下層となる3層は褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面と周囲の状況から、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 17号土坑（第66図）

位置：調査区の北東壁中央やや北寄りの壁際に位置し、北西側に16号土坑が近接する。また、周囲にピットが散見される。

座標値：X=61,199～61,201 Y=-91,975・91,976

検出状況：先行した8区東半の第1-2面調査時に検出された。北東壁際に位置することから、第1-1面調査での天明泥流被災後の復旧坑と天明3年時の地表面、さらに本土坑との土層観察を行うことができた。調査できたのは西半のみで、東半は調査区外となる。規模の大きい土坑で、壁の上位は斜位に立ち上がり、下位はやや垂直ぎみとなる。底面は平坦で、大型罐2点を出土したが遺物の出土はない。

形状：不明

規模：長軸1.25m 短軸(0.47)m 深さ88cm

長軸方向：N-25°-W

埋没土：2層の暗褐色土が天明泥流であり、2'層が復旧坑の埋没土、3層が褐灰色土で上面が天明3年時の生活面となる。そして、4層の鈍い黄褐色土が本土坑の埋土であり、3層下に確認できる。

所見・時期：検出面と周囲の状況、そして土層断面から、時期は中世と考えられる。

#### ピット

ピットとして扱った遺構は、8区東半での調査の際に検出されている。調査区の北東壁寄りに、計11基を検出している。これらピットの埋没土は、黄褐色土ブロックを含む黒褐色土ないし暗褐色土である。

#### 1号溝（第67・68図、第15表、PL.36・53）

本溝は、8区西半の第1-2面調査時に検出された石組をもつ溝であるが、東半の調査では検出されておらず、詳細の不明な溝である。

位置：8区西半の南西壁南寄りの壁際から直線ぎみに北東方向に延びる溝で、調査区東半では溝の痕跡が不明となる。西半では、一部が復旧坑群と重複する。

座標値：X=61,173～61,191 Y=-91,989～92,001

検出状況：8区西半の第1-2面調査時に石組を伴う溝として検出された。第67図の土層断面からも解るように、天明泥流直下面是天明3年時の地表面（生活面）であり、本溝はさらに下層のAs-Kkを含む灰黄褐色土の下に検出されている。調査区の南西壁南寄りの壁際から北東方向に、直線ぎみに延びる溝で、北側壁は石組が良好に残存し、南壁では一部に石組が残存する。復旧坑との重複による残存の悪さとも考えられるが、詳

細は不明。両側石組の残存する箇所での溝幅は、底面近くで40～70cmを測り、上方はやや開きぎみ。石組は1段ないし2段積みで、比較的大型の礫を用いている。底面はほぼ平坦で、西側から北東方向へ緩い勾配となる。なお、石組の裏側もやや広くなっている。石組以前の溝の可能性もある。溝内から、石臼が1点出土している。

**規模：**長さ20.83m 上面幅0.58～0.74m

深さ27～35cm

**延伸方向：**N-28°-E

**埋没土：**南西壁での土層観察からは、2層の遺跡を覆う天明泥流と復旧坑内の天明泥流、そして3～5層が堆積する下位に本溝の埋没土が確認できる。各断面でも確認できるが、本溝はAs-Kkを含む褐色土ないし黒褐色土を埋没土としている。

**遺物：**出土遺物は少ないが、3は瀬戸・美濃陶器の鉄絵皿の口縁部片であり、4は瀬戸・美濃陶器の皿片である。また、5は粗粒安山岩製の石臼(上臼)の破片であり、溝底面からの出土である。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期の溝と考えられる。

#### 4. 8-1区第1-2面調査

検出された遺構は、6基の土坑のみである。埋土から中世から近世前半期の遺構面と考えられ、先の8区第1-2面での東半と同一の面にあたる。

以下、検出された遺構について記述する。

**34号土坑** (第66図、PL.32)

**位置：**三角形を呈する8-1区の中央付近に位置し、北東側に36・37号土坑、南および南東側に40・41号土坑が近接する。

**座標値：**X=61,203・61,204 Y=-92,012～-92,014

**検出状況：**第1-2面調査時に検出されたが、浅く不明瞭。 楕円形状を呈するようで、壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦となるが中央が窪む。僅かであるが、遺物の出土はある。

**形状：**楕円形

**規模：**長軸1.53m 短軸0.93m 深さ21cm

**長軸方向：**N-33°-W

**埋没土：**1層のAs-Kkを含む暗褐色土を主体に、2層の黄橙色土を埋土とする。

**遺物：**出土した遺物は、土師器の細片2点のみである。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**36号土坑** (第66図、PL.32)

37号土坑と重複するが、詳細の不明な点が多い。

**位置：**三角形を呈する8-1区の中央やや北東寄りに位置し、南東側に39号土坑が近接する。

**座標値：**X=61,205・61,206 Y=-92,011・-92,012

**検出状況：**第1-2面調査時に検出されたが、浅く不明瞭。 楕円形状を呈するようであるが、北側を37号土坑と重複する。その新旧は、土層確認から37号土坑が新しく、本土坑が旧い。壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦となる。遺物の出土はない。

**形状：**楕円形

**規模：**長軸(0.68)m 短軸0.65m 深さ8cm

**長軸方向：**N-33°-W

**埋没土：**暗褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況から、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**37号土坑** (第66図、PL.32)

36号土坑と重複するが、詳細の不明な点が多い。

**位置：**三角形を呈する8-1区の中央やや北東寄りに位置し、36号土坑と重複する。南東側には39号土坑が近接する。

**座標値：**X=61,205・61,206 Y=-92,011・-92,012

**検出状況：**第1-2面調査時に検出されたが、浅く不明瞭。 楕円形状を呈するが、南端を36号土坑と重複する。その新旧は、土層確認から本土坑が新しく、36号土坑が旧い。壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦となるが中央寄りが窪む。遺物の出土はない。

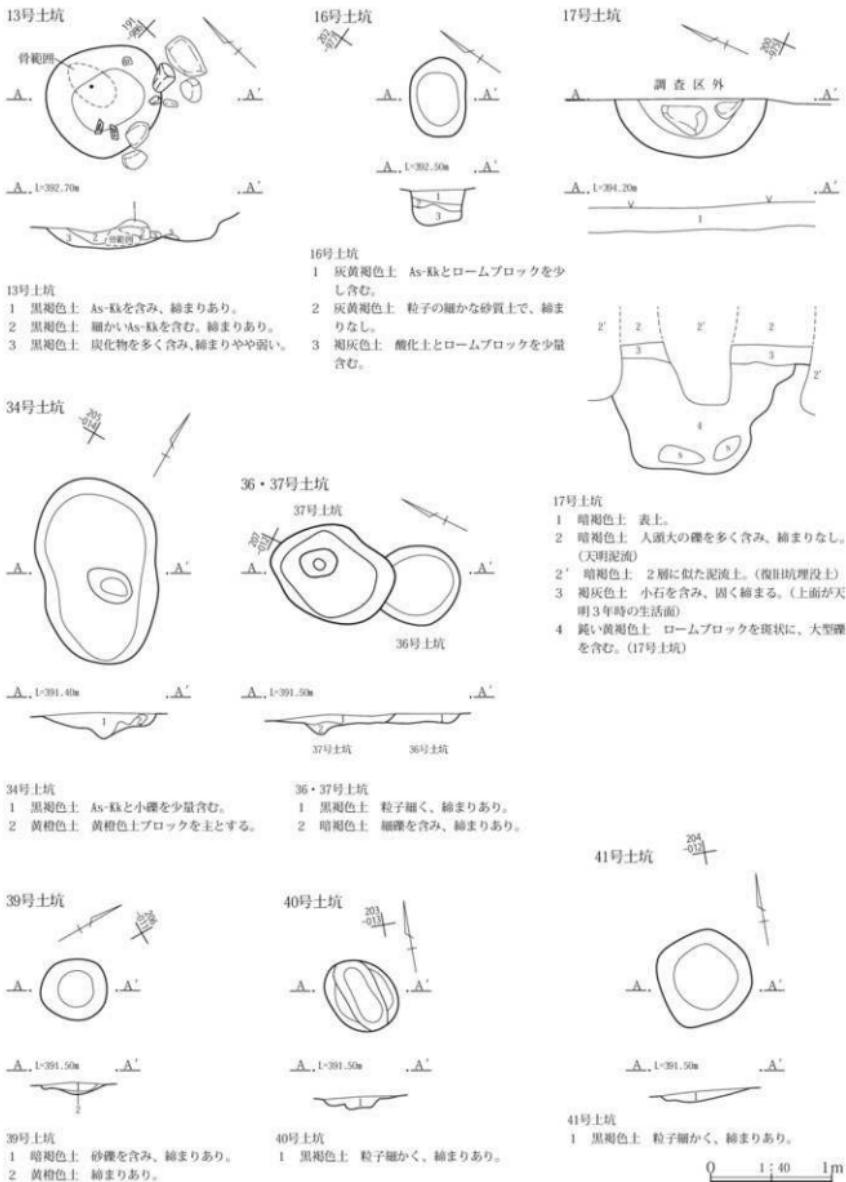
**形状：**楕円形

**規模：**長軸0.95m 短軸0.74m 深さ16cm

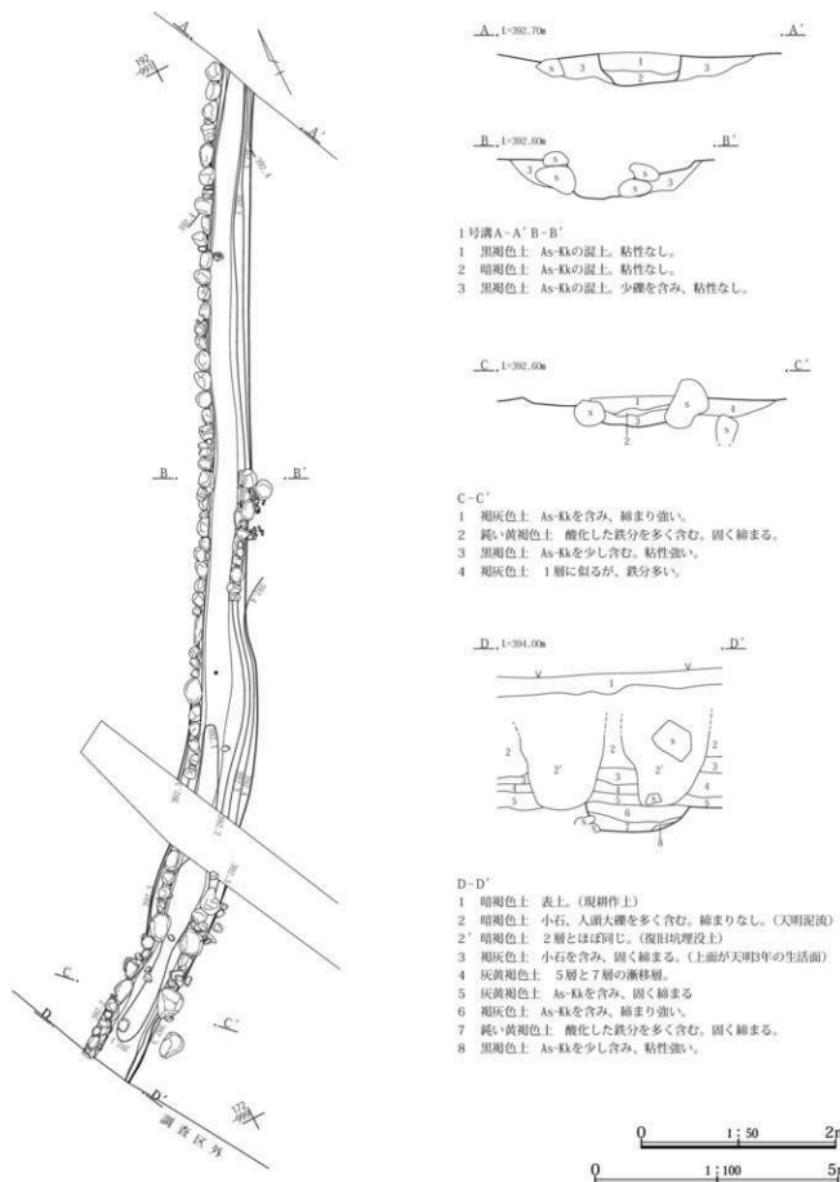
**長軸方向：**N-11°-E

**所見・時期：**検出面と周囲の状況から、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 第4章 検出された遺構と遺物



第66図 13・16・17・34・36・37・39～41号土坑 平・断面図



第67図 1号溝 平・断面図

13号土坑



1 (1/1)



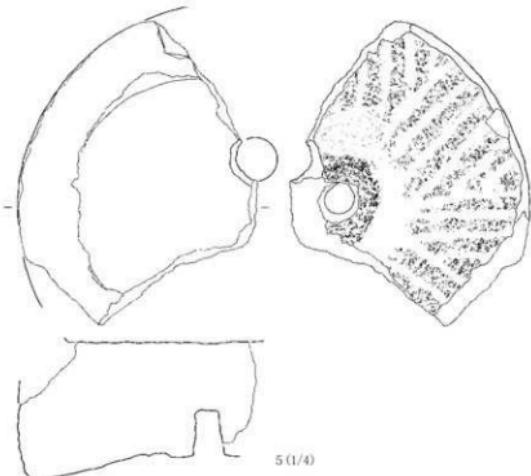
2 (1/1)

0 1:1 2cm

1号溝



4



5 (1/4)

0 1:3 10cm

0 1:4 10cm

第68図 13号土坑、1号溝出土遺物

第14表 13号土坑出土遺物観察表

種 因 PL. No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				外	内			
第6889 PL. 53	1	銭貨 紹熙元寶	13号坑 完形	2.381 1.995	厚 0.200 重 2.3		背元。面の文字、輪、郭は明瞭。背の肌はやや浅く文字、輪は明瞭。外圧で割れ、ねじれがついている。	
第6890 PL. 53	2	銭貨 治平元寶か	13号坑 完形	2.210 1.750	厚 0.168 重 0.6		文字が剥離しており見えづらい。背の肌は荒れており、全体的に出来が良くない。	

第15表 1号溝出土遺物観察表

種 因 PL. No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口	(H.0)	高			
第6891 PL. 53	3	漁戸・美濃 鉄鋸皿	1溝 口縁部片	口 底	—	—	淡黄	口縁部内面に鉄鋸皿による彫線。内外面に長石軸。	17世紀前葉
第6892 PL. 53	4	漁戸・美濃 陶器皿	1溝 1/4	口 底	(0.0) (6.0)	高 2.0	淡黄	内外面に長石軸か。高台内に目跡1カ所残る。	17世紀中葉～後葉
第6893 PL. 53	5	石製品 石臼(上臼)	1溝 1/4	径 5500	高 11.9	重 5500	粗粒輝石安山岩//	上臼1/4破片。目は深く鮮新で、目立て後もなく焼夷した可能性あり。上面縁を全損する。軸穴孔・物入孔・挽き手孔が残る。6分画。	

## 39号土坑 (第66図、PL.33)

**位置**：三角形を呈する8-1区の中央東寄りに位置し、北西側には重複する36・37号土坑が近接する。

**座標値**：X=61,205 Y=-92,010・92,011

**検出状況**：第1-2面調査時に検出されたが、浅く不明瞭。

円形を呈し、壁は斜位に立ち上がり、底面は緩い播鉢状となる。遺物の出土はない。

**形状**：円形

**規模**：長軸0.53m 短軸0.51m 深さ10cm

**埋没土**：1層に暗褐色土、2層の黄橙色土を埋土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況から、時期は中世から近世前半期と考えられる。

## 40号土坑 (第66図、PL.33)

**位置**：三角形を呈する8-1区の中央南寄りに位置し、北側に36・37号土坑、東側に41号土坑が近接する。

**座標値**：X=61,202 Y=-92,013

**検出状況**：第1-2面調査時に検出されたが、浅く不明瞭。

楕円形状を呈し、壁は斜位に立ち上がり、底面は一段低く平坦となる。遺物の出土はない。

**形状**：楕円形

**規模**：長軸0.66m 短軸0.53m 深さ10cm

**長軸方向**：N-43°-W

**埋没土**：黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況から、時期は中世から近世前半期と考えられる。

## 41号土坑 (第66図、PL.33)

**位置**：三角形を呈する8-1区の中央南寄りに位置し、北西側に重複する36・37号土坑、西側に40号土坑が近接する。

**座標値**：X=61,202・61,203 Y=-92,011・92,012

**検出状況**：第1-2面調査時に検出されたが、浅く不明瞭。

やや大型な円形を呈し、壁は極めて緩く、底面は浅い播鉢状となる。遺物の出土はない。

**形状**：円形

**規模**：長軸0.75m 短軸0.74m 深さ8cm

**埋没土**：黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況から、時期は中世から近世前半期と考えられる。

## 第2項 第2面調査

調査は8区東半と西半、そして8-1区に分割して行われたが、他の調査区と同様にAs-B下面を遺構確認面としていることから、調査面の統一は図られている。検出された遺構には、掘立柱建物、土坑、ピット、烟がある。掘立柱建物は8区西側に5棟を確認し、掘立柱建物の周辺にピットが多い傾向にある。土坑は8区および8-1区のほぼ全面に散在し、長楕円形ないし楕円形・円形を呈する。烟は8区の南東隅、8-1区のほぼ全面に検出され、いずれも歓間にAs-Kk混土を埋土としている。

以下、8区と8-1区を分割せずに、各遺構種ごとに記述する。

## 1. 掘立柱建物

掘立柱建物として整理時に認定できた建物は計5棟である。8区の西側調査時に検出されており、比較的狭い範囲に集中する。

## 3号掘立柱建物 (第70図、PL.37)

本調査区で検出された掘立柱建物の中では、比較的大型の建物の部類であり、4号掘立柱建物と重なる。

**位置**：8区の中央西側に位置し、4号掘立柱建物と大きく重複し、南側に5・6号掘立柱建物、東側に7号掘立柱建物がある。

**座標値**：X=61,182～61,192 Y=-91,994～92,003

**重複**：重複する4号掘立柱建物との新旧は、重複する柱穴も無く不明。

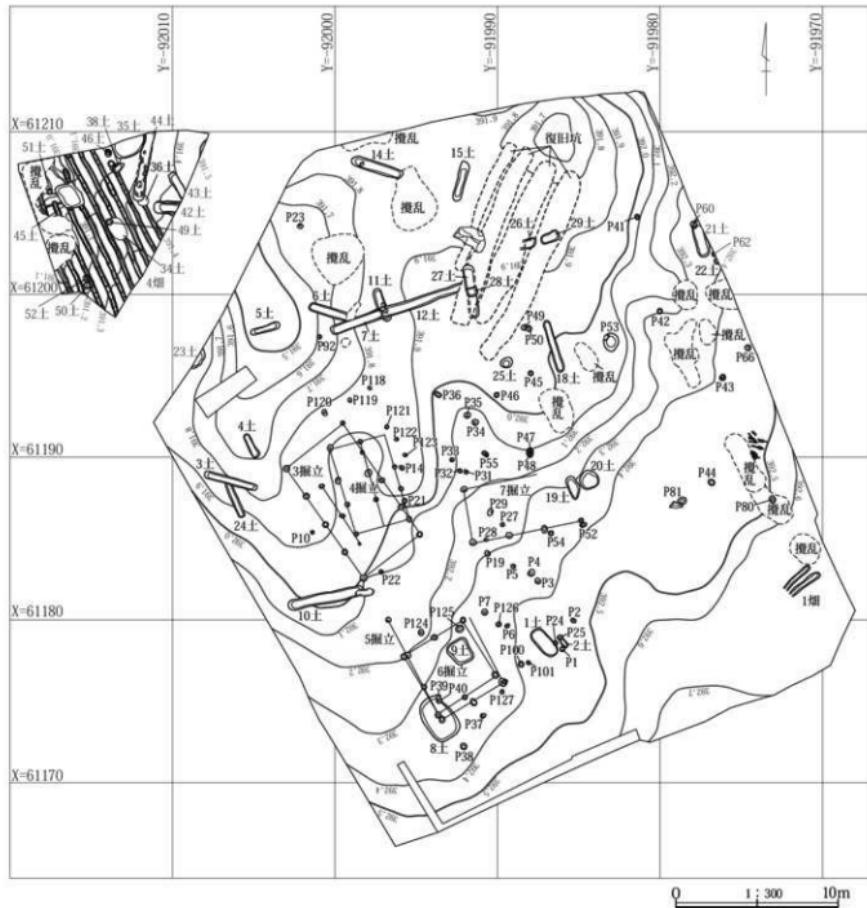
**形状**：長方形

**規模**：桁行方向8.32m 梁行方向4.46m

**桁行方向**：N-35°-W

**検出状況・埋没土**：北西方向に長い建物で、検出された

柱穴は南西辺にP1～5、北東辺にP6～10の計10基で、桁行4間、梁行1間の掘立柱建物となる。各柱間の距離は、桁行方向で2.00～2.10m、梁行方向で4.40～4.46mを測る。各柱穴は概ね円形を呈し、その規模は径28～40cm、深さ20～32cmを測る。また、南西辺P2～4の内側1.1m程に、P11～13がそれぞれ対応するように位置しており、束柱の可能性が高く、総数13基の柱穴で構築された掘立柱建物として報告す



第69図 8区第2面 全体図

る。これら柱穴の埋土は、As-Kkを含む黒褐色土を主とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられ、より中世の可能性が高い。

#### 4号掘立柱建物（第71図）

本調査区で検出された掘立柱建物の中では、やや小さな建物であり、3号掘立柱建物と重なる。

**位置：**8区の中央西側に位置し、3号掘立柱建物と大きく重複し、南側に5・6号掘立柱建物、東側に7号掘立柱建物がある。

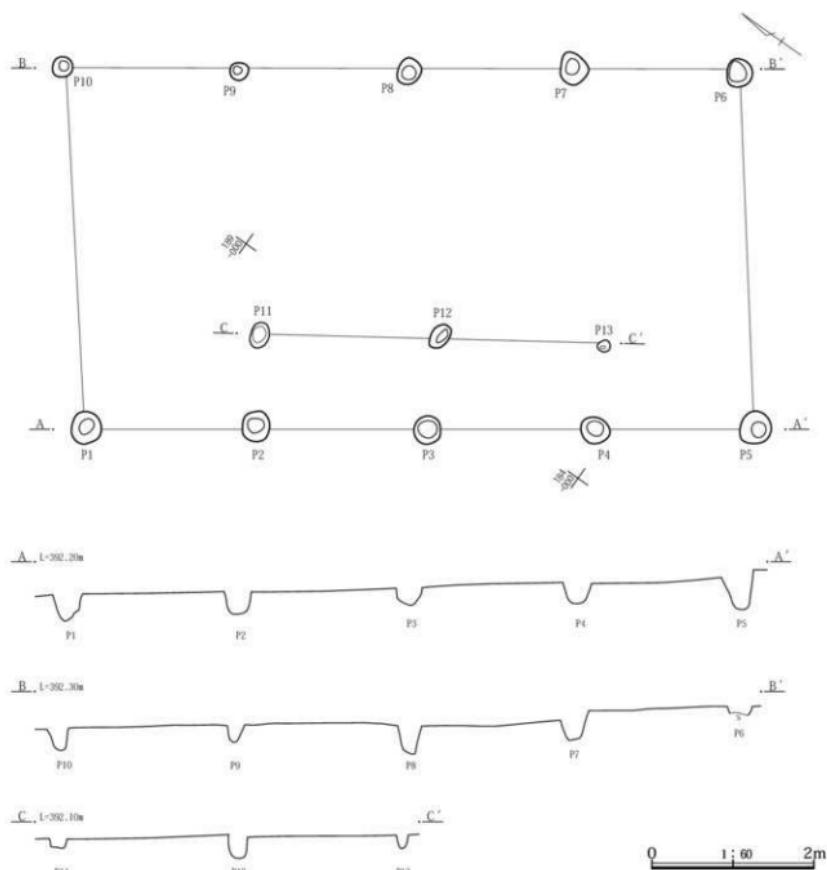
**座標値：**X=61,185～61,191 Y=-91,995～92,000

**重複：**重複する4号掘立柱建物との新旧は、重複する柱穴も無く不明。

**形状：**長方形

**規模：**桁行方向5.49m 梁行方向3.40m

**桁行方向：**N-17°-W



第70図 3号掘立柱建物 平・断面図

**検出状況・埋没土：**北北西方向に長い建物で、検出された柱穴は西辺にP1～4、東辺にP6～9、北辺P10および南辺P5、さらに内側の中軸上にP11・12からなる計12基で構成され(但し、P5・9は未確認)、桁行3間、梁行2間の総柱の掘立柱建物である。各柱間の距離は、桁行方向で1.50～1.90m、梁行方向で1.60～1.80mを測る。各柱穴は楕円形ないし円形を呈し、その規模は長軸28～44cm、短軸25～38cm、深さ25～36cmを測る。これら柱穴の埋土は、As-Kkを含む黒褐色土を主とする。

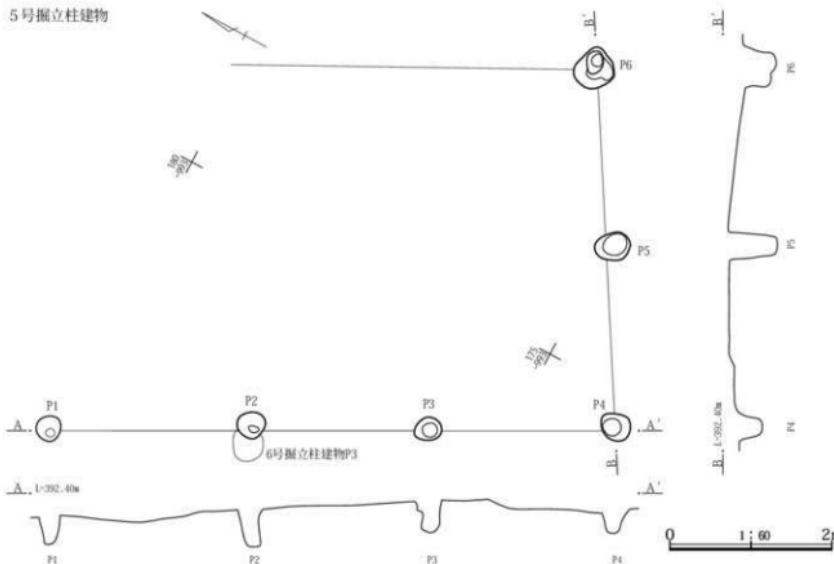
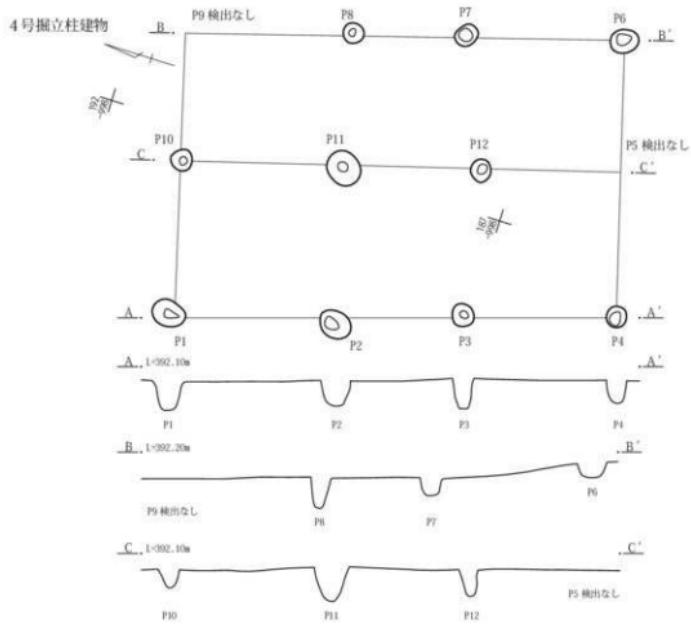
**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられ、より中世の可能性が高い。

#### 5号掘立柱建物（第71図、PL.37）

未確認の柱穴が多いものの、比較的大型の建物で、6号掘立柱建物と重なる。

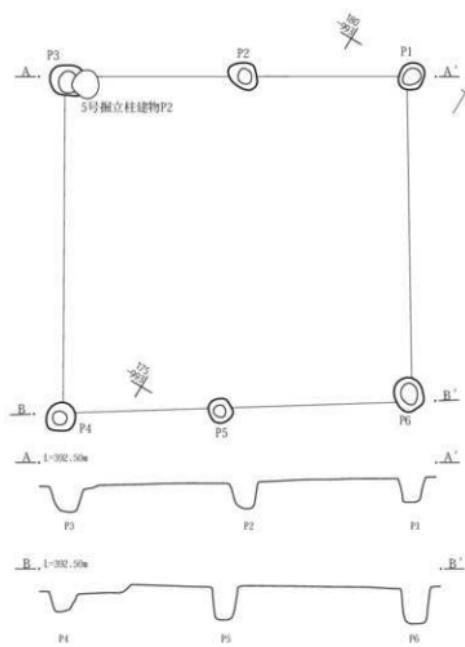
**位置：**8区中央の南西側に位置し、6号掘立柱建物および8号土坑と重複し、北側に3・4号掘立柱建物、北東側に7号掘立柱建物がある。

第4章 検出された遺構と遺物

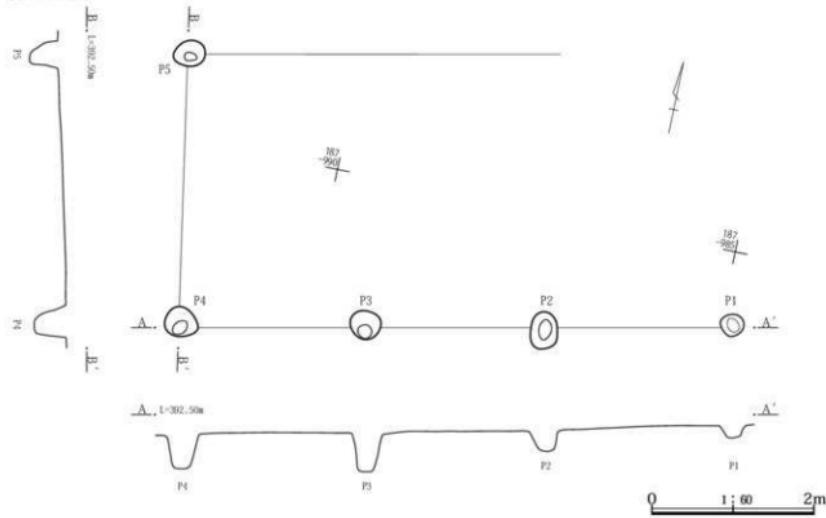


第71図 4・5号掘立柱建物 平・断面図

6号掘立柱建物



7号掘立柱建物



第72図 6・7号掘立柱建物 平・断面図

#### 第4章 検出された遺構と遺物

座標値：X=61,173～61,180 Y=-91,989～91,996

重複：重複する6号掘立柱建物との新旧は、重複する柱穴はあるものの不明。また、8号土坑の底面に柱穴を検出したが、新旧は不明。

形状：長方形

規模：桁行方向(6.96)m 梁行方向4.51m

桁行方向：N-28°-W

検出状況・埋没土：北北西方向に長い建物で、検出された柱穴は西辺にP1～4、南辺にP5、南東隅にP6の計6基が確認でき、桁行3間、梁行2間の掘立柱建物であろう。各柱間の距離は、桁行方向で2.20～2.50m、梁行方向で2.20mを測る。各柱穴は梢円形ないし円形を呈し、その規模は長軸34～50cm、短軸30～50cm、深さ36～56cmを測る。これら柱穴の埋土は、As-Kkを含む黒褐色土を主とする。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられ、より中世の可能性が高い。

#### 6号掘立柱建物（第72図、PL.37）

本調査区で検出された掘立柱建物の中で最も小さく、正方形で、5号掘立柱建物と重なる。

位置：8区中央の南西側に位置し、5号掘立柱建物および8号土坑と重複し、北西側に3・4号掘立柱建物、北側に7号掘立柱建物がある。

座標値：X=61,174～61,180 Y=-91,989～91,995

重複：重複する5号掘立柱建物との新旧は、重複する柱穴はあるものの不明。また、8号土坑の底面に柱穴を検出したが、新旧は不明。

形状：正方形

規模：桁行方向4.31m 梁行方向4.16m

桁行方向：N-58°-E

検出状況・埋没土：検出された柱穴は北西辺にP1～3、南東辺にP4～6の計6基で構成され、桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。各柱間の距離は、桁行方向で1.90～2.30m、梁行方向で4.10mを測る。各柱穴は梢円形ないし円形を呈し、その規模は長軸32～40cm、短軸26～32cm、深さ29～44cmを測る。これら柱穴の埋土は、As-Kkを含む黒褐色土を主とする。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられ、より中世の可能性が高い。

むことから、時期は中世から近世前半期と考えられ、より中世の可能性が高い。

#### 7号掘立柱建物（第72図）

未確認の柱穴が多いものの、4号掘立柱建物と同規模のやや小さな建物である。

位置：8区の中央やや南寄りに位置し、西側に3・4号掘立柱建物、南西側に5・6号掘立柱建物がある。

座標値：X=61,184～61,188 Y=-91,984～91,992

形状：長方形

規模：桁行方向(6.84)m 梁行方向3.35m

桁行方向：N-78°-E

検出状況・埋没土：南南東方向に長い建物で、検出された柱穴は南辺にP1～4、北西隅にP5の計5基が確認でき、桁行3間、梁行1間の掘立柱建物であろう。各柱間の距離は、桁行方向で2.20～2.30m、梁行方向で3.35mを測る。各柱穴は梢円形ないし円形を呈し、その規模は長軸26～44cm、短軸28～38cm、深さ19～44cmを測る。これら柱穴の埋土は、As-Kkを含む黒褐色土を主とする。なお、建物は東側に延びる可能性もある。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられ、より中世の可能性が高い。

## 2. 土坑

検出された土坑は8区全体に散漫に分布し、8-1区に11基、8区に25基の計36基である。これらの土坑には、円形、長方形、梢円形、長梢円形といった様々な形状を呈する土坑がある。

#### 1号土坑（第73図、PL.38）

位置：8区の中央の南側に位置し、ピットと重複し、東側に2号土坑が接する。

座標値：X=61,177～61,179 Y=-91,986～91,987

検出状況：8区西半の第2面調査時に検出した。東壁南東寄りでピットと重複するが、新旧は不明。梢円形を呈する本土坑は、やや浅く、壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦である。遺物の出土はない。

形状：梢円形

**規模**：長軸2.01m 短軸0.93m 深さ14cm

**長軸方向**：N-42°-W

**埋没土**：As-Kkを含む灰黄褐色土を埋土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 2号土坑（第73図、PL.38）

**位置**：8区の中央の南側に位置し、北側をピットと重複し、西側に1号土坑が近接する。

**座標値**：X=61,178 Y=-91,985・91,986

**検出状況**：8区西半の第2面調査時に検出した。北側でのピットとの重複は、詳細不明。楕円形を呈する小さな本土坑は、浅く、壁は斜位に立ち上がり、底面は狭く平坦である。遺物の出土はない。

**形状**：楕円形

**規模**：長軸(0.54)m 短軸0.30m 深さ11cm

**長軸方向**：N-36°-W

**埋没土**：As-Kkを含む暗褐色土を埋土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 3号土坑（第73図、PL.38）

**位置**：8区南西壁の北側角付近に位置し、本土坑中央に24号土坑が重複する。北側には4号土坑が近接する。

**座標値**：X=61,187～61,189 Y=-92,004～92,008

**検出状況**：8区西半の第2面調査時に検出した。本土坑中央に24号土坑と重複するが、新旧は不明。土坑は3mを超える長楕円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦となる。遺物は埋土中から出土している。

**形状**：長楕円形

**規模**：長軸3.32m 短軸0.45m 深さ46cm

**長軸方向**：N-75°-W

**埋没土**：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**遺物**：出土した遺物は、僅かに土師器片1点である。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 4号土坑（第73図、PL.38）

**位置**：8区南西壁の北側角付近に位置し、南側に重複する3・24号土坑が近接する。また、南東側には3号掘

立柱建物も近接する。

**座標値**：X=61,189～61,191 Y=-92,004～92,005

**検出状況**：8区西半の第2面調査時に検出した。本土坑は1.5mほどの短い長楕円形を呈し、浅く、壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦となる。遺物の出土はない。

**形状**：長楕円形

**規模**：長軸1.57m 短軸0.42m 深さ5cm

**長軸方向**：N-27°-W

**埋没土**：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 5号土坑（第73図、PL.38）

**位置**：8区の北西壁中央付近に位置し、東側に6号土坑、西側に23号土坑がある。

**座標値**：X=61,197・61,198 Y=-62,003～92,005

**検出状況**：8区西半の第2面調査時に検出した。本土坑は1.9mほどの長楕円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦となる。遺物の出土はない。

**形状**：長楕円形

**規模**：長軸1.86m 短軸0.38m 深さ23cm

**長軸方向**：N-72°-E

**埋没土**：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 6号土坑（第73図、PL.38）

**位置**：8区の北西側に位置し、東端を攪乱によって壊され、併せて7号土坑と重複する。東側に7号土坑、西側に5号土坑がある。

**座標値**：X=61,198・61,199 Y=-91,999～92,001

**検出状況**：8区西半の第2面調査時に検出した。本土坑の東端を7号土坑と重複するが、新旧は不明。本土坑は2.4mほどの長楕円形を呈し、やや浅く、壁は斜位ぎみに立ち上がり、底面はほぼ平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

**形状**：長楕円形

**規模**：長軸(2.40)m 短軸0.55m 深さ14cm

**長軸方向**：N-73°-W

#### 第4章 検出された遺構と遺物

埋没土：不明。

遺物：出土した遺物は、土師器の小片が3点である。

所見・時期：検出面と周囲の状況から、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 7号土坑（第73図、PL.38）

位置：8区の北西側に位置し、土坑中央の北側に6号土坑、東端に11・12号土坑が重複する。西側に5号土坑がある。

座標値： $X=61,197 \sim 61,199$   $Y=-91,997 \sim 92,000$

検出状況：8区西半の第2面調査時に検出した。本土坑中央の北側に6号土坑、東端に11・12号土坑が重複するが、新旧は何れも不明。土坑は3mを超える長楕円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

形状：長楕円形

規模：長軸3.35m 短軸0.55m 深さ57cm

長軸方向：N-70°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

遺物：出土した遺物は、土師器の小片が3点である。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 8号土坑（第73図、PL.38）

位置：8区の南西隅付近に位置し、5・6号掘立柱建物と重複し、北側に9号土坑が接する。

座標値： $X=61,172 \sim 61,175$   $Y=-91,992 \sim 91,994$

検出状況：8区西半の第2面調査時に検出した。本土坑中央に5号と6号の掘立柱建物の柱穴が重複し、北隅にピットも重複するが、新旧はいずれも不明。大型の楕円形を呈し、浅く、壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

形状：楕円形

規模：長軸2.82m 短軸1.85m 深さ12cm

長軸方向：N-34°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

遺物：出土した遺物は、土師器片4点と須恵器片1点である。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 9号土坑（第74図、PL.38）

位置：8区の南西側に位置し、5・6号掘立柱建物と重複し、南側に8号土坑が接する。

座標値： $X=61,177 \sim 61,178$   $Y=-91,991 \sim 91,993$

検出状況：8区西半の第2面調査時に検出した。5・6号掘立柱建物と重複するが、新旧は不明。隅の丸い長方形を呈し、浅く、壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

形状：隅丸長方形か

規模：長軸1.50m 短軸1.28m 深さ17cm

長軸方向：N-32°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

遺物：出土した遺物は、土師器の細片が少量ある。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 10号土坑（第74図、PL.39）

位置：8区南西壁の中央付近に位置し、土坑の東端に大型礫がある。北側には3号掘立柱建物が接する。

座標値： $X=61,180 \sim 61,182$   $Y=-91,998 \sim 92,003$

検出状況：8区西半の第2面調査時に検出した。長さ4.7mと長い長楕円形を呈し、壁は直立ぎみに立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

形状：長楕円形

規模：長軸4.70m 短軸0.69m 深さ33cm

長軸方向：N-77°-W

埋没土：As-Kkを含む黑色土(1層)と黒褐色土(2層)を埋土とする。

遺物：出土した遺物は、土師器の細片が少量ある。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 11号土坑（第74図、PL.39）

位置：8区の北側に位置し、南側に7・12号土坑が重複する。西側には6号土坑がある。

座標値： $X=61,198 \sim 61,200$   $Y=-91,996 \sim 91,997$

検出状況：8区西半の第2面調査時に検出した。重複する7・12号土坑との新旧は不明。長さ2.1mとやや長い長楕円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

**形状：**長楕円形

**規模：**長軸2.11m 短軸0.58m 深さ57cm

**長軸方向：**N-21°-W

**埋没土：**As-Kkを含む黒色土を埋土とする。

**遺物：**出土した遺物は、土師器の片が少量ある。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**12号土坑** (第74図、PL.39)

**位置：**8区の北側に位置し、西端に7・11号土坑が、東端は復旧坑によって壊されている。また、東端近辺には27号土坑がある。

**座標値：**X=61,198 ~ 61,200 Y=-91,992 ~ 91,997

**検出状況：**8区西半の第2面調査時に検出した。西端に重複する7・11号土坑との新旧は不明。東端では復旧坑の方が新しい。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

**形状：**長楕円形

**規模：**長軸(5.88)m 短軸0.60m 深さ55cm

**長軸方向：**N-72°-E

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**遺物：**出土した遺物は、土師器片が少量ある。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**14号土坑** (第74図、PL.39)

**位置：**8区北壁の西寄り付近に位置し、東側に15号土坑がある。

**座標値：**X=61,207 ~ 61,208 Y=-91,995 ~ 91,998

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。

長さ3.2mと長い長楕円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

**形状：**長楕円形

**規模：**長軸3.25m 短軸0.65m 深さ37cm

**長軸方向：**N-72°-W

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**遺物：**出土した遺物は、土師器片1点である。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**15号土坑** (第74図、PL.39)

**位置：**8区北壁の中央付近に位置し、西側に14号土坑がある。

**座標値：**X=61,205 ~ 61,208 Y=-91,991 ~ 91,992

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。長さ2.5mとやや長い長楕円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

**形状：**長楕円形

**規模：**長軸2.48m 短軸0.50m 深さ30cm

**長軸方向：**N-15°-E

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**遺物：**出土した遺物は、土師器片2点である。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**18号土坑** (第75図、PL.39)

**位置：**8区中央のやや北東付近に位置し、西側に25号土坑がある。

**座標値：**X=61,195 ~ 61,198 Y=-91,985 ~ 91,987

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。長さ3.8mと長い長楕円形を呈し、浅いが壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

**形状：**長楕円形

**規模：**長軸3.27m 短軸0.46m 深さ15cm

**長軸方向：**N-18°-W

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**遺物：**出土した遺物は、土師器片と須恵器片が1点ずつである。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**19号土坑** (第75図、PL.39)

**位置：**8区中央のやや東寄りに位置し、東側に20号土坑が近接する。

**座標値：**X=61,187 ~ 61,188 Y=-91,984 ~ 91,985

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。長さ1.5m程の不整楕円形を呈し、浅く、壁は斜位に立ち上がり、底面は概ね平坦となる。遺物の出土

#### 第4章 検出された遺構と遺物

はない。

**形状：**不整楕円形

**規模：**長軸1.44m 短軸0.70m 深さ18cm

**長軸方向：**N-15°-W

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 20号土坑（第75図、PL.39）

**位置：**8区中央のやや東寄りに位置し、西側に19号土坑が近接する。

**座標値：**X=61,188・61,189 Y=-91,983・91,984

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。長さ1.2m程の不整円形を呈し、浅く、壁は斜位に立ち上がり、底面は凹凸状となる。遺物の出土はない。

**形状：**不整円形

**規模：**長軸1.17m 短軸1.14m 深さ21cm

**長軸方向：**-

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 21号土坑（第75図、PL.39）

**位置：**8区北東壁の中央北寄り壁際に位置し、北端でピットと重複し、南側に22号土坑が近接する。

**座標値：**X=61,202～61,204 Y=-91,977・91,978

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。北東壁際に位置するため、完掘はできなかった。また、重複するピットとの新旧も不明。長さ2.3mとやや長い長楕円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦となる。遺物の出土はない。

**形状：**長楕円形

**規模：**長軸2.28m 短軸0.71m 深さ28cm

**長軸方向：**N-13°-W

**埋没土：**1層の暗褐色土を主体に、2層の灰黄褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は近世前半期か。

#### 22号土坑（第69図、PL.40）

**位置：**8区北東壁の中央北寄り壁際に位置し、北側に21号土坑が近接する。

**座標値：**X=61,201・61,202 Y=-91,976

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。北東壁際に位置するため、完掘はできなかった。径の小さな円形のピット状を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦。遺物の出土はない。

**形状：**不明

**規模：**長軸(0.38)m 短軸(0.22)m 深さ(57)cm

**長軸方向：**N-26°-W

**埋没土：**上層に暗褐色土、下層に灰黄褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含まないことから、時期は近世前半期か。

#### 23号土坑（第75図、PL.40）

**位置：**8区北西壁の南西寄り壁際に位置し、東側に5号土坑がある。

**座標値：**X=61,195・61,196 Y=-92,008

**検出状況：**8区西半を主とした第2面調査時に検出した。北西壁際に位置するため、土坑の大半は調査区外となり、調査は一部にとどまる。そのため、形状は不明。壁は緩く立ち上がり、底面は北寄りが低い。遺物の出土はない。

**形状：**不明

**規模：**長軸1.45m 短軸0.40m 深さ42cm

**長軸方向：**N-30°-E

**埋没土：**1層の表土(現耕作土)、2層の天明泥流、そして3層のAs-Kkを含む黒褐色土が埋土となる。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 24号土坑（第75図、PL.40）

**位置：**8区南西壁の北側角付近に位置し、本土坑の北端に3号土坑が重複する。北側には4号土坑が近接する。

**座標値：**X=61,186～61,188 Y=-92,005・92,006

**検出状況：**8区西半を主とした第2面調査時に検出した。土坑の北端に3号土坑が重複するが、新旧は不明。長さ2.2mとやや長い長楕円形を呈し、壁は垂直に立

ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物の出土がある。

**形状：**長楕円形

**規模：**長軸(2.24)m 短軸0.44m 深さ27cm

**長軸方向：**N-23°-W

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**遺物：**出土した遺物は、土師器片1点である。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**25号土坑（第75図、PL.40）**

**位置：**8区中央のやや北東寄りに位置し、東側に18号土坑がある。

**座標値：**X=61,195・61,196 Y=-91,989

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。長さ0.75mと短い楕円形を呈し、浅く、壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦となる。遺物の出土はない。

**形状：**楕円形

**規模：**長軸0.75m 短軸0.60m 深さ17cm

**長軸方向：**N-71°-E

**埋没土：**明黄褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含まないことから、時期は近世前半期か。

**26号土坑（第75図、PL.40）**

**位置：**8区中央の北東側に位置し、復旧坑と重複する。東側に29号土坑が接近する。

**座標値：**X=61,202・61,203 Y=-91,987・91,988

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。土坑は天明泥流被災後の復旧坑と復旧坑との間に検出されたため、残存状態は極めて悪く、土坑の東端のみの検出となった。長楕円を呈すると考えられるが不明。壁は垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦。遺物の出土はない。

**形状：**不明

**規模：**長軸(0.65)m 短軸0.57m 深さ19cm

**長軸方向：**N-79°-E

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**27号土坑（第76図）**

**位置：**8区中央の北側に位置し、復旧坑と重複する。西側に12号土坑が接近する。

**座標値：**X=61,198～61,201 Y=-91,991・91,992

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。土坑は天明泥流被災後の復旧坑と復旧坑との間およびその底面に検出されたため、残存状態は極めて悪い。長さ3.2m程の長い長楕円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦となるが中央でやや低くなる。遺物の出土はない。

**形状：**長楕円形

**規模：**長軸3.24m 短軸0.63m 深さ35cm

**長軸方向：**N-8°-W

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**29号土坑（第76図、PL.40）**

**位置：**8区中央の北東側に位置し、復旧坑と重複する。西側に26号土坑が接近する。

**座標値：**X=61,203 Y=-91,986・91,987

**検出状況：**8区東半を主とした第2面調査時に検出した。土坑は天明泥流被災後の復旧坑の底面に検出されたため、残存状態は極めて悪い。長さ1.2m程の楕円形を呈し、浅く、底面は平坦。遺物の出土はない。

**形状：**楕円形

**規模：**長軸1.17m 短軸0.57m 深さ8cm

**長軸方向：**N-68°-E

**埋没土：**As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

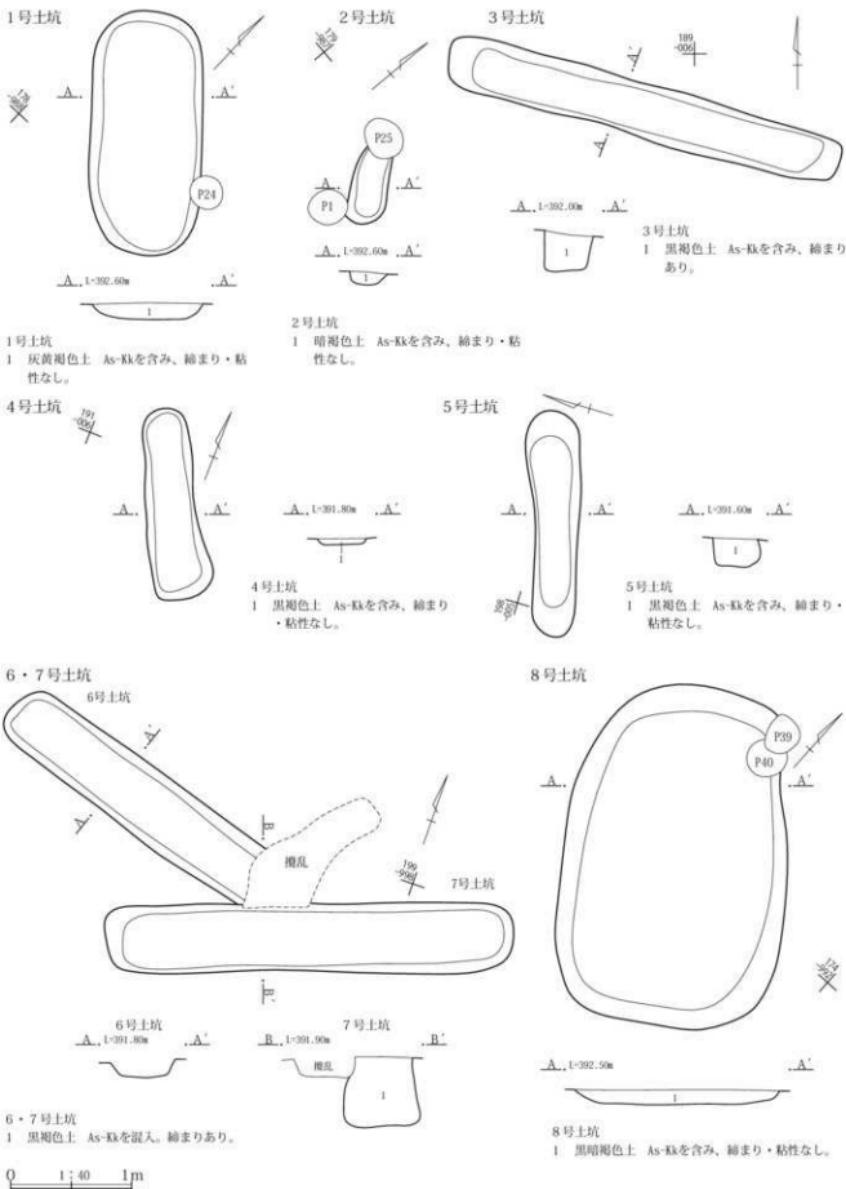
**35号土坑（第76図、PL.32）**

**位置：**8-1区北壁の中央東寄り壁際に位置し、東端を44号土坑と重複する。南側に38号土坑、西側に46号土坑が接近する。

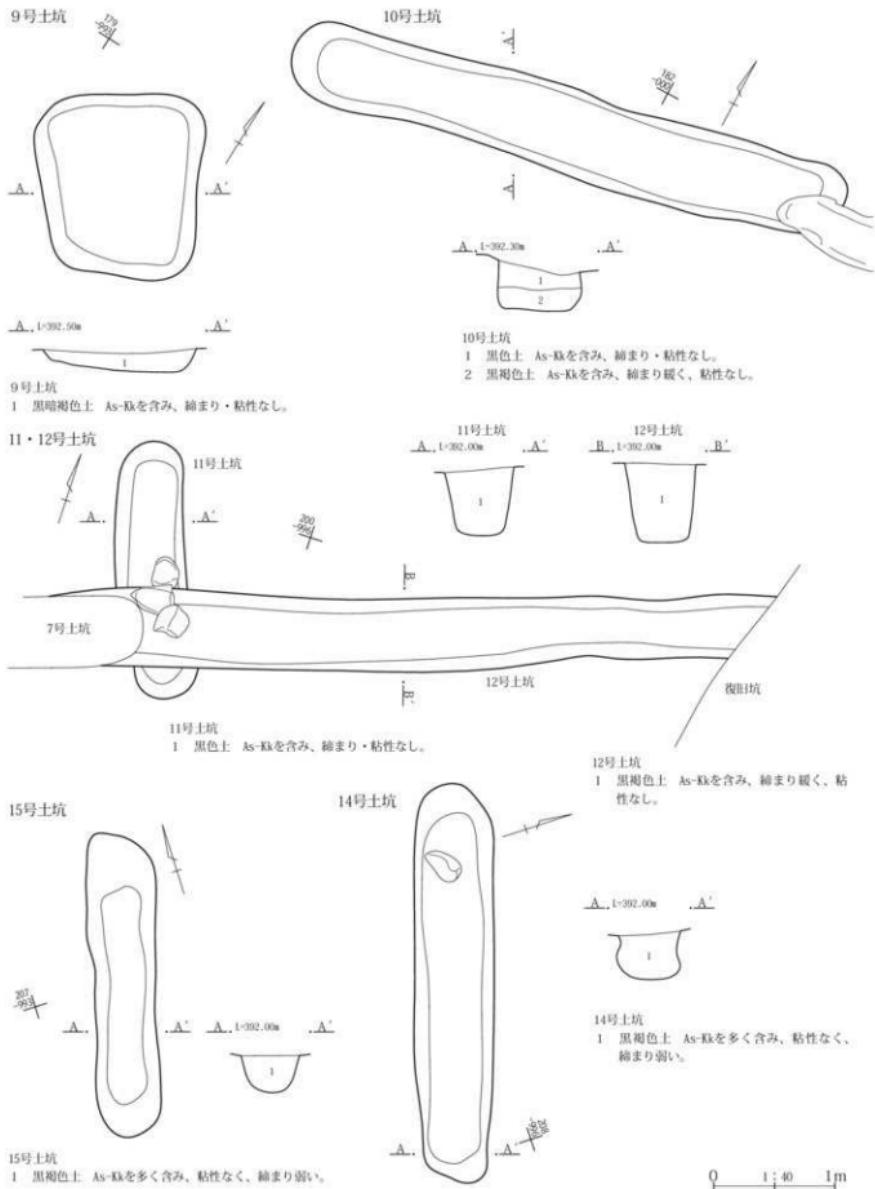
**座標値：**X=61,208・61,209 Y=-92,011～92,013

**検出状況：**8-1区の第2面調査時に検出した。重複する44号土坑との新旧は不明。北壁際に位置するため、土坑の北半は調査区外となる。楕円形を呈すると思われ、

第4章 検出された遺構と遺物

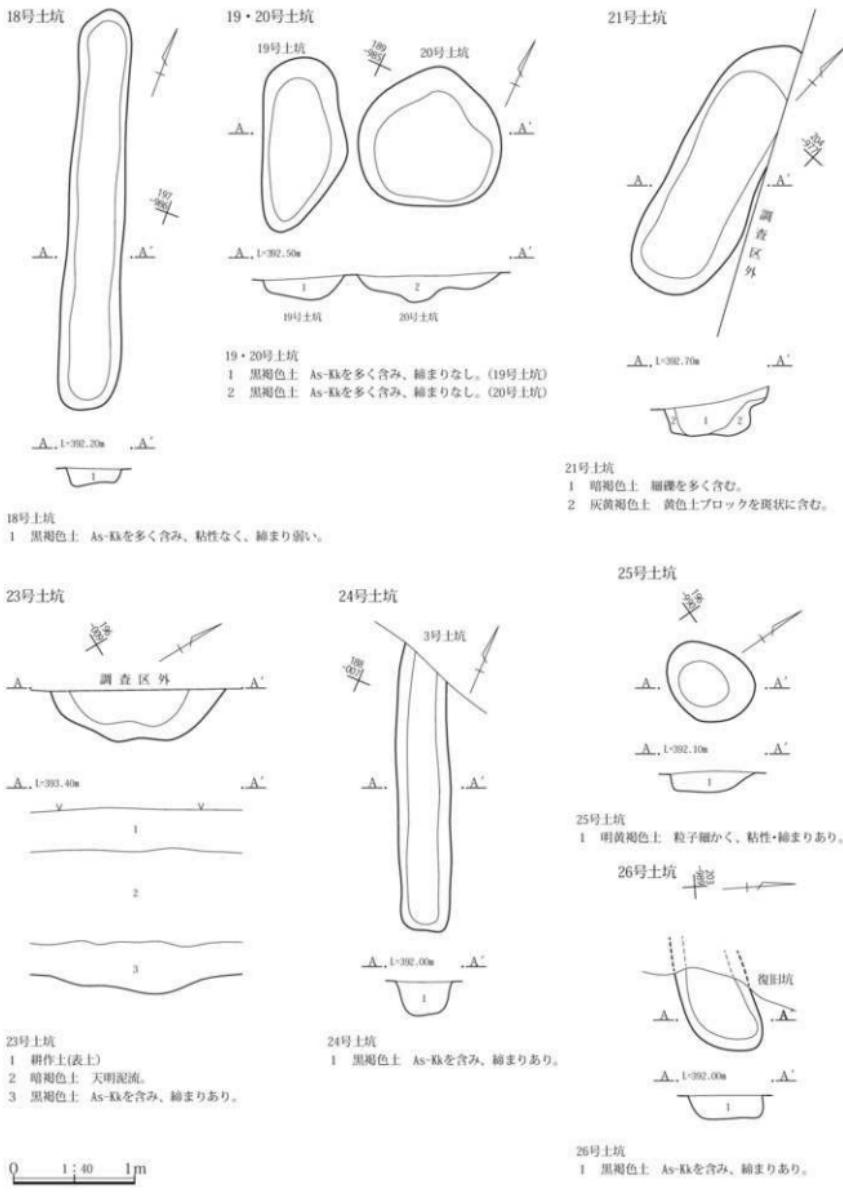


第73図 1～8号土坑 平・断面図



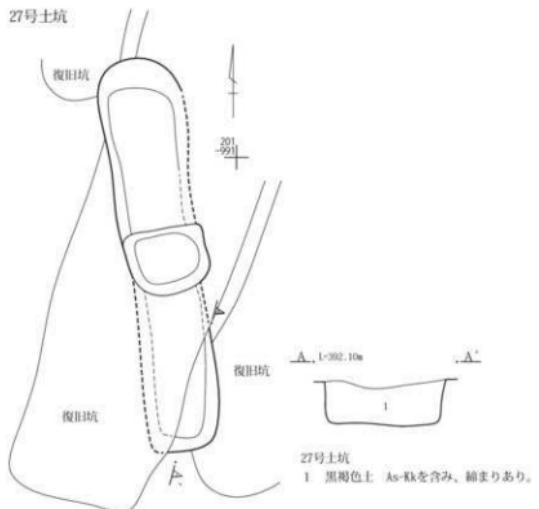
第74図 9～12・14・15号土坑 平・断面図

#### 第4章 検出された遺構と遺物

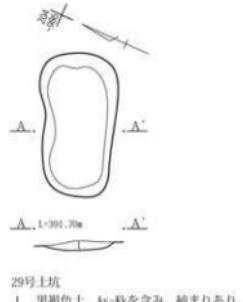


第75図 18～21・23～26号土坑 平・断面図

27号土坑

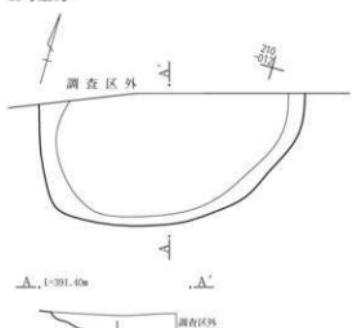


29号土坑



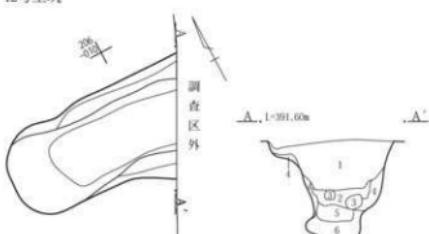
29号土坑  
1 黒褐色土 As-Kkを含み、縫まりあり。

35号土坑



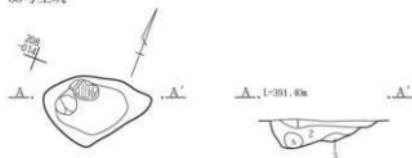
35号土坑  
1 黒褐色土 繊維を含み、縫まりあり。

42号土坑



- 42号土坑  
1 細い黄褐色土 黄褐色土・褐灰色土・黒色土ブロックの混上。  
2 庚黄褐色土 黑色土ブロックを多量に含む。  
3 褐灰色土 褐灰色ブロックが主体。  
4 細い黄褐色土 黑色土ブロックを含む。  
5 庚白色土 浅黄褐色砂質土ブロックを含む。縫まりあり。  
6 黒褐色土 浅黄褐色砂質土ブロックを含み、粘質。

38号土坑

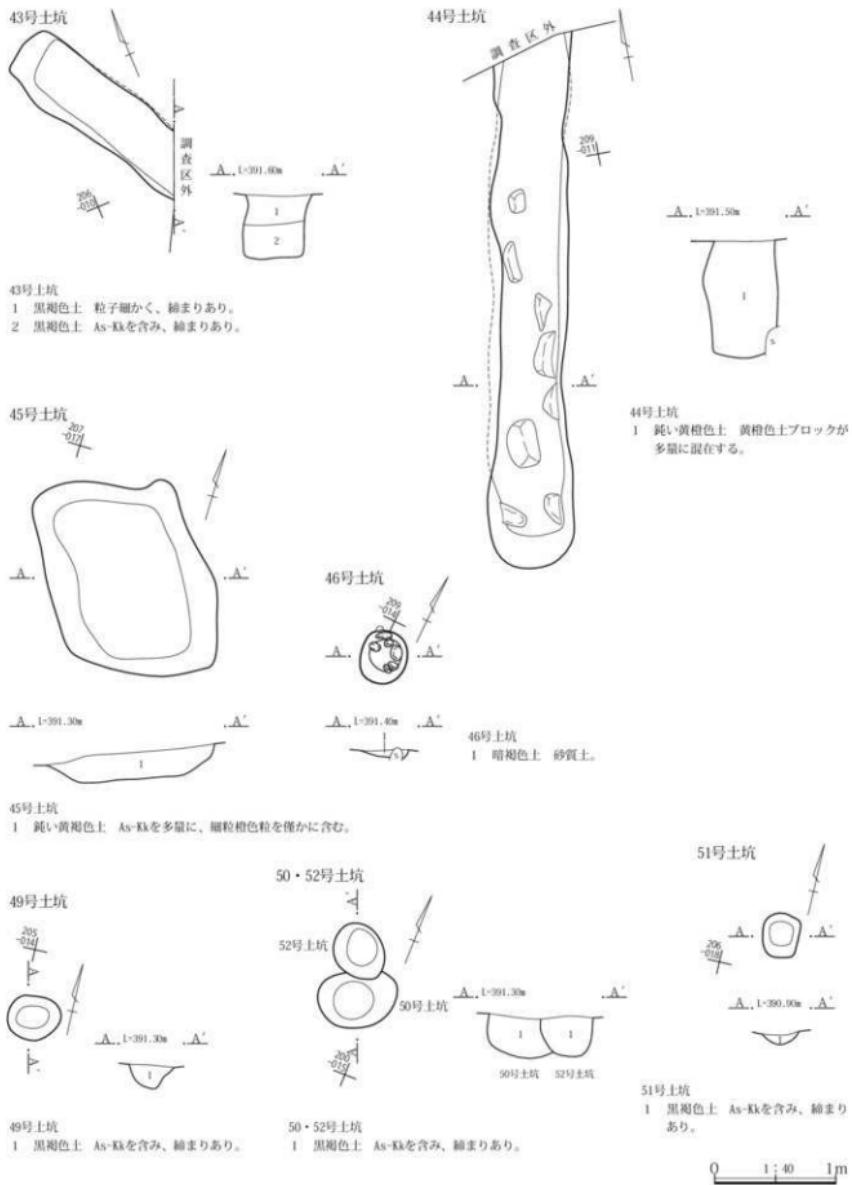


- 38号土坑  
1 黒褐色土 粒子細かく、縫まりあり。  
2 黒褐色土 繊維を含み、縫まりあり。  
3 暗褐色土 粒子細かく、縫まりやや弱い。

0 1:40 1m

第76図 27・29・35・38・42号土坑 平・断面図

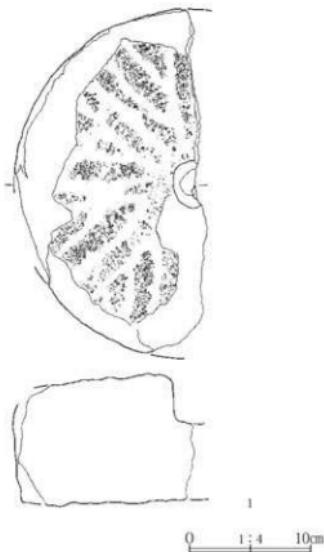
#### 第4章 検出された遺構と遺物



第77図 43～46・49～52号土坑 平・断面図

第16表 38号土坑出土遺物観察表

種類 器 PL.No.	No.	種類 器 PL.53	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第78図 PL.53	1	石製品 石臼(下臼)	38上坑 1/2	径 (28.6) 高 11.4 重 6450	粗粒灰安山岩	下臼1/2破片。摺合わせ部外縁は体部外縁より内側にある。 主溝・副溝は深く、目立て後まもない。分割面に打撃痕はなく、被熱破壊した可能性が大。6分両。	



第78図 38号土坑出土遺物

浅く、壁は斜位に立ち上がり、底面は概ね平坦。遺物の出土はない。なお、底面下には48号土坑が重複しており、その新旧は本土坑の方が新しい。

形状：梢円形か

規模：長軸2.18m 短軸(1.08)m 深さ16cm

長軸方向：N-67°-E

埋没土：黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含まないことから、時期は近世前半期か。

#### 38号土坑（第76・78図、第16表、PL.32・53）

位置：8-1区の北壁中央付近に位置し、4号烟の歓間と重複する。北側に35・46号土坑、東側に44号土坑が接続する。

座標値：X=61,207・61,208 Y=-92,013

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。重複する4号烟との新旧は、本土坑の方が新しいことが遺構確認時に明瞭であった。不整な梢円形を呈し、壁は斜位に緩く立ち上がり、底面は西側が低くなる。遺物には、石臼の半欠品が1点出土している。

形状：不整梢円形

規模：長軸0.89m 短軸0.57m 深さ21cm

長軸方向：N-69°-E

埋没土：1・2層の黒褐色土を主体に、3層の暗褐色土を埋土とする。

遺物：1は粗粒安山岩製の石臼(下臼)の半欠品であり、底面から出土している。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含まないことから、時期は近世前半期か。

#### 42号土坑（第76図、PL.33）

位置：8-1区南東壁の中央や北東寄りに位置し、北側に43号土坑が接続する。

座標値：X=61,204・61,205 Y=-92,009～92,011

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。南東壁際に位置するため、土坑の東半は調査区外となる。長い梢円形を呈すると思われ、浅く、壁は垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦である。遺物の出土はない。

形状：長梢円形か

規模：長軸(1.46)m 短軸0.82m 深さ81cm

長軸方向：N-85°-W

埋没土：1層の鈍い黄褐色土を主体とし、2～5層の灰褐色土、褐灰色土、鈍い黄褐色土、灰白色土を中間に、底面付近では6層の黒褐色土が埋土となる。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含まないことから、時期は近世前半期か。

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 43号土坑（第77図、PL.33）

位置：8-1区南東壁の中央北東側に位置し、南側に42号土坑が接近する。

座標値：X=61,205～61,207 Y=-92,009・92,010

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。南東壁際に位置するため、土坑の南端は調査区外となる。長い楕円形を呈すると思われ、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物が出土している。

形状：長楕円形

規模：長軸1.57m 短軸0.50m 深さ52cm

長軸方向：N-31°-W

埋没土：1・2層に分層されるが共に黒褐色土で、2層にはAs-Kkを含む。

遺物：出土した遺物は、土師器片1点である。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

##### 44号土坑（第77図、PL.33）

位置：8-1区北壁の中央東側の壁際に位置し、西側を35号土坑と重複する。南東側に42・43号土坑が接近する。

座標値：X=61,205～61,209 Y=-92,011・92,012

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。重複する35号土坑との新旧は不明。北壁際に位置するため、土坑の北端は調査区外となる。かなり長い長楕円形を呈し、壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦となる。遺物の出土はないが、大型礫を多く含む。

形状：長楕円形

規模：長軸(4.30)m 短軸0.64m 深さ95cm

長軸方向：N-11°-E

埋没土：黄褐色土ブロックが多量に混在する鈍い黄褐色土を埋土とし、人為的堆積と考えられる。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含まないことから、時期は近世前半期か。

##### 45号土坑（第77図、PL.33）

位置：8-1区の中央北西寄りに位置し、4号烟と重複する。西側に51号土坑が接近する。

座標値：X=61,205・61,206 Y=-92,015～92,017

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。重複する4号烟との新旧は、本土坑の方が新しいことが遺構確

認時に明らかであった。不整な長方形を呈し、壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦となる。僅かに、遺物が出土している。

形状：不整長方形

規模：長軸1.62m 短軸1.30m 深さ22cm

長軸方向：N-30°-W

埋没土：As-Kkを含む鈍い黄褐色土を埋土とする。

遺物：出土した遺物は、土師器片2点である。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

##### 46号土坑（第77図、PL.33）

位置：8-1区北壁の中央付近に位置し、東側に35号土坑、南側に38号土坑が接近する。

座標値：X=61,208 Y=-92,013・92,014

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。小型の円形に近い浅い土坑で、底面はやや擂鉢状となる。礫を多く出土させたが、遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.44m 短軸0.38m 深さ6cm

長軸方向：N-5°-W

埋没土：暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含まないことから、時期は近世前半期か。

##### 49号土坑（第77図、PL.34）

位置：8-1区のほぼ中央に位置し、1-2面で調査した34号土坑の底面下にある。

座標値：X=61,204 Y=-92,013・92,014

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。34号土坑の底面下での検出であることから、本土坑の方が古い。ピット状の小型の土坑で、底面はやや擂鉢状となる。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.43m 短軸0.36m 深さ19cm

長軸方向：N-74°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

## 50号土坑 (第77図、PL.34)

位置：8-1区の南隅付近に位置し、4号烟および52号土坑と重複する。

座標値：X=61,200 Y=-92,014・92,015

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。重複する4号烟との新旧は、本土坑の方が古いことが遺構確認時に明らかであった。52号土坑との重複では、土層確認から本土坑の方が新しい。ピット状の小型の土坑で、底面はやや播鉢状となる。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.65m 短軸0.47m 深さ33cm

長軸方向：N-55°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

## 51号土坑 (第77図、PL.34)

位置：8-1区の北西隅付近に位置し、東側に45号土坑が接する。

座標値：X=61,206 Y=-92,017

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。ピット状の小型の浅い土坑で、底面はやや播鉢状となる。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.37m 短軸0.29m 深さ8cm

長軸方向：N-11°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

## 52号土坑 (第77図、PL.34)

位置：8-1区の南隅付近に位置し、4号烟および50号土坑と重複する。

座標値：X=61,200・61,201 Y=-92,015

検出状況：8-1区の第2面調査時に検出した。重複する4号烟との新旧は、本土坑の方が古いことが遺構確認時に明らかであった。50号土坑との重複では、土層確認から本土坑の方が新しい。ピット状の小型の土坑で、底面はやや播鉢状となる。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸0.50m 短軸0.40m 深さ34cm

長軸方向：N-54°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面と周囲の状況、埋土中にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

## 3. ピット

本報告で最も多くピットが検出されたのが8区であり、調査区全体に広がる。中でも、調査区西半の掘立柱建物が比較的まとまる辺りに集中する。凡そ等間隔に、直線的に並ぶピットもみられるが、掘立柱建物に認定し難いピットも数多く存在する。それらピットの埋没土は、As-Kkを含む黒褐色土ないし黒暗褐色土がほとんどであり、As-Kkを含まないものも僅かにある。大方が、掘立柱建物の埋没土と同様である。

## 4. 煙

## 1号煙 (第79図、PL.41)

8区東半の調査時に検出した煙で、畝間にAs-BとAs-Kkが堆積していた。

位置：8区の南東隅に位置する。

座標値：X=61,181～61,183 Y=-91,970～91,972

検出状況：8区東半の調査時に検出されたが、2ないし3条の溝状となる畝間の上位にAs-Kk、下位にAs-Bが埋没した状態で検出された(PL.41-2を参照)。本来は周囲に広がりをもつと思われるが、詳細は不明。

区画規模：長さ(2.23)m 幅(1.12)m

畝長(2.23)m 畝間間隔60cm前後

畦数1条

畝間方向：N-49°-E

所見・時期：検出面およびAs-Bの一次堆積が埋没土であることから、時期は古代と考えられる。

## 4号煙 (第79図、PL.34)

8-1区第2面の調査で、中世土坑と共に検出した。

位置：8-1区全体に広がり、同じ調査面で検出した多くの土坑と重複する。

座標値：X=61,198～61,208 Y=-92,010～92,018

検出状況：8-1区第2面調査で検出された。畝間方向は第1-1面での3号煙と大きく異なり、南南東から北北

#### 第4章 検出された遺構と遺物

西方向を向き、重複する38・45号土坑より古い。歎間の埋土は、明黄褐色土ブロックを含む暗褐色土である。

区画規模：長さ(10.48)m 幅(6.78)m

歎長(10.48)m 歎間間隔68～76cm前後

畦数9条

歎間方向：N—26°—W

所見・時期：検出土面および重複する土坑との新旧から、

時期は中世と考えられる。

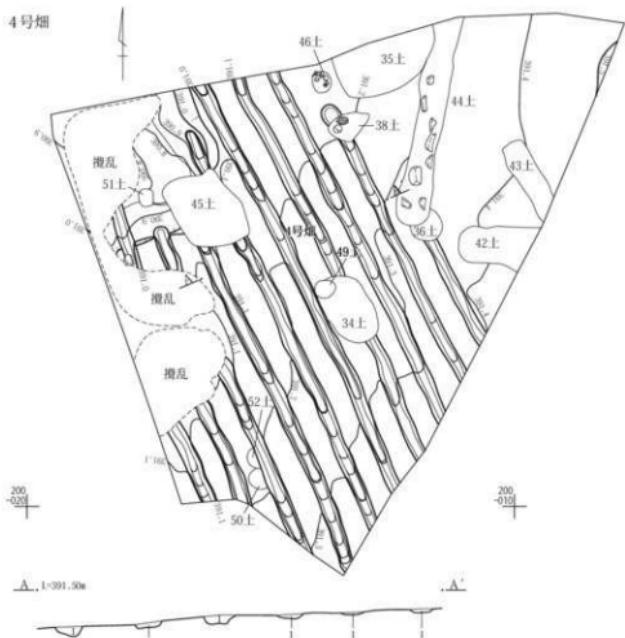
1号烟



1号烟

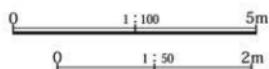
1 黄褐色土 As-Kk軽石を多量に含む。

4号烟



4号烟

1 暗褐色土 明黄褐色土ブロックを含む。



第79図 1・4号烟 平・断面図

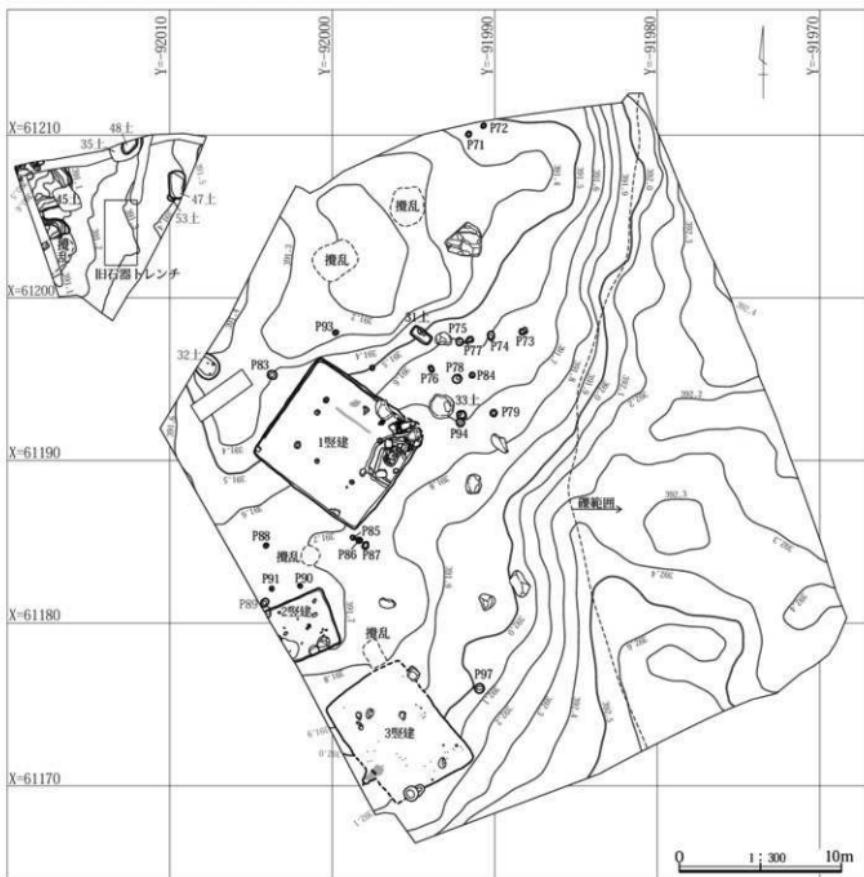
### 第3項 第3面調査

調査は8区東半と西半、そして8-1区に分割して行われた。本調査区は微高地にある点で他の調査区と違いをみせており、8区基本層序IX層の暗褐色土上面ないし中位を遺構確認面として調査した。検出された遺構には、西バイパス・東バイパスを通じて初出となる竪穴建物、そして土坑、ピットであり、古墳時代の集落の跡であつた。遺構確認面からする第3面は、東側ないし南東側が最も高く、一段下った西側ないし北側がやや平坦となり、

その平坦面に竪穴建物等の各遺構が点在する。竪穴建物は8区西側となる平坦面に3棟を確認し、周辺に土坑やピットが点在する。また、8-1区にも土坑は検出されている。

なお、8-1区での第3面調査終了後に、第3面下のローム層への旧石器時代の試掘を行ったが、遺物等の痕跡は確認できなかった。

以下、8区と8-1区を分割せずに、各遺構種ごとに記述する。



第80図 8区第3面 全体図

## 1. 竪穴建物

検出された竪穴建物は計3軒である。8区の西側調査時に検出され、近接した比較的狭い範囲に集中し、しかもほぼ同時期の建物である。

### 1(A・B)号竪穴建物（第81～88図、第17表、

PL.42～45・54・55）

8区西半の調査で検出した3軒の中で、最も大型の竪穴建物である。整理時に床面下を検討した結果、拡張を伴う竪穴建物であることが判明したことから、本報告では拡張後を1A号竪穴建物、拡張前を1B号竪穴建物として記述する。特に、1A号竪穴建物は多くの遺物を出土し、しかも焼失家屋である。また、カマドは石組構造であり、2個体の甕が並列に架かった状態という、極めて稀な残存状態の良さである。

**位置：**8区の中央西寄りに位置する。8区西側となる一段低い平坦面に他の竪穴建物と共にあり、本建物の南側4m程に2号竪穴建物、南側9m程に3号竪穴建物が織まるように配置する。建物の周囲には、土坑やピットが散見される。また、竪穴建物の東側の遺構確認面には、大型の地山礫が数多く露出する。

**座標標：X=61,185～61,196 Y=-91,994～92,004**

**1A号竪穴建物形状：**方形

**1A号竪穴建物規模：**長軸8.30m 短軸7.50m

壁高16～41cm

**1A号竪穴建物長軸方向：**N-53°-W

**1A号竪穴建物床面積：**54.79m<sup>2</sup>

**1A号竪穴建物埋没土：**1・2層の黒褐色土を主に、壁際から下位に3層の暗褐色土と分層できる。壁際出土の炭化材の多くは、この3層中からの出土であり、床面上に出土した炭化材も多い。また、4層とした暗褐色土は、壁周溝を埋める土である。なお、5層は床下土（拡張前の1B号竪穴建物）となるが、5層上面が床面で硬く硬化している。

**1A号竪穴建物床面・壁：**床面はほぼ平坦で、カマド前から中央付近が著しく硬化する。しかし、カマドおよび貯蔵窓の周囲には大型礫や地山礫がある。また、火災建物であるため、床面には數か所の被熱した部分がある。

壁高は16～41cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

なお、カマドの左右壁際には、大型の地山礫がある。

**1A号竪穴建物カマド：**東隅付近のやや北東壁寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-77°-Eを向き、遺構確認面に焚口部天井石および甕の口縁部が確認できた残存状態の良好な石組みカマドである。カマドの左側には巨大な地山礫が露出し、右側にも壁際に大型礫が2石あり、その間の北東壁に斜めにカマドが設けられている（建物の角隅ではない）。カマド燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ短く突き出る。カマドの規模は、全長1.65m、幅0.8mを測る。袖は壁から1.18mほど突出し、両先端に袖石、さらに袖石に架かる天井石を確認した。天井石は、長さ63cm、最大幅42.5cm、厚さ13cm程を測り、大型の平石を横長に使用するが、途中で二つに割れる。両袖石は上端がやや内傾し、焚き口部の間口は幅45cm、高さ23cm前後である。焚き口部底面は著しく被熱し、焚き口部から燃焼部の底面にかけては建物床面より僅かに低くあり、煙道部は燃焼部奥からそのまま緩く斜位に立ち上がり煙出し部となる。カマド燃焼部から煙道にかけての内壁には、両内面に扁平礫を4ないし5石を立て並べてあり、扁平礫の内壁面側は被熱している（右側内壁石の奥は、扁平礫ではなく、建物壁際に位置する大型礫の側面の一部が内壁石に取り込まれ、僅かに被熱している）。煙道部先端の壁石は不明。なお、土層断面からは、鈍い黄褐色土が煙道部天井の構築土として確認されており、崩落していない状態であることが明らかとなった。さらに、袖部の構築にあたっては、内壁石の外側に褐色土を構築土として用いられている。

一方、燃焼部に架かったままで出土した2個体の甕であるが、並列に架けられ、両底部下には支脚石が据えられた状態にあった。ただし、左側の支脚石上には、杯の完形品が逆位に乗せられ、その上に甕の底面が接する状態であり、高さの調節の跡が窺える。

**1A号竪穴建物貯蔵窓：**カマドの右側となる東隅付近の南東壁脇に位置し、貯蔵窓の周囲に土手を有する。土手の規模は、カマド右袖に接するように長軸3.5m、短軸2.1mの楕円形を呈し、土手上面は平坦で幅20～30cm、床面からの高さは5cm前後を測る。土手内にある貯蔵窓は、長軸1.32m、短軸0.78mの楕円形を呈し、深さ52cmを測り、壁および底面は地山礫が露出した状

態にある。底面の平坦な地山礫上面には、6の杯が出土している。埋土は、ロームブロックを少量、焼土粒と炭化粒を多く含む暗褐色土を主体とする。なお、この貯蔵穴および周囲の土手は、本竪穴建物に先行する1B号竪穴建物時の貯蔵穴および土手をそのまま継承していると思われる。

**1A号竪穴建物柱穴：**主柱穴と考えられるP1・3・5・6を検出し、他にP2・4が主柱穴間の軸上にある。主柱穴は円形ないし梢円形で、長軸52～90cm、短軸50～70cm、深さ38～82cmを測る。埋土は黒褐色土を主体とする。

**1A号竪穴建物周溝：**北東および北西壁際に、幅12cm前後、深さ4cm前後の周溝が巡り、埋没土は暗褐色土である。

**1A号竪穴建物床面下：**床面下には掘り込みをもつ。この硬化した床面を形成する床下土は、ロームブロックを斑状に混在させた褐色土であり、全体に固く締まっている。カマド周辺においては、地山礫の露出が目立つ。なお、床下底面には、北西壁と南西壁沿いにL字状となる段が一段高くあること、床面で検出された主柱穴とは別な柱穴の存在、さらにはカマド左側の床面下に焼土範囲が確認されたことから、本竪穴建物の前身となる竪穴建物の存在を整理時に確認した。つまり、後述する1B号竪穴建物の北東と南東壁の位置をそのままに、北西および南西壁を拡張させ、主柱穴、そしてカマドを新たに設営したのが本建物であることが、床面下の調査で判明した。

**1A号竪穴建物遺物：**出土した遺物量は本調査の中で最も多く、特にカマドとその周囲に土器が多く出土し、炭化材も極めて多い。遺物の出土状態であるが、先ずカマド内出土遺物については、先述のようにカマドに並列でかかった状態にあった29・30の2個体の甕、それを支える支脚石上に12の杯が逆位で、他にカマド内埋土中に7の杯と26の甕が出土している。カマド周囲にも多く出土している。カマドの北側となる左袖脇からは、カマド焚口部と地山礫との間の床面上に2の杯、23の甕、24の甕が出土し、左袖奥脇の上位から18の高环の体部が出土している。さらに、右袖脇から貯蔵穴周囲の土手上面には、焚口部右袖の斜め前に5の杯が正位で出土し、同じ土手上の奥部大型礫間に25の甕が

正位で潰れた状態にあり、その口縁部に蓋するように8の杯が入れ子状に出土。そのすぐ南側の土手上面からも、1(内側)・16(外側)の杯が正位で入れ子状に出土している。貯蔵穴土手内側の南東壁際からは14・9・17・3の4個体の杯が、貯蔵穴底面には6の杯が出土している。他に、27・28の甕、19の器台等も床面上からの出土である。また、建物中央の北西側床面上からは32～34の白玉が出土している。

炭化材の出土状態は、北東・北西・南西壁の三方向の壁際に、壁に直行するように長さ1m前後のやや太い削材が間隔を置いて並ぶようになり、その樹種はクリ・エノキ属・クルミ属・ヤナギ属・トネリコ属からなる。また、三方向の壁際炭化材の内側には、壁に並行するような長い削材の炭化材があり、樹種はエノキ属が多い。壁際の炭化材の出土状態から、高さ1m程の壁立ちの竪穴建物である可能性があろう。

出土遺物として、土器31点と石製品3点を図示した。1～9は土師器の内斜口縁の杯で、1～4の内面にはヘラ磨きを施す。11～16は土師器の内反する口縁の杯で、11・12・15の内面にはヘラ磨きを施す。18は土師器の高杯で、21・22は須恵器の高杯19は土師器の器台。24は土師器の甕。23は土師器の甕で、胴上位に放射状のヘラ磨きを施す。25は土師器の甕で、口縁部内面と胴部外面上半にヘラ磨きが施される。27は土師器の甕で、口縁部内面は横位のヘラ磨き、胴部内面は斜位ヘラ削り後に縦位のヘラ磨きを施す。29～31は土師器の甕。

32～34は石製品の白玉で、何れも蛇紋岩製で、32は径0.5cm、厚さ0.2cm、孔径2mm、重さ0.1g、33は径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径2mm、重さ0.1gを測り、共に側面に線条痕が認められる。34はやや大きく、径0.6cm、厚さ0.4cm、孔径2mm、重さ0.2gを測り、線条痕はなく光沢を帯びる。

未掲載遺物には、土師器片が多く、須恵器片が僅かに有る。

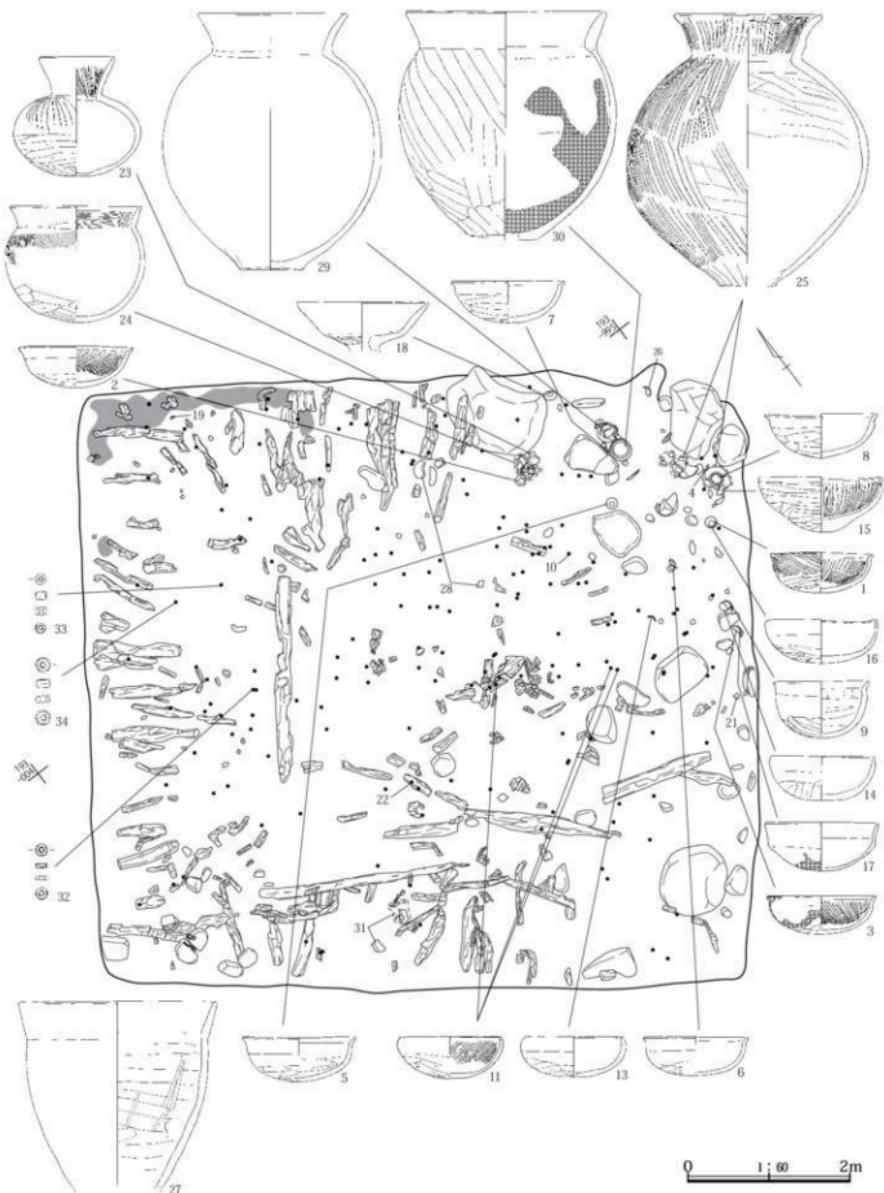
#### 1B号竪穴建物形状：方形

**1B号竪穴建物規模：**長軸8.00m 短軸7.14m

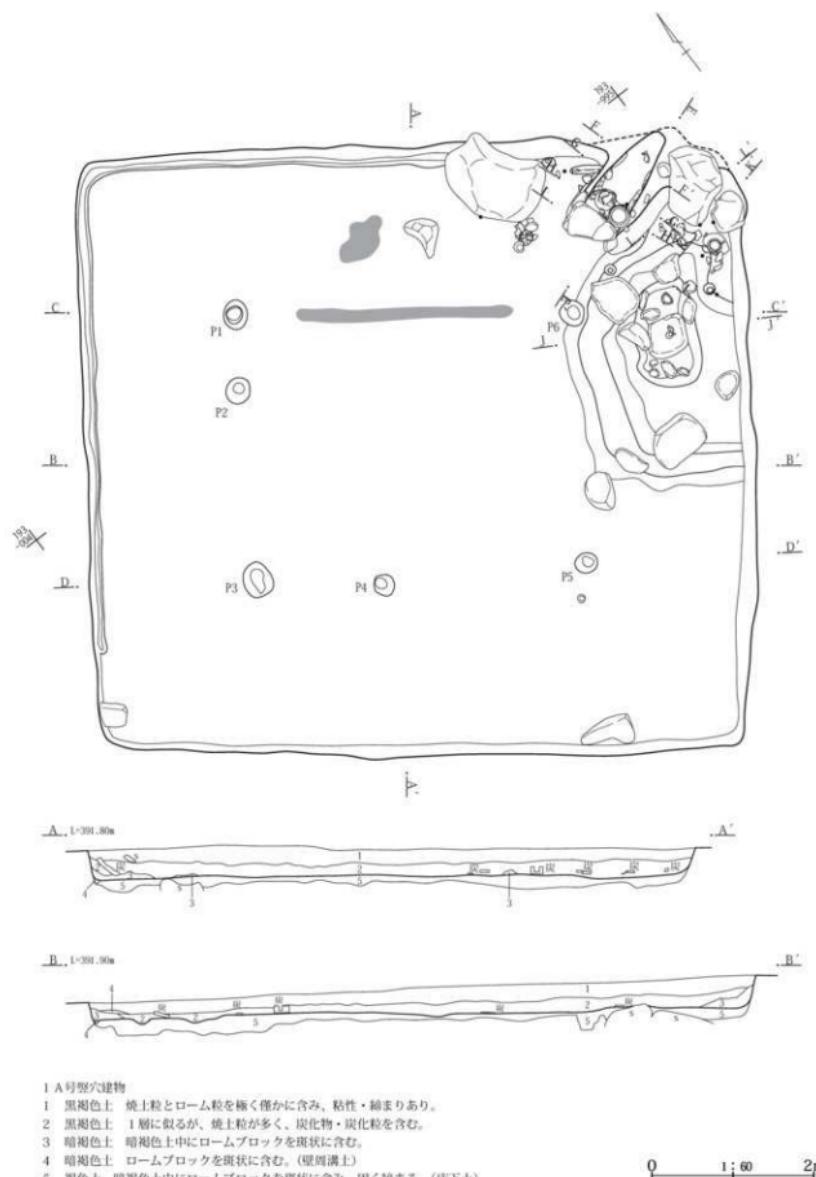
壁高16～41cm

**1B号竪穴建物長軸方向：**N-53°-W

**1B号竪穴建物床面積：**51.18m<sup>2</sup>



第81図 1A号堅穴建物 遺物・炭化材出土分布図



第82図 1 A号型穴建物 床面 平・断面図

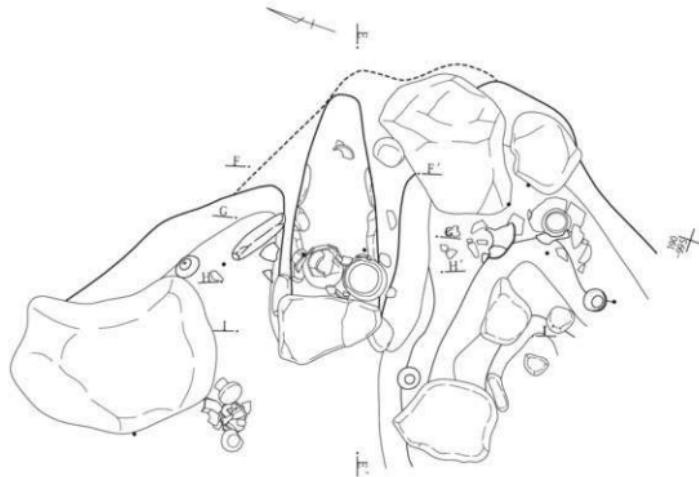


- 1 A号型穴建物K-K'  
1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を含み、締まりあり。  
2 暗褐色土 ローム粒を僅かに含む。

- L-L'  
1 細い黄褐色土 ロームブロックを斑状に含み、固く締まる。(床下上)  
2 暗褐色土 ローム小ブロックと焼土粒を少し含み、粘性あり。  
3 褐色土 ローム粒を多く含むが堅ではない。

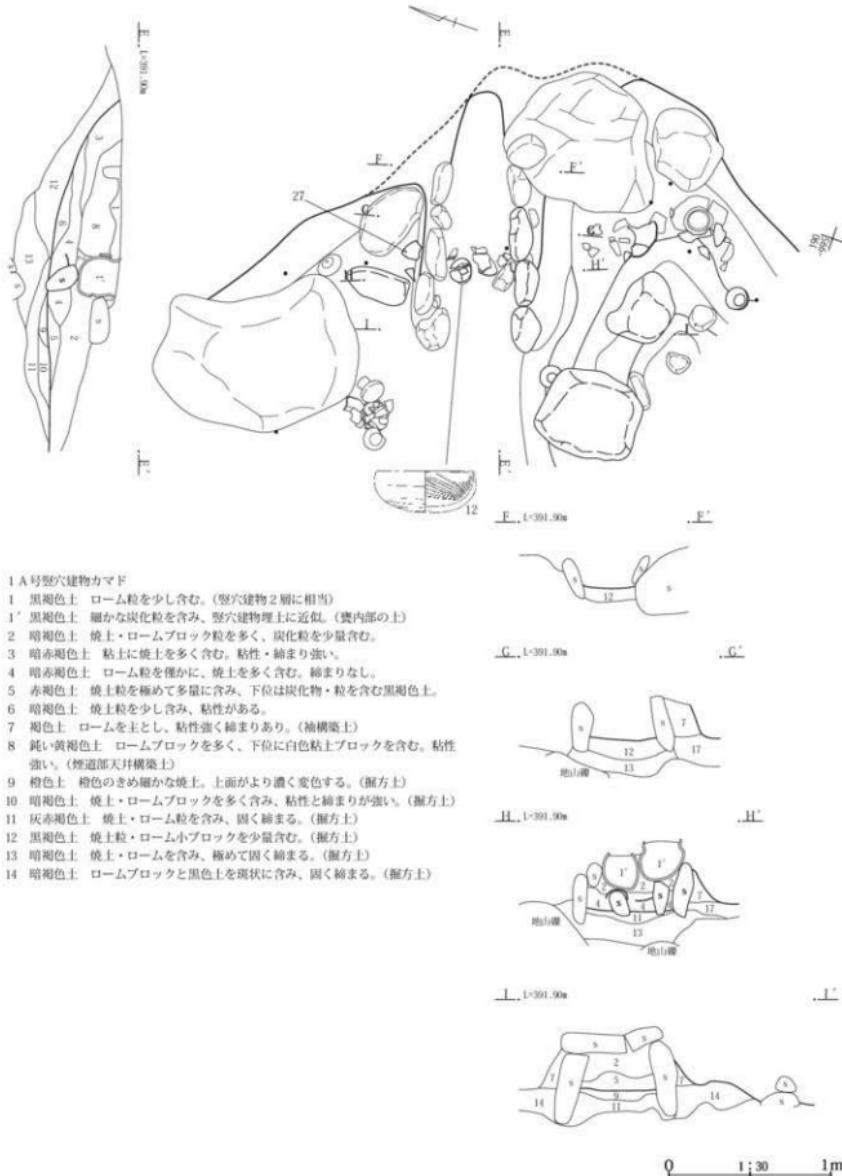
0 1:60 2m

カマド遺物出土状態

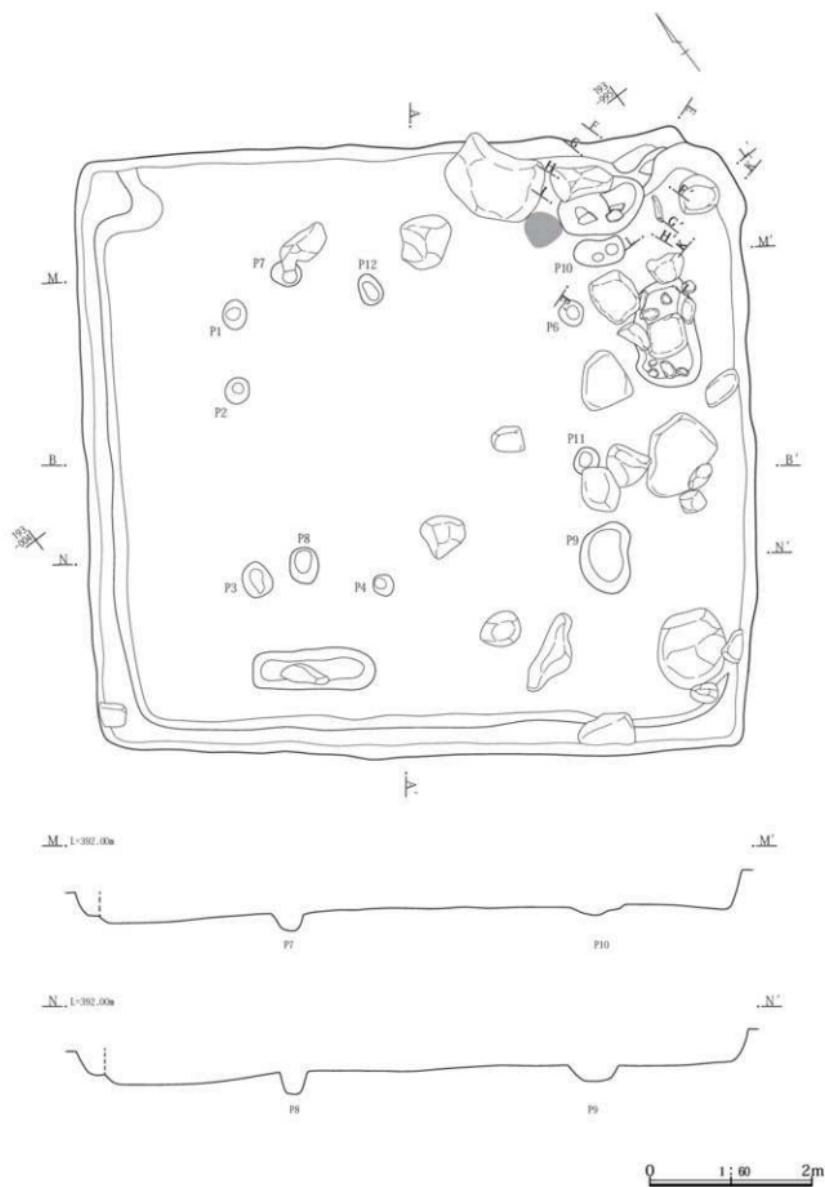


0 1:30 1m

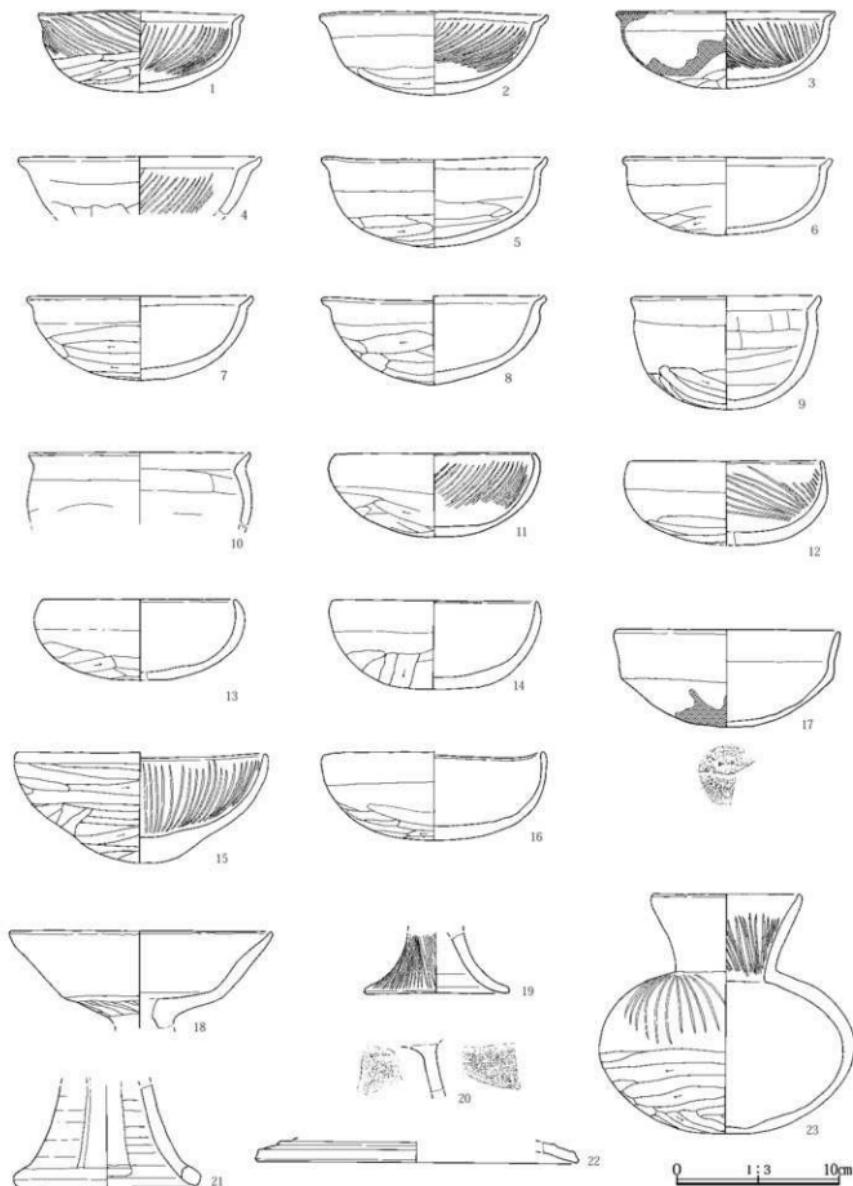
第83図 1A号竪穴建物 床面・貯蔵穴 断面図、カマド遺物出土状態 平面図



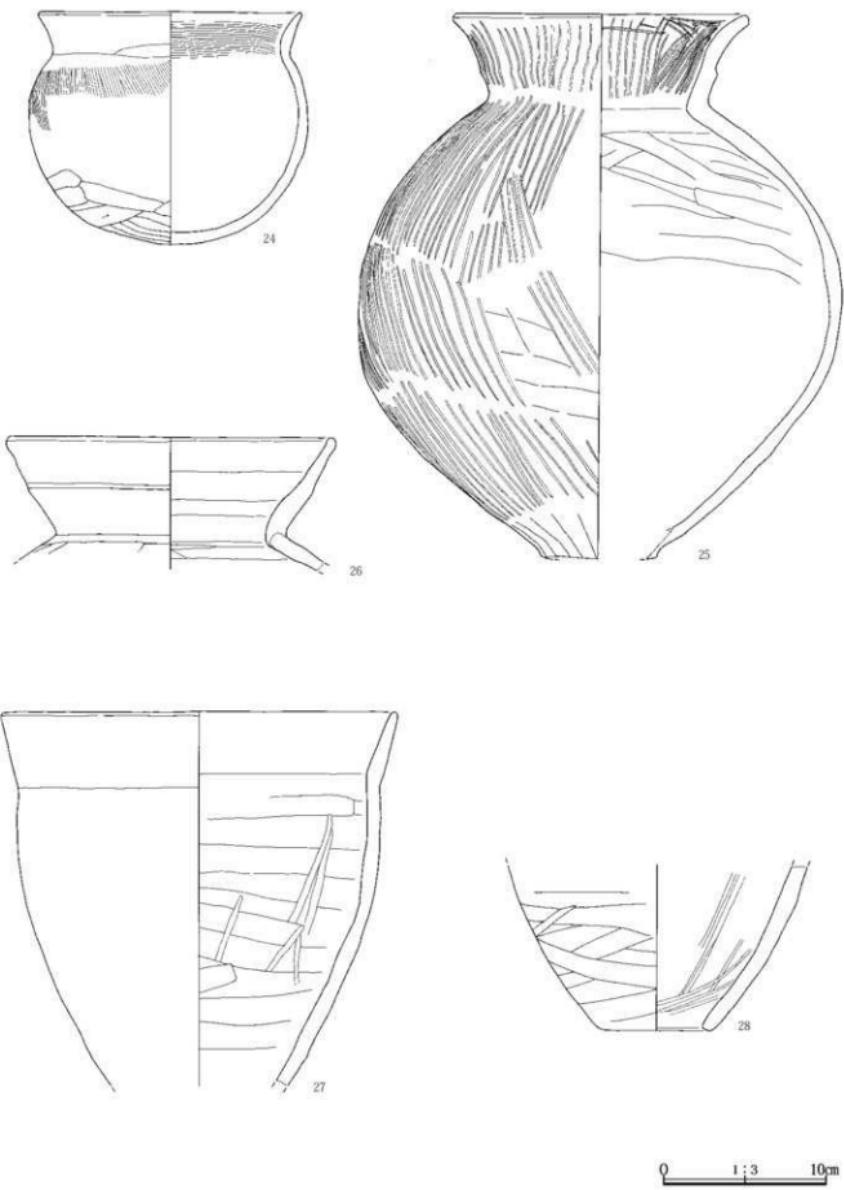
第84図 1A号竖穴建物 カマド 平・断面図



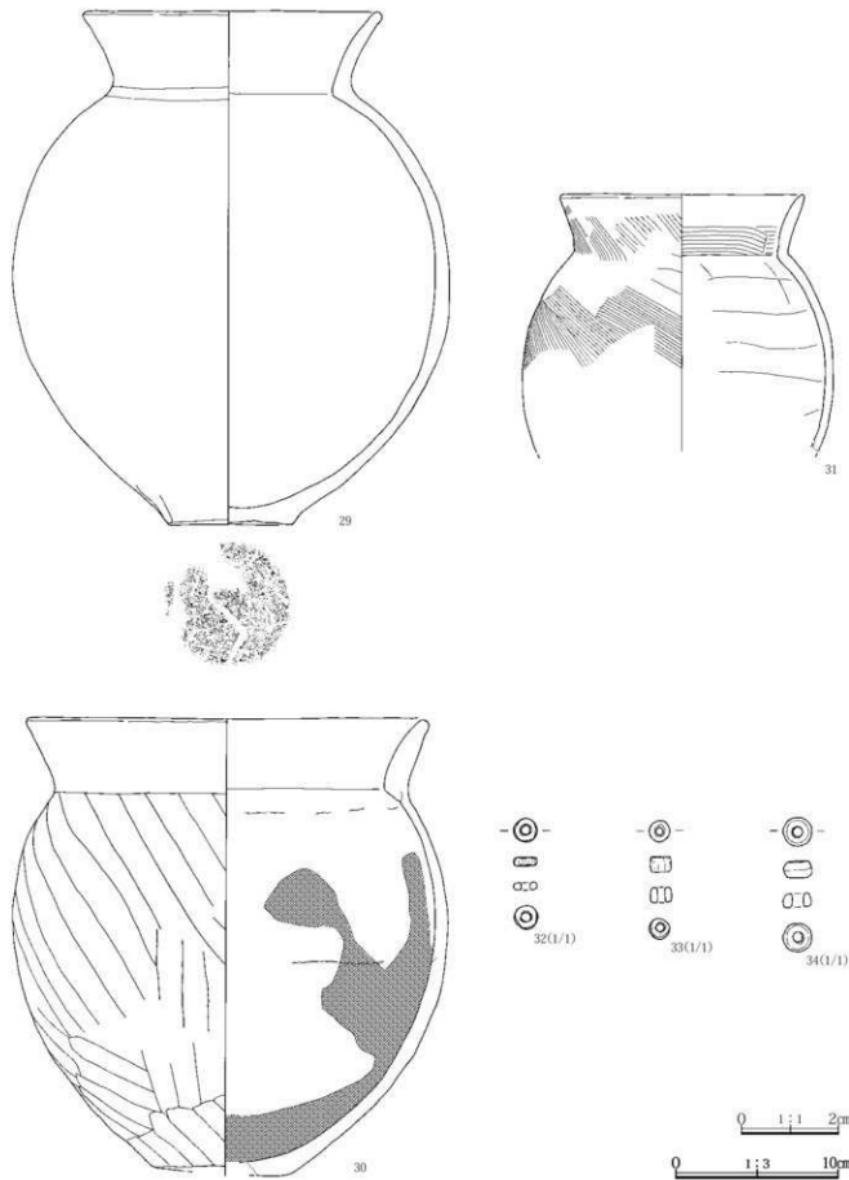
第85図 1 A号竪穴建物床面下・1 B号竪穴建物 平・断面図



第86図 1A号竪穴建物出土遺物(1)



第87図 1A号竪穴建物出土遺物(2)



第88図 1A号竪穴建物出土遺物(3)

#### 第4章 検出された遺構と遺物

第17表 A号堅穴建物出土遺物觀察表

種類 PL.No.	器種 No.	出上位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・蓋等	成形・整形の特徴	備考
			口	高	幅			
第8684 PL.54	1	土師器 杯	貯藏穴上手 ほぼ完形	口 高	12.4 4.9		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から体部上半は横ナデ後左傾のヘラミガキ、体部下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から口縁部にや右傾の放射状ヘラミガキ。
第8684 PL.54	2	土師器 杯	カマド左袖脇 ほぼ完形	口 高	13.9 5.1		細砂粒/良好/に赤 い赤褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から口縁部に右傾の斜放射状ヘラミガキ。
第8684 PL.54	3	土師器 杯	貯藏穴上手 1/2	口 高	13.4 4.7		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部に左傾の斜放射状ヘラミガキ。外側の一部にスヌークと黄褐色土が付着。
第8684 PL.54	4	土師器 杯	貯藏穴上手 口縁部～体部片	口 高	14.8		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面は体部に右傾の斜放射状ヘラミガキ。
第8684 PL.54	5	土師器 杯	貯藏穴上手 ほぼ完形	口 高	13.8 5.5		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部下にヘラナデ。
第8684 PL.54	6	土師器 杯	貯藏穴 3/4	口 高	12.6 4.7		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。
第8684 PL.54	7	土師器 杯	カマド ほぼ完形	口 高	13.8 5.1		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第8684 PL.54	8	土師器 杯	貯藏穴上手 ほぼ完形	口 高	13.7 5.4		細砂粒・粗砂粒(褐 色)/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上位がナデ、中位から底部は手持ちヘラ削り。内面は器皿が荒れており整形不鮮明。
第8684 PL.54	9	土師器 杯(楕)	貯藏穴上手 1/2	口 高	11.4 6.9		細砂粒・粗砂粒/ 良好/に赤い白粧 地	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。
第8684 PL.54	10	土師器 杯(楕)	フク土 口縁部～体部片	口 高	13.4 13.7		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半は手持ちヘラ削り。内面全体はヘラナデ。
第8684 PL.54	11	土師器 杯	フク土 1/2	口 高	12.2 13.1	5.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部から口縁部に右傾の斜放射状ヘラミガキ。
第8684 PL.54	12	土師器 杯	カマド 4/5	口 高	11.8 12.5	5.2	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部から口縁部に左傾の斜放射状ヘラミガキ。
第8684 PL.54	13	土師器 杯	貯藏穴上手 1/4	口 高	11.8 13.0	4.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半は手持ちヘラ削り。
第8684 PL.54	14	土師器 杯	貯藏穴上手 4/5	口 高	12.5 13.0	5.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は器皿が荒れており整形不鮮明。
第8684 PL.54	15	土師器 杯	貯藏穴上手 ほぼ完形	口 高	15.3 15.6	6.7	細砂粒/良好/橙	底盤を突起状に造る。口縁部は横ナデ、口縁部から体部・底盤部は丁寧なヘラ削り。内面は底部中央から口縁部に向け放射状ヘラミガキ。
第8684 PL.54	16	土師器 杯	貯藏穴上手 ほぼ完形	口 高	13.5 13.9	5.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は器皿が荒れており整形不鮮明。
第8684 PL.54	17	土師器 杯	貯藏穴上手 1/2	口 高	13.8 13.2	3.6 5.9	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り後ナデ(一部器面が薄く剥落)。底盤は手持ちヘラ削り。内面は体部にヘラミガキが施されているが、器皿底盤のため判別不明。
第8684 PL.54	18	土師器 杯	カマド左袖脇 高杯	口 高	16.1 9.6		細砂粒/良好/明赤 褐	脚部上端に突起状のホゾを作り杯部を差し込むよう接合。杯部は口縁部が横ナデ、接下はヘラナデ。
第8684 PL.54	19	土師器 高杯	床面 脚部下半片	脚 8.8			細砂粒/良好/橙	外側は放射状ヘラミガキ。内面はヘラナデ。
第8684 PL.54	20	須恵器 高杯	フク土 脚部上位片				細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。脚端部は丸く作り。透孔4方に配置か。
第8684 PL.54	21	須恵器 高杯	貯藏穴上手 脚部上片	脚 11.0			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。脚端部は丸く作り。透孔4方に配置。
第8684 PL.54	22	須恵器 高杯	フク土 脚部端片	脚 9.8			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転は右回り。脚端部上に段を作る。
第8684 PL.54	23	土師器 壺	カマド左袖脇 ほぼ完形	口 高	9.0 15.8	14.6	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部と脚部上半は放射状ヘラミガキ、口縁部は器皿摩滅のため単位不明、脚部下半から底部はヘラ削り。内面は口縁部に放射状ヘラミガキ。
第8784 PL.54	24	土師器 甕	カマド左袖脇 ほぼ完形	口 胸	15.9 17.2	14.2	細砂粒/良好/橙	口縁部から頭部は横ナデ、頭部は上位がハケメ(1cm当たり6本)、中位がナデ、下位から底部がヘラ削り。内面は口縁部が横ナデ、口縁部がハケメ、底部から脚部はヘラナデ。
第8784 PL.54	25	土師器 甕	貯藏穴上手 3/4	口 胸	17.7 29.4	7.0 33.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部はヘラミガキ、頭部はヘラ削り後ヘラミガキ。底部はヘラ削り。内面は口縁部にヘラミガキ、底部から脚部はヘラナデ、脚部下半は器皿摩滅のため単位不明。
第8784 PL.55	26	土師器 甕	カマド左袖脇 口縁部～脚部片	口 高	20.0		細砂粒/良好/橙	口縁部は中程に段を作る。口縁部から頭部は横ナデ、脚部はヘラ削り。内面は脚部にヘラナデ。

種 図 PL.No.	No.	種 類 器 器	出上位置 残 存 率	計測値		加工/焼成/色調 石 材 / 材 料 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第878 PL.55	27	土師器 甕	床面 口縁～胴部下位 片	口 25.0		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ、器面摩滅のため単位不明。内面はヘラナデ後一部にヘラミガキ。	30026と同一か?
第878 PL.55	28	土師器 甕	床面 底 底 底	6.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	胴部は外面がヘラミガキ。内面はヘラナデ後一部にヘラミガキ。	
第888 PL.55	29	土師器 甕	カマド 口縁部3/4欠 脚	口 17.8	底 31.5	7.7 良好/に赤い黄柏	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後ナデか。底部はヘラ削り。内面は脚部にヘラナデ、器面摩滅のため単位不明。	
第888 PL.55	30	土師器 甕	カマド ほぼ完形	口 脚 26.5 26.6	底 高 底 高	34.1 8.6 良好/に赤 い黄柏	口縁部は横ナデ、胴部は上半がハケメ、下半がヘラ削り後ヘラナデ。底部はヘラ削り。内面は底部から脚部にヘラナデ、器面摩滅のため単位不明。	内面脚部に煤 が付着。
第888 PL.55	31	土師器 甕	床面 口縁部～胴部中 位	口 14.7 脚 19.0	0	0 厚 重	細砂粒/良好/に赤 い黄柏	口縁部は上半が横ナデ、下半から脚部はハケメ(1cm当た り4~6本)。内面は口縁部上半が横ナデ。下半は木目の 残るヘラナデ、脚部はヘラナデ。
第888 PL.55	32	石製品 白玉	床面 完形	径 0.5	厚 重	0.2 0.1	蛇紋岩	表面面とも略平坦、体部は丸味を帯び、浅い窓位線条痕が 残る。孔径は2mm弱で、極めて薄い作り。
第888 PL.55	33	石製品 白玉	床面 完形	径 0.5	厚 重	0.3 0.1	蛇紋岩	表面面とも略平坦だが、下面孔側平面は部分的に浅くU 字状に窪む。体部には軽い窓位線条痕が残る。孔径は2mm 弱。
第888 PL.55	34	石製品 白玉	床面 完形	径 0.6	厚 重	0.4 0.2	蛇紋岩	表面面とも平坦、体部は丸味を帯び鼓状を呈す。体部線条 痕はほとんど見られず、光沢を帯びる。光景は2mmほど。

**1B号竪穴建物埋没土：**拡張された1A号竪穴建物により不明。

**1B号竪穴建物床面・壁：**拡張された1A号竪穴建物により多くは不明であるが、床下の底面の状況から、床面位置は1A号竪穴建物の床面とほぼ同じと考えられ、地山礫の露出も同様であったものと考えられる。

**1B号竪穴建物カマド：**詳細は不明であるが、1A号竪穴建物のカマド左側床面下に確認された焼土範囲が本建物のカマドの痕跡と考えられることから、北東壁の東隅に寄った位置にあり、カマド左脇には地山礫がある。確認された焼土範囲は、径50cm前後で北東壁の内側にあり、焚き口部から燃焼部にかけての底面と考えられ、その延長線上に煙道が付随したものと推定される。しかし、カマドではない可能性(?)も捨てきれない。

**1B号竪穴建物貯蔵穴：**先の1A号竪穴建物と位置・規模共に同じであり、カマドの右側となる東隅付近の南東壁脇で、貯蔵穴の周囲に土手を有する。その状況は、建物拡張後となる1A号竪穴建物にそのまま継承され

たことを物語る。

**1B号竪穴建物柱穴：**1A号竪穴建物床面上には計6基の柱穴(主柱穴はP1・3・5・6)を検出していたが、本竪穴建物に関わる柱穴は床下面底面において、P7～12の計6基を検出した。この内、P7～10が主柱穴として方形に組まれる。これら主柱穴は梢円形を呈し、長軸45～86cm、短軸32～58cm、深さ10～28cmを測る。埋土は黒褐色土を主体とする。

**1B号竪穴建物床面下：**床面下の底面はローム層に達し、凹凸が著しく、周囲が深く中央部が高い状態にある。さらに、南東半の壁寄り程地山礫が多く露出する。

**所見・時期：**拡張を伴う竪穴建物で、主柱穴や貯蔵穴の配置、床下面の段差の状態から、北東壁および南東壁をそのままに、他の二方向の壁を拡張させて改築した建物が1A号竪穴建物であり、拡張前となる当初の建物が1B号竪穴建物である。また、出土した炭化材の状況から、1A号竪穴建物は焼失家屋であり、壁際の炭化材は壁材の可能性が高い。なお、1A号竪穴建物

#### 第4章 検出された遺構と遺物

の時期は、出土土器から古墳時代(5世紀中葉頃)と考えられ、石組カマドをもつ竪穴建物としては極めて古い例と言えよう。

##### 2号竪穴建物 (第89・90図、第18表、PL.45・56)

8区西半の調査で検出した3軒の中で、最も小型の竪穴建物である。調査区の壁際に位置することから、竪穴建物の西壁を検出できていない。結果、カマドの有無については不明。

**位置：**8区の南西壁際に位置する。8区西側となる一段低い平坦面に他の竪穴建物と共にあり、本建物の北側4m程に1号竪穴建物、南東側2.5mに3号竪穴建物が近接する。建物の周囲には、土坑やピットが僅かに散見される。また、竪穴建物内南側の遺構確認面には、大型の地山礫が2石露出する。

**座標標：**X=61,177 ~ 61,182 Y=-91,999 ~ 92,004

**形状：**不明

**規模：**長軸3.70m 短軸(3.54)m

壁高14 ~ 22cm

**長軸方向：**N-26°-W

**床面積：**(11.96) m<sup>2</sup>

**埋没土：**1・2層と壁際の3層(黒褐色土)ないし4層(暗褐色土)を主に、分層できる。床面付近には、部分的にはあるが炭化物の集中箇所がある。また、5層とした焼土ブロックを多量に含む暗褐色土、6層とした褐色ブロックを混在する黒褐色土は、カマドに絡む土層の可能性もある。なお、7層上面が床面となり、固く硬化している。

**床面・壁：**床面はほぼ平坦となるが、床面上には地山礫が露出する箇所が点在する。また、土層断面でのカマドに絡む土層付近となる建物南西部の床面は、著しく硬化する。

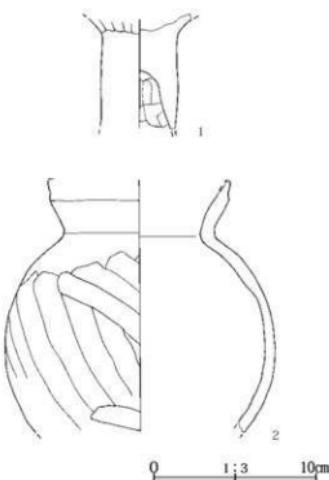
壁高は遺構確認面から14 ~ 18cm、南西壁断面で32 ~ 40cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

**カマド：**詳細は不明である。先述の土層断面にみる5・6層、床面の硬化範囲がカマドに絡むと想定すれば、カマドの想定位置は建物南西壁の南寄りに存在する可能性が高い。

**貯蔵穴：**調査では検出されていない。

**柱穴：**検出されていない。

**床面下：**床面下に掘り込みをもつ。床面を形成する床下土は、褐色土ブロックを含む鈍い黄褐色土であり、全体に締まっている。底面の状況は、地山礫の露出が目立ち、凹凸が多い。なお、床下底面に2基の床下土坑を確認した。床下土坑1は、床下底面の中央南西寄りに位置し、長軸0.62m、短軸0.5m、深さ38cmの楕円形を呈する。床下土坑2は、床下底面の中央北西寄りに位置し、長軸1.05m、短軸0.5m、深さ24cmの楕円形を呈する。

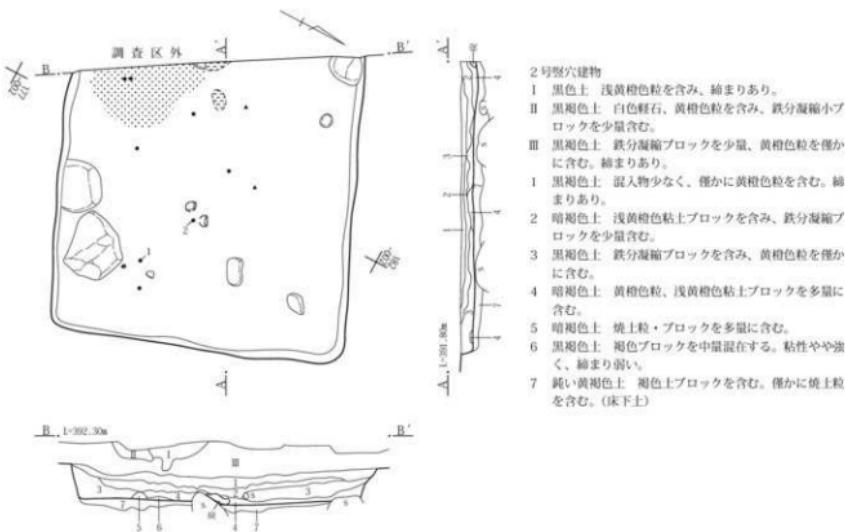


第89図 2号竪穴建物出土遺物

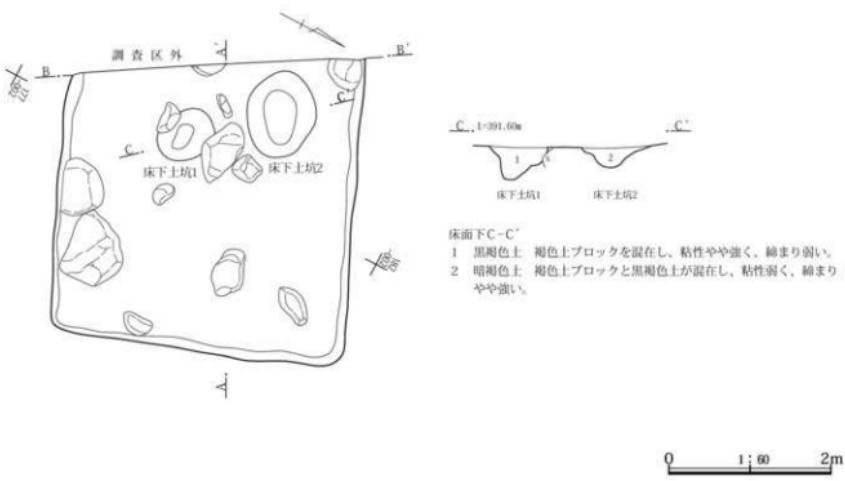
第18表 2号竪穴建物出土遺物観察表

種 国 PL.No.	No.	種 類 器 物	出土位置 残 存 率	計画値	胎土・燒成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第89図 PL.56	1	土師器 高杯	床面 脚部上位片		細砂粒/良好/明赤 褐	杯部との接合方法不明。外面はナデ、内面はヘラナデ。	
第89図 PL.56	2	土師器 壺	床面 口縁～脚部下位 片	頭 9.4 脚 16.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にふい黄粘	口縁部中程に段を作る。口縁部は横ナデ、脚部上位はナデ、 中位から下位はヘラ削り。内面は脚部にヘラナデ、器面摩 滅のため単位不明。	

床面



床面下



第90図 2号竖穴建物 床面・床面下 平・断面図

#### 第4章 検出された遺構と遺物

**遺物**：出土した遺物はかなり少なく、そのほとんどが埋土中からである。

図示した遺物はいずれも土師器で、1は高環の脚部であり、2は壺の半完形品である。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、出土土器から、時期は古墳時代(5世紀中葉頃)と考えられる。

##### 3号竪穴建物 (第91・92図、第19表、PL.46・56)

検出した3軒の竪穴建物の中で、調査区の最も南西に位置する。建物の床面は浅く、遺構確認面とほぼ同じ位置にあったことから、残存状況は極めて悪い。また、南西壁の南寄り付近に焼土範囲を確認したことから、カマドの痕跡と判断した。

**位置**：8区南西隅の壁際に位置する。一段低い平坦面に他の竪穴建物と共にあり、本建物の北西側2.5mに2号竪穴建物、北側9.0m程に1号竪穴建物が接する。建物の周囲には、ピットが僅かに検出されている。また、竪穴建物北の北隅付近には、遺構確認時より大型の地山礫が露出する。

**座標値**：X=61,169～61,177 Y=−91,991～−92,000

**形状**：長方形

**規模**：長軸7.84m 短軸5.76m

壁高 不明

**長軸方向**：N−38°−W

**床面積**：41.41m<sup>2</sup>

**埋没土**：建物の床面を遺構確認面に近い位置で確認したため、埋没土の詳細は不明。記録した土層断面図は床下の状況図であり、1層の黒褐色土は床下土である。

**床面・壁**：床面はほぼ平坦となるが、床面上には地山礫が露出する箇所が点在する。また、南西壁の南寄り付近に、カマドの痕跡と考えられる焼土範囲を確認した。壁については不明。

**カマド**：詳細は不明である。カマドの痕跡と考えられる焼土範囲を確認したことから、カマドは建物南西壁の南寄りに位置する。焼土範囲の主たる部分は、幅45cm程で壁の内側にあり、その中央部から土師器の壺の胸部片が出土していることから、燃焼部の痕跡と考えられる。煙道部は、燃焼部奥となる窓の外側に突出するが、詳細は不明。なお、カマド掘方として、僅かに掘り込みを確認した。

**野蔵穴**：床面では検出できなかったが、床面下の調査で確認できた。カマドの右側となる建物南隅付近の壁際に位置し、長軸1.06m、短軸0.82mの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。底面には、地山礫が露出する。黒褐色土を埋没土とする。

**柱穴**：床面では検出できなかったが、床面下の調査で数基のピットを確認した。しかし、主柱穴とは異なる。

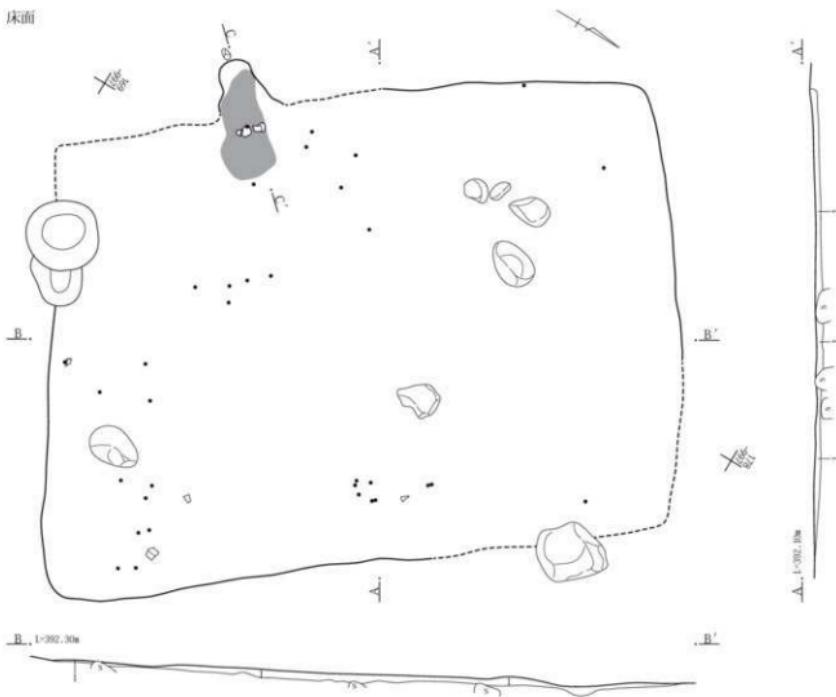
**床面下**：床面下に掘り込みをもつ。床面を形成する床下土は、混入物の少ない黒褐色土で、全体に綿まつている。底面の状況は、凹凸が多く、地山礫の露出が目立つ。また、床下底面に床下土坑を1基確認した。床下底面の東隅付近に位置し、長軸0.8m、短軸0.68m、深さ42cmの楕円形を呈する。土坑内からは1の杯が出土し、床下土と同じ黒褐色土を埋没土とする。

**遺物**：出土した遺物は少なく、床面上ないし焼土範囲内(カマド内)からの出土が大半で、床下土坑内からの出土もある。

図示した遺物はいずれも土師器で、1は床下土坑から出土した半完形の环。2は長頸壺の口縁部片である。3は壺の口縁部から胴部上半である。

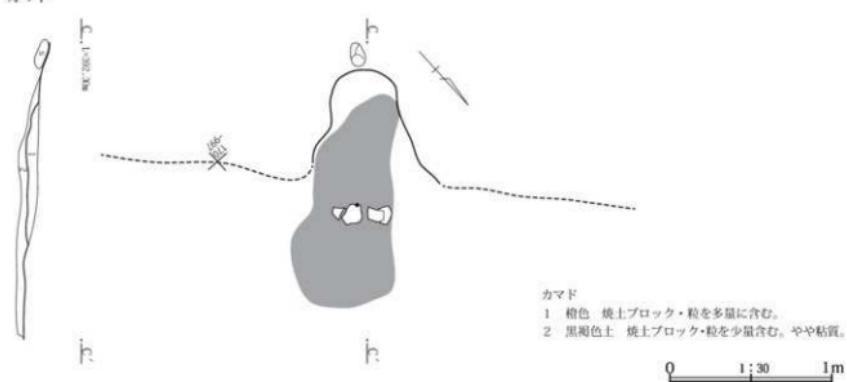
**所見・時期**：検出面と周囲の状況、出土土器から、竪穴建物の時期は古墳時代(5世紀中葉頃)と考えられる。

床面



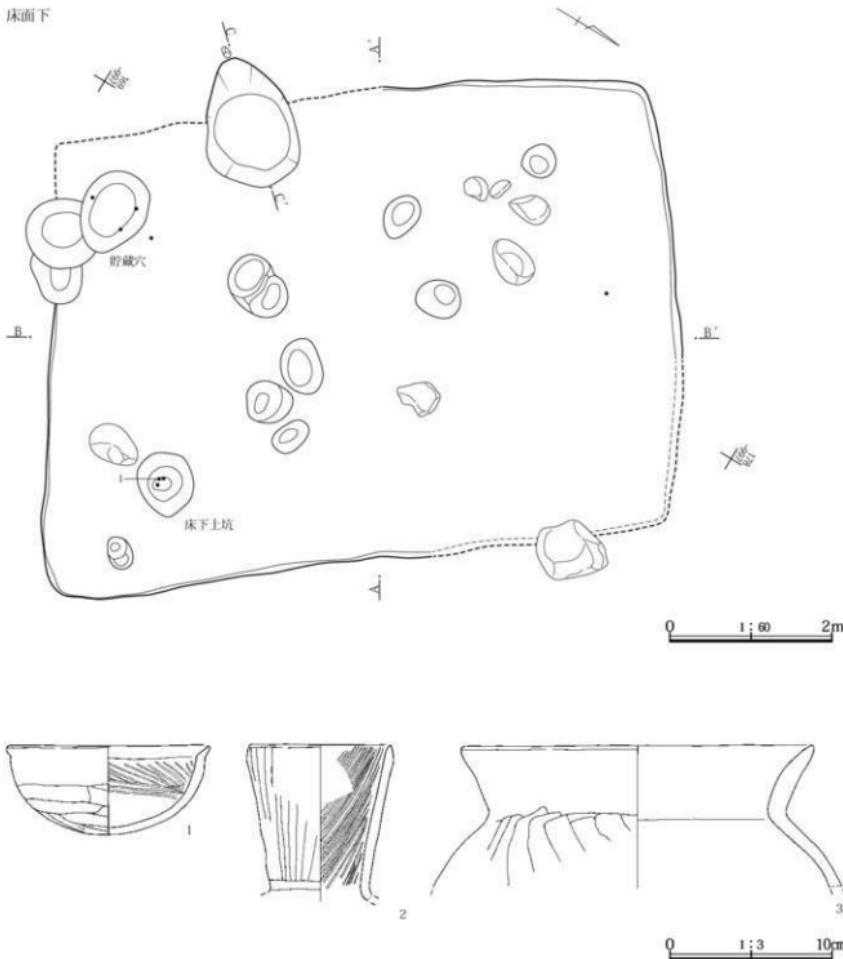
3号竖穴建物  
1 黒褐色土 混入物は少なく、僅かに黄褐色粒を含む。綈まりあり。

カマド



第91図 3号竖穴建物 床面・カマド 平・断面図

床面下



第92図 3号竖穴建物 床面下 平面図、出土遺物

第19表 3号竖穴建物出土遺物観察表

種 図 PL. No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第92図 PL. 56	1 上飾器 杯	床下土坑 1/2	口 12.4 5.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は 体部上半に横方向のヘラミガキ後左縁の斜放射状ヘラミガ キ。	内斜口縁杯
第92図 PL. 56	2 上飾器 鉗	床面 口縁部片	口 8.6	細砂粒/良好/明黄 褐	口縁部は外面が縱方向ヘラナデ、内面は斜放射状ヘラミガ キ。	
第92図 PL. 56	3 上飾器 甕	床面 口縁～頂部上位 片	口 21.4	細砂粒/良好/褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ、 器面摩減のため単位不明。	

## 2. 土坑

検出された土坑は、8区の一段低い平坦面の北側に竪穴建物と共に点在する。8-1区においても数少ないが検出されている。8区に3基、8-1区に3基の計6基であり、その形状は円形ないし楕円形、長方形を呈する。

### 31号土坑（第93図、PL.46）

**位置：**8区中央のやや北西寄りに位置し、南西側に1号竪穴建物が近接する。

**座標値：**X=61,197・61,198 Y=-91,993～91,995

**検出状況：**8区西半を主とした第3面調査時に検出した。長さ1.33m程の長方形を呈し、壁は垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦となる。土師器片のほとんどは2層中から出土し、大型の扁平碟も壁に立てかかるように出土している。

**形状：**長方形

**規模：**長軸1.33m 短軸0.70m 深さ33cm

**長軸方向：**N-55°-W

**埋没土：**上層に1層の鈍い黄褐色土、そしてロームブロックを含む黒褐色土が2層として主体をなす。この2層中に土器片が出土している。

**遺物：**出土した遺物はいずれも土師器で、杯の口縁部小片、甕の胴部片が少量ある。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、出土土器から、竪穴建物とほぼ同時期の古墳時代（5世紀中葉頃）と考えられる。

### 32号土坑（第93・94図、第20表、PL.46・56）

8区北西壁際で、第2面での23号土坑の直下に検出された。しかも、検出された土坑の中では、出土遺物量が最も多い。

**位置：**8区北西壁の南西寄り壁際に位置し、23号土坑と重複し、一部は調査範囲外へと延びる。南東側に1号竪穴建物が近接する。

**座標値：**X=61,195・61,196 Y=-92,006～92,008

**検出状況：**8区西半を主とした第3面調査時に検出した。上位に重複する23号土坑との新旧は明らかで、調査面からも本土坑の方が旧い。楕円形を呈するようで、壁は垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦となる。土師器片の多くは埋没土中からの出土であるが、3の甕の

胸下半は逆位で底面から出土している。

**形状：**楕円形か

**規模：**長軸1.42m 短軸(1.28)m 深さ108cm

**長軸方向：**N-38°-E

**埋没土：**1・2層の黒褐色土、3層の暗褐色土、最下層に4層の黒褐色土に分層でき、2層と4層が鈍い黄褐色土ブロックを含むことで近似する。

**遺物：**出土した遺物はいずれも土師器であり、出土量も多い。その内の3点を図示した。

1は内斜口縁となる杯で、内外面にミガキを施す。

2は甕の口縁部で、3は小型甕の底部である。

未掲載遺物には、甕の口縁部・胸部片が最も多く、杯片も僅かにある。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、遺構の重複、さらには出土土器から、竪穴建物とほぼ同時期の古墳時代（5世紀中葉頃）と考えられる。

### 33号土坑（第93図）

**位置：**8区ほぼ中央付近に位置し、ビットと接するようになり、西側に1号竪穴建物が近接する。

**座標値：**X=61,192・61,193 Y=-91,991・91,992

**検出状況：**8区西半を主とした第3面調査時に検出した。かなり小型の土坑で、遺物の出土もある。また、ビットと接するようにあるが、重複はしていない。上面形状は方形に近いが、底面形状は円形と呈する。壁は垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦となる。

**形状：**方形か

**規模：**長軸0.54m 短軸0.48m 深さ32cm

**長軸方向：**N-83°-E

**埋没土：**黒褐色土を埋土とする。

**遺物：**出土した遺物はいずれも土師器で、甕の胴部片が少量ある。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況、出土土器から、竪穴建物とほぼ同時期の古墳時代（5世紀中葉頃）と考えられる。

### 47号土坑（第93図、PL.34）

**位置：**8-1区の南東壁際に位置し、本土坑の南西隅に53号土坑が重複し、北西側に48号土坑が近接する。

**座標値：**X=61,206・61,207 Y=-92,009・92,010

#### 第4章 検出された遺構と遺物

**検出状況：**8-1区の第3面調査時に検出された。重複する53号土坑との新旧は不明。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北壁は斜位に立ち上がる。底面は平坦。僅かに、遺物が出土している。

**形状：**隅丸長方形

**規模：**長軸1.71m 短軸0.97m 深さ45cm

**長軸方向：**N-1°-W

**埋没土：**1層の白色軽石と黄橙色粒を含む暗褐色土を主体に、壁際に黄色土ブロックを含む2層、黄橙色粒を多量に含む3層とに分層できる。

**遺物：**出土した遺物は、土器片1点である。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況から、時期は古墳時代と考えられる。

#### 48号土坑（第93図、PL.34）

**位置：**8-1区北壁の中央東寄りの壁際に位置し、本土坑の直上に第2面調査時の35号土坑と重複する。南東側に47号土坑がある。

**座標値：**X=61,208・61,209 Y=-92,011～92,013

**検出状況：**8-1区の第3面調査時に検出された。重複する35号土坑との新旧は、遺構確認面の違いおよび土層断面での確認から、本土坑の方が古い。壁はやや斜位に立ち上がり、底面はやや捕鉢状。遺物は出土していない。

**形状：**不明

**規模：**長軸(0.93)m 短軸0.78m 深さ0.38cm

**長軸方向：**N-25°-E

**埋没土：**暗褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**重複する35号土坑より古く、検出面と周囲の状況から、時期は古墳時代と考えられる。

#### 53号土坑（第93図、PL.34）

**位置：**8-1区の南東壁付近に位置し、47号土坑の南西隅に重複する。

**座標値：**X=61,205・61,206 Y=-92,009・92,010

**検出状況：**8-1区の第3面調査時に検出された。重複する47号土坑との新旧、土坑の詳細は不明。残存する壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦か。遺物の出土はない。

**形状：**円形か

**規模：**長軸0.44m 短軸(0.40)m 深さ31cm

**長軸方向：**N-51°-W

**埋没土：**締まりの弱い黒褐色土を埋土とする。

**所見・時期：**検出面と周囲の状況から、時期は古墳時代と考えられる。

### 3. ピット

微高地の中でも、一段下った西側から北側の平坦面に竪穴建物や土坑と共に点在し、計22基を数える。これらピットの埋没土は黒褐色土が最も多く、僅かに明黄褐色土を埋土とするものがある。なお、導水路を隔てた西側における7区第3面での1号掘立柱建物およびその周囲のピットは、本調査区の調査面標高と同一面上にあり、微高地平坦面の広がりと遺構分布が予測できる。

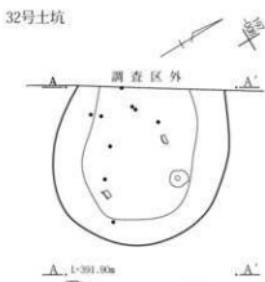
### 4. 第3面下の状況

8-1区での第3面調査終了後に、微高地におけるローム層の存在から、第3面下を対象とした旧石器時代の試掘を行った。試掘は4m×2mのトレーナーを設定し、人力による掘削を行った。しかし、ローム層の堆積状態は良くない。堆積状況は、上位から1層の黄橙色土ブロックと黄橙色粒を全体に含む黄褐色土、2層の黄橙色土ブロックを含む鈍い黄橙色土、そして3層の黄橙色土粒を少量含む明黄褐色土が順に堆積するものの、これらの各層中ないし層を跨いで黒褐色粘質土がブロック・アメリカー状に介在する。

なお、試掘を行った結果、遺物等の痕跡も確認できなかった。



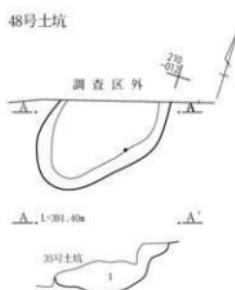
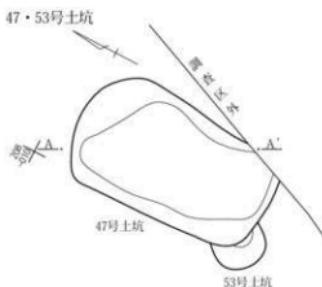
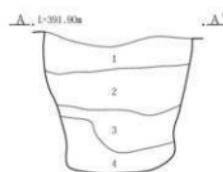
31号土坑  
 1 細い黄褐色土 ローム粒を少量含む。  
 2 黒褐色土 ロームブロックを含み、粘質。



32号土坑  
 1 黒褐色土 粒子細かく、締まりやや弱い。  
 2 黒褐色土 細い黄褐色土ブロックを含み、締まり弱い。  
 3 黄褐色土 粒子細かく、粘質。締まりやや弱い。  
 4 黒褐色土 細い黄褐色土ブロックを含み、粘質。



33号土坑  
 1 黒褐色土 粒子細かく、締まりあり。



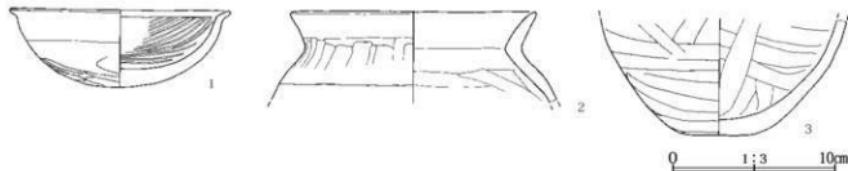
48号土坑  
 1 暗褐色土 粒子細かく、締まりあり。



47号土坑  
 1 暗褐色土 粒子白色輕石、黃褐色粒を含む。締まりあり。  
 2 暗褐色土 黃色土ブロック、黃褐色粒を含む。  
 3 浅黃褐色土 黃褐色粒を多量に含む。

0 1:40 1m

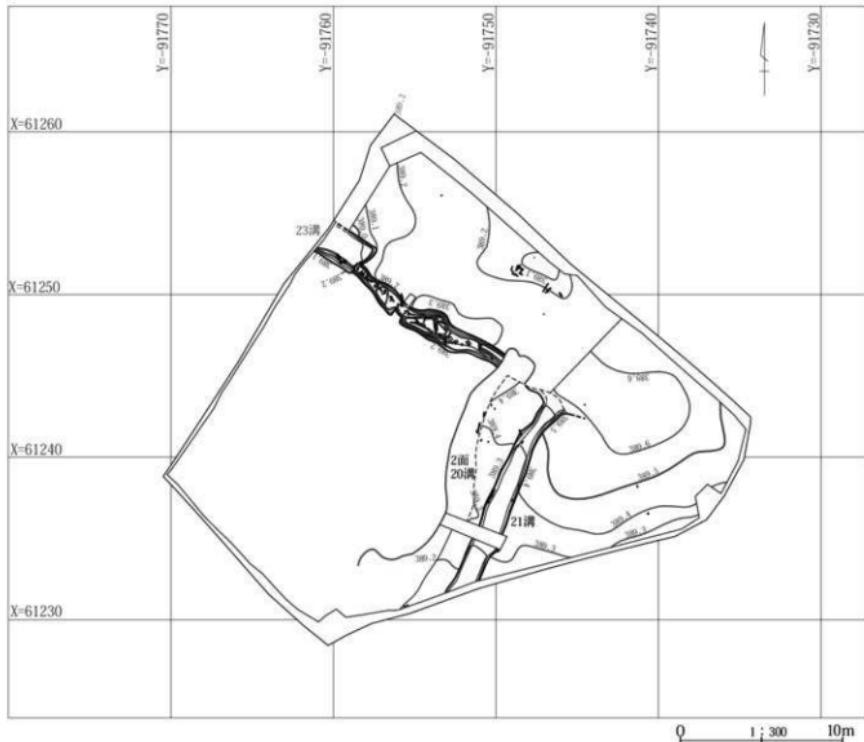
第93図 31～33・47・48号土坑 平・断面図



第94図 32号土坑出土遺物

第20表 32号土坑出土遺物観察表

拂 図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
			口 高	13.4 4.7			
第94図 PL.56	1 土師器 杯	32号土坑 1/3	口 高	13.4 4.7	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上平がナデ。下平から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部に右側の斜放射状ヘラミガキ。	
第94図 PL.56	2 土師器 甕	32号土坑 口縁～胴部上位 片	口 高	15.0	細砂粒/良好/に赤い黄褐 色	口縁部は横ナデ、頸部はヘラナデ。胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第94図 PL.56	3 土師器 甕	32号土坑 底部～胴部下位	底	5.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	



第95図 9区第1面 全体図

## 第10節 9区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内でも最北東端付近に位置し、先述した8区の北東側へ約200mほど隔てた箇所にある。この8区からの隔てた間は、令和4年度に調査が予定されている。

調査は、本調査初段階の令和2年7月に開始された8区西半1・2面調査後に、急遽、調査対象に加わったことから開始し、第1面と第2面を対象に調査を行った。特に、第2面の調査では雨天の出水がひどく、遺構検出は難航した。

### 第1項 第1面調査

本調査区における第1面となる遺構は、第2面の遺構と共に確認され調査が行われた。第95図に示したように、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した遺構には、杭列を伴う溝が検出された。

以下、検出できた溝について記述する。

#### 21号溝（第96図、PL.47）

調査区の南隅付近の壁際から北北東方向へと延びる溝で、23号溝に接続する。

**位置：**調査区の南東側にあり、南隅付近の壁際から北北東方向へと直線的に延びる溝である。溝の北端は、直交する23号溝に接続する。

**座標値：**X=61,231 ~ 61,244 Y=-91,745 ~ 91,753

**検出状況：**23号溝と共に天明泥流で埋没した溝であり、本溝の北端部で直交する23号溝とT字状に接続する。しかし、接続部分の詳細は不明。南隅付近の壁際から北北東方向へと延びる溝で、幅1.4m前後を測り、全体に浅い。底面には砂礫が溜まり、北北東方向に緩い勾配をもつ。また、埋没土中からは、木片も出土している。

**規模：**長さ12.94m 上面幅0.90 ~ 1.62m

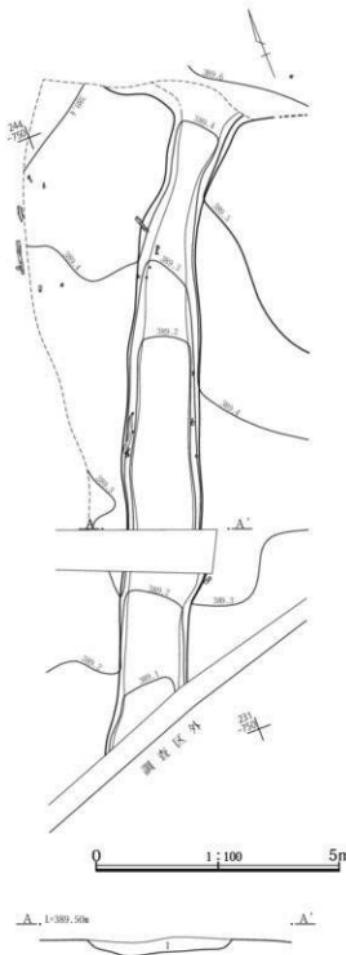
深さ16 ~ 26cm

**延伸方向：**N-25°-E

**埋没土：**暗褐色土(天明泥流)を埋没土とする。

**所見・時期：**溝が天明泥流で埋没していることから、埋

没時期は天明3年で、泥流により被災した状況である。



第96図 21号溝 平・断面図

## 23号溝 (第97図、PL.47・48)

調査区中央の北寄りに検出された溝で、溝の途中に21号溝が接続する。溝の南東端は不明。また、北西壁際においても擾乱とされる掘り込みと重複し、詳細は不明。

**位置：**調査区中央の北寄りに位置し、南東から北西へと延びる溝で、途中に直交する21号溝が接続する。なお、溝の両端の状況は不明。

**座標標：**X=61,245 ~ 61,254 Y=-91,749 ~ -91,761

**検出状況：**天明泥流で埋没した溝である。遺構確認時に溝上面に木製品や木材の出土が多く、中には杭が刺さったままの状態で残存している状況も覗えた。溝は、南東方向から北西方向へと概ね直線的に延びる溝で、南東端は不明。途中の21号溝とT字状に接続するあたりから確認でき、北西壁付近では擾乱とされた掘り込みと重複する。この擾乱との重複は、溝の底面よりも擾乱の底面が深く、土層断面からも、明らかに本溝の方が古い。また、接続する21号溝とは、埋没土が同じであることから、同時期の溝である。一方、溝の上面に確認されていた杭の存在は、溝内の杭列となり、調査の進行とともに明らかとなった。杭は、表皮の無い丸木、削材、角材であり、先端は加工が施され、長いものでは1.0mを超えるものまである。溝の底面の状況であるが、北西側に勾配が向くものの、部分的に深くなる箇所がある。

**規模：**長さ13.54m 上面幅0.65 ~ 1.86m

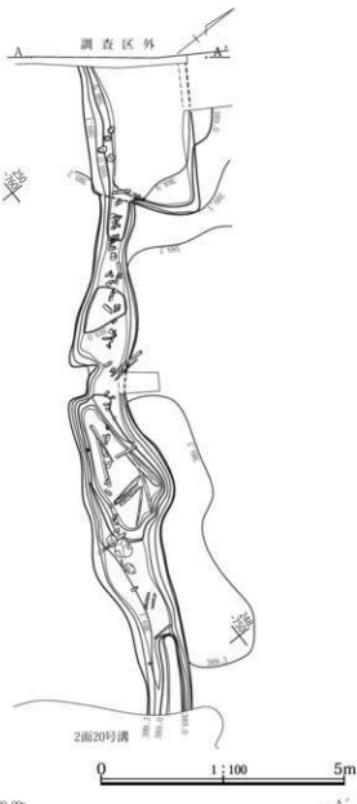
深さ19 ~ 49cm

**延伸方向：**N-56°-W

**埋没土：**接続する21号溝と同じく、暗褐色土(天明泥流)を埋没土とする。

**遺物：**溝内からは多くの杭が出土しているが、図示はしていない。

**所見・時期：**溝と杭列との関係については不明。溝が天明泥流で埋没していることから、埋没時期は天明3年で、泥流被災の状況である。なお、北西壁際に重複する擾乱と扱った掘り込みは、その埋没土である1 ~ 5層は天明泥流であり、底面は天明泥流層(7層)より下位層まで達していることから、8区等にみられた復旧坑の可能性が高い。



▲, 1:390.00m



23号溝

- 1 灰黄褐色土 砂粒と小礫を多量に含む。
- 2 灰褐褐色土 砂粒を主体とし、細まりなし。
- 3 暗褐色土 砂礫を主とし、5~6cmの礫を斑状に含む。
- 4 暗褐色土 砂礫を主とするが、小礫を多く含む。
- 5 暗褐色土 4層に似るが小礫を主とする。
- 6 黑褐色土 天明泥流。(9区基本層序I層)
- 7 暗褐色土 As-Kの混在土。(9区基本層序II層)
- 8 黄灰色土 As-Bの灰(一次堆積)層。(9区基本層序IV層)
- 9 黑褐色土 As-B下水田の耕作土。(9区基本層序V層)
- 10 黑褐色土 黏質な水田耕作土。(9区基本層序VI層)

0 1:50 2m

第97図 23号溝 平・断面図

## 第2項 第2面調査

本調査区における本来の第2面に相当する遺構は、As-B直下の水田である。第98図に示すように、調査区の南側から北方向へ延びる溝、そしてその溝の西側に水田を検出した。しかし、水田の状態は悪く、畦とみられる僅かな高まりが、帯状に連なる状況を確認した。なお、水田の東縁には段を有し、溝を含めた以東は一段低い面となっている。なお、溝の東側および水田の北側にある第1面で検出された23号溝以北についての詳細は不明。

### 20号溝（第99図、PL. 48）

調査区の中央を南側から北側へと延びる溝で、溝の西側には段差の斜面を有し、東側は僅かではあるがさらに低い面となる。

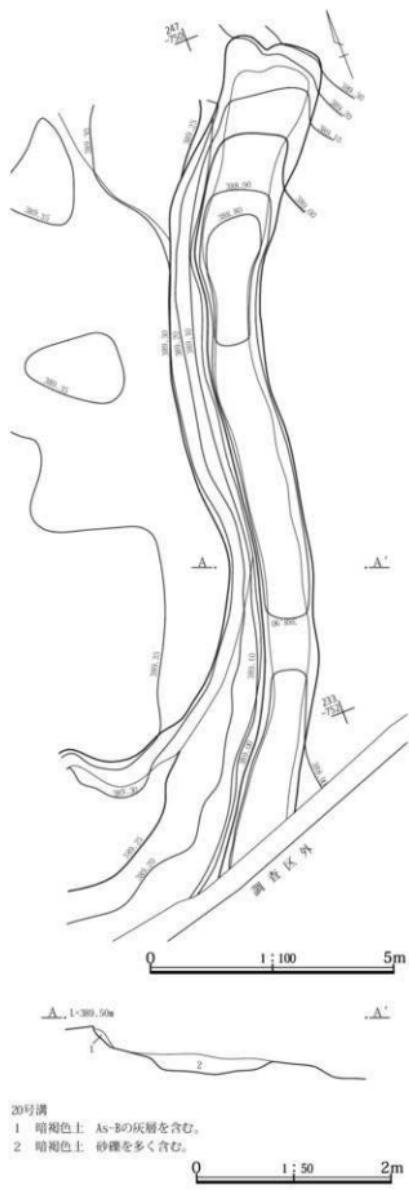
**位置：**調査区の中央に位置し、南側から北側へ延びる緩く蛇行する溝である。先述した第1面での21・23号溝よりは下位に検出されている。

**座標値：**X=61,230 ~ 61,246 Y=91,747 ~ 91,756

**検出状況：**第1面での21号溝と共に、トレンチによって確認された溝であり、土層断面の観察からも21号溝より下位で、砂礫を多く含む暗褐色土を挟んだ下に検出面がある。第99図の土層断面図に示すように、この検出面は、本溝の西側に20cmほどの段差となる斜面を有し、その斜面上にAs-Bの火山灰層を含む暗褐色土が薄



第98図 9区第2面 全体図



第99図 20号溝 平・断面図

く堆積し、As-B下面であることが理解できる。そして、段差上面に広がる平坦面がAs-B下の水田面となる。本溝の南端は南隅付近の壁際に発し、緩く蛇行するよう北へと延びるが、その端部の詳細は不明。幅1.2m前後で、深さ20cmを測り、北側へ勾配をもつ。

**規模：**長さ16.50m 上面幅1.16～1.92m

深さ13～21cm

**延伸方向：**N-23°～31°-E

**埋没土：**砂礫を多く含む暗褐色土を埋没土とする。

**所見・時期：**トレンチでの土層断面観察により、As-Bの灰層を含む暗褐色土下面に検出されていることから、埋没時期はAs-B下水田と同時期と考えられる。

#### As-B下水田（第100図、PL.48）

第2面調査で検出した、As-B直下の水田である。検出できた水田域は調査区の西半においてであり、水田区画の東縁には段差と段差下に20号溝を有する。水田面の残存状態はあまり良くなく、畦も明確さに欠ける。なお、20号溝の東側は若干低い面となるが、今調査においては水田の検出に至っていない。

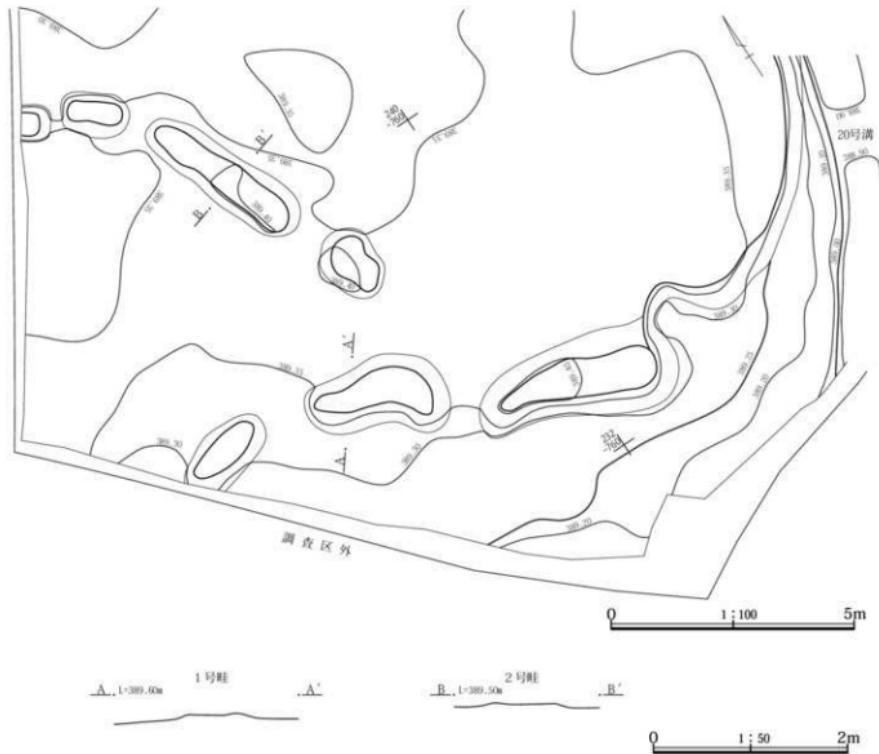
**位置：**20号溝の西側に位置し、調査区中央から西半に広がるが、重複する23号溝以北の状況は不明。

**座標値：**X=61,230～61,252 Y=91,750～91,770

**検出状況：**検出された水田は、9区北壁における基本層序IV層下面に検出されたAs-B直下の水田である。北側は重複する23号溝があり、東側は段差となる。この段差により水田の東側は画され、段差下には20号溝が緩く蛇行するように北流する。天候不順等により水田面の調査状況は悪く、田面の検出に手間取った。田面の状態は、緩い凸凹がほぼ全面に確認でき、一部に帯状に連なる高さ4.0cm程の高まりを確認することができた。この高まりは2条あり、1条は田面の南側を画すように段差と繋がる畦と考えられるが、やや途切れがちの状態にある。もう一方の高まり列は、北東壁際から南側区画の畦に向かう高まりで、やはり途切れがちの状態にある。何れの高まり列も水田面を区画する畦と考えられ、数区画の水田の存在を窺わせる。また、東側を画する段差上面に畦状の高まり列は検出されていないが、本来は畦が線にあったものと理解できよう。なお、調査時において、南側を画す高まり(畦)の東端

に水口を想定したが、詳細は不明。

**所見・時期：**本調査区における第2面の水田は、As-B直下であることからして所謂As-B下水田に比定され、古代水田として位置付けられる。本調査におけるAs-B下水田は2・5・6・10区でも検出されており、微高地を除く多くの低地帯に水田が展開していた状況が理解できる。併せて、以前の吾妻西バイパスでの調査成果からしても、この地域一帯に存在した水田の状況が見て取れよう。



第100図 As-B下水田 畦 平・断面図

## 第11節 10区の遺構と遺物

本調査区は、吾妻東バイパス建設に伴う本遺跡調査対象地内の南東端に位置し、北側は道路を挟んで8区、西側は道・水路を挟んで3区と接した東西に細長い調査区であり、調査区の東側は9区を含めた令和4年度の調査対象範囲となっている。また、本調査区には、天明泥流と共に巨大な「浅間石」が流れ着いて残存している。調査は、先ず天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流下を対象とした第1面調査を行った。その後、第1面下にAs-B下面とは異なる遺構面を確認したことから第2面として調査が進められ、さらに第3面としてAs-B下面の調査、第4面として8区から続く微高地の調査を行った。これら調査時の各調査面については、整理段階において他調査区との調査面の整合性を図らざるを得なかった。

### 第1項 第1面調査

本項で扱う第1面には、調査時に第1面として天明3年の泥流下面で検出された遺構、そして第2面として検出された遺構を含めることとした。前者の調査時第1面を第1-1面(天明3年の泥流下面)とし、調査時第2面は第1-2面として記述する。

#### 1. 第1-1面調査

天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した遺構には、溝、土手、畑といった遺構が検出された。また、一部であるが泥流被災後の復旧坑や溝も検出されている。第101図に示すように、調査区のほぼ中央付近に巨大な「浅間石」が残存するが、比較的に平坦な調査区のほぼ全面に畠の歓間溝が検出され、調査区南西隅に溝と土手が僅かに確認されている。

以下、検出された各遺構ごとに記述する。

#### 24号溝（第102図、PL.49）

調査時の第1面で検出された溝であるが、6号畠を壊すように検出された。

位置：調査区の北西隅から東側に延びた溝で、東端は西壁から12mほどで不明となる。6号畠を壊すように横



第101図 10区第1-1面 全体図

切り、25号溝と重複する。

座標値：X=61,153～61,155 Y=91,977～91,989

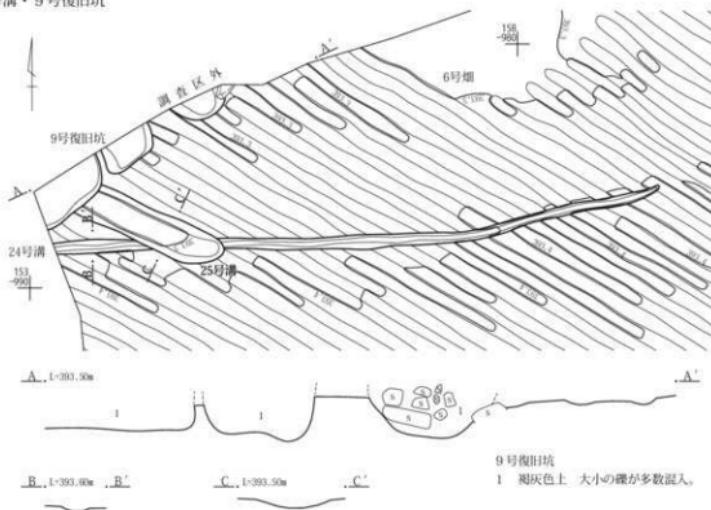
検出状況：調査時の第1面調査で検出された。調査区北西隅の西壁際から東側へ延びる溝で、6号畠を壊すように横切り、25号溝とも重複する。埋没土の記録がなく不明な点もあるが、6号畠より新しく、25号溝より古い可能性がある。検出された溝の状態はかなり浅く、西壁から12mほどで不明となる。

規模：長さ12.52m 上面幅0.15～0.32m

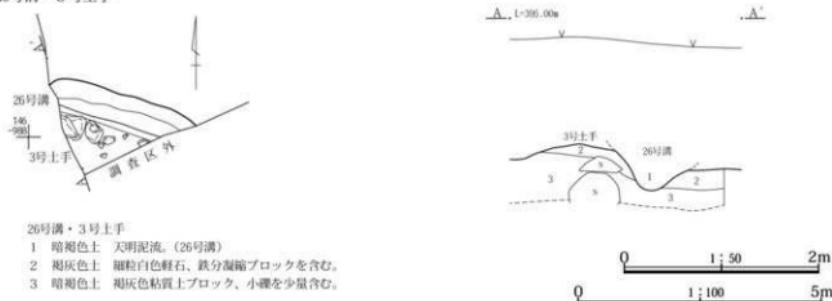
深さ2～6cm

延伸方向：N-76°～88°-E

24・25号溝・9号復旧坑



26号溝・3号土手



第102図 24～26号溝、9号復旧坑、3号土手 平・断面図

**埋没土**：詳細は不明。

**所見・時期**：溝の埋没土は不明であるが、図面および写真的な状況から天明泥流（26号溝）より新しく、25号溝より古い可能性を持つ。依って、埋没時期は天明3年の泥流被災以後と考えられる。

#### 25号溝（第102図、PL.49）

調査時の第1面で検出された溝で、9号復旧坑群と重複し、6号煙を壊すように検出された。

**位置**：調査区の北西隅付近に位置し、9号復旧坑群と重複しながらも南東方向に延びる溝で、24号溝とも重複する。

**座標値**：X=61,153～61,155 Y=-91,986～-91,989

**検出状況**：調査時の第1面調査で検出された。調査区北西隅の9号復旧坑群と重複し、6号煙を壊すように煙の歓間方向と同方向に延び、その先端部が24号溝と重複する。埋没土の記録がなく不明な点もあるが、6号煙および24号溝より新しい可能性があるものの、9号

#### 第4章 検出された遺構と遺物

復旧坑群との新旧は不明。検出された溝の状態は、かなり浅く、24号溝より幅広である。

規模：長さ2.96m 上面幅0.78m

深さ5～8cm

延伸方向：N-66°-W

埋没土：詳細は不明。

所見・時期：溝の埋没土は不明であるが、図面および写真の状況から天明泥流で被覆した6号烟および泥流被災後の24号溝より新しく、9号復旧坑群との新旧は不明。埋没時期は、天明3年の泥流被災以後と考えられる。

#### 26号溝（第102図）

調査時の第1面で検出された溝で、3号土手と共に調査区南西隅に僅かに確認された。

位置：調査区の南西隅に位置し、6号烟の南西端歛間溝の西側にある。また、本溝の西側には3号土手が沿うようにある。

座標値：X=61,145～61,147 Y=-91,984～91,987

検出状況：調査時の第1面で検出された。溝の西際には3号土手が沿うようにあり、一体を成すように西側から東側へと直線的に延びるものと推測される。この延伸方向は、6号烟の歛間溝の延伸方向と同じであり、歛間溝の最西端から50cm前後の帯状の空間を空けていることから、6号烟の南西辺を区画する溝でもある。溝幅は70cm前後を測り、断面形はU字状を呈する。

規模：長さ(2.4)m 上面幅0.7m

深さ24cm

延伸方向：N-74°-W

埋没土：暗褐色土の天明泥流を埋没土とする。

所見・時期：天明泥流で埋没していることから、埋没時期は天明3年で、泥流により被災した状況である。また、6号烟の南西辺を区画する溝でもある。

#### 9号復旧坑群（第102図、PL.49）

調査時の第1面で確認され、25号溝と重複し、6号烟を壊すように検出された。

位置：調査区の北西隅に位置し、北壁際に3基からなる土坑状に検出された。また、25号溝と重複する。

座標値：X=61,154～61,157 Y=-91,986～91,989

検出状況：調査時の第1面で検出された。調査区北西隅の、北壁際に3基の土坑が並ぶように検出された。その状況は、北側の道路を挟んだ8区第1-1面での復旧坑群の在り方に酷似しており、8区第1-1面から続く復旧坑群の一部で、その先端が検出されたものと考えられる。壁際での断面観察からは、明らかに天明泥流で埋没しており、大小の礫も多く含んでいる。また、その底面は、天明3年時の旧地表面下深くまで達しており、天地返しとしての耕土獲得にも十分である。なお、重複する新旧について、泥流被災後の復旧坑であることから6号烟よりも新しいが、25号溝とは不明。

規模：長さ(0.8)m 幅(1.5)m 深さ36cm

延伸方向：N-25°-W

埋没土：大小の礫が多量混入する褐色土を埋没土とする。

所見・時期：復旧坑であり、周囲の状況および土層断面等から、埋没時期は天明泥流による被災後である。

#### 6号烟（第103図、PL.49）

調査時の第1面で検出された烟であり、調査区のほぼ全面に広がる。

位置：調査区のほぼ全面に広がり、重複する24・25号溝および9号復旧坑群より旧く、26号溝で画された烟区画の南西辺を一部確認できる。

座標値：X=61,145～61,167 Y=-91,955～91,989

検出状況：調査時の第1面で検出された。本烟は調査区のほぼ全面に広がり、調査区の南西隅に26号溝で画された本烟区画の南西辺の一部を見ることができた。この南西辺となる区画には、26号溝との間に幅50cm前後の帯状の空間があり、烟境を巡る小道と推察できよう。検出された烟は平坦面にあり、歛間を含め天明泥流が被覆し、歛間の方向は西北西から東南東を向く。その歛間数は61条を数え、歛間間隔は50cmを測る。

区画規模：長さ(32.10)m 幅(23.25)m

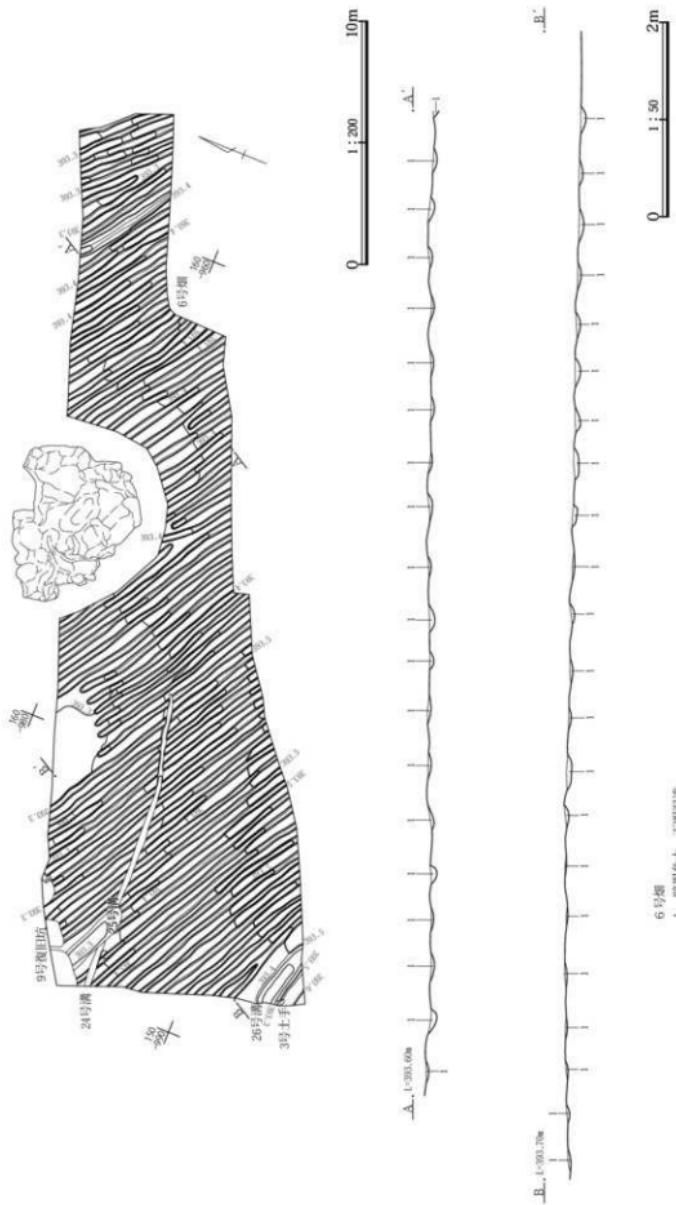
歛長(23.25)m 歛間間隔48～60cm前後

畦数61条

歛間方向：N-59°-W

埋没土：暗褐色土の天明泥流を埋没土とする。

所見・時期：天明泥流で埋没していることから、埋没時期は天明3年で、泥流により被災した状況である。



第103図 6号烟 平・断面図

## 3号土手（第102図）

調査時の第1面で検出され、26号溝と共に調査区南西隅に僅かに確認された。

位置：調査区の南西隅に位置し、6号畠の南西辺を区画する26号溝の西際に沿うようある。検出できた距離は短い。

座標値：X=61,145 ~ 61,146 Y=-91,985 ~ 91,987

**検出状況：**調査時の第1面調査で検出された。本土手の東際に26号溝が沿うようあり、一体を成すように西侧から東側へと直線的に延びる。同様な土手は、用水路を挟んだ西側の3区および7区にも検出されており、面的な関係性を含め一考する必要性があろう。この土手もまた、耕地の区画土手であることは周囲の状況からも明らかであるが、土手の内側となる部分については調査区外となることから不明。なお、土手は26号溝と同様に、暗褐色土の天明泥流で被覆されている。

規模：長さ(2.15)m 幅1.1m 高さ15cm

延伸方向：N-72°-W

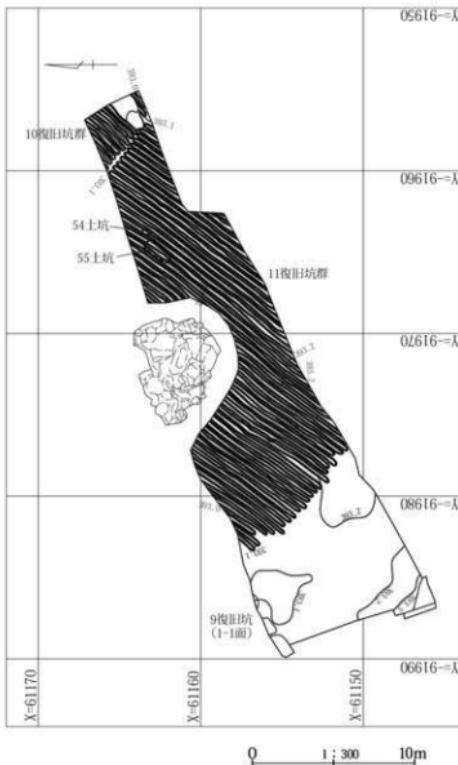
**盛土(構築状況)：**天明泥流に覆われた下面は、6号畠際で褐灰色土の耕土となり、その下層に暗褐色土が確認されている。本土手の盛土の構築においても同様な層序となっており、疑問を残す。同時に、盛土の下層となる暗褐色土内下位には大型礫が積み上がり、盛土の芯材としてみることができる。同様な芯材をもつ構築状況は、3区および7区での土手にも共通する。

**所見・時期：**第1面調査での検出であることと、天明泥流の直下であることから、埋没時期は天明3年で、泥流により被災した状況である。

## 2. 第1-2面調査

本調査面は、調査時にAs-B下面とは異なる遺構面を確認したことから第2面として調査された各種の遺構であり、整理段階に他調査区との調査面の整合性を図る必要から第1-2面として扱った経緯がある。検出された遺構には、土坑と復旧坑状の溝群(復旧坑として記述する)があり、第104図に示すように、調査区の西側を除く中央付近から東側にかけての広い範囲に復旧坑状の溝群が検出された。

以下、検出された各遺構ごとに記述する。

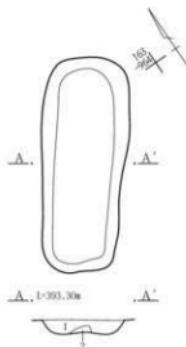


第104図 10区第1-2面 全体図

54号土坑



55号土坑



第105図 54・55号土坑 平・断面図

**54号土坑** (第105図、PL.50)

調査時の第2面調査で、55号土坑と共に検出され、11号復旧坑と重複する。

**位置**：調査区の東半に位置し、西側に55号土坑が隣接し、11号復旧坑と重複する。

**座標値**：X=61,163 Y=91,963

**検出状況**：第2面調査時に検出され、重複する11号復旧坑より新しい土坑として調査された。規模は小さくピット状をなす。遺物の出土はない。

**形状**：楕円形

**規模**：長軸0.40m 短軸0.32m 深さ17cm

**長軸方向**：N-35°-E

**埋没土**：As-Kkを含む暗褐色土と黒褐色土を埋没土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

**55号土坑** (第105図、PL.50)

調査時の第2面調査で、54号土坑と共に検出され、11号復旧坑と重複する。

**位置**：調査区の東半に位置し、東側に54号土坑が隣接し、11号復旧坑と重複する。

**座標値**：X=61,161 ~ 61,163 Y=91,964 ~ 91,965

**検出状況**：第2面調査時に検出され、重複する11号復旧坑より新しい土坑として調査された。壁は斜位に立ち上がり、底面は平坦。遺物は出土していない。

**形状**：隅丸長方形

**規模**：長軸1.76m 短軸0.68m 深さ12cm

**長軸方向**：N-36°-E

**埋没土**：As-Kkを含む暗褐色土と黒褐色土を埋没土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、埋没土にAs-Kkを含むことから、時期は中世から近世前半期と考えられる。

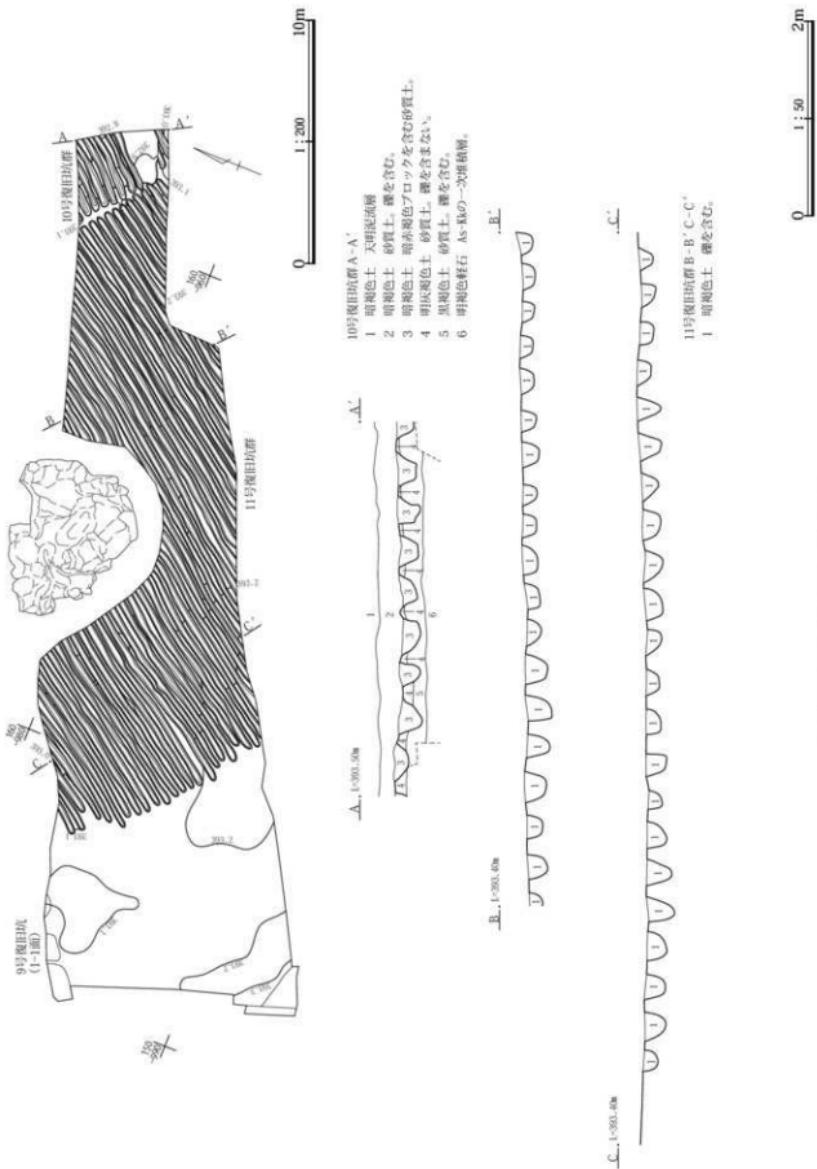
**10号復旧坑群** (第106図、PL.50)

調査時の第2面調査で検出された。

**位置**：調査区の東端に位置し、本復旧坑の西側に同様な11号復旧坑が続くように隣接する。

**座標値**：X=61,163 ~ 61,167 Y=91,955 ~ 91,959

**検出状況**：第2面調査時に、直線的な細長い溝が整然と並ぶように検出された。復旧坑の西端部は、その先端を直線的に描えるようにあり、その溝数は調査範囲内で10数条を数える。遺物の出土はない。調査区東壁の土層断面からは、天明泥流下の暗褐色土(2層)の下層に堆積する明灰褐色土(4層)を掘り込んでおり、さらに下位層にはAs-Kkの一時堆積層が存在する。この土



層の状況からすると、天明3年時より旧く、As-Kk降下後であることは明らかで、天明3年直後の復旧坑とは異なる形態の復旧坑と言えよう。

**規模(1条あたり)**：長さ(0.3)～(2.9)m

幅0.2～0.3m 深さ15～25cm

**延伸方向**：N-34～45°-E

**埋没土**：暗赤褐色ブロックを含む砂質な暗褐色土を埋没土としている。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、東壁の土層断面の状況から、時期は中世から近世前半期と考えられる。

#### 11号復旧坑群 (第106図、PL.50)

調査時の第2面調査で検出され、54・55号土坑と重複する。

**位置**：調査区西半の中央付近から調査区東端手前までの広い範囲に及び、調査区東半で54・55号土坑と重複し、本復旧坑の東側に同様な10号復旧坑が続くように隣接する。

**座標値**：X=61,150～61,165 Y=-91,957～91,983

**検出状況**：第2面調査時に検出され、重複する54・55号土坑より旧い遺構として調査された。復旧坑の在り方は、直線的な細長い溝が整然と並ぶように、両端部を揃えるように検出された。その溝数は調査範囲内で45条を数え、全体の形状から方形の区画内に施工されたものと考えられる。遺物の出土はない。

**規模(1条あたり)**：長さ(0.7)～(13.8)m

幅0.2～0.3m 深さ4～27cm

**延伸方向**：N-30～40°-E

**埋没土**：暗褐色土を埋没土とする。

**所見・時期**：検出面と周囲の状況、特に10号復旧坑との関連から、時期は中世から近世前半期と考えられる。

## 第2項 第2面調査

本調査面は、調査時に第3面(As-B下面)として調査した遺構であり、整理段階に他調査区との調査面の整合性を図る必要から第2面として扱った経緯がある。検出された遺構には、調査区の東端で水田面および畦が小範囲に確認できた。また、第107図に示すように、水田が検出された調査区中央から東側は低地帯となり、その西側は斜面を挟んで微高地となる。微高地部での遺構検出はなかったものの、調査区北側の8区から続く微高地であることは明らかである。なお、西側となる3区東端付近においても、低地帯から微高地への変換部が僅かに見て取れる。

以下、検出された水田について記述する。

#### 水田 (第107図、PL.50)

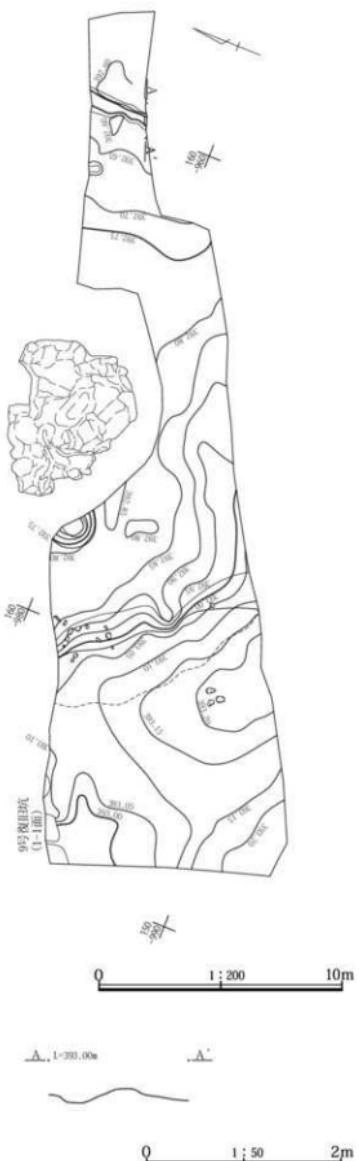
調査時の第3面調査で検出した、As-B直下の水田である。

**位置**：調査区のほぼ中央から東側にかけての低地部に位置し、水田面での湧水など、西側の微高地部とは大きく状況を異にする。

**座標値**：X=61,146～61,166 Y=-91,955～91,989

**検出状況**：検出された水田は、10区東壁における基本層Ⅸ層下面にあたるAs-B直下の水田である。調査区の中央から東側の狭い範囲で検出されたため、その水田域は不明であるが、平坦な低地部に、基本層Ⅸ層となる黒褐色土の水田耕作土と共に畦となる帯状の高まりを確認した。湧水のため水田面の状態は悪く、他調査区でのAs-B下水田に見られた凹凸は確認できなかった。また、検出できた畦は1条のみで、ほぼ南北方向を向く。なお、調査区西側の微高地部と水田面との比高差は、40～50cmほどを測る。

**所見・時期**：本調査区における第2面の水田は、As-B直下にあることから、As-B降下直前の古代水田として位置付けられる。また、5・6区第2面の水田と同時期の水田もある。

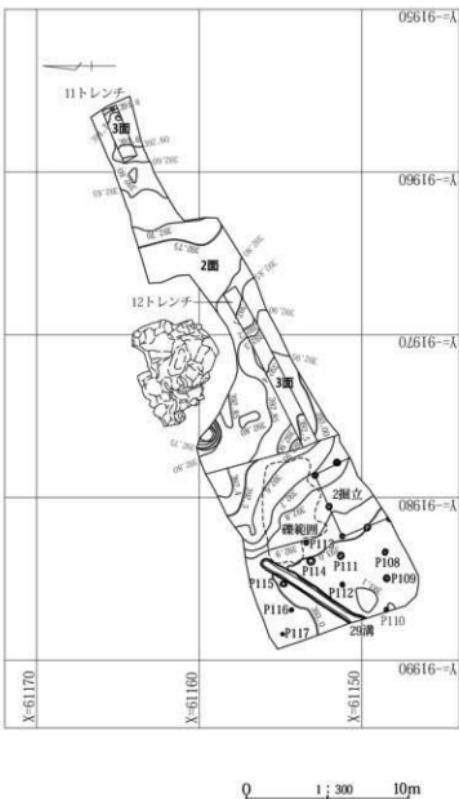


第107図 10区第2面 全体図、畦 断面図

### 第3項 第3面調査

本調査面は、調査時に第4面として調査した遺構であり、整理段階に他調査区との調査面の整合性を図る必要から第3面として扱った経緯がある。調査区内は先述の第2面と同様な地形を背景に、検出された遺構には、調査区西側の微高地部に掘立柱建物、ピット、溝がある(第108図)。また、調査区中央から東側にかけての低地部についても、トレンチ等による遺構確認を行ったが検出には至らなかった。

以下、検出された各遺構ごとに記載する。



第108図 10区第3面 全体図

**2号掘立柱建物（第109図、PL.51）**

調査時の第4面調査で、調査区西端一帯の微高地部に掘立柱建物の一部を検出した。

**位置：**調査区の西端付近の南壁際に位置し、建物の南半は調査区外となる。周囲にはピットが散在し、29号溝も近い。

**座標値：**X=61,148～61,153 Y=-91,977～91,982

**形状：**不明(長方形か)

**規模：**桁行方向(2.58)m 梁行方向4.14m

**桁行方向：**N-23°-W

**検出状況・埋没土：**検出された掘立柱建物の柱穴はP1～6の6基で、桁行1間、梁行1間の掘立柱建物となる。各柱間の距離は、桁行方向で1.4～1.6m、梁行方向で1.9mを測る。各柱穴は概ね円形を呈し、その規模は径50～70cm、深さ50～60cmを測る。埋土は暗褐色土を主体とする。

**所見・時期：**検出面が第3面であることと、北側調査区の8区から続く微高地上に立地することから、本建物の時期は古墳時代から古代の建物である可能性が高い。

**29号溝（第109図、PL.51）**

調査時の第4面調査で検出された溝である。

**位置：**調査区の西端一帯の微高地部に位置し、西壁際に北東方向に延びる溝で、周囲には散在するピットが近接する。

**座標値：**X=61,149～61,156 Y=-91,983～91,987

**検出状況：**2号掘立柱建物と共に、第4面調査時に検出された。微高地部の頂部付近を調査区の西壁際に北東方向に直線的に延びる溝で、長さ6.9mほどを測り、端部となる。西壁際に溝幅は0.7m、深さ50cmを測り、底面は比較的に平坦である。遺物の出土はない。

**規模：**長さ6.9m 上面幅0.60～0.72m

深さ15～26cm

**延伸方向：**N-33°-E

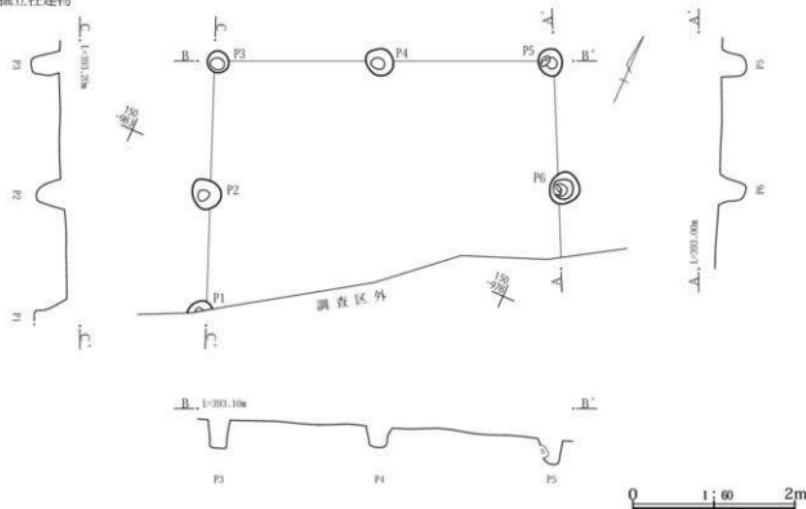
**埋没土：**褐色土を主とする。

**所見・時期：**検出面が第3面であること、北側調査区の8区から続く微高地上に立地した周囲の遺構の状況から、本溝の時期は古墳時代から古代の溝である可能性が高い。

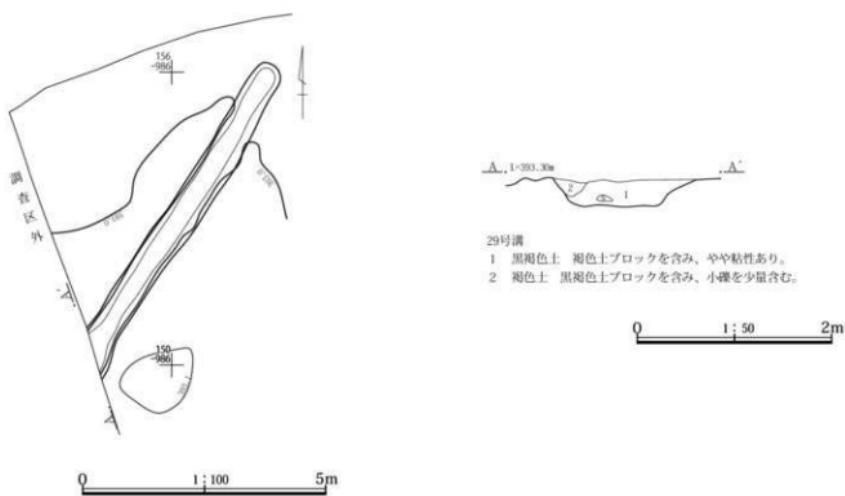
**ピット**

調査区西端一帯の微高地上にある2号掘立柱建物の北西側に、29号溝と共に10基を検出した。各ピットは径28～56cmを測り、暗褐色土ないし褐色土を埋土とする。遺物を出土させたピットはない。

2号掘立柱建物



29号溝



第109図 2号掘立柱建物、29号溝 平・断面図

## 第12節 遺構外出土遺物

本遺跡で出土した遺構に伴わない遺物について記す。遺物には縄文時代以降の土器類や石器・石製品、金属製品、木製品等がある。

〈土器〉(第110・111図、第21表、PL.56・57)

出土した土器量は少ないが、縄文時代から古代までと時間幅はかなり広い。ここでは、縄文・弥生時代、古墳時代、奈良時代以降に分けて以下に記す。

### 1. 縄文・弥生時代

図示した土器は、何れも3・5・8・10区からの出土であり、時期を代表する土器を掲載した。1～10は縄文土器であり、11～23は弥生土器である。

1～4は胎土に纖維を含有する縄文時代前期中葉の黒浜式土器で、口縁下ないし胴部に斜行縄文や羽状縄文を施す。5は纖維を含有しない黒浜式土器で、胴部に羽状縄文を施す。6は胴部に平行沈線と地文縄文を施す前期後葉の諸磯b式土器。7は口縁部文様下に降帯で文様区画し、頸部を無文とする中期後半の加曾利E式土器。8・9は後期初頭の称名寺式土器で、8は胴部にJ字文等の曲線的な文様を沈線で描き、文様内に縄文を充填する。9は胴部にJ字文等の曲線的な文様を沈線で描き、文様内に刺突を充填する。10は後期前葉と考えられる胴部無文の土器。

11～23は弥生時代後期の樽式土器で、11～14は口縁部に、15～17は頸部に柳描波状文を横位多段に施す。18・19は頸部に柳描廉状文を巡らせ、肩部に柳描波状文を横位に施す。20は肩部に柳描波状文を横位に施し、以下の胴部に縱位のミガキを施す。21～23は胴部に斜位のハケ目が施される。

### 2. 古墳時代

図示したもの全てが8区からの出土である。24は土師器の内斜口縁の鉢で、内面体部に斜放射状のヘラミガキをもつ。25は土師器の内斜口縁の杯で、内面体部に斜放射状のヘラミガキをもつ。26・27は土師器の

高杯の脚部で、共に柱状部がナデ、26の裾部は横ナデとなる。28は須恵器の杯、29は須恵器の蓋杯の蓋である。30は土師器の楕か。

### 3. 奈良時代以降

図示した31～34は8区、35は10区からの出土である。31～33は須恵器の杯で、32の底部は回転ヘラ削り、33の底部は回転ヘラ起こし後に回転ヘラ削り。34は須恵器の椀で、底部に回転糸切りをもつ。35は須恵器の杯蓋である。

〈陶磁器類〉(第111図、第21表、PL.57)

出土した陶磁器類は各調査区から出土して比較的多いが、その大半は細片であり、国産施釉陶器や国産磁器からなる。代表される2点を図示した。

36は2区出土の瀬戸・美濃陶器の皿の底部片で、37は8区出土の取手を欠損する陶器のカンテラである。

〈石器・石製品〉(第111図、第21表、PL.57)

出土した石器量は極めて少ないが、石鏃や剝片類といった種類がある。しかし、剝片類については割愛する。また、石製品として図示した遺物以外に、写真のみの掲載遺物が2点ある。

### 1. 石器

石鏃が2点出土しており、共に6区からの出土である。38は黒色頁岩製の凹基無茎鏃で、先端部と左辺返し部を僅かに欠く。もう1点の39は流紋岩製の凸基有茎鏃で、先端部が長く、側縁下半が広がる器帶を呈するが、先端部と基部を大きく欠損する。

### 2. 石製品

図示した石製品には3区出土の40があり、玉鶴製の火打石で、先端側縁が著しく潰れて機能部をなす。

また、写真のみ掲載の5区出土の52は、牛伏砂岩製の石臼(上臼)で、著しく片減りした状態にある。8区の復旧坑より出土した53は、粗粒輝石安山岩製の敲石で、小口部両端に弱い敲打痕があり、礫面に鉄が付着する。

〈金属製品〉(第111図、第21表、PL.57)

#### 第4章 検出された遺構と遺物

金属製品には煙管と錢貨が主で、僅かに板状の鉄片等がある。

##### 1. 煙管

41は5区出土の銅製の煙管(雁首)で、雁首がやや長い。  
42～46は銅製の煙管(吸口)で、42・43は3区から、44  
は7区、45は8区、46は5区から出土している。

##### 〈木製品類〉(第111図、第21表、PL.57)

木製品類について多くの区から出土しているが、図示できる遺物は極めて少ない。

51は4区から出土した径15.0cmほどの小振りな曲物の底板で、全体に薄く、劣化が進んでいる。

##### 2. 錢貨

47は宋銭の「開元通寶」で、7区から出土している。  
48・49は7区から出土した新寛永で、48は四文の波錢、  
49は背面に「元」の文字をもつ。50は5区から出土した新  
寛永である。

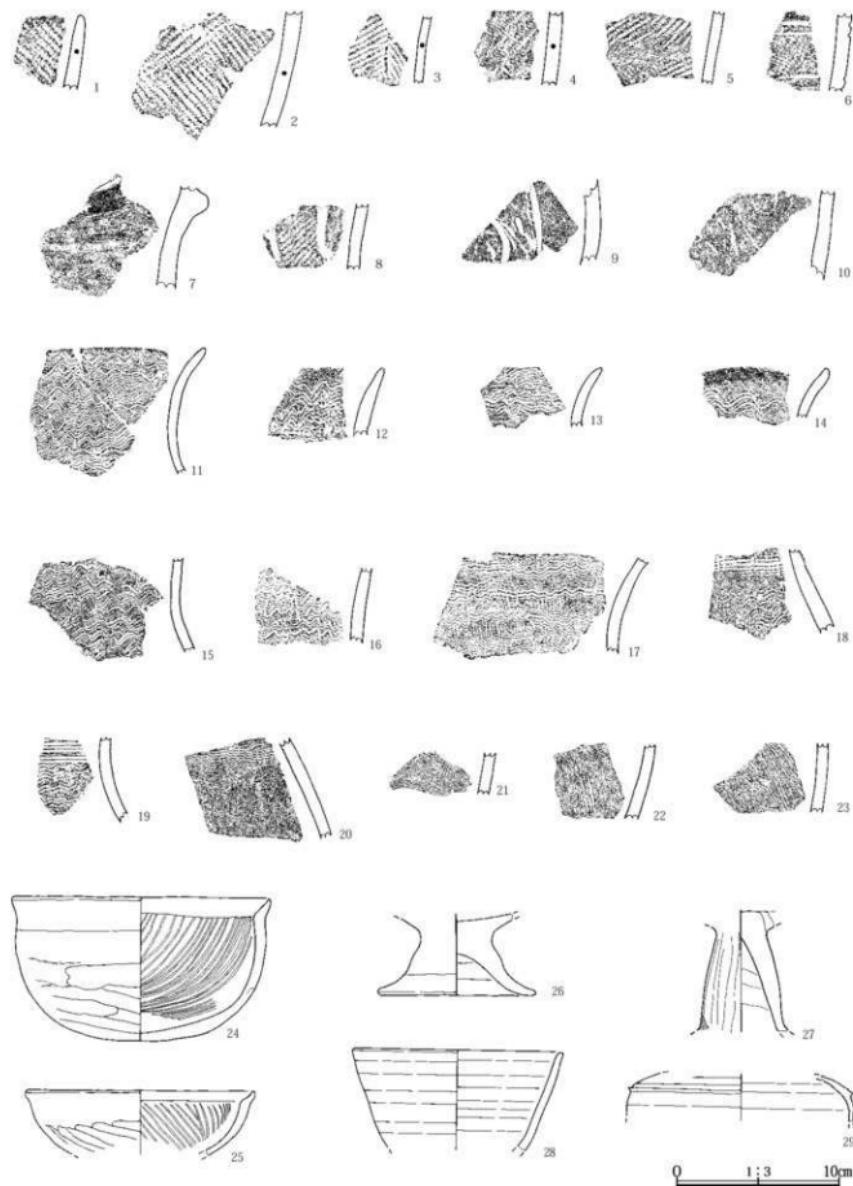
第21表 遺構外出土物觀察表

掃 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出上位置 残 有 率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第110回 PL.56	1	織文土器 深鉢	8区遺構外 口縁部破片		粗砂、織維/ふつ う/	粗織文を横位施文する。	黒浜式
第110回 PL.56	2	織文土器 深鉢	7区遺構外 胸部破片		粗砂、白色粒、輝 石、織維/ふつう/	LR、RL織文を羽状施文する。	黒浜式
第110回 PL.56	3	織文土器 深鉢	8区遺構外 胸部破片		粗砂、織維/ふつ う/	LR、RL織文を羽状施文する。	黒浜式
第110回 PL.56	4	織文土器 深鉢	8区遺構外 胸部破片		粗砂、織維/良好/	LR織文を横位施文する。	黒浜式
第110回 PL.56	5	織文土器 深鉢	10区遺構外 胸部破片		粗砂、輝石/良好/	LR織文を横位施文する。	黒浜式
第110回 PL.56	6	織文土器 深鉢	6区遺構外 胸部破片		粗砂、輝石/良好/	平行沈線を横位多段にめぐらす。地間にLR織文を横位施文。諸磯寺式	
第110回 PL.56	7	織文土器 深鉢	6区遺構外 胸部破片		粗砂、輝石/良好/	疊帶による口縁部区画を施す。頸部は無文帯。	中期中葉
第110回 PL.56	8	織文土器 深鉢	5区遺構外 胸部破片		粗砂、赤色粒、輝 石/良好/	帶状沈線による弧状モチーフを施し、RL織文を充填施文す る。	称名寺1式
第110回 PL.56	9	織文土器 深鉢	8区遺構外 胸部破片		粗砂、輝石、石英 /良好/	帶状沈線による弧状モチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺2式
第110回 PL.56	10	織文土器 深鉢	8-1区遺構外 胸部破片		粗砂、石英/良好/	無文。	後期前葉
第110回 PL.56	11	弥生土器 甕	8区遺構外 口縁部破片		粗砂/良好/	櫛描波状文を横位多段に施す。	樽式
第110回 PL.56	12	弥生土器 甕	3区遺構外 口縁部破片		粗砂、白色粒/良 好/	櫛描波状文を横位多段に施す。	樽式
第110回 PL.56	13	弥生土器 甕	3区遺構外 口縁部破片		粗砂/良好/	櫛描波状文を横位多段に施す。内面ミガキ整形。	樽式

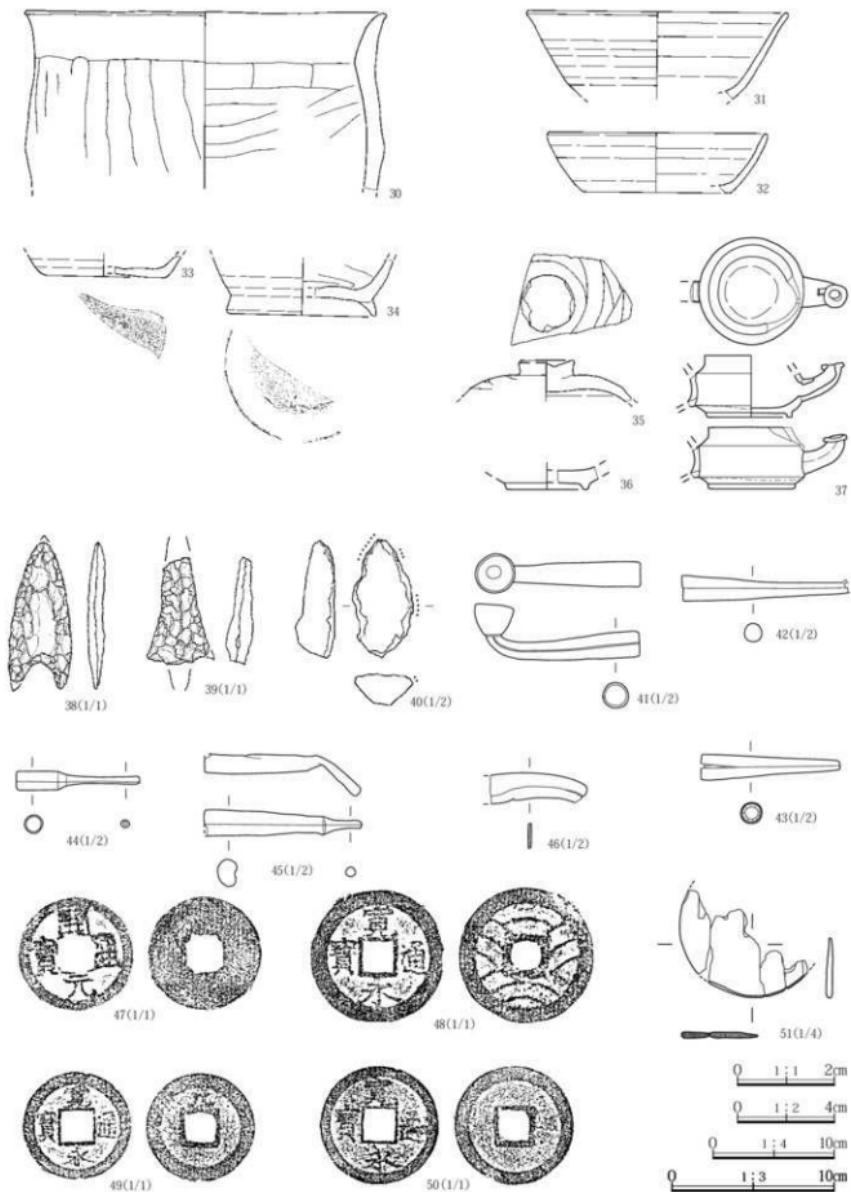
種 図 PL. No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎工/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	8区遺構外 口辺部破片		細砂/良好/	櫛描波状文をめぐらす。内面ミガキ整形。	縄式
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	8区遺構外 口辺部破片		細砂、輝石/良好/	櫛描波状文を横位多段に施す。	縄式
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	3区遺構外 口辺部破片		細砂、白色粒、輝 石/ふつう/	櫛描波状文を横位多段に施す。	縄式
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	7区遺構外 口辺部破片		細砂、白色粒、輝 石/良好/	櫛描波状文を横位多段に施す。	縄式
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	3区遺構外 頭部破片		細砂、白色粒/良 好/	頭部に廉状文、肩部に櫛描波状文をめぐらす。	縄式
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	3区遺構外 頭部破片		細砂/良好/	頭部に廉状文、肩部に櫛描波状文をめぐらす。	縄式
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	8区遺構外 頭部破片		細砂/良好/	肩部に櫛描波状文をめぐらす。波状下縦ミガキ、内面横 ミガキ整形。	縄式
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	3区遺構外 頭部破片		細砂、輝石/良好/	斜位のハケメを施す。	縄式
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	8区遺構外 頭部破片		細砂、輝石/良好/	斜位のハケメを施す。	縄式
第1108 PL. 56	弥生土器 甕	8区遺構外 頭部破片		細砂/良好/	斜位のハケメを施す。	縄式
第1108 PL. 57	土師器 鉢	8区遺構外 口 1/2	15.8 8.7	細砂粒/良好/赤 褐色	外表面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部は上半 がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部に右 側傾の斜放射状ヘルミガキ。	内斜口縁系
第1108 PL. 25	土師器 杯	8区遺構外 口縁部~体部外 部	14.0	細砂粒/良好/橙 色	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は 内斜口縁杯	
第1108 PL. 26	土師器 高杯	8区遺構外 脚部片	9.4	細砂粒/良好/明 闇	杯部との接合状態不明。脚部は柱状部がナデ、底部は横ナ デ。内面は横ナデ。	
第1108 PL. 27	土師器 高杯	8区遺構外 脚部柱状部		細砂粒/良好/明闇	杯部は脚部に巻き付けるように成形。脚部柱状部は外外面 ともヘルナナデ。	
第1108 PL. 28	須恵器 杯	8区遺構外 口縁部~体部片	12.6	細砂粒/還元塩/オ リーブ灰	クロロ整形、回転は右回り。	
第1108 PL. 29	須恵器 蓋杯	8区遺構外 口縁部~天井部 片	13.8	細砂粒/還元塩/灰 白	クロロ整形。回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り。稜は 小凸帯状に突出する。	
第1108 PL. 30	土師器 甕?	8区遺構外 口縁~胴部上位 片	21.8	細砂粒/良好/に ぶい黄	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部にヘラナデ。	
第1111 PL. 31	須恵器 杯	8区遺構外 口縁部~体部片	15.8	細砂粒/還元塩/灰 白	クロロ整形。回転は右回り。	
第1111 PL. 32	須恵器 杯	8区遺構外 口縁部~底部 底	13.4 9.2	3.6 細砂粒/還元塩/灰 白	クロロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ削りか。	
第1111 PL. 33	須恵器 杯	8区遺構外 底部片	7.8	細砂粒/還元塩/灰 白	クロロ整形。回転は右回り。底部は回転ヘラ起こし後回転 ヘラ削り。	
第1111 PL. 34	須恵器 甕	8区遺構外 底部~体部下位 片	8.8 9.0	細砂粒/還元塩/灰 白	クロロ整形。回転は右回り。底部は回転糸切り、高台は貼 付。内面は底部から体部にヘラナデ。	
第1111 PL. 35	須恵器 杯蓋	10区遺構外 摘~天井部片	3.4	細砂粒/還元塩/灰 白	クロロ整形。回転は右回り。天井部は回転ヘラ削り。摘は 厚めのボタン状の上板を貼付し周囲をつまみ上げ環状に作 る。	
第1111 PL. 36	瀬戸・美濃 陶器 皿	2区遺構外 底部1/4	一 (4.9)	高 一 灰	底部内面に押印文か。内面から高台内に灰釉。大窓。	15世紀末~ 16世紀中葉か
第1111 PL. 37	製作地不詳 カンテラ	8区遺構外 一部欠	5.4 5.2	高 3.3 にぶい黄	蓋は出土していない。口縁端部上面は無釉。内面と体部外 面に灰釉。取っ手欠損。	19世紀
第1111 PL. 38	剥片石器 石鑿	6区遺構外 凹壳形	長 (3.0) 幅 1.3	厚 0.4 重 1.4 黒色頁岩	完成状態。表裏面とも周辺加工して、器体を作出する。先 端部および左辺刃部をわざわざに欠く。	凹基無茎鑿
第1111 PL. 39	剥片石器 石鑿	6区遺構外 幅 2/3	長 (2.2) 幅 (1.3)	厚 0.6 重 1.1 流紋岩	完成状態。先端部が長く延び、側縁下半は広がり、鋸齒状 を呈す。石器中の石英が崩離を邪魔して、石材として良質 凸基有茎鑿には見えない。先端部および基部を大きく欠損する。	
第1111 PL. 40	剥片石器 火打石	3区遺構外 完形	長 4.8 幅 2.5	厚 1.6 重 17.6 玉髓	側面剥片を用いる。両側縁が加工され、見た目に構文石器 とすることも可能だが、先端側エッジが著しく潰れ、これ を機能部と見た。	
第1111 PL. 41	副製品 煙管(瓶首)	5区遺構外 完形	長 6.8 径 1.6	厚 0.1 重 11.5	火咀と側面部のつなぎ目が明瞭。	

#### 第4章 検出された遺構と遺物

種 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎上/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第111図 PL.57	銅製品 煙呑(吸口)	3区遺構外 縦宍(吸口) 圓完形	長 徑 幅	6.8 1.0 重	0.1 2.8		つなぎ目は明瞭。口付がわずかに破損する。	
第111図 PL.57	銅製品 煙呑(吸口)	3区遺構外 縦宍(吸口) 完形	長 徑 幅	5.8 1.0 重	0.1 4.3		羅字の一部が残存し、つなぎ目が明瞭。一部に金属光沢が見られる。	
第111図 PL.57	銅製品 煙呑(吸口)	7区遺構外 縦宍(吸口) 完形	長 徑 幅	5.1 0.8 重	0.8 3.8		金色の光沢が見られる。羅字の一部が中に残存し、つなぎ目は明瞭。小口から1.7cmのところに斜がつく。	
第111図 PL.57	銅製品 煙呑(吸口)	8区遺構外 縦宍(吸口) 圓完形	長 徑	7.0 1.0	厚 重	0.1 4.2	つなぎ目は不明瞭。口付近くで折れ曲がって破損する。	
第111図 PL.57	銅製品 煙呑(吸口)	5区遺構外 縦宍(吸口) 1/3	長 徑	(4.0) —	厚 重	0.1 2.0	つなぎ目が明瞭。羅首と見られるが、潰れており詳細不明。	
第111図 PL.57	銅貨	7区遺構外 開元通寶 完形	外 内	2.347 1.875	厚	0.094 重	面は文字、輪は凹面。背は形が丸く不明瞭。郭が無く、四隅を埋めたような形状で穴が作られている。	
第111図 PL.57	銅貨	7区遺構外 新寛永 完形	外 内	2.791 2.151	厚 重	0.174 5.4	四文践、II波。面、背とともに文字、輪、郭が明瞭。	
第111図 PL.57	銅貨	7区遺構外 新寛永 完形	外 内	2.236 1.742	厚 重	0.105 1.7	背元。面の文字、輪、郭は明瞭。背はやや肌が荒れ、一部不規則。	
第111図 PL.57	銅貨	5区遺構外 新寛永 完形	外 内	2.449 1.886	厚 重	0.122 3.4	面、背とともに文字、輪、郭は明瞭。	
第111図 PL.57	木製品 曲物	1/2	径	15.0	厚	0.6	小ぶりの曲物の底板。全体的に薄くなり劣化が見られる。	
PL.57	石製品 石臼(上臼)	5区遺構外 1/3	径 幅	(32.0) —	高 重	6.7 2500	著しく片減り。主溝・副溝の類は全く痕跡を残していない。ものくばり孔から長い溝が延びているが、ものくばり溝としては明らかに長過ぎる。	
PL.57	礫石器 礫石	8区遺構外 完形	長 幅	11.9 3.9	厚 重	3.2 244.1	小口部両端に弱い敲打痕がある。礫面に鉄が付着してその他の痕跡は確認できない。	棒状器



第110図 遺構外出土遺物(1)



第111図 遺構外出土遺物(2)

## 第5章 自然科学分析

### 第1節 各分析の経緯と結果

#### 1 火山灰分析

本遺跡の位置する東吾妻町周辺には、榛名山や浅間山から噴出したテフラ(火山碎屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰していることは、周辺遺跡における発掘調査で明らかとなっている。本遺跡においても、吾妻西バイパスでの調査で複数の火山灰が確認され、吾妻東バイパス調査においても各調査区で確認されており、調査対象地域に堆積していることは先述したとおりである。同時に、各テフラの同定と降下年代を知ることが不可欠となった。そこで、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を目的として、令和2年度調査での5・7・8区を対象に、調査の進行に応じて火山灰分析業務を株式会社火山灰考古学研究所に委託して実施した。

その結果、5区においてはAs-B下水田面の下位にHr-FAの可能性のあるテフラ層と、それを覆う洪水堆積物の堆積が明らかとなった。また、7・8区での分析からは、上位から天明3年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物、As-Kk、As-B、そしてHr-FAが確認され、他にAs-Dの可能性があるテフラ粒子なども検出された。

#### 2 植物珪酸体・花粉分析

調査では、浅間泥流およびAs-Bの下面に畑や水田といった生産遺構を検出している。しかし、その状態は悪く、水田に至っては畦畔の明瞭な箇所もあるが、棚田状の平坦面が連なる箇所がかなり多い状況にある。また、水田と考えられる面の下層は、粘性の強い黒色土が耕土としてある。そこで、土地(耕地)利用や環境および植生を明らかにすることを目的に、令和2年度調査の2・5・7・8区を対象とした植物珪酸体分析と花粉分析業務をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

その結果、As-B下の黒色土の状況は、全ての試料採取地点からイネ属の花粉化石や植物珪酸体が産出されたが、その産状は調査区毎に異なるものであった。特に、5区での算出状況は、稲作を積極的に支持することは難

しいとの報告を受けたが、先述したように試料採取した地点は耕地ではなく閑地であるが故の結果と考えられる。また、7区でのイネ属の花粉や植物珪酸体の産状にばらつきが見られた点については、一考を要する。

一方、対象とした7・8区の浅間泥流化の状況は、7区での泥流被災以前の稲作については積極的に支持することは難しいしながらも、ソバ属が確認されたことから、周辺でのソバの栽培・利用の可能性がでてきた。8区では、イネ属花粉は認められなかったもののイネ属の植物珪酸体が産出されている。

周辺の森林植生であるが、As-B下の黒色土では落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、スギ属などの針葉樹、クマシデ属—アサダ属、ブナ属、ニレ属—ケヤキ属などの落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹が認められ、周辺に分布した二次林に由来の可能性をもつ。また、浅間泥流下の土壤については、7区で花粉化石が豊富に産出し、木本類ではマツ属が優占する。マツ属のうち亜属まで同定できたのは、二次林の代表的な種類でもあるマツ属複維管束亜属であった。その他ではモミ属、ツガ属、スギ属などの針葉樹、コナラ亜属などの落葉広葉樹が検出されている。

#### 3 炭化材樹種同定

8区での1号竪穴建物(5世紀後半)の調査からは、多くの炭化材が出土しており、その建築材の樹種同定を目的に、令和2年度の調査時に炭化材樹種同定業務をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

その結果、20点の試料は広葉樹5種類とイネ科2種類であり、広葉樹のうちのエノキ属とクリの2種類が主要構成種であった。建物の構造材である骨組材には、エノキ属を多用していたことが分かり、屋根材(垂木)は特定の樹種選定をしていないことが明らかとなった。また、木取りについては、骨組材や屋根材による違いは認められなかった。

以下、各分析報告を掲載する。

## 第2節 火山灰分析

### 第1項 5区の分析

#### 1 5区北壁の土層層序

5区北壁では、下位より黒褐色泥層(層厚8cm以上)、成層したテフラ層(層厚1.8cm)、灰色砂層(層厚12cm)、円磨を受けた黄色軽石を多く含む黄色砂層(層厚7cm)、軽石の最大径10mm)、黄色軽石混じり灰褐色泥層(層厚19cm、軽石の最大径9mm)、黒泥層(層厚4cm)が認められる(図1)。最上位の黒泥層の上面は水田面で、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ層(As-B、荒牧、1968、新井、1979、町田・新井、2011)に覆われている。

これらの土層のうち、成層したテフラ層は、下部の白色砂質細粒火山灰層(層厚0.8cm)と、上部の桃色砂質細粒火山灰層(層厚1cm)からなる。

#### 2 テフラ検出分析

##### (1) 分析試料と分析方法

土層の由来を解明するために、5区北壁で採取された4試料を対象に、テフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

1) 砂分の含有程度に応じて試料5~8gを秤量。

2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。

3) 恒温乾燥器により80°Cで恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下で観察。

##### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。5区北壁の試料4には、白色や灰白色のスponジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。また、磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物(以降、重鉱物)には、角閃石や斜方輝石が認められる。試料3には、白色や灰白色のスponジ状軽石型ガラスがごく少量含まれている。重鉱物としては、角閃石や斜方輝石が認められる。

試料2には、分厚い中間型やスponジ状または織維束状の軽石型ガラスが少量含まれている。前者の色調は白

色、後者の色調は無色透明である。さらに、試料1には、黄白色や黄灰色の円磨された軽石(最大径10.6mm)が比較的多く含まれている。また、黄白~白色や灰白色のスponジ状軽石型ガラスや、淡灰色や無色透明の中間型ガラスも比較的多く含まれている。重鉱物には、斜方輝石や單斜輝石のほかに、ごく少量の角閃石が認められる。

#### 3 考察

野外調査で認められた成層したテフラ層は、層相、含まれる火山ガラスの特徴、さらに重鉱物の組み合わせなどから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、2011など)、あるいは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、2011など)と考えられる。現段階では、前者の分布の広域性を考慮して、前者の可能性を指摘しておく。

また、テフラ検出分析で認められたテフラ粒子のうち、円磨された黄白色や黄灰色の軽石、黄白~白色や灰白色のスponジ状軽石型ガラスは、それらの岩相から、約1.5~1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP、新井、1962、町田・新井、2011)や、その直上にある浅間草津テフラ(As-K、町田・新井、2011)で代表される浅間火山軽石流期のテフラと考えられる。とくに、As-YP噴火の後半に発生し、吾妻川上流域にも厚く広く堆積した浅間小諸1火碎流堆積物(As-Km1、荒牧、1968、町田、2011など)に由来する可能性が高い。なお、今回検出されたテフラ粒子の一部は、厚田中村遺跡周辺に分布する地すべりや泥流の堆積物に含まれる軽石流期のテフラに由来する可能性もある。

なお、榛名火山の東麓一帯では、Hr-FAおよびHr-FPの噴火の際に、大規模な火山泥流が発生したことがよく知られている(早田、1989など)。今回も、Hr-FAの可能性が高いテフラ層の直上に洪水性堆積物が認められた。しかしながら、今回検出された堆積物には、浅間系テフラ粒子が多く含まれていることから、Hr-FA火山泥流のほかに、Hr-FA噴火に関係した、あるいは直接関係のない地震による地すべり、さらに噴火とは関係のない豪雨などによる可能性も考えておきたい。

## 4まとめ

東吾妻町厚田中村遺跡5区において、野外調査(地質調査)とテフラ分析(テフラ検出分析)を実施した。その結果、浅間Bテフラ層(As-B, 1108年)に覆われた水田面の下位で、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)の可能性が非常に高いテフラ層と、それを覆う洪水堆積物を認めることができた。

## 文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の绳文時代以降の示標テフラ層、考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質、地図研修專報, no.14, p.1-45.
- 町田 洋・新井房夫(2011)「新編火山灰アトラス(第2刷)」、東京大学出版会, 336p.
- 坂口一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器、群馬県教育委員会編「荒砥北原道路・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 魁(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害、第四紀研究, 27, p.297-312.

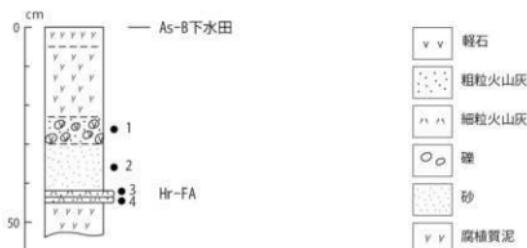


図1 5区北壁の土層柱状図  
●: テフラ分析試料の層位。数字: テフラ分析の試料番号。

表1 テフラ分析結果

地点	試料	種類	褐色・スコリア	色調	形状	重複物
5区北壁	1 **	層	褐色 灰白、黄灰	10.6mm	層 pm (sp), ml ml, pm (sp, fb)	pm (sp), ml ml, pm (sp, fb)
	2 *	層	褐色 灰白	*	層 pm (sp)	pm (sp)
	3 *	層	褐色 灰白	*	層 pm (sp)	pm (sp)

\*\*\*\*: とくに多い、 \*\*\*: 多い、 \*\*: 中程度、 \*: 少ない、 fb: バブル孔、 ml: 中間型、 pm: 褐色型、 sc: スコリア型、 sp: 斜方輝石、 tp: 単斜輝石、 cpx: 斜方輝石、 opa: 斜方輝石、 cpx: 斜方輝石、 am: 角閃石、 ol: カララン石、 重複物の( ): 量が少ないことを示す。

5区火山灰分析写真図版

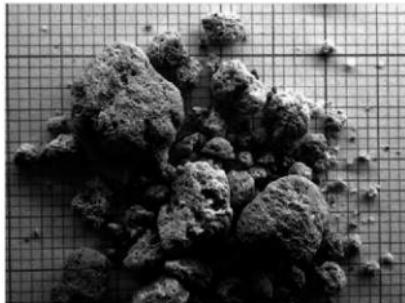


写真1 5区北壁・試料1(落射光)

円磨された黄白色や黄灰色の軽石が多く含まれている。重鉱物には、斜方輝石や單斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が認められる。背後は1 mmメッシュ。

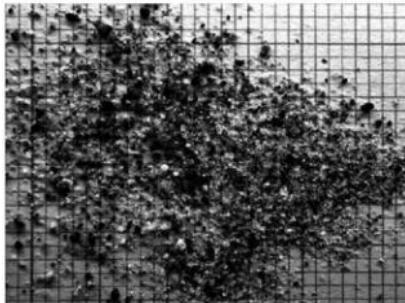


写真2 5区北壁・試料3(落射光)

発泡がさほど良くない白色や灰白色のスponジ状軽石型ガラスがごく少量含まれる。重鉱物には、角閃石や斜方輝石が認められる。背後は1 mmメッシュ。

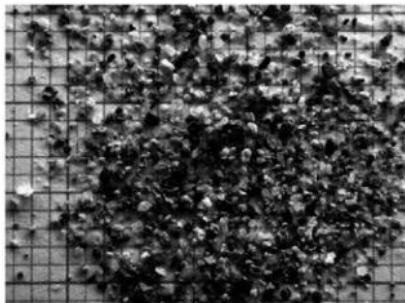


写真3 5区北壁・試料4(落射光)

発泡がさほど良くない白色や灰白色のスponジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれる。重鉱物には、角閃石や斜方輝石が認められる。背後は1 mmメッシュ。

## 第2項 7・8区の分析

### 1 試料採取地点の土層層序

#### (1) 7区南壁

低湿地部に位置する7区南壁では、下位より黒泥層(層厚2cm以上)、灰褐色軽石混じり青灰色細粒火山灰層(層厚4cm)、灰褐色泥層(層厚3cm)、黄褐色軽石層(層厚10cm)、亜角礫を多く含み色調がやや暗い灰色土(層厚18cm、礫の最大径28mm)、亜角礫を多く含む灰色土(層厚7cm、礫の最大径32mm)、亜角礫混じり灰色土(層厚9cm、礫の最大径18mm)、亜角礫や円礫を含む暗灰色泥流堆積物(層厚200cm以上、礫の最大径256mm)が認められる(図1)。

岩棚城跡など周辺遺跡におけるテフラの観察や分析の結果(早田, 2018など)から、灰褐色軽石混じり青灰色細粒火山灰層は、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ層(As-B、荒牧, 1968、新井, 1979、町田・新井, 2011)の可能性が考えられる。また、その上位の褐色軽石層は、層位および層相から、1128(大治3)年に浅間火山から噴出したらしい浅間船川テフラ層(As-Kk、早田, 1991, 1996, 2004など)と考えられる。さらに、最上位の暗灰色泥流堆積物は、層位や層相から、1783(天明3)年の浅間火山の噴火に伴って発生したいわゆる浅間天明泥流堆積物に同定される。

#### (2) 8区北壁

小規模な扇状地地形の上に位置する8区北壁では、調査区の基本土層をよく観察できた(図2)。ここでは、巨礫群(礫の最大径678mm)の上位に、下位より砂混じり褐色シルト層(層厚15cm)、淘汰の良い黄色砂層(層厚32cm、以上10層)、黄色がかった灰色砂質土(層厚16cm)、黄白色軽石混じりで砂を多く含む灰色土(層厚23cm、軽石の最大径12mm、以上9層)、炭化物や黄色軽石(最大径3mm)混じり暗灰褐色土(層厚6cm)、黄色軽石混じり黒色土(層厚25cm、軽石の最大径6mm)、黄色軽石混じり黒褐色土(層厚10cm、軽石の最大径7mm)、黒色土(層厚4cm、以上8層)、下部(7層)に粗粒の灰色軽石を含むやや黄色がかった灰色砂質細粒火山灰層(層厚3cm、軽石の最大径14mm)、暗灰褐色土(層厚1cm、以上6層)、黄色軽石層(層厚7cm、軽石の最大径27mm)、石質岩片の最大径6mm)、亜

角礫を多く含む灰褐色土(層厚23cm、礫の最大径24mm、以上5層)、やや青みがかった暗灰色土(層厚6cm、4層)、最下部10cm(3層)が灰色を呈する褐灰色泥流堆積物(層厚61cm、礫の最大径168mm、2層)、やや褐色がかった灰色土(層厚16cm、1層)、盛土(層厚13cm)が認められる(図2)。

やはり、周辺遺跡における調査分析の結果から、下部に粗粒の灰色軽石を含むやや黄色がかった灰色砂質細粒火山灰層(7~6層下部)はAs-B、また黄色軽石層(5層下部)はAs-Kkにそれぞれ同定される可能性が高い。また、上位の褐灰色泥流堆積物(3~2層)は、層位や層相から浅間天明泥流堆積物に同定される。

### 2 テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

7区南壁と8区北壁で採取された10試料を対象に、テフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出と同定精度の向上を図った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 砂分の含有程度に応じて試料3~8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

#### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。分析の結果、7区南壁の試料1からは、淡灰色、淡褐色、褐色の軽石(最大径8.1mm)が少量、スポンジ状軽石型ガラスが比較的多く検出された。また、不透明鉱物以外の重鉱物(以降、重鉱物)には、斜方輝石や單斜輝石が認められる。

一方、8区北壁では、試料6以上の試料で上述の軽石や火山ガラスが認められた。このうち、試料5には、比較的粗粒の淡灰色や褐色の軽石が比較的多く、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。試料3の軽石層には、淡灰色や褐色の軽石(層厚8.6mm)やスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。試料1では、このような軽石やスポンジ状軽石型ガラスのほかに、細粒の白色の軽石(最大径2.2mm)や、スポンジ状あるいは織維束状の火山ガラスが少量ながら認められた。このうち、織維束状軽石型ガラスには光沢をもつ

ものがある。これらの試料には、重鉱物として斜方輝石や單斜輝石が認められる。

より下位では、試料9にスponジ状に良く発泡した灰色軽石(最大径3.5mm)やその細粒物のスponジ状軽石型ガラスのほか、黄白色や白色のスponジ状や纖維束状の軽石型ガラスが含まれている。これらの試料にも、重鉱物に斜方輝石や單斜輝石が認められる。さらに、試料7や試料6には、さほど発泡の良くない白色のスponジ状軽石型ガラスが少量ずつ含まれており、重鉱物として斜方輝石や單斜輝石のほかに角閃石が認められる。なお、試料9から試料6にかけては、無色透明で分厚い中間型ガラスも含まれている。また、試料7には無色透明のバブル型ガラスも少量認められた。

以上のように、テフラ検出分析で認められた軽石や火山ガラスは、従来の周辺での分析結果をもとに次の6タイプに大まかに区分できる。

タイプa：無色透明のバブル型ガラス。

タイプb：黄白色や白色のスponジ状あるいは纖維束状の軽石型や、無色透明の中間型の火山ガラス。

タイプc：スponジ状に良く発泡した灰色軽石や、その細粒物であるスponジ状軽石型ガラス。

タイプd：さほど発泡が良くない白色のスponジ状軽石型ガラス。角閃石を共伴している可能性が高い。

タイプe：淡灰色、淡褐色、褐色の軽石やスponジ状軽石型ガラス。斜方輝石や單斜輝石を共伴する。

タイプf：スponジ状あるいは纖維束状に発泡した白色の軽石や火山ガラス。光沢をもつものが認められる。

### 3 考察

8区北壁で検出された軽石や火山ガラスのうち、タイプaは、岩相から約3万年前に南九州地方の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 2011, 早田, 2019など)と考えられる。また、タイプbは、岩相から、約1.5～1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石層(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 2011)、あるいはそれに関係するらしい浅間草津テフラ層(As-K, 町田・新井, 2011)で代表される浅間火山軽石流期のテフラと考えられる。今回の分析では、これらのテフラ粒子の濃集層準は認められなかったことから、今回の分析対象土層の層位は、As-YP kより上位と推定される。

9層や8層下部で認められたタイプcに関しては、今後火山ガラスの屈折率特性の解明が行われると良いが、微晶が比較的少ないところをみると、約4,500年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間D軽石(As-D, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 早田, 1996)かも知れない。そうであれば、8区が位置する扇状地地形の形成終了は完新世中期頃と推定されよう。

タイプdについては、火山ガラスの岩相や角閃石を共伴する可能性が高いこと、さらに従来の周辺での調査分析成果を合わせると、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 2011など)に起源をもつ可能性が高い。したがって、より下位にあって色調がやや明るい土層から採取された試料7付近(8層中部)にHr-FAの降灰層準があったと考えられる。

タイプeは、岩相から平安時代に浅間火山から噴出したテフラ粒子と考えられる。7区南壁において試料1、また8区北壁において試料5および試料4が採取されたテフラ層(7～6層下部)と、それらの上位の軽石層(8区北壁・試料3, 5層下部)は、層相を合わせると、それぞれAs-BとAs-Kに同定される。

なお、本遺跡における土層観察の際には、浅間天明泥流の発生に先立って吾妻川流域に降灰した浅間A軽石層(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)は認められなかったものの、テフラ検出分析により8区北壁の泥流堆積物最下部(試料1, 3層)から検出されたタイプaの軽石や火山ガラスがAs-Aで、泥流の流走中にAs-A包含層が泥流に取り込まれた結果の産状と考えられる。

### 4まとめ

東吾妻町厚田中村遺跡において、野外調査(地質調査)とテフラ分析(テフラ検出分析)を実施した。その結果、浅間Bテフラ層(As-B, 1108年)、浅間柏川テフラ層(As-K, 1128年)、浅間天明泥流堆積物(1783年)を認めることができた。そして、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間A軽石(As-A, 1783)などに由来する可能性が高いテフラ粒子や、浅間D軽石(As-D, 約4,500年前<sup>\*1</sup>)の可能性があるテフラ粒子なども検出した。

\*1：放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代。

文献

- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層、考古学ジャーナル、no.53、p.41-52。
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質、地図研報專編、no.14、p.1-45。
- 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—始良Tr火山灰の発見とその意義、科学、46、p.339-347。
- 町田 洋・新井房夫(2011)「新編火山灰アトラス(第2刷)」、東京大学出版会、336p.
- 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器、群馬県教育委員会編「荒砥北原道路、今井 神社古墳群・荒砥青柳遺跡」、p.103-119。
- 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害、第四紀研究、27、p.297-312。

- 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち、佐久考古通信、no.53、p.2-7。
- 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御活第1テフラより上位のテフラについて—、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書、no.7、p.256-267。
- 早田 勉(2004)火山噴百年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について、かみつけの里博物館編「1108～浅間山噴火～中世への影響」、p.45-56。
- 早田 勉(2018)科学分析、東吾妻町教育委員会編「東吾妻町指定史跡岩櫃城跡総合調査報告書」、p.121-130。
- 早田 勉(2019)北関東地方西部における旧石器時代の火山噴火と環境変化、令和元年度岩宿フォーラム講演要旨集、p.19-25。

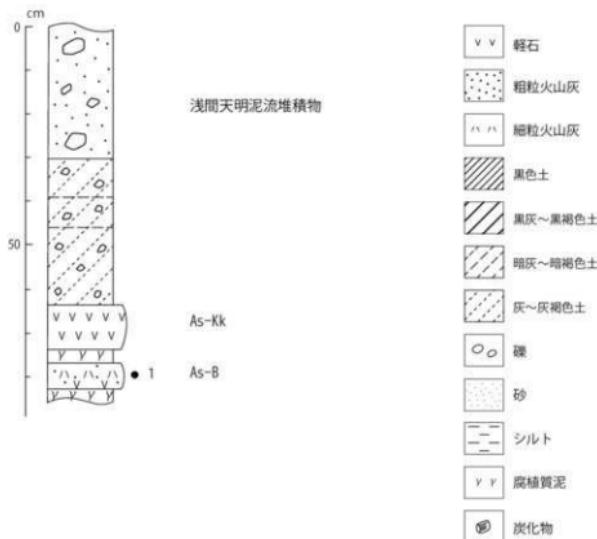


図1 7区南壁の土層柱状図  
●：テフラ分析試料の層位、数字：テフラ分析の試料番号。

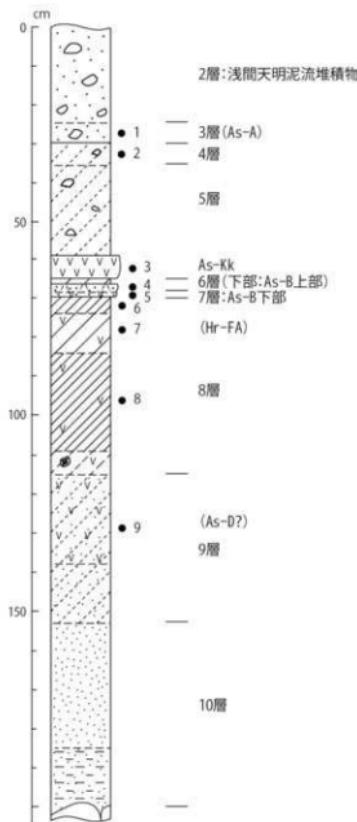


図2 8区南壁の土層柱状図  
●: テフラ分析試料の層位。  
数字: テフラ分析の試料番号。

表1 テフラ検出分析結果

地点名	試料	鉄石・スコリア		層	形態	火山ガラス	
		量	色調			(不透明物以外)	量
7K6南壁	1 *	#	淡灰	淡灰	暗灰	淡灰	0.6
8K6北壁	1 **	#	淡灰	淡灰	暗灰	淡灰	0.6
	2 ***	#	淡灰	淡灰	暗灰	淡灰	0.6
	3 ****	#	淡灰	暗灰	暗灰	淡灰	0.6
	4 *	#	淡灰	淡灰	暗灰	淡灰	0.6
	5 **	#	淡灰	淡灰	暗灰	淡灰	0.6
	6 *	#	淡灰	淡灰	暗灰	淡灰	0.6
	7	#	淡灰	淡灰	暗灰	淡灰	0.6
	8	*	淡灰	暗灰	暗灰	白	無色透明
	9	*	灰	暗灰	暗灰	黃白	白

\*\*\*\*: 少くない、\*\*\*: 多い、\*\*: 中程度、\*: 少ない、(\*): 半分少ない。  
bw : ブラウ型、sp : 鉄石型、nd : 両方型、sp : スボンジ型、tb : 滲透型、ops : 斜方解 $F_5$ 、cps : 单斜解 $F_5$ 、an : 角閃石。  
不透明物(\*)は量が少ないとします。

付表 山中式土壤硬度計による8区北壁の土層の硬度測定結果

地点	上層	測定値(平均)*1	備考
基本上断面	2層上部	25.8mm	浅間天明泥流堆植物
	2層中央上部	25.5mm	浅間天明泥流堆植物
	2層中央下部	26.8mm	浅間天明泥流堆植物
	2層下部	27.0mm	浅間天明泥流堆植物
4.0-5.1m復旧溝	2'層上部	20.0mm	復旧溝覆土
	2'層中部	21.8mm	復旧溝覆土
	2'層下部	21.4mm	復旧溝覆土
5.5-6.2m復旧溝	2'層上部	18.0mm	復旧溝覆土
	2'層中部	23.7mm	復旧溝覆土
	2'層底部	19.0mm	復旧溝覆土
基本上断面	3層	28.8mm	浅間天明泥流堆植物基底部
	4層	24.3mm	
	5層	20.6mm	
	8層	20.0mm	
	9層	26.3mm	

\*1 3～5回の測定結果(指標硬度目盛り)の平均値。

7・8区火山灰分析写真図版

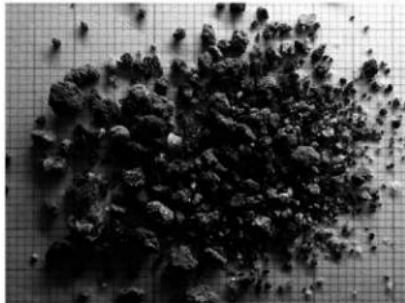


写真1 8区北壁・試料1(落射光)

淡灰色、淡褐色、褐色のほかに、白色の軽石や  
スポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれて  
いる。背景は1 mmメッシュ。

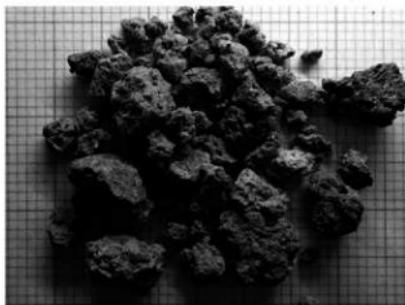


写真2 8区北壁・試料3(落射光)

淡灰色や淡褐色の粗粒軽石およびスポンジ  
状軽石型ガラスが多く含まれている。背景は1  
mmメッシュ。

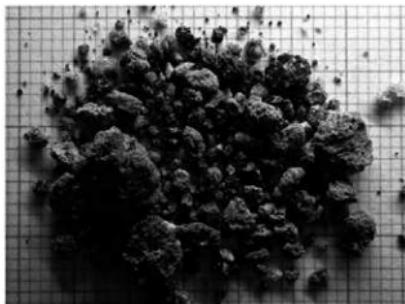


写真3 8区北壁・試料5(落射光)

淡灰色や淡褐色の軽石およびスポンジ状軽石型  
ガラスが多く含まれている。軽石の中には粗粒  
のものが認められ、粒径が不揃いである。背景  
は1 mmメッシュ。

## 第3節 植物珪酸体・花粉分析

### 1 試料

2区ではAs-B下面で畦畔は検出されなかったものの、水田土壌と思われる黒色土が検出された。試料は、調査区壁面の黒色土が明瞭に見られる箇所から、As-B層～As-B直下黒色土層にかけて5点が採取された。この内、3点(No. 1～3)が分析対象試料として選択された。

5区では、西から東に大きく3つの段差(上段、中段、下段)のある水平面が認められる。上段の一部に畦畔が検出されている。この畦畔に区画された箇所、上段東側に位置する中段、下段に当たる調査区壁面でそれぞれ黒色土が明瞭に認められる。試料は、As-B層～As-B直下黒色土層にかけて6点が採取された。この内、畦畔が見られない中段や下段の水田耕作を検証するために各場所から1点ずつ(No. 5・6)、比較のために畦畔を有する地点(No. 4)が分析対象試料として選択された。

7区では、部分的に黒色土が検出された。調査区壁面より黒色土が明瞭に見られる場所から、As-B層～As-B直下黒色土層にかけて5点、黒色土の上位に認められる天明3年浅間泥流層下面から1点が採取された。この内、黒色土層から2点(No. 7・8)、泥流被災以前の土壌として天明3年浅間泥流層下面の1点(No. 9)の計3点が分析対象試料として選択された。

表1. 分析対象試料一覧

試料No.	採取地点	番号	分析対象	備考
1	AN2IK	1	○	
	AN2IK	2		
2	AN2IK	3	○	
	AN2IK	4		
3	AN2IK	5	○	
	AN5IK	1		
4	AN5IK	2	○	
	AN5IK	3		
5	AN5IK	4	○	
	AN5IK	5		
6	AN5IK	6	○	
	AN7IK	1		
7	AN7IK	2	○	
	AN7IK	3		
8	AN7IK	4	○	
9	AN7IK	5	○	As-A泥流下
10	AN8北壁	1	○	As-A泥流下
	AN8北壁	2		As-B下

8区では、天明3年浅間泥流の直下に畠状の高まりが検出されたことから、この部分の土壌を採取し、分析試料(No.10)とした。

以上の10点について、分析調査を実施した。分析項目は、栽培植物や植生に関して花粉分析を、特にイネ属などのイネ科作物やイネ科草本に関して植物珪酸体分析を選択した。As-B下の試料については、分析の際にAs-Bを取り除き、直下に見られた黒色土を分析に必要な量に分離して用いた。天明3年浅間泥流の直下の試料では、泥流由来と思われる礫を除き、必要量を採取して試料とした。分析試料の一覧を表1に示す。

### 2 分析方法

#### (1)花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980a)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等を参考にする。

イネ属については、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚状況・粒径などを考慮し、中村(1974)を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

#### (2)植物珪酸体分析

各試料について、植物珪酸体の産状を調べる。各試料を5g前後(湿重)で秤量する。次に過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリ

ウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個体以下は<100>で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める(100単位にする)。なお、今回は杉山(2000)を参考として主な分類群の推定生産量(kg/m<sup>2</sup>・cm)を求める。推定生産量は機動細胞珪酸体の含量(個/g)に土壌の乾比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個体当たりの植物体乾重:単位:10<sup>3</sup>g)をかけて、面積1m<sup>2</sup>で層厚1cm当たりの植物体の生産量を求めたものである。分類群の換算係数は、イネ属(赤米の地上部)が2.94、キビ連(ヒエ属として)が8.4、クマザサ属(チシマザサ節などとして)が0.75、ヨシ属が6.31、ススキ属が1.24を用いる。この結果も表中に併記する。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

### 3 結果

#### (1) 花粉分析・イネ属同定

結果を表2、図1に示す。花粉化石の産状は地点により大きく異なる。

以下に、各調査区での産状を述べる。

#### ・2区

As-B下の3点(No.1~3)では、いずれからも花粉化石が豊富に産出するが、保存状態はやや悪い。

花粉化石群集は、木本花粉と草本花粉がほぼ同率の割合で産出し、群集組成はいずれも類似する。木本花粉はコナラ属コナラ亜属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、クマシデ属—アサダ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツ

リグサ科が多産し、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。

イネ科にはイネ属も含まれており、イネ科全体に占めるイネ属の割合は、試料番号1が26.9%、試料番号2が9.2%、試料番号3が11.5%である。またガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属などの水湿地生植物も確認される。

#### ・5区

As-B下の3点(No.4~6)では、いずれも花粉化石の産出状況が悪く、保存状態も悪い。

わずかに検出された種類は、木本花粉ではモミ属、マツ属、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属など、草本花粉ではイネ属を含むイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、タンボボ亜科などである。

#### ・7区

As-B下のNo.8から花粉化石が豊富に産出し、試料番号7は産出が少ない。保存状態はいずれの試料もやや悪い。

No.8の花粉化石群集は、木本花粉と草本花粉がほぼ同率の割合で産出する。木本花粉ではモミ属が最も多く産出し、ツガ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、クマシデ属—アサダ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ属を含むイネ科、カヤツリグサ科が多産し、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科、タンボボ亜科などを伴う。イネ科に占めるイネ属の割合は26.1%である。

No.7は産出が少ないものの、No.8で多産する種類が検出されている。

一方、As-A下のNo.9では花粉化石が豊富に産出し、保存状態も普通程度で、他の試料と比較しても良好である。木本花粉ではマツ属が優占し、モミ属、ツガ属、スギ属、コナラ亜属などを伴う。

草本花粉ではイネ属を含むイネ科、タンボボ亜科が多く認められ、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。イネ科に占めるイネ属の割合は17.6%で、その他に栽培の可能性があるものではソバ属が確認される。

#### ・8区

As-A下のNo.10は花粉化石の産状が悪く、保存状態も悪い。

わずかに木本花粉のマツ属、草本花粉のイネ科、キク亜科、タンボボ亜科1~3個体が確認されたのみである。

表2. 各調査区の花粉分析結果

種類	As-B下						As-A下			
	2区 1	2区 2	3区 3	5区 4	5区 5	6区 6	7区 7	8区 8	7区 9	8区 10
<b>木本花粉</b>										
モミ属	20	21	14	-	1	-	12	59	9	-
ツガ属	18	22	25	-	-	1	6	25	7	-
トウヒ属	3	3	7	-	-	-	-	17	-	-
マツ属單管束亞属	-	3	2	-	-	-	-	1	-	-
マツ属複管束亞属	2	3	6	-	-	-	-	8	74	1
マツ属(不明)	5	9	8	-	1	-	5	17	99	-
スギ属	25	8	16	-	-	-	8	11	16	-
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	4	2	7	-	-	-	-	1	-	-
サワグルミ属	9	4	4	-	-	-	1	1	1	-
クルミ属	3	2	2	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属—アサダ属	14	6	7	-	1	-	3	11	1	-
カバノキ属	3	5	9	-	1	-	1	4	-	-
ハンノキ属	4	3	7	-	-	-	1	2	1	-
ブナ属	21	29	14	-	1	-	-	12	-	-
コナラ属コナラ亜属	66	123	63	4	23	5	9	28	4	-
コナラ属アカガシ亜属	8	7	10	-	1	-	-	2	1	-
クリ属	1	2	1	-	-	-	2	1	-	-
シイ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属—ケヤキ属	9	13	18	-	1	1	3	13	2	-
モチノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-
<b>草本花粉</b>										
ガマ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-
イネ属	36	10	15	1	-	1	2	29	16	-
他のイネ科	98	99	115	1	5	1	13	82	75	1
カタツツリグサ科	118	111	104	2	24	15	22	65	7	-
ホシクサ属	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	3	1	-	-	-	-	-	-	1	-
サナエタデ節—ウナギツカミ節	2	2	-	-	-	-	-	4	-	-
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
アカザ科	1	-	-	1	-	-	1	-	1	-
カラマツソウ属	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-
バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
セリ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シソ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属	5	10	5	1	1	-	3	11	4	-
キク亞科	5	11	8	-	2	2	3	12	4	1
タンポポ科	1	-	1	-	2	-	3	23	3	-
<b>不明花粉</b>										
不明花粉	11	4	4	1	2	1	4	12	4	1
<b>シダ類胞子</b>										
ゼンマイ属	3	5	5	1	10	3	5	4	7	-
他のシダ類胞子	115	452	122	13	52	58	50	155	154	1
<b>合計</b>										
木本花粉	217	266	222	4	30	7	52	213	215	1
草本花粉	276	244	253	6	34	19	44	207	134	5
不明花粉	11	4	4	1	2	1	4	12	4	1
シダ類胞子	118	457	127	14	62	61	55	159	161	1
合計(不明を除く)	611	967	602	24	126	87	151	579	510	7

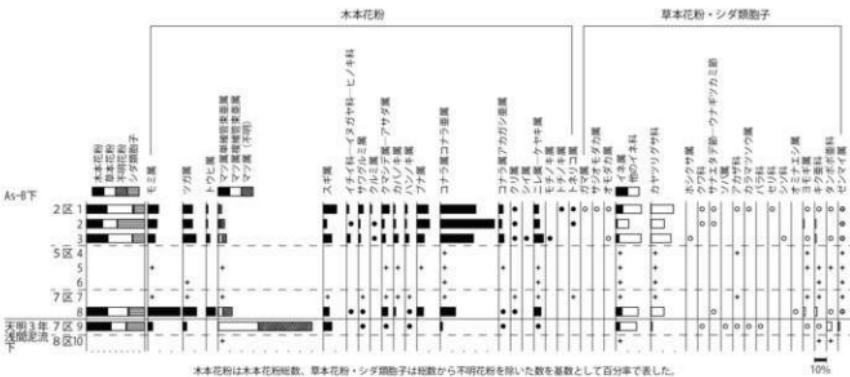


図1. 花粉化石群集の空間的な変化

## (2) 植物珪酸体分析

結果を表3、図2に示す。各試料から検出された植物珪酸体の保存状態は、概ね良好である。

以下に、各調査区での産状を述べる。

### ・2区

3点(No. 1～3)の植物珪酸体含量は多く、8万個/g前後である。各試料からは栽培植物であるイネ属が産出し、概して機動細胞珪酸体の含量が多い。また、その含量は空間的にばらつきが見られる。すなわち、No. 1では機動細胞珪酸体が6,400個/g、No. 2では同じく3,600個/g、No. 3では同じく2,600個/gである。この他にクマザサ属を含むタケ亞科、ヨシ属、コブナグサ属、スキ属、イチゴツナギ亞科などが見られる。この中では、ヨシ属の産出が目立つ。また、主な分類群の推定生産量(kg/m<sup>2</sup>・cm)は、ヨシ属(2.50～4.54)がイネ属(0.77～1.87)よりも多い。

### ・5区

3点(No. 4～6)の植物珪酸体含量は、No. 4で8万500個/gと多いが、No. 5やNo. 6では4.6万個/g前後である。各試料からはイネ属が産出し、概して機動細胞珪酸体の含量が多い。しかし、2区試料と比較すると少なく、その含量は空間的にばらつきが見られる。すなわち、No. 4では機動細胞珪酸体が700個/g、No. 5では同じく1,000個/g、No. 6では同じく1,500個/gである。この他に検出される分類群は2区試料と同様であり、ヨシ

属の産出が目立つ。また主な分類群の推定生産量(kg/m<sup>2</sup>・cm)は、ヨシ属(3.16～5.73)がイネ属(0.21～0.43)よりも多い。

### ・7区

2点(No. 7と8)の植物珪酸体含量には違いが見られ、No. 7で7.4万個/gに対して、No. 6では3.7万個/gと少ない。両試料からはイネ属が産出し、概して機動細胞珪酸体の含量が多い。この含量にも違いが見られ、No. 7では2区のNo. 1と同程度の6,200個/g、No. 8では5区のNo. 6と同程度の1,700個/gである。珪化組織片も検出され、耕(穎)に形成される穎珪酸体や葉部の短細胞列が見られる。

また、栽培種を含む分類群としてキビ連やコムギ連が産出し、キビ連では短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、コムギ連では短細胞珪酸体や穎珪酸体が見られる。

この他に検出される分類群は、クマザサ属を含むタケ亞科、ヨシ属、スキ属、イチゴツナギ亞科などが見られる。2区や5区と異なり、ヨシ属の産出は少なく、クマザサ属を含むタケ亞科が目立つ。また、主な分類群の推定生産量(kg/m<sup>2</sup>・cm)は2区や5区と異なり、イネ属(1.82と0.49)がヨシ属(0.65と0.47)よりも多い。また、キビ連が0.43と0.16である。なお、コムギ連は機動細胞珪酸体が形成されないために、生産量の推定には至らない。

一方、泥流被災以前の土壌(No. 9)は植物珪酸体含量が

4.8万個/gであり、2区や5区と比較して少ないと言える。イネ属も産出するが少なく、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体ともに800個/gである。この他に、下位のAs-B試料と同様な分類群が見られ、ヨシ属やタケア科の産出が目立つ。主な分類群の推定生産量(kg/m<sup>2</sup>·cm)は、イネ属が0.22、クマザサ属が0.09、ヨシ属が2.64である。

## ・8区

天明3年浅間泥流の直下に畠状の高まり(No.10)では、植物珪酸体含量が3.1万個/gであり、7区と比較して少ない。イネ属が産出する。機動細胞珪酸体の含量が多

く、3,800個/gである。また、コムギ連も僅かに見られる。この他に、7区と同様な分類群が見られ、タケア科の産出が目立つ。主な分類群の推定生産量(kg/m<sup>2</sup>·cm)は、イネ属(1.13)がヨシ属(0.69)よりも多い。

なお、4つの調査区の10点については、この他にイネ科起源(棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源)が多く見られるものの、由来となった分類群は明確にならない。

また、他の草本類として、カヤツリグサ科もNo.8~10を除いて検出される。

表3. 各調査区の植物珪酸体含量

分類群	(kg/g)									
	As-B下			As-A下						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ属	3,900	2,300	1,100	400	400	400	4,900	400	800	500
キビ連	-	-	-	-	-	-	500	-	-	-
クマザサ属	900	1,300	1,500	500	1,400	600	4,400	5,800	1,100	3,100
タケア科	11,400	7,500	3,500	1,400	1,200	2,200	4,100	4,500	2,300	1,300
ヨシ属	14,300	14,100	18,900	20,000	7,400	10,400	1,800	900	5,500	500
コブナグサ属	1,300	900	1,100	1,800	600	700	-	-	600	400
ススキ属	400	1,500	700	1,200	800	400	2,600	600	1,100	500
コムギ連	-	-	-	-	-	-	1,300	-	-	200
イチゴツナギア科	400	400	200	400	200	400	1,800	400	900	500
不明	25,900	25,300	15,900	28,100	13,400	9,100	27,900	6,700	15,000	8,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ属	6,400	3,600	2,600	700	1,000	1,500	6,200	1,700	800	3,800
キビ連	-	-	-	-	-	-	500	200	-	-
クマザサ属	1,300	3,800	2,000	700	3,400	1,300	3,600	5,800	1,100	4,700
タケア科	2,200	2,300	2,600	2,000	1,400	400	3,900	3,400	3,200	900
ヨシ属	4,800	4,000	7,200	9,100	5,000	9,100	1,000	700	4,200	1,100
不明	14,300	12,600	16,300	14,300	9,000	11,500	9,800	6,200	12,200	5,300
合計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	58,500	53,400	42,900	53,800	25,400	24,000	49,300	19,200	27,300	15,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	28,900	26,200	30,700	26,700	19,800	23,700	25,000	17,900	21,500	15,900
植物珪酸体含量	87,400	79,600	73,600	80,500	45,200	47,700	74,300	37,100	48,800	31,100
単位面積(畠厚1cm)当たりの植物体生産量(単位:kg/m <sup>2</sup> ·cm)										
イネ属	1.87	1.05	0.77	0.21	0.29	0.43	1.82	0.49	0.22	1.13
キビ連	-	-	-	-	-	-	0.43	0.16	-	-
クマザサ属(シマザサ節などとして)	0.10	0.28	0.15	0.05	0.26	0.10	0.27	0.43	0.09	0.36
ヨシ属	3.04	2.50	4.54	5.73	3.16	5.72	0.65	0.47	2.64	0.69
珪化組織										
イネ属頸珪酸体	-	-	-	-	-	-	*	*	-	-
コムギ連頸珪酸体	-	-	-	-	-	-	*	-	-	-
イネ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	*	*	-	-
イネ科起源(その他)										
棒状珪酸体	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**
長細胞起源	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
毛細胞起源	**	**	**	**	*	*	**	**	**	**
草本起源										
カヤツリグサ科	*	*	*	*	*	*	*	*	-	-

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

-: 未検出、\*: 有、\*\*: 多い

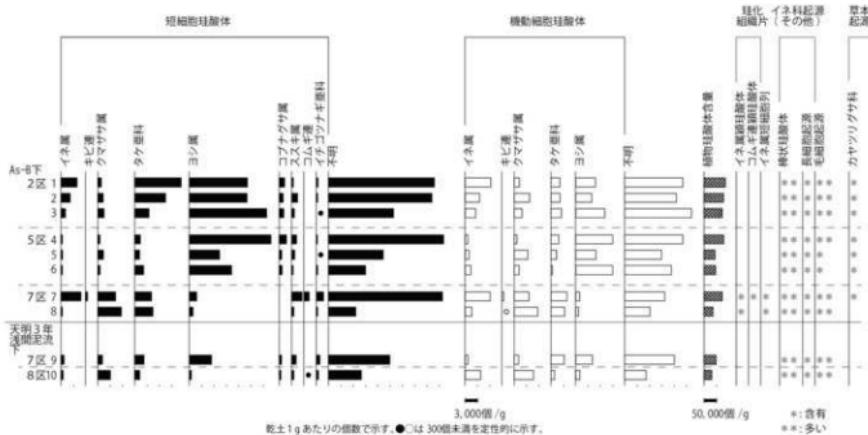


図2. 植物珪酸体含量の空間的な変化

## 4 考察

### (1) As-B下の稲作について

今回調査した調査区2区、5区、7区では、As-B下の黒色土からイネ属の花粉化石や植物珪酸体が产出した。また、その産状は調査区毎に異なるものであった。

以下に、黒色土の状況を含めて、主にイネ属の産状を考慮して、各調査区での稲作について検討する。

#### ・2区

As-B下面では硅質は検出されなかったものの、水田土壤と思われる黒色土が検出された。調査区壁面3ヶ所(No. 1~3)では検出されたイネ科花粉にイネ属も含まれていた。イネ科全体に占めるイネ属の割合は、No. 1が26.9%、No. 2が9.2%、No. 3が11.5%であった。中村(1980b)によると、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合が30%以上であることから、イネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせるとしている。3ヶ所のイネ属花粉は上記の値に近い割合であり、稲作が行われていた可能性が指摘される。

また、イネ属の植物珪酸体も产出した。概して機動細胞珪酸体の含量が多く、No. 1で6,400個/g、No. 2で3,600個/g、No. 3で2,600個/gであった。安定した稲作

が行われた水田跡の土壤では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壤中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山, 2000)。ただし、3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例もあり、これを判断の基準とする場合もある(株式会社古環境研究所, 2007)。これらの事例と比較すれば、空間的にばらつきが見られるものの、各箇所で稲作が行われていたことを反映する結果と言える。

以上のように、花粉化石や植物珪酸体の産状を見る限り、As-Bが降灰する以前に調査区内で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。また、水湿地生草本のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属などの花粉化石が確認され、植物珪酸体では湿润な場所に生育するヨシ属やコブナグサ属が見られ、ヨシ属の产出が目立った。これらの点から調査区内に水湿地の存在が指摘される。そうであれば、ここでの稲作は水湿地を利用した水田稲作が行われていたと思われる。なお、調査区内からは明瞭な硅質などの水田に関わる遺構は検出されていない。ただし、調査区内は西から東へ緩やかに傾斜していることから、水が行き渡ることも考えられる。2

区での稲作については今後さらに、調査区内の微地形などの発掘調査所見を含めて検討する必要があろう。

#### ・5区

西から東に大きく3つの段差のある水平面が見られる。上段の一部に畦畔が検出されている。この畦畔に区画された部分、東側に続く中段、下段に当たる調査区壁面に黒色土が見られた。

調査区壁面の3ヶ所(No. 4～6)では、イネ属花粉が産出しない、あるいは僅かに認められたに過ぎない。また植物珪酸体も2区と比較して少なく、No. 4で700個/g、No. 5で1,000個/g、No. 6で1,500個/gであった。前述した調査例と比較すれば、イネ属花粉と植物珪酸体とともに、畦畔を有する地点(No. 4)を含めて稲作が行われたことを積極的に支持することは難しい。

なお、植物珪酸体ではヨシ属の産出が目立ったが、草本花粉では水湿地生草本の花粉化石が少なかったことから、As-Bが降灰する以前に調査区内は必ずしも湿润な状態にあったとは言い切れない。畦畔が構築されたのにも関わらず、稲作の可能性を示唆する結果にならなかつた要因については、黒色土の水分環境を含めて検討する必要があり、今後さらに珪藻分析を実施することが望ましい。また、東側に向かってイネ属の機動細胞珪酸体含量が増加する傾向が見られた。西から東に段差のある水平面が形成されていた点と何らかの関係があるのかは現段階では不明であるが、今後さらに発掘調査所見を含めて検討したい。

#### ・7区

調査区内に、部分的に水田土壤と思われる黒色土が検出されている。

調査区壁面の2ヶ所(No. 7と8)では、イネ属花粉が認められた。その割合はNo. 7で13.3%、No. 8で26.1%であり、前述の調査例で示された値に近い。また植物珪酸体も産出し、機動細胞珪酸体の含量がNo. 7で6,200個/g、No. 8で1,700個/gであった。前述の調査例と比較すれば、No. 8で少ないものの、No. 7では稲作を示唆する値である。また植物体の存在を示唆する珪化組織片として穎珪酸体や葉部の短細胞列も検出され、稲作の過程で土壤中に混入した稻稈殻や葉部に由来すると思われる。これらの点を考慮すれば、7区で稲作が行われていた可能性が考えられる。

なお、木本花粉ではモミ属やツガ属などの針葉樹花粉が目立つ傾向にある。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。そのため、7区は2区と比較しても好気的になりやすい環境であった可能性がある。また植物珪酸体でもヨシ属が他の地点よりも少ない傾向にあった。このような状態のためにイネ属の花粉や植物珪酸体の産状にはばらつきが見られた可能性があるものの、今後さらに発掘調査所見を含めて検討したい。

また栽培種を含む分類群としてキビ連やコムギ連の植物珪酸体も産出した。これらが栽培種に由来するものであれば、周辺でこれらイネ科作物が栽培されていた可能性が考えられる。この点については、今後さらに種実遺体についても調査し、栽培種の有無を調べることが有効と思われる。

#### (2) 天明3年浅間泥流下の土地利用

7区では、黒色土の上位に天明3年浅間泥流が見られた。その直下の土壤より検出された花粉化石の中ではイネ科に占めるイネ属の割合が17.6%であり、前述の調査事例と比較すると少ない。イネ属の機動細胞珪酸体も、800個/gと少ない。これらの産状を考慮すれば、7区では泥流の被災以前に稲作が行われていたことを積極的に支持することは難しい。ただし、イネ属が畑作や植物体の投棄など何らかの形で土壤中に混入していたことは指摘できる。この要因については、今後さらに発掘調査所見を含めて検討したい。なおソバ属が確認されたことから、当時の周辺でソバの栽培・利用の可能性が想定される。また、イネ科、タンボボ亜科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などの「人里植物」が認められ、周辺の草地や林縁に由来すると考えられる。植物珪酸体の産状からは、イネ科にクマザサ属やヨシ属、コブナグサ属、スキ属、イチゴツナギ亜科などが含まれていたと考えられる。

一方、8区では天明3年浅間泥流の直下に畝状の高まりが検出された。イネ属花粉は認められなかったが、イネ属の植物珪酸体が産出し、機動細胞珪酸体含量は前述

の調査例と比較して同等程度であった。これは、泥流の被災以前に稻作が行われていたことを示唆するものの、現代までの間に花粉化石が土壤中の風化作用などにより減少したと考えられる。

### (3)周辺の森林植生

As-B下の黒色土について見ると、2区のNo. 1~3、7区のNo. 8から古植生推定に有効な数の花粉化石が産出した。地区や試料により割合に差は見られるものの、多産する種類はいずれの試料も類似する。産出が少なかった5区のNo. 4~6、7区のNo. 7も、他の調査区で多産する種類が検出されている。これらから、いずれも同様の周辺植生を反映していると推測される。比較的産出状況の良い2区の結果に従うと、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、スギ属などの針葉樹、クマシデ属ーアサダ属、ブナ属、ニレ属ーケヤキ属などの落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹が認められた。このうち、多産するコナラ亜属は、関東平野の二次林(雜木林)を構成する種類であることから、アカガシ亜属などとともに周辺に分布した二次林に由来する可能性がある。また、コナラ亜属はニレ属ーケヤキ属などとともに河畔や溪谷沿いなどの適湿地に生育する種類であり、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属ーアサダ属、ハンノキ属、トネリコ属なども同様の生育環境を示す。これらは、調査区周辺の河川沿いなどに生育していたと考えられる。またモミ属、ツガ属、スギ属などは後背の山地の森林植生を反映している可能性がある。

一方、天明3年浅間泥流下の土壤について見ると、7区のNo. 9で花粉化石が豊富に産出し、木本類ではマツ属が優占する。マツ属のうち、亜属まで同定できたのはすべてマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)は生育の適応範囲が広く、他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能であるほか、極端な陽樹であることから二次林の代表的な種類でもある。マツ属の増加年代は各地で異なり、九州では1,500~1,000年前頃とされているが、関東地方で急増するのは江戸時代になってからとされている(波田, 1987)。群馬県館林市の茂林寺沼周辺における花粉分析結果では、マツ属花粉は天仁元年(1108年)のAs-B降灰以降に増

加を開始し、天明3年(1783年)に噴出したAs-A降灰付近より高率で出現することが知られている(辻ほか, 1986)。今回も高率で検出されることから、既存の調査事例とも矛盾しない。その他では、モミ属、ツガ属、スギ属などの針葉樹、コナラ亜属などの落葉広葉樹が検出されることから、当時の周辺にこれらも分布していたと推測される。

### 引用文献

- 新井房大, 1979, 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層、考古学ジャーナル, 157, 41~52。  
 藤木利之・小澤智生, 1979, 球流列島植物花粉図鑑、アカアコーラル企画, 155p.  
 波田善夫, 1987, 松くい虫害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究ー松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の擾乱とその動態についてー、資料集、日本自然保護協会, 41~49。  
 株式会社古環境研究所, 2007, 付編 石関西田遺跡Ⅲの自然科学分析、石関西田遺跡Ⅲ 市道00-061号親道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、前橋市埋蔵文化財発掘調査班, 7 p.  
 近藤謙三, 2010, プラント・オパール園譜、北海道大学出版会, 387p.  
 三宅 尚・中村信和, 1998, 森林土壤に堆積した花粉・孢子の保存状態、植物生理研究, 6, 15~30.  
 三好教大・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本花粉図鑑、北海道大学出版会, 824p.  
 中村 篤, 1967, 花粉分析、古今書院, 232p.  
 中村 篤, 1974, イキ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究, 13, 187~193.  
 中村 篤, 1980a, 日本花粉の標準 I II(国版)、大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.  
 中村 篤, 1980b, 花粉分析による種作史の研究、自然科学の手法による道路・古文化財等の研究 一総括報告書一、文部省科研費特定研究「古文化財・總括班」, 187~204。  
 鳥食巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.  
 徳水重元・山内輝子, 1971, 花粉・孢子・化石の研究法、共立出版社会社, 50~73.  
 辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人, 1986, 茂林寺沼および地熱温泉調査報告書 第2集 館林の油沼群と環境の変遷史、館林市教育委員会, 110p.

## 属

環孔材で、孔團部は3～4列、孔團外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～15細胞高。

・エノキ属(*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔團部は1～3列、孔團外では塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔、壁孔は交互状、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

・トネリコ属(*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔團部は1～3列、孔團外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または1～3個(2個が多い)が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・イネ科(*Gramineae*)

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを纖維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。タケ亜科は、纖維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。また維管束が大きい。一方、草本類は、纖維細胞が明らかに薄い。維管束全体が小さい。このことから、イネ科の中でもタケ亜科と草本類は区別される。なお、維管束は柔組織中に散在し、不

## 第4節 炭化材樹種同定

## 1 試料

分析試料は、1号竪穴建物で検出された炭化物21点(No.1～21)である。いずれも建物構築材とみられ、炭化した太い木材が多い。試料の状態を同定結果とともに表1に示す。

## 2 分析方法

木口(横断面)・極目(放射断面)・板目(接線断面)の各割片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

## 3 結果

結果を表1に示す。検出された試料は広葉樹5種類と、イネ科2種類(タケ亜科、草本類)である。広葉樹は、エノキ属が10個体、クリが7個体で、この2種類が主要構成種である。その他、クルミ属、ヤナギ属、トネリコ属が少量検出される。イネ科は、タケ亜科と草本類(いわゆる茅材)が検出される。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

・ヤナギ属(*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2～3個が複合して散在する。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、單列、1～15細胞高。

・オニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または2～3個が散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ

表1. 樹種同定結果

試料名		状態	樹種
No.1	ミカン割り	10年以上	クリ
No.2	半削	20年以上	クルミ属
No.3	ミカン割り	20年以上	クリ
No.4	ミカン割り	20年以上	クリ
No.5	ミカン割り	10年以上	エノキ属
No.6	ミカン割り	15年以上	ヤナギ属
No.7	ミカン割り	30年以上	エノキ属
No.8	半削	30年以上	エノキ属
No.9	ミカン割り	30年以上	クリ
No.10	半削	30年以上	トネリコ属
No.11	半削	40年以上	エノキ属
No.12	?		エノキ属
No.13	ミカン割り	20年以上	エノキ属
No.14	極目板状	20年以上	エノキ属
No.15	極目板状	5年以上	エノキ属
No.16	極目板状	5年以上	クリ
No.17	極目板状	5年以上	エノキ属
No.18	?		イネ科草本類、クリ
No.19	ミカン割り	10年以上	クリ
No.20	?		タケ亜科
No.21	?		エノキ属

齊中心柱をなす。

#### 4 考察

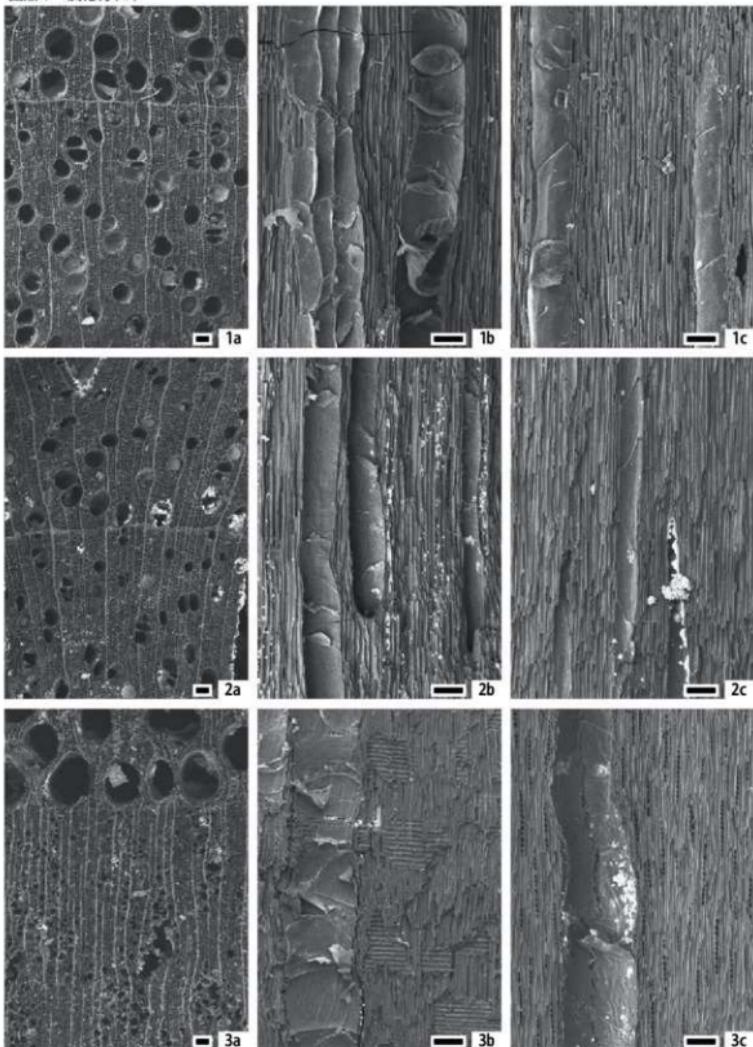
検出された炭化材は建物構築材と思われ、大部分がエノキ属とクリである。最も多かったエノキ属は河川沿いなどやや湿った場所を好み、人里近くに多い。成長が早く、巨樹になるため、社寺林として植えられることもある。木材はやや重堅で、質感が似ているケヤキの代替材として用いられることが多い。曲げに強く、建築用材や家具材、器具・細工物・彫刻など幅広く使われる。次に多いクリは、重硬な木材であり、水温に強いので建物の柱材などの構造材に多用される。その他、家具、建具、屋根、器具等様々な用途で使われる。この他、火持ちが良いことから薪炭材としても優良である。このように、エノキ属とクリとともに建物構築材として適しており、柱や梁などの主要な構造材として使われていたと考えられる。エノキ属は河川沿いに生育することが多いため、遺跡の立地から考えて太い木を得やすい環境にあったと思われる。また、クリはコナラ節やクヌギ節などと共に人里に多い樹木で、里山林を構成する。里山林は、適度な伐採や粗朶の収奪などが行われることにより維持管理される森林(二次林)で、萌芽による更新が容易な陽樹で構成される。おそらく、当時(古墳時代末頃)の人里近くにこのような二次林が存在し、そこから木材を得ていたと思われる。その他、少数ではあるが検出されるヤナギ属、クルミ属、トネリコ属も河川沿いに多い樹木であり、遺跡付近から建物構築材を得ていたと思われる。また、イネ科は屋根材として用いられる草本類と、柔軟性に富み、器具や資材として多用されるタケ類が両方出土している。

本製品用材データベース(伊東・山田編,2012)をみると、県内では、古墳時代頃の建築部材としてはクリが多用される傾向にある。エノキ属、ヤナギ属、クルミ属、トネリコ属も少量ではあるが検出されている。また、吾妻川沿いでは用途ははっきりしないが、旧子持村で古墳時代の遺構から比較的多くのエノキ属の炭化材が検出されている(藤根,1996)。このように、今回の結果は、既存の県内の結果とも調和的である。

#### 引用文献

- 藤根 久,1996,白井北中道1号遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡出土炭化材の樹種.白井北中道1号遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡国道353号道路改築(改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集,〔著〕群馬県埋蔵文化財調査事業団,330-339.
- 林 明三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,440p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I., and Gasson P.E. (編), 2006, 鈴葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.
- [Richter H.G., Grosser D., Heinz I., and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- Wheeler E.A., Bass P., and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 高(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A., Bass P., and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

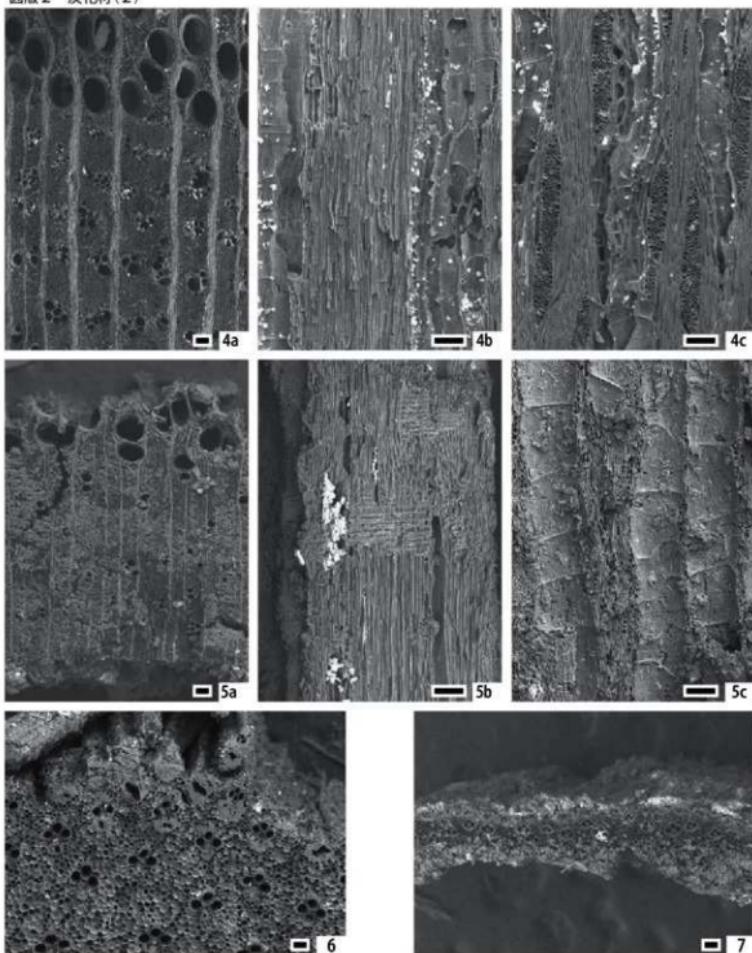
図版1 炭化材(1)



1. クルミ属 (No.2)
2. ヤナギ属 (No.6)
3. クリ属 (No.4)

a:木口 b:径目 c:板目  
スケールは100  $\mu\text{m}$

図版2 炭化材(2)



4. エノキ属 (No.5)  
5. トネリコ属 (No.10)  
6. イネ科草本類 (No.18)  
7. イネ科タケ亜科 (No.20)

a:木口 b:弦目 c:板目  
スケールは100  $\mu\text{m}$

## 第6章 調査の成果(総括)

### 第1節 時期別遺構分布の全体像

先の第4章では、各調査区および各調査面ごとに検出された遺構について記してきた。ここでは各調査区を一回に、調査面を優先した各時代ごとの遺構分布を通じて、吾妻東バイパス調査地内での厚田中村遺跡の全体像を把握しておきたい。以下、各調査面について、天明3年前後(泥流被災時の状況ないし被災直後の復旧状況)を第1-1面とし、中世から近世初頭までを第1-2面、浅間山噴火に伴うAs-B直下を第2面とした古代末、榛名山噴火に伴うHr-FA下および地山(ローム相当)を第3面とした古墳時代から古代として、計4期に分けて記述する。

#### 1 天明3年前後

天明3年前後の泥流被災時の状況ないし被災直後の復旧状況を第1-1面(第112図上段)に図示した。なお、分割できずに第1面として扱った調査区についても、この第1-1面で扱うこととした。

厚田中村遺跡における調査範囲全体に天明3年の浅間山噴火に伴う泥流が覆い、その天明泥流の上面が現在の地表面を形成している。天明泥流を除去した面、それが泥流で被災した面であり、正に天明3年の地表面である。厚田中村遺跡内での天明泥流下の調査は、遺跡西側となる吾妻西バイパス分の調査でもほぼ全面に及び、天明3年時の水田や畑、それらに伴う水路や段差での土留め跡など、多くの泥流被災の痕跡が検出されていた。東バイパス分となる本調査範囲内においても全調査区で天明泥流を確認したが、泥流下における各調査区の調査時の状況はまちまちであった。整理時に全体を見通すことで、遺構の繋がりが明らかとなり、道・水路および耕地の区画や水田・畑地がより鮮明となった。以下に、その状況を記す。

#### 〈道〉

5区での3号道であるが、12号溝と16号溝に挟まれた間の南側から北側へ延びる道であり、途中で4号道と交差する。4号道は14・15号溝と19号溝を両側にもつが、両溝は早い段階で埋没するものの、3号道と交わる12・

16号溝には石組補強がなされる。また、6区での2号道と7区での5号道は、共に区画境の段差際に設けられた道で、その方向性から同一の道の可能性もある。

#### 〈水路〉

各調査区を合成した全体図での遺構配置や断面観察を確認すると、調査時において1区と5区の12号溝に対して調査区を跨ぐ同一溝としていたが、むしろ1区の36号溝が5区の12号溝と、1区の12号溝が5区の16号溝と同一溝であろうと考えられる。また、2区から6区に跨る7号溝は、7区での6号溝と同一溝であり、その東端は5号溝に交わる。

さて、天明泥流で埋没した多くの溝は、道の側溝としての役割と共に農地境の区画溝でもあり、加えて水路としての機能も併せもっていた。そうした溝の中には、地形に沿って段々となる農地の段差際に、石組みや杭等による土留めが施される箇所も多々見られた。その代表例としては、12号溝や27A号溝であり、12号溝での石組みは4号道と3号道の交差部に絡む補強として、27A号溝での杭列の状況は段差の高い側の壁面補強として、さらには7区における5号溝での杭列の状況は疊を絡めた壁面の補強であることが見て取れる。

一方、地形等を考慮した水路をみれば、南から北側へと直線的に延びる溝が主要な水路と考えられ、12号溝(5区)や5号溝(3・7区)があてはまる。これに対し、6区での27A号溝や2・6・7区に跨る7号溝は、南北方向部と東西方向部を併せた屈曲部をもつ溝で、水路であると共に、耕地の区画を意図とした区画溝と考えられる。もちろん、区画を主とした溝であっても、平坦面の作出に伴う段差の際にあって、特に高い側の壁面への補強はしっかり行われている。

#### 〈耕地区画と水田・畑地〉

天明泥流直下に水田面を確認できたのは、3区と6区だけである。畑を確認できたのは、3・6・7・8-1・10区である。これら水田・畑の検出状況を、各調査区を跨ぐ水路・区画溝をも考慮し、平坦面ごとに農地の地目をみると、8区を中心とした8-1区および10区は、微高地に位置し、残存する畑と復旧坑群の存在からも、畑

地であることが明らかである。その微高地の西側にある7区の南側と3区5号溝以東は、調査区を跨ぐ同一平坦面であり、その東端は10区南西隅の26号溝と3号土手で区画される。3区での水田面の検出からすると、この平坦面は水田地となる。さらに、その西側に平行するように、3区西端、7区南西隅、6区南東隅、2区東端で構成される同一平坦面が位置する。区画は、南西辺を2・6区7号溝、北西辺を6区7号溝と7区6号溝、北東辺を3・7区5号溝で画され、3区に残る5号畑からすると、この区画は畑地であろう。次に、7区中央に位置する中段の平坦面は、その西端に2号畑があることで、畑地であることが判る。その中段平坦面の西側に位置する7区南西壁中央部と6区南東付近の細長い区画は同一区画であるが、地目は判然としない。さらに中段の延長上にある6区南西部の平坦面は、極めて傾斜のない平坦さと、その北西辺を区画する30号溝と内側の土手の存在から、水田地である可能性が高い。そして6区中央に位置する一段低い面は、南東端を段差の斜面とし、南西辺から北側の辺にかけて27A号溝で区画され、溝縁に土手と区画内に畦を有する水田面となっている。その水田面の北西部から北側は、若干低い緩斜面となる平坦面上に8・9号畑が営まれている。

以上、各平坦面の地目を改めて概観すると、地形をそのままに階段状の平坦面を作り出し、各段には規制されずに水田と畑が入り混じる形で耕作されていることが明らかとなった。

#### <泥流被災後の耕地復旧II>

泥流による被災した後の耕地への復旧の痕跡は、8区での復旧坑群が顕著である。この8区での復旧坑の在り方は、元の区画を意識したような単位の中に、区画の主体となる長い復旧坑(曲線的に歪む)と、区画の縁部への短い復旧坑との2形態からなり、新たな耕土(泥流被災以前の旧耕作土)獲得のためにその底面は旧耕作土よりも深い位置まで達している。そして、耕土獲得後の埋め戻す際には、泥流で運ばれた大小の礫を優先して投じている。また、その先端は10区に僅かにみることができる。しかし、10区では泥流に覆われた畑が検出されていることから、復旧坑による「天地返し」という復旧方法が、農地全体には及んでいないことが窺える。なお、復旧坑群と復旧坑群の間にある帶状の空間は、農地境を暗示して

いる可能性が高い。

一方、こうした復旧坑は、天明3年の泥流被害を受けた利根川沿いの多くの遺跡で検出されている。そうした調査例では、耕地区画単位ごとに直線的な長い復旧坑であることが多く、曲線状となる例は極めて少ない。

## 2 中世から近世初頭

中世から近世初頭までを第1-2面(第112図下段)として扱うが、中世遺構については一部に漏れがある。

この時期にかかる遺構としては、掘立柱建物、土壙墓、土坑、ピット、溝、水田、畑、復旧坑群と様々である。これらの時期については、出土遺物の明確な場合を除き、総じて遺構内の埋没土を重視し、As-BあるいはAs-Kkを含むかどうかを判定基準とした。

まず、時期の明らかな唯一の遺構として、宋銭2枚を出土した8区での13号土坑(墓壙)がある。また、同じ8区西側には、天明泥流下面の下層から石組みを伴う1号溝が、さらに下層となる第2面調査で検出された掘立柱建物およびピットの多くが集中する。この位置は前代にみる微高地頂部にあたり、最も建物等の安定する場所としての選地かと考えられる。土坑もまた、この微高地部に集中する。掘立柱建物は5棟検出されているが、3号と4号掘立柱建物が少しずれるよう重複し、5号と6号掘立柱建物がほぼ同一方向に重複する。これら4棟は概ね北西方向に桁行をもつが、7号掘立柱建物だけは東方向に桁行をもつ。重複等を考慮すると、2時期以上からなる建物群と考えられる。

先の1号溝に統いて中世から近世初頭期の溝としては、5区の12号溝、6区の27B・31号溝、3・7区に跨る5号溝がある。12号溝は古代水田に伴い泥流被災直前まで機能していた溝と考えられ、5号溝は中世から泥流被災直前まで機能していた溝と考えられる。27B号溝は27A号溝の前身の溝で、部分的要所に石積みを施しているのが特徴である。そして、7区における5号溝に南西辺を面した7区南側平坦面の縁には、石組み列を芯とした土手が巡り、平坦面の東端は一段高くなるが用途は不明。

一方、水田については不明であるが、畑は点在するよう僅に検出されている。6区南東隅の12号畑、第113図第2面の3区7号畑、同じく第2面の8区1号畑と8

-1区4号畑があり、微高地状のやや高い場所に畑が作られていたようである。

さらに、時期の特定は難しいが、10区では10・11号復旧坑群が検出されており、中世から近世初頭までの間に復旧坑を要する何らかの事変があったのであろうか。しかも、本復旧坑のような幅狭な形状は他に例を見ない。

### 3 古代末

古代末には、浅間山噴火に伴うAs-B直下を第2面(第113図上段)として扱うが、一部に中世遺構の紛れがある。特に、第2面(第113図上段)として図示した8区内の掘立柱建物やピットは、前述にもあるように中世の遺構である。

ほとんどの調査区でAs-Bを確認しているが、中でも良好な状態で確認できた調査区は5区と6区、そして9区である。1~3・7区では、As-B直下に明瞭な遺構は検出されず、斜面地での段差や不安定な状態であり、8区に至ってはAs-Bのテフラ層自体が判然としない微高地であった。5・6・9区での良好なAs-Bの直下面からは、畦を伴う水田、畦は不明瞭であるが段々となる棚田状の水田が検出された。特に5・6区での水田は、前代の水田地をそのままに、一部拡張する形で低地部となる谷地地形を利用し造営されている。

5区における水田の状況は、調査区の西側に東側への緩傾斜面上に營まれ、その東端は直線状に区画されて以東の南北水路(5区12号溝は、このAs-B下水田の開田期に伴う可能性がある)までの間は閑地としてあり、その南北水路の東側は北側への緩傾斜面上に段差の低い棚田状の平坦面(水田面)を幾枚も重ねる。しかし、段差際に明瞭な畦は確認できない。また、5区の東側となる6区においては、5区東半から続く段差の低い棚田状の平坦面(水田面)が北東への緩傾斜面上に幾枚も重なり、As-B下水田を分断するように南西から北東方向への大畦が地形に直行するように大区画をなす。水田域の南東端は段差の高い急斜面が形成され、その急斜面東側および南側での水田痕跡は判然としない。但し、10区の東端では畦が僅かに検出され、8区および10区の東側ではAs-B下水田が營まれる可能性は高い。そのことは、9区でのAs-B下水田の検出が物語っている。

なお、遺跡西側となる吾妻西バイパス分の調査におい

てもAs-B直下を第2面とした調査で、As-B下水田が多くの調査区で検出されており、同様な棚田状の平坦面が連なっている。但し、状態はあまり良好ではない。

### 4 古墳時代から古代

榛名山噴火に伴うHr-FA下および地山(ローム相当)をもって第3面(第113図下段)とし、古墳時代から古代までの遺構を網羅する。

第3面になると、調査範囲内での微地形がかなりはっきりし、5・6区に跨る低地部、6・7区での微高地からの斜面段差部、7区南東隅から8区および10区西側が微高地の頂部であり、低地部には水田が、微高地頂部には竪穴建物等の集落が展開する。

集落は、狭い微高地頂部に竪穴建物と掘立柱建物、土坑からなり、竪穴建物からの出土土器から5世紀中葉以降の時期に限定され、その規模も小さい。同時期の集落には、本遺跡の西側約1kmにある温川西岸の四戸遺跡での大規模な集落が知られ、同遺跡内におけるその後の古墳造営(四戸の古墳群)に大きく関わっている。この四戸遺跡は弥生時代後期から古墳時代、そして律令期を通じた古代まで継続した集落遺跡である。また、同じく吾妻川右岸に位置する金井遺跡は東に遠いが、Hr-FAに絡む火碎流によって埋没した集落であり、やはり5世紀中葉以降と本遺跡と同時期の遺跡である。

一方、低地部での水田について、榛名山東南麓でのHr-FA下水田と同様な古墳時代特有の小区画水田であることは、各調査区でも記した通りである。また、水田面を覆う輕石についても、榛名山起因のHr-FAであることことが分析結果で示されている。低地部は北東へ緩傾斜する狭い谷地であり、谷地の斜面際に水路を設け、大畦による大区画と大区画内に小畦で小さな区画を無数に配置する。さらに、小区画内の水口は、谷地の緩傾斜方向となる南西辺と北東片の中央に多く設けられ、大畦においても南西側の片に取水の水口が設けられている。このことからも、水田内における水の掛け方が理解できる。

この小区画水田は、吾妻西バイパスでの本遺跡西側でも僅かに検出されているが、周辺遺跡での検出例はなく新たな発見と言えよう。同時に、周辺での遺跡調査の際には、同様な水田の存在に注意が必要となる。

## 第2節 まとめ

本書で報告する厚田中村遺跡は、岩櫃山を北に望む吾妻川右岸の段丘上に位置し、榛名山麓から北流する田中沢川と本田中沢川によって形成された扇状地形にあり、西側の一段高い段丘面上には新井遺跡が隣接する。その新井遺跡も含め、本遺跡の西側は上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴い発掘調査が行われた。その後に吾妻東バイパス建設事業に伴う発掘調査が令和2年を初年度に始まり、その初年度には小田沢遺跡、下泉A遺跡、下泉B遺跡と共に本遺跡の調査が行われた。吾妻東バイパスの西端に位置する厚田中村遺跡は、本遺跡の東側を調査対象に発掘調査が進められ、現在も発掘調査は進行している。

令和2・3年の調査の結果、本調査範囲内からは、繩文・弥生土器は僅かに出土したものの、遺構は検出されなかった。

古墳時代では、現地表面では現れていない微高地の存在と、その微高地上に3軒の5世紀中～後半期の竪穴建物や土坑が検出され、小規模ながらも集落が形成されていたことは、新たな発見であった。併せて、6世紀初頭の榛名山二ツ岳噴火に伴うHr-FA下に、古墳時代特有の小区画水田と水路が共に検出された。しかも、この小区画水田は、扇状地内の谷地状の低地部に形成されていたことも明らかとなった。そして、このHr-FA下水田の存在は、今後の周辺遺跡の調査に新たな視点を加えることとなった。

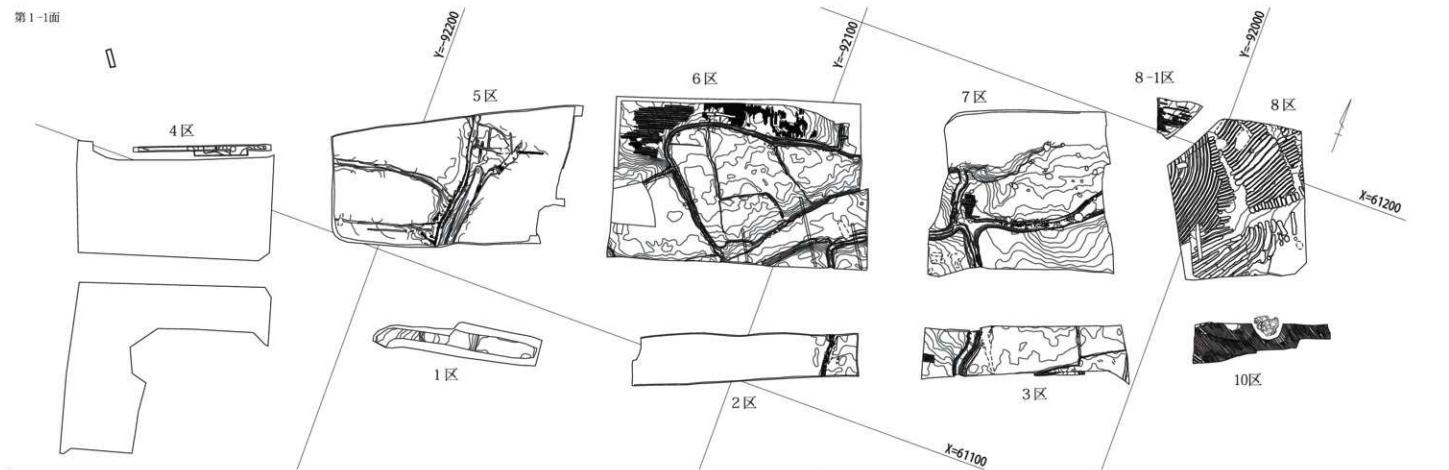
古代の遺構としては、天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴うAs-Bに覆われた水田跡が検出された。水田跡は、微地形の中で緩傾斜する低地部にあり、傾斜地特有の棚田状に幾枚も連なるように広がっている様子が明らかとなった。併せて、As-B下水田に伴う水路の存在や、水路の周囲に閑地を設けていることも新たな発見であった。しかし、律令期に伴う竪穴建物を含む集落の存在は、調査範囲内および吾妻西バイパス調査分にも検出されていない。近隣での古代集落としては、西隣の新井遺跡で8世紀後半から9世紀前半の小規模な集落が知られ、さらに西側には大型の奈良三彩短頸壺を出土して話題となつた大規模集落を擁する四戸遺跡がある。

中世から近世初頭期にかけては、遺構の大半が微高地に集中し、それ以外の場所では水路および散在する小範囲の畠跡、そして復旧坑群が検出されている。微高地上では、掘立柱建物や土坑(墓)、ピットが集中し、2時期以上の永続性を窺わせている。水路の時期は特定しきれないが、古代水田から続く可能性のある水路も存在し、そこには水田や畠地といった耕地の存在が推測できる。また、他に例を見ない幅狭な形状の復旧坑群の存在は、中世から近世初頭までの間に何らかの事変を想起させる。

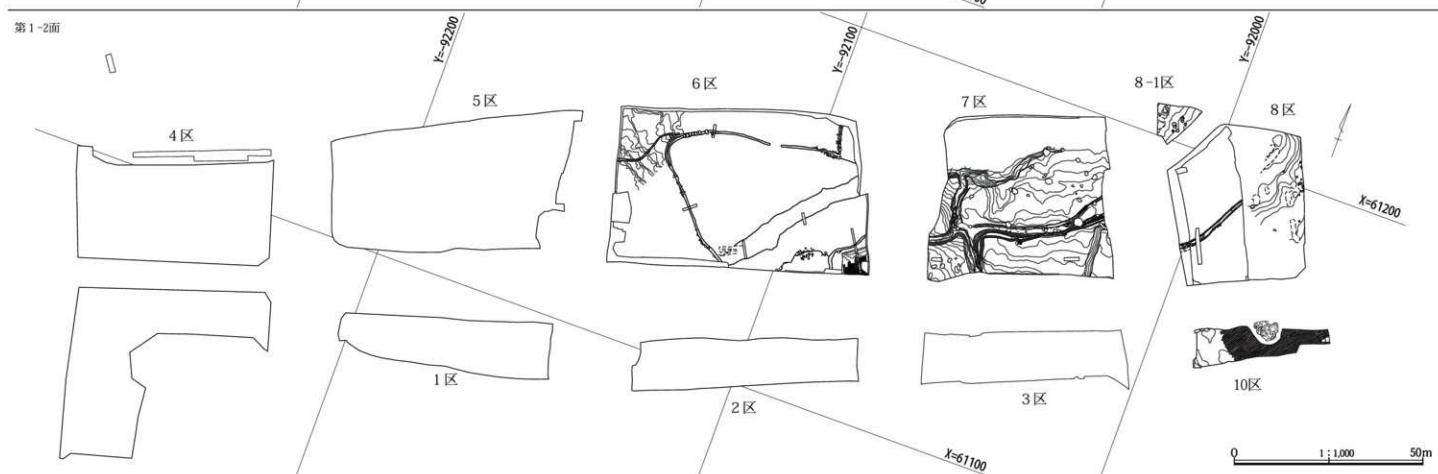
江戸時代後期には、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流被害を受けた地域であり、調査地内全体を泥流が覆っていた。その一端は、今も地表に突き出て残る巨岩の「浅間石」にみることができる。調査で泥流を除去すると、そこは泥流で被災した当時の地表面である。段々に作られた田畠が各調査区内一面に広がり、溝の中や畠の歎間に残る泥流、農作業具や桶底といった木製品類が集中して散乱する場所、石組みの崩れた場所、畠の境地に植えられた植栽の痕跡等々、正に被災した状態のままの姿であった。また、被災後に進められた復興の跡として、畠地への「天地返し」の痕跡である復旧坑群も確認された。

以上、この地における水田耕作は、古墳時代には既に始まっており、その谷地利用の水田は古代において棚田状となって範囲を拡大させ、水路も併設していた。そして、その水路は時を超えて、天明3年まで継続していたことは、地域を考える上で本調査の最大の成果の一つと言えよう。

第1-1面

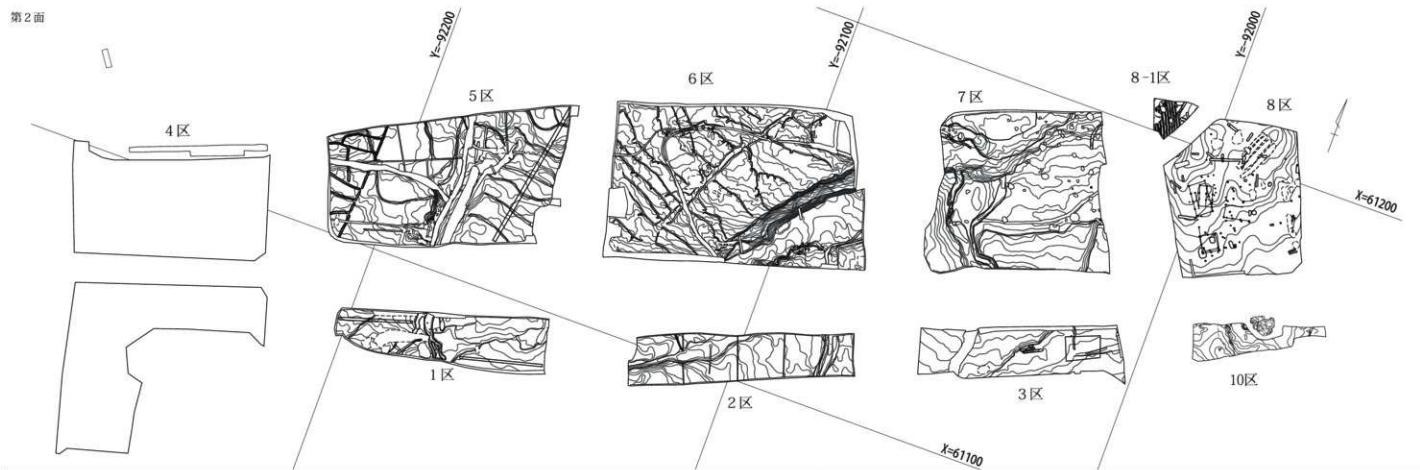


第1-2面

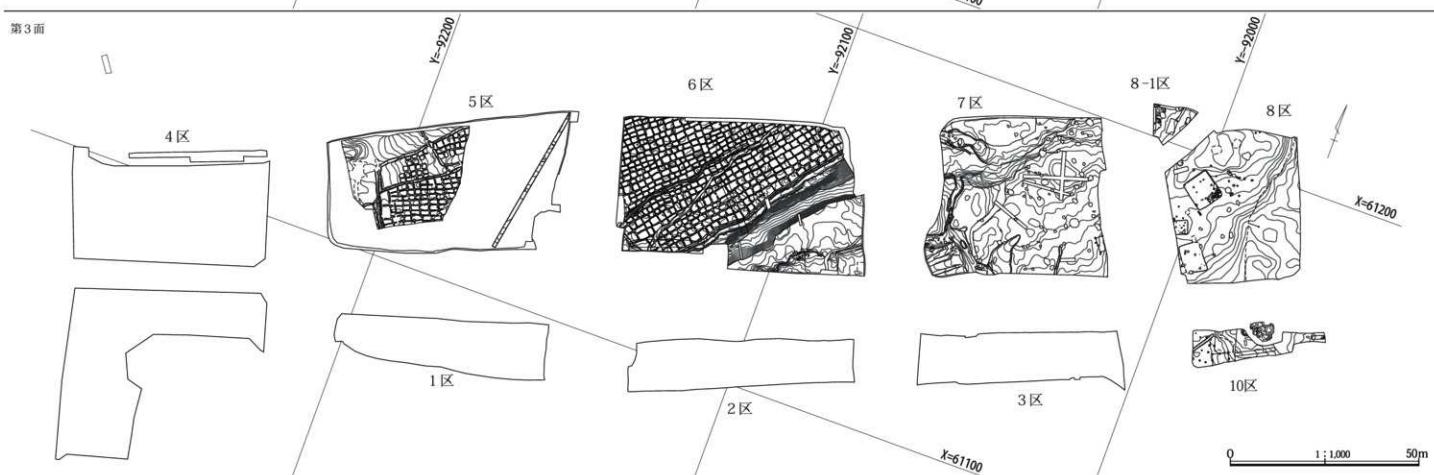


第112図 時期別全体図(上: 第1-1面・下: 第1-2面)

第2面



第3面



第113図 時期別全体図(上: 第2面・下: 第3面)

# 写 真 図 版





1 厚田中村遺跡遠景（上信自動車道厚田IC付近の空中写真(左側にJR吾妻線と吾妻川)）



1 遺跡全景 空中写真 上空から



2 遺跡全景 空中写真 東上空から



1 1区第2面(As-B下) 空中写真 東上空から



2 1区第2面(As-B下) 空中写真 上空から



1 1区第2面(As-B下) 全景 東から



2 12号溝(1区2面) 全景 北から



3 22号溝(1区2面) 全景 南西から



4 1区北壁 土層断面 南から



1 7号溝(2区1面) 磚出土状態 北から



2 7号溝(2区1面) 全景 北から



3 7号溝(2区1面) 陶磁器出土状態 北から



4 7号溝(2区1面) 杖列残存状況 北から



5 2区2面(As-B下) 全景 西から

# PL.6



1 9号溝(2区2面) 全景 北から



3 2区西壁 土層断面 東から



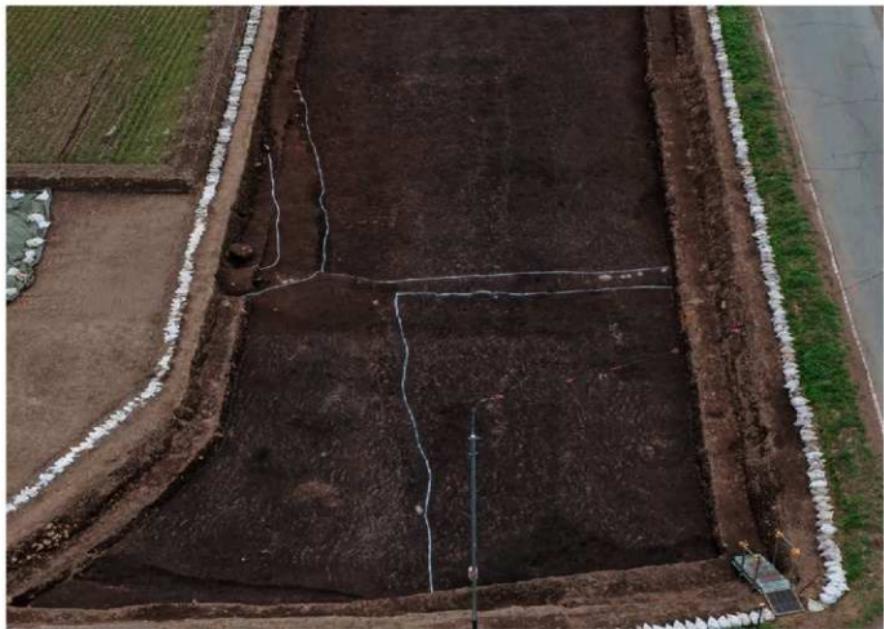
2 10号溝(2区2面) 全景 北から



4 3区1面(As-A泥流下) 全景 東から



1 3区1面(As-A泥流下) 全景 西から



2 3区1面(As-A泥流下) 東半 上から



1 5号溝と1号土手(3区1面) 全景 北から



2 5号溝(3区1面) 杖列残存状況 南から



3 1号土手(3区1面) 全景 南から



4 1号土手(3区1面) 土層断面 北から



5 2号土手(3区1面) 全景 東から



6 2号土手(3区1面) 遺物出土状態 北から



7 2号土手(3区1面) 土層断面 北から



8 2号土手(3区1面) 碓出土状態 東から



1 2号土手と畦・水田面(3区1面) 北から



3 畦内の礫(3区1面) 確認状況 北から



2 5号畑(3区1面) 土層断面 西から



4 5号畑(3区1面) 全景 東から



1 3区2面 全景 北から



2 3区2面(西側低地から東側微高地への変換部) 西から



1 28号溝(3区2面) 南から



2 7号畑(3区2面) 全景 西から



3 7号畑(3区2面) 土層断面 西から



4 3区2面下の確認トレンチ 西から



5 3区北壁(低地から微高地への変換部) 土層断面 南から



1 4区造構確認作業状況 東から



2 4区2号トレンチ 挖削作業状況 南から



3 5区1・2面(近世・As-B下) 空中写真 上空から



4 11号溝(5区1面) 全景 西から



5 11号溝(5区1面) 土層断面 東から



1 12号溝(5区1面) 全景 南から



2 12号溝(5区1面) 西壁南端付近の石組 東から



3 12号溝(5区1面) 西壁中央南寄りの石組 東から



4 12号溝(5区1面) 西壁中央の石組 東から



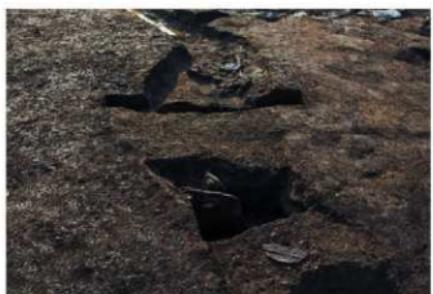
5 12号溝(5区1面) 東壁中央の石組 西から



1 12号溝(5区1面) 底面に残存する杭 西から



2 12号溝(5区1面) 西壁石組内出土状態 西から



3 13号溝(5区1面) 北半 遺物出土状態 北東から



4 13号溝(5区1面) 木製品出土状態 北から



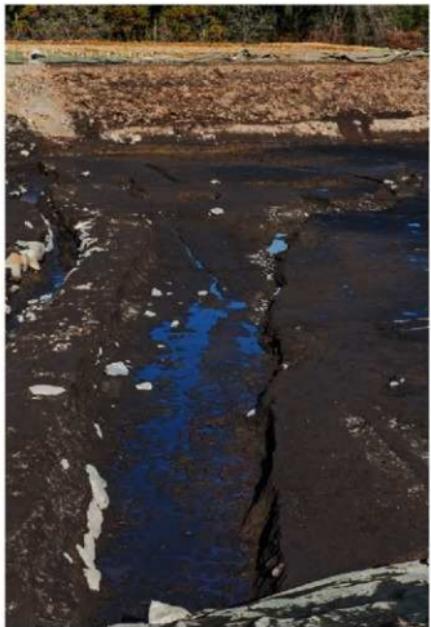
5 14・19号溝(5区1面) 全景 西から



6 14・19号溝(5区1面) 東から



7 15号溝(5区1面) 全景 西から



1 16号溝(5区1面) 全景 南から



2 16号溝(5区1面) 西壁南端付近の石組 東から



3 16号溝(5区1面) 遺物(煙管)出土状態 北から



4 17号溝(5区1面) 全景 南から



5 18号溝(5区1面) 碾出土状態 西から



6 18号溝(5区1面) 全景 西から



1 3号道(5区1面) 路面に敷かれた小石 南から



2 5区(1面) 遺構外遺物(白)出土状態 北から



3 5区(1面) 遺構外遺物(銭貨)出土状態



4 5区(1面) 遺構外遺物(煙管)出土状態



5 5区(1面) 遺構外遺物(鉄製品)出土状態



1 5区As-B下水田(2面) 全景 北東から



2 5区西側 As-B下水田(2面) 西から



3 5区北西側 As-B下水田(2面) 西から



4 5区西側 As-B下水田(2面) 南から



5 5区西側 As-B下水田(2面) 水口 東から



1 5区3面(Hir-Fa下) 空中写真 上空から



2 5区3面(Hir-Fa下) 大畦で区画された小区画水田(南半) 空中写真 上空から



1 5区3面(Hr~FA下) 大畦で区画された小区画水田(北半) 空中写真 上空から



2 Hr~FA下水田(3面) 水路と大畦・小畦、水口 南から



3 Hr~FA下水田(3面) 小畦が検出されなかった区画 西から



4 5区北堀 基本土層 南から



1 6区 1-1面(As-A泥流下) 全景 空中写真 上空から



2 12・13号復旧坑(6区 1-1面) 埋没状況 東から



3 7号溝(6区 1-1面) 全景 北東上空から



4 7号溝(6区 1-1面) 南端土壌断面 北から



5 2号道(6区 1-1面) 斜面際に延びる平坦面 西から



1 27A・30号溝と水田区画および烟地(6区1-1面) 上空から



2 27A号溝(6区1-1面) 西側 30号溝付近 北から



3 27A号溝(6区1-1面) 東端付近 東から



4 27A号溝(6区1-1面) 桁列検出状況 西から



1 As-A泥流下水田(6区1-1面) 南北方向の畝 北から



2 As-A泥流下水田(6区1-1面) 畝と水口 北から



3 8号畠(6区1-1面) As-A泥流で埋まる畝間 西から



4 9号畠(6区1-1面) As-A泥流で埋まる畝間 南から



5 27B号溝(6区1-2面) 南西端の石組と杭列 南から



6 27B号溝(6区1-2面) 北東端の石組 北から



7 12号畠(6区1-2面) As-Kk上面の畝間痕 北から



8 12号畠(6区1-2面) 土層断面 北から



1 6区2面(As-B下) 全景 北東から



2 6区2面(As-B下) 全景 空中写真 上空から



1 As-B下水田(6区2面) 直線的に延びる大畦 南西から



2 As-B下水田(6区2面) 梅田状の小段差と水口 北西から



1 6区3面(Hr-FA下) 全景 空中写真 上空から



2 写真中央が33号溝、右側に溝脇の土手状大畦および小区画水田(6区3面) 北東から



1 Hr-FA下水田(6区3面) 検出状況 南西から



2 Hr-FA下水田(6区3面) 小区両畦と水口 南西から



3 32・34号溝(6区3面) 全景 北東から



4 6区北壁 基本土層 南から



1 7区1-1面(As-A泥流下) 全景 空中写真 上空から



2 3号溝(7区1-1面) 全景 東から



3 3号溝脇 柴状小枝が密集した出土状態 東から



4 5号溝(7区1-1面) 全景 南から



5 5号溝 南端東壁土止め状況 西から



1 6号溝(7区1-1面) 全景 西から



2 2号畑(7区1-1面) 全景 東から



3 1号土手(7区1-2面) 東から



4 1号土手内部の石列(芯材) 南から



5 3号溝と5号道での遺物(木製品)出土状態 東から



6 5号道 遺物(木製品)出土状態 東から



7 5号道 遺物(木製品)出土状態 東から



1 5号道 遺物(木製品)出土状態 東から



2 5号道 遺物(木製品)出土状態 北から



3 5号道 遺物(木製品)出土状態 北から



4 5号道 遺物(木製品)出土状態 北から



5 5号道 遺物(木製品)出土状態 東から



6 3号溝北側 煙壇の植栽痕 東から



7 7区(1面) 遺構外遺物(銭貨)出土状態 北から



8 7区(1面) 遺構外遺物(銭貨)出土状態 北から



1 7区2面(As-B下) 全景 空中写真 上空から



2 7区2面 南東隅の段差部分 西上空から



3 7区2面 南東隅の段差部分 上空から



4 2号溝(7区2面) 全景 南から



5 2号溝 土層断面 西から



1 7区3面 南東隅付近 西から



2 1号掘立柱建物(7区3面) 全景 北から



3 8号溝(7区3面) 全景 南から



4 7区南壁・8号溝 基本土層 北から



1 8-1区1-1面 全景 北東から



2 3号烟(8-1区1-1面) 全景 東から



3 8-1区2面 全景 北東から



4 8-1区2面 全景 南から



5 34号土坑(8-1区1-2面) 全景 東から



6 35号土坑(8-1区2面) 全景 北から



7 36・37号土坑(8-1区1-2面) 全景 北から



8 38号土坑(8-1区2面) 全景 北から



1 39号土坑(8-1区1-2面) 全景 東から



2 40号土坑(8-1区1-2面) 全景 南から



3 41号土坑(8-1区1-2面) 全景 南から



4 42号土坑(8-1区2面) 全景 西から



5 43号土坑(8-1区2面) 全景 西から



6 44号土坑(8-1区2面) 全景 南から



7 45号土坑(8-1区2面) 全景 南から



8 46号土坑(8-1区2面) 全景 東から



1 47号土坑(8-1区3面) 全景 北から



2 48号土坑(8-1区3面) 全景 北から



3 49号土坑(8-1区2面) 全景 西から



4 50・52号土坑(8-1区2面) 全景 東から



5 51号土坑(8-1区2面) 全景 東から



6 53号土坑(8-1区3面) 土屑断面 東から



7 4号烟(8-1区2面) 全景 南から



8 4号烟 敵間に残る耕作具痕 南から



1 8区1-1面(As-A泥流下) 東半全景 空中写真 上空から



2 8区1-1面(As-A泥流下) 南東部復旧坑群 上空から



3 8区1-1面(As-A泥流下) 南東部復旧坑群 上空から



4 8区1-1面(As-A泥流下) 西半中央部復旧坑群 東から



5 8区1-1面(As-A泥流下) 北西部復旧坑群 東から



1 8区1-1面(As-A泥流下) 南西部復旧坑群 東から



2 2号復旧坑群(8区1-1面) 土層断面 北から



3 3号復旧坑群(8区1-1面) 全景 北西から



4 3号復旧坑群(8区1-1面) 土層断面 北東から



5 8区西壁の復旧坑 土層断面 東から



6 13号土坑(8区1-2面) 遺物出土状態 北から



7 1号溝(8区1-2面) 全景 西から



1 8区2面(As-B下) 東半全景 南から



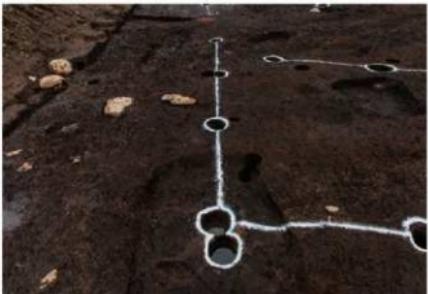
2 8区2面(As-B下) 西半全景 南から



3 西半北西部ピット群(8区2面) 東から



4 3号掘立柱建物(8区2面) 西辺柱列 南から



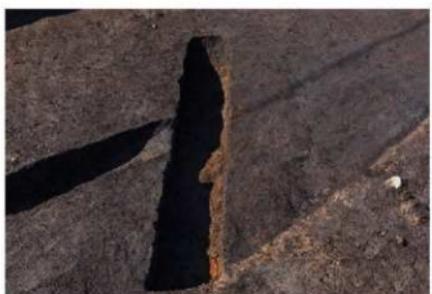
5 5・6号掘立柱建物(8区2面) 西辺柱列 南から



1 1号土坑(8区2面) 全景 西から



2 2号土坑(8区2面) 全景 南から



3 3号土坑(8区2面) 全景 南東から



4 4号土坑(8区2面) 全景 東から



5 5号土坑(8区2面) 全景 東から



6 6・7号土坑(8区2面) 全景 南東から



7 8号土坑(8区2面) 全景 南から



8 9号土坑(8区2面) 全景 北から



1 10号土坑(8区2面) 全景 東から



2 11・12号土坑(8区2面) 全景 南から



3 14号土坑(8区2面) 全景 南東から



4 15号土坑(8区2面) 全景 南西から



5 18号土坑(8区2面) 全景 南から



6 19号土坑(8区2面) 全景 南から



7 20号土坑(8区2面) 全景 南から



8 21号土坑(8区2面) 全景 西から



1 22号土坑(8区2面) 全景 西から



2 23号土坑(8区2面) 全景 南から



3 24号土坑(8区2面) 全景 南から



4 25号土坑(8区2面) 全景 東から



5 26号土坑(8区2面) 全景 南東から



6 28号土坑(8区2面) 全景 北から



7 29号土坑(8区2面) 土層断面 西から



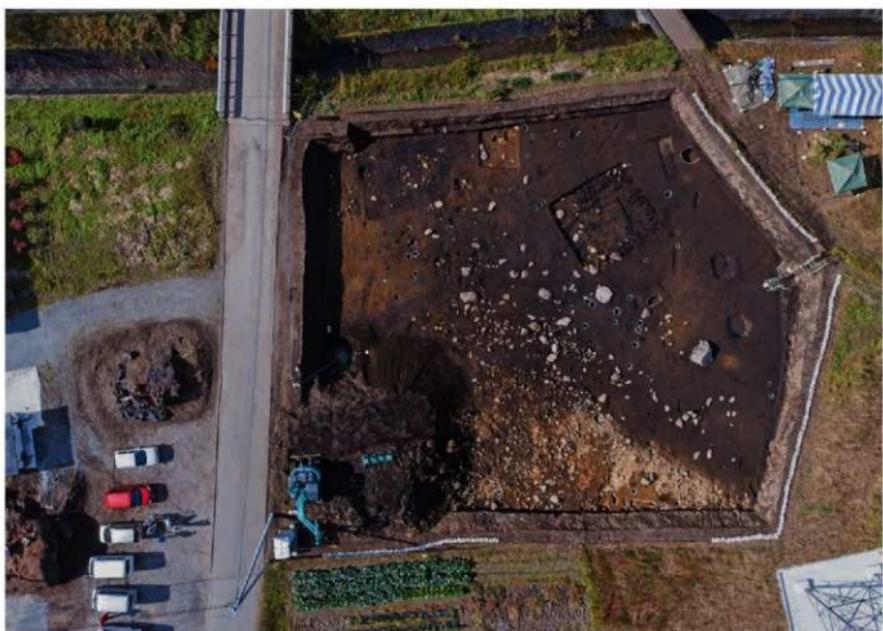
8 29号土坑(8区2面) 全景 西から



1 1号烟(8区2面) 検出状況 西から



2 1号烟 敵間に堆積するAs-BとAs-Kk 西から



3 8区3面(古墳時代) 全景 空中写真 上空から



4 8区3面(古墳時代) 西半遺構確認状況 南から



5 8区3面(古墳時代) 南東隅遺構確認状況 北から



1 1号壁穴建物(8区3面) 炭化材出土状態 全景 上空から



2 1号壁穴建物 炭化材出土状態 西から



3 1号壁穴建物 炭化材出土状態 北東から



4 1号壁穴建物 北西壁中央 炭化材出土状態 北から



5 1号壁穴建物 北西壁西隅 炭化材出土状態 北から



1 1号竪穴建物 遺物出土状態 全景 南西から



2 1号竪穴建物 カマド周辺 遺物出土状態 西から



3 1号竪穴建物 カマド左側 遺物出土状態 西から



4 1号竪穴建物 カマド右側 遺物出土状態 南西から



5 1号竪穴建物 カマド右側 遺物出土状態 北西から



6 1号竪穴建物 重なった杯の出土状態 北西から



7 1号竪穴建物 南西壁中央 遺物出土状態 北西から



8 1号竪穴建物 白玉出土状態 西から



1 1号竪穴建物 床面全景 南西から



2 1号竪穴建物 カマド検出状況 西から



3 1号竪穴建物 カマド検出状況 北から



4 1号竪穴建物 カマドに据えられた甕検出状況 西から



5 1号竪穴建物 カマド底面の支脚検出状況 西から



1 1号竪穴建物 カマド底面・側壁石組検出状況 西から



2 1号竪穴建物 カマド基底(据方)検出状況 西から



3 1号竪穴建物 貯藏穴 南から



4 1号竪穴建物 床下検出状況 上空から



5 2号竪穴建物 遺物出土状態 全景 北東から



6 2号竪穴建物 遺物出土状態 北東から



7 2号竪穴建物 床面全景 北東から



8 2号竪穴建物 床下検出状況 南西から



1 3号竪穴建物 遺物出土状態 北東から



2 3号竪穴建物 床面全景 上空から



3 3号竪穴建物 カマド検出状況 南東から



4 3号竪穴建物 床下検出状況 北東から



5 31号土坑(8区3面) 全景 北から



6 32号土坑(8区3面) 全景 南から



7 8区北壁 基本土層 南から



1 9区1面 全景 北西から



2 21号溝(9区1面) 全景 北西から



3 21号溝(9区1面) 全景 東から



4 23号溝(9区1面) 全景 北西から



5 23号溝(9区1面) 杭列検出状況 北西から



1 23号溝(9区1面) 桧列検出状況 南西から



2 23号溝(9区1面) 桧列検出状況 南西から



3 23号溝(9区1面) 桧列検出状況 南西から



4 9区1面 遺物(木製品)出土状況 北西から



5 9区1面 遺物(木材)出土状況 北西から



6 20号溝(9区2面) 全景 南から



7 As-B下水田(9区2面) 北東から



8 As-B下水田(9区2面) 瓦の検出状況 南から



1 10区1-1面(As-A泥流下) 西側 6号烟、9号復旧坑群、24・25号溝 西から



2 10区1-1面(As-A泥流下) 6号烟東側 北西から



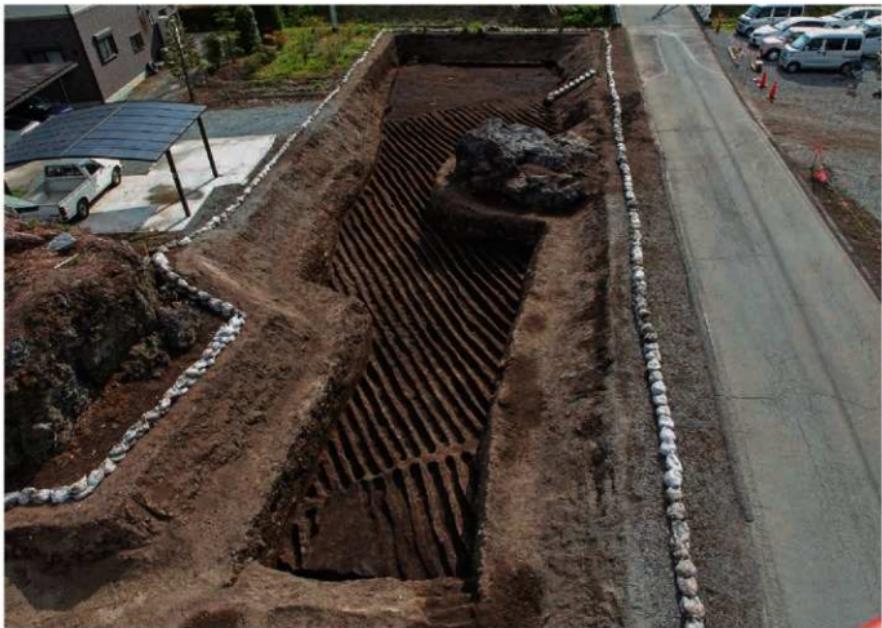
3 9号復旧坑群(10区1-1面) 土層断面 南から



4 10区1-2面 東側全景 北から



5 10区1-2面 西側全景 北から



1 10・11号復旧坑群(10区1-2面) 全景 東から



2 54号土坑(10区1-2面) 全景 南西から



3 55号土坑(10区1-2面) 全景 南西から



4 10区2面(As-B下) 東半全景 北から



5 10区2面(As-B下) 西半全景 北東から



1 10区3面 西側全景 西から



2 2号掘立柱建物(10区3面) 全景 北から



3 10区1~2面 復旧坑掘削作業状況 西から



4 10区東壁 基本土層 西から

PL.52



7号溝1



2号土手1



16号溝1



12号溝1



13号溝1



13号溝2



12号溝2



5号溝1



5号溝2



5号溝3



5号溝4



5号溝5



5号道1



5号道2



5号道3



5号道4



5号道、13·38号土坑、1号沟出土遗物



1 A号窑穴出土遗物(1)



32

33

34



2号壁穴建物



3号壁穴建物

2

2

3



1



2



3

32号土坑



1

2



3



5



7

8

9

10

11



12

13

14

15

16

17



18

19



20



21

22

23

2 • 3号壁穴建物、32号土坑、遗构外出土遗物(1)



24

26

30

32



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53

# 報告書抄録

書名ふりがな	あつだなかむらいせき(に)
書名	厚田中村遺跡(2)
副書名	上信自動車道吾妻東バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	716
編著者名	谷藤保彦・高島英之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20230302
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	あつだなかむらいせき
遺跡名	厚田中村遺跡
所在地ふりがな	あがつまぐんひがしあがつままちおおあざあつだあざなかむら
遺跡所在地	吾妻郡東吾妻町大字厚田字中村
市町村コード	10429
遺跡番号	117
北緯(世界測地系)	363248.10814
東経(世界測地系)	1405143.35070
調査期間	20200701-20200731、20201001-20201231、20210331-20210630
調査面積	21,622.60m <sup>2</sup>
調査原因	道路建設
種別	集落/生産
主な時代	古墳/古代/中世/近世
遺跡概要	繩文・弥生・土器・石器/古墳・堅穴建物3+土坑・土器・石製品/古代・溝・水田・畑・土器/中世・掘立柱建物・土坑・溝・畠・錢貨/近世・溝・水田・畠・復旧坑・陶磁器・石製品・錢貨・木製品
特記事項	旧地表の微地形に営まれた古墳時代の集落と小区画水田が検出された。さらに、天明3年の泥流に覆われた農地がそのままに、発掘調査で明らかとなった。
要約	遺跡は岩櫃山を北に望む吾妻川右岸の段丘上に形成された扇状地に位置し、西側に新井遺跡が隣接する。本遺跡の西側は先の上信自動車道吾妻西バイパス建設に伴い調査され、遺跡の東側を同自動車道吾妻東バイパスとして調査した報告が本書である。吾妻西バイパスでの調査でも明らかとなっていたが、現地表面は天明泥流で覆われた上にあり、その下面には泥流で被災した農地がそのまま残されていた。一方、天明泥流下には、現地形とは異なる微地形があり、微高地部には中世の掘立柱建物や墓壙、古墳時代(5世紀後半)の集落が検出された。また、低地部では、古代のAs-B下水田が棚田状に、古墳時代のHr-FA下には小区画水田が検出された。

公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第716集

## 厚田中村遺跡(2)

上信自動車道吾妻東バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第716集

令和5(2023)年2月28日 発行  
令和5(2023)年3月2日 発行

編集・発行／公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県邑楽市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／松本印刷工業株式会社



